
黄昏時の溜息

薄明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏時の溜息

【Nコード】

N0002R

【作者名】

薄明

【あらすじ】

金銭トラブルに巻き込まれ、困っているところを助けてくれたのは、街一番の金持ちで変人と噂される青年だった。だけど彼の行動は謎ばかり。その上、私の秘密をなぜ知ってるようで……。

ねえ、あなたの目的は何？ 甘い言葉も過ぎれば冷めてしまうって知ってる？

お題サイトcapriccio様(<http://noir.suib.jp/cpr/>)より「譚詩曲 第二番」をお借りしました。

01. 予感と言うには曖昧な、 前編

失敗した――。

内心、大量の冷や汗をかきながら、けれど正面に向けた眼差しは決してゆるめることなく睨みつける。

散々街中を駆けずりまわったおかげで、ゆるく編み上げていた髪は見るも無残な状態だった。

冬も近づく寒空の下。まさかここまで汗をかくことになるとは。その上、日頃走ることとは無縁の生活を送っているため膝もすでに悲鳴を上げている。

背後は行き止まり。正面にはガラの悪い男が三人。

最初から狙っていたように路地裏に追い込まれ、まさかその先が行き止まりとは知らず。

「どうして私が借りてもないお金を払わなくちゃならないのよ！」
朝から何度この問答を繰り返したのか。

「もう諦めなつて。あの家を手放したつて、まだ借金は返しきれないんだよ」

三人の中で一番年配の男が呆れたような眼差しを向けてくる。あれだけ走り回ったにも関わらず、男が息も切らしていないことに頭のどこかで逃げ切れないか、と諦念が過る。だが、ここで諦めてしまったらそれこそ相手の思うつぼだ。

彼らが決して手荒なことをしないのは、ユーフェミアを商品と思想っているからだろう。

まったく冗談じゃない。

家の一階を貸していた一家が、自分の知らないうちに家と土地の権利書を持ち出し、お金を借りていたなんて。

今思えば、路地裏に駆け込むことよりも、あの一家に家を貸したこと自体が敗因なのだろう。自らの迂闊さに思わず齒がみする。

取りあえずこの状態を何とかしなければならぬ。じりじりと焦りながら、咄嗟に思いついた言葉をよく考えもせず口にしてしまったのは、きっとこの現実を受け入れたくなかったからに違いない。「だからってこんな嫁き遅れの……トウの立った女が身体を売ったって、借金なんて返せないわよ！」

我ながらなんて情けない言いわけ。

ユーフェミアは先月二十五になったばかりだ。

二十歳前後で結婚するこのご時世に、未だ独身なのだから嫁き遅れには違いない。しかし肩身の狭い思いをしているわけではないので気にしていなかったが。

正面にいる男はユーフェミアの台詞に一瞬鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしたが、肩をすくめると盛大な溜息を落とした。

「……ねえちゃん、それ、自分で言ってる悲しくねえか？」

「う、うるさい！」

しみじみと言う男の突っ込みに動揺を隠せず、口ごもりつつも反論する。気にしていないが、妙な同情は頭にくる。

お互い微妙な睨み合いのまま平行線をたどっていたものの、先程から視界の隅にちらちらと入る路地の一角が、実のところ気になって仕方がなかった。

取り立て屋たちのずっと背後。黒っぽいフロックコートを着た、まさに上流階級という様相をした男がじっとこちらを見ていたからだ。

壁に寄りかかり、こちらの成り行きを見ているその男は、二十代後半ぐらいだろうか。背は高い。髪は黒く、遠目で顔は良く見えないうが、口元がゆるく弧を描いているように見える。

別に助けてくれとは言わないが、黙って——しかも面白そうにこちらを見ているのは、気分のいいものではない。

渋面を作ると、取り立て屋たちも自分たちから逸れた視線に気づいたのか、ユーフェミアの見ている先を追って男の存在に気づく。

「なんだ、にいちちゃん。用がないならさっさと行きな」

感心なことに彼らも事を荒げるつもりはないようだった。静かに追い払おうとしているのが窺えて、助けて欲しいような、巻き込まれて欲しくないような、どっちつかずの感情がせめぎ合う。

だが、男のとった行動は予想外のものだった。やっと思いながらも、ええ、嬉しかったのか笑みを深めたのだ。

「いや、気にしないでくれ。珍しい光景を少しばかり見学していただけだ」

そう言うと言った壁から身を起こし、服についた埃を優雅にはたく。

「……」

「えっと……」

取り立て屋たちもユーフェミアも、男の発言に呆気にとられた。

こういう場合、助けるのが紳士というものではないだろうか。確かに助けてくれとは言わなかったが、言わないと助けてくれないものなのだろうか。

唸然としていると、男はゆったりと靴音を響かせて近づいてきた。

「どうしたんだい？ さあ、続けてくれ」

ユーフェミアが口を挟む間もなく、男は取り立て屋との間に立ち、続きを促すように両手を広げた。

なに、この人――。

取り立て屋たちもさすがに奇妙なものを見るような眼差しを向けている。

「見世物じゃないんだがな」

それには同感だった。

「そうかい？ 見世物じゃなければ何だって言うんだろうね。女性をこのような路地裏に連れ込んで、普通じゃ考えられないだろうか？」

穏やかな言い方に反して、取り立て屋たちに向けた眼差しは、先程とは打って変わり、決して穏やかとは言えないものだった。

もしかして助けてくれようとしているのだろうか、と思わず淡い期待をしてしまう。何気に取り立て屋たちとの間に立っているのも庇ってくれている、と考えるのは都合が良過ぎだろうか。

だが、突然豹変した男の非難めいた台詞に、取り立て屋たちの方が気色ばんだ。色めき立って一步出た彼らは、しかし手前にいた年配の男に制され踏み止まった。一方、最初から話をしていた年配の男は、ちらりと男に視線を投げると、なんと彼を執り成し始めたのだ。

「そうは言うが、こっちも仕事なんだよ。そのねえちゃんがお金を返してくれないと困るんだよ」

「私はお金なんて借りてないわよ!」

折角助けてくれそうな人なのに誤解されては困ると、すかさず反論する。事実、非難されてもそれは身に覚えのない借金なのだ。

確かに家を抵当に入れられたのは迂闊だった。だが、身に覚えのない借金まで背負うほどユーフェミアもお人好しではない。

「だが見るからにこの状況からすると、かなりの借金なんだろう?」

取り立て屋の説明から、くるとこちらに向き直った男は、すでに険しさを纏っていなかった。あれは目の錯覚だったのだろうかと思えるほど穏やかな眼差しを向けてくる。

だが今、何か聞き捨てならないことを言わなかったか。

「待ってよ! あなた、どちらの味方なの!？」

思わず怒鳴ってしまい、ハッと手で口を覆った。助けてくれようとしている人にこの言い草はない。機嫌を損ねるわけにはいかないだろう。

男は慌て始めたこちらの様子など気にも留めず首を傾げていたが、何を思ったのか、ふいに身をかがめるとユーフェミアの顔を覗き込んできたのだ。しかも無遠慮にしげしげと見つめてくる。

「……きみ、もしかしてユーフェミア・エヴァーツ?」

「え? ええ。そうよ」

あまりの近さに身を引きながら頷いた。

少なくとも彼とは初対面のはず。名前を知られているのは少し気味が悪いが、会ったことがあったらどうかと思わず男の顔を凝視した。自然と目は男の印象的な瞳に寄せられて、その夜を湛えたよう

な深い色を頼りに記憶の底を引っくり返す。しかし見覚えはなかった。出会ったことがあるなら、きっと忘れるはずはない。

しかもこの現状をどうにかしてくれるというなら、藁にも縋る気持ちで期待を込めて見つめてしまった。

その思いが伝わったのかどうか。男は身を起こすと、顎に手をあてて唸っていたが、それは一瞬の事ですぐに顔を上げると男たちを振り返った。

「事情が変わった。きみは家に帰っているといい。おまえたちは元締めのところ案内してくれるかい？ 彼女の借金について話し合おうじゃないか」

「は？ 代わりに払ってくれるっていうのか？」

取り立て屋が胡散臭げに鼻を鳴らす。

「場合によってはね。ということで案内してもらおうか」

手早く話をまとめると、さっさと身を翻し、路地から出て行こうとしている青年にユーフェミアは咄嗟に声をかけた。

確かに現状をどうにかして欲しいと思ったが、いくらなんでも見ず知らずの人に借金を返済させるつもりはない。

それを告げると青年は振り返ってニヤリと笑った。

「どちらにしろ、きみの家を訪ねるつもりだったんだ。話は落ち着いてした方がいいからね。取りあえず、こちらは片付けてしまおう」
そう言って、取り立て屋たちを促し歩き出す。

最初はいきり立っていた取り立て屋たちも、互いに顔を見合わせ戸惑いを見せている。

だが、やはりというか仲間を仕切っていた男だけは、両腕を組んで青年に声をかけた。

「そう言って彼女を逃がして、おまえも俺たちを撒こうって魂胆がないとは言えないだろう？ だから俺は話がつくまで、こっちのねえちゃんを見張っておくが構わないよな？」

男の言葉に心臓がひやりとする。言い分は分かるが、家も知られているため逃げられるはずもないのに。

怖さの方が先に立ち、縋るように彼を見た。

だが彼は「抜け目がないな」、とだけ呟くとあっさりと了承してしまった。

「いいだろう。彼女の家で待機していてくれ」

「わかった。——とところで、にいちちゃん。あんたの名前は？」

問われ、再度青年は振り返った。

「そうか。まだ名乗っていなかったな。——ディーン・ラムレイだ」
一瞬、先に行こうとしていた取り立て屋たちがピタリと足を止めた。

ユーフェミアも耳を疑った。この街の者なら、その名前に誰もがすぐに一つの言葉を思い浮かべてしまう。

——変人ラムレイ……。

密かに囁かれるそれが彼の異名だ。

では行こうかと、取り立て屋二人を促して青年は路地裏から姿を消した。

驚きのあまり息をすることさえ忘れていたユーフェミアだったが、それは残った男も同じだったようで、思わず互いに顔を見合わずと、止めていた息を深々と吐き出したのだった。

01. 予感と言うには曖昧な、後編

彼の名がこのバルフォアの街に知れ渡ったのは今から五年前。

街一番の一等地にある、街一番のいわくつき物件であったオールドリッジ邸の買い手となったからだ。

オールドリッジ邸はディーン・ラムレイの手に渡るまで、持ち主を何度も変遷し、早い者だと一日、もって五日もすれば、どんな屈強な者も取るものもとれあえず逃げ出していくと言われてきた屋敷だ。

聞くとところによると、逃げ出した者たちはみな青ざめながら、日暮れから明け方まで幽霊に追いかけて回されたと口を揃えて言っている。

つまり、知る人ぞ知る幽霊屋敷なのだ。

そのような噂のある屋敷を、次はどのような人物が持ち主になるのかと街の住民たちは噂の種に……ある意味、楽しみにしていたのだが。

彼が屋敷に入ってから、数日。一向に出ていく気配はない。

十日経っても一ヶ月経ってもそれは変わりなく、それどころかパーティーでも開いているのか、敷地内からは煌々とした明りと楽曲、人のざわめきが聞こえてくる時もあるという。

そしてついに三ヶ月を迎える頃、バルフォアの住民は彼を、幽霊と暮らす変人だと言うようになったのだった。

取り立て屋で一人残った男は、オーブリーと名乗った。

付いて来る男を居心地悪く思いながら帰路につき、ユーフェミアが鍵を取り出し玄関を開けると、遠慮もせずに彼は中へ入っていく。抵当として差し押さえられているこの家の現在の所有者は、確かに彼らの元締めなのだが、勝手に上がり込まれたようで気分が悪い。

それに、この家が自分の家ではないことが、ユーフェミアとしては実感がわかなかった。

一階は昨日まで古着屋を営んでいたバック家の物がそのまま残っていた。だが、彼らは昨夜のうちに夜逃げをしてしまったのだ。

朝起きた時、一階は静かだった。すでに一家の姿はなく、訳が分からないうフェミアの元にオーブリーたちがやって来たのだ。このようなことになって迷惑をかけられ腹は立っているが、人の気配のない家はやはり寂しい。それに、一家がここに戻ってくることはもう二度とないのだろう。

どうしようもない現実には虚しさだけを覚え、一階を興味深げにうろついているオーブリーを放っておき、二階へと上がった。

「ただいま」

誰もいない空間に声をかけ、鍵を戸棚の所定場所に置く。

まさか家を抵当にいれられたとは思ってもよらなかった。

だが言われてみれば、数日前に祖父が何かを言っていたことを思い出す。今思えば家と土地の権利書のことだったのだが、ここ数日、仕事を立て込んでいて気にも留めていなかった。それに昨夜は、前日から徹夜で仕事を片づけ、疲れきって深く眠っていた為、一階の物音にも気づかなかったのだ。

まだ安心はできないが、あの青年——ディーン・ラムレイはこの街で一、二を争うほどの金持ちだと言われている。彼が一体どのような物件で自分を訪ねて来たのか知らないが、これ以上事態が悪くならないよう祈るしかない。

夕闇の迫りくる窓辺に立ち、道行く人々を見下ろす。

この家はユーフェミアが祖父から受け継いだ唯一の財産だ。できることなら手放したくはない。それに——。

窓に映った室内を振り返り、先ほどまで誰もいなかったその場所に立つ祖父に、ごめんなさいと呟く。

「もしかしたら家を手放すことになってしまうかもしれない……」

今では絶対に祖父の温かい手を握ることはできないが、その笑顔

の温かさは生前と変わらない。

『ま、仕方ないの』

日が暮れる頃になると、祖父のナフムは現れる。

五年前、ナフムは確かに亡くなった。他に家族のいないユーフェミアは一人、ここで暮らすことになったのだが、しばらくして祖父が廊下に立っていることに気づいた。

だが幽霊というにはおぞまじさがなく、生前の元気だった頃そのものの祖父で、病気だったことも亡くなったことも、夢だったのではないかと思えてしまうほど変わりなく、だが透き通る身体は現実で、どうしたものかと思いつながら数日を過ごしていたが、ある日、どうにも堪え切れなくなって声をかけてしまったのだ。

話してみるとナフムは自分が死んでいることに気づいていた。ただ、ユーフェミアに見えているとは思わなかったようで、怖がらせてはならないと、これからもずっと見守っていくつもりだったと話してくれた。

それからは日が暮れると、ナフムと過ごすことにしている。一緒に夕食を取ったり、仕事を手伝ってもらったりしている。

ナフムはかつて大学の教授をしていた経歴もあり、ユーフェミアも子供の頃は彼に文字や勉強を教わったのだ。おかげで女性としては珍しく読み書きができ、今では写字職人として一人で生活する分にはそこそこの収入も得ている。

「ねえ、もしも……家を手放すことになったら、おじいちゃんはどうなるの？」

『ん？ そうじゃな。わしはここから動けんじやろうて』

分かりきっていた返事に、口を引き結ぶ。

今までどうにか一人でやってこられたのも、夜になるとナフムが現れてくれたからだ。それもこれも自分のせいなのだが、これから本当に一人きりになるのかもしれないと思うと、胸が押し潰されそうになる。

『心配せんでも大丈夫じゃ。何となくそんな気がするわい』

撫でる感触はないが、ナフムが今、頭を撫でてくれているのが分かった。ユーフェミアの頭の位置に持ち上げられた手が、ゆっくりと動いている。

「おい！　ねえちゃん！」

一階からオーブリーの呼ぶ声がして、ハツとする。

いい加減、ねえちゃんと呼ぶのは止めて欲しい。中年の弟を持った覚えはないのだ。

何か言い返そうかと思ったが、続けてディーン・ラムレイが来たことを告げられ思い止まる。

不安はあったが行かなければならない。今後の生活がかかっているのだ。

穏やかに笑むナフムに見送られて、ユーフェミアは一階へと向かった。

「つまり、現在この家は貴方のもののね？」

説明を受けながら、確認した。

ディーン・ラムレイの説明によると、ユーフェミアが払うべき借金は、払わなくてもよくなったらしい。元々借金はユーフェミアがしたのではなく、保証人になっていたわけでもないのです、それが幸いだったと言われた。

だが、やはりこの家は抵当に入っていたようで、家と土地の権利書はすでに彼らの手に渡っていた。当然それは払わなければならなくて、彼がその場で支払ったと言った。そして権利書は現在、彼の手の中にある。だから当然、家主はディーン・ラムレイということになる。

オーブリーはそこまで話を聞くと、用は済んだと判断したらしい。呆気ないほど簡単に立ち去ってくれた。

ユーフェミアたちは一階の客間に取りあえず落ち着き、話を続けているのだが。

「きみは、このままここで暮らしたい？」

「あたりまえです！」

もし出ていけと言われれば出ていくしかなかったが、選択の余地が残されているなら、もちろんこのまま住ませてほしい。ナフムとも離れる必要はなくなる。

「そうだね。私も別にこの家が欲しかったわけじゃないからその点はおかまわない」

さらりと言われたその言葉に、思わず目を見張る。

欲しくもないのに家を買う人の心理など分からない。助けてくれて文句を言うのも何だが、それだけお金が有り余っていることを何気に自慢しているのだろうか。

「――ありがとうございます」

引きつりそうになる頬を笑顔でどうにか誤魔化すと、彼の機嫌を損ねないよう一先ず礼を口にする。

しかしユーフェミアには一つだけ懸念があった。

それを察したのかどうか。彼は口を開いた。

「ただ――」

きたっ、と思った。

無料で美味しい話など、あるはずないのだ。^{タダ}

「何でしょう？ 家賃はきちんとお支払いしますけど」

差し当たって先手を打ってみる。

家を買戻すことも考えたが、それはどう考えてもユーフェミアの現時点での収入では無理だった。ならばせめて人道的に暮らしていける方法を選びたい。

彼はそれには答えず周囲を見渡すと、面白そうに口元を歪めた。

「ここは以前、店をやっていたのかい？」

「ええ。昨日までは古着屋でした」

目の前に座る男が着ている服よりも格段に質の落ちる服が、客間とはいえ其処此処に広げてあった。

まだ積み上げられている服にも目を止め、ユーフェミアは首を横

に振る。このままこの家に住むなら、店の品物も処分しなくてはならない。

「それなら私もここに店を構えることにしよう。そうだな。家賃は知らないから、きみはこれから開く店で店員をしてくれないか？」

「はい？」

それは交換条件というものだろうか。思わず聞き返す。

「うん。いい案だ」

よしっと言って、彼は立ち上がった。ユーフェミアの返事も聞かずに。

「詳細はまた後日にしよう。今日はもう遅いから失礼するよ」

「はい？」

すでに彼の中では決定事項となってしまったようだ。

釈然としないまま、それでも家を出なくてもいいという安心感に、どっと疲れが押し寄せてくる。

「ラムレイさん」

店の出入口でもある扉の前で、馬車に乗り込む青年に声をかけると、振り返った紺色の瞳がユーフェミアを映した。

「ディーンで結構。では、また。ユーフェミア」

お礼を口にする時間さえ与えられず、さっさと馬車の扉を閉めた青年を呆気にとられて見送る。

悪い人ではないのかもしれない。だが、何なのだろう。彼は周囲が見えていないのだろうか。その行動と思考に合わせようとするとかなり疲れる。

石畳を去っていく馬車を見送りながら、夜空を見上げて息を吐き出した。

まさかこれがユーフェミアの運命を変える出会いになるとは、その時は思いもよらなかった。

02. その日は薄く紗を掛けた雨が降っていた 前編

絶対にお客なんて来ないわ――。

アンティークショップ
その骨董品店は、開店日から雨が降っていた。

大々的な開店を呼びかけたわけでもなく、ひっそりと開店したのだが、店に並ぶ商品を見てユーフェミアが呟いたのもあながち間違いいではない。

もともと古着屋であった店内を改装し、残っていた古着や家具などはすべてディーンが処分してくれたが、それでも広いというほどの広さはなく、壁紙も張替え、しつとりと落ち着いた雰囲気に変わっていく様を見ていると、思った以上に素敵なお店で、こんな場所で働くのも悪くないかも、という気分にはなっていた。

しかし昨日から次々と運び込まれてくる商品にユーフェミアは目を疑った。

骨董品店と聞いて、店内の広さと雰囲気から小物類、もしくはちよつとした家具なのだろうと思っていたし、ディーンからも外国の珍しいものと聞いていたので期待もしていた。確かに家具類もあった。素敵な照明もあって、値段を聞き、即座に断念したものもあったのだ。

だが、店の奥まった一角に置かれた商品に、有り得ないと呟やかずにはいられなかった。

普通に見たら有り得ないことはないのだ。ソファにアンティーク人形が並べられ、見ている分には随分と可愛らしい。

だが、ユーフェミアには分かってしまったのだ。それらから祖父のナフムと同じ気配がする――。

「嘘でしょう……」

やはり彼の幽霊にまつわる噂は本当だったのかと、胸に密かに不安が生じたのは言うまでもない。

お客が来ない理由は、実はもう一つある。

それも現実的な理由である。

単純に高価すぎるのだ。値段を聞くまでもなく、デザイナー的にも庶民の家にそぐわない。

このバルフォアの街の住民なら、約一年分の稼ぎを注ぎ込んでも買える代物ではないだろう。

つまり開店休業状態だ。しかも柔らかな雨が降り続けている。客足は遠のく一方だ。

果たして、この街の住民でこの店の骨董品を買える者はいるのだろうか。いるとしても、きっとディーンの種類だろう。買う必要はないが、買っておいてもいいか、という理由にもならないような理由で買いたい物ができる人種などそういて欲しくはない。

ユーフェミアは昼過ぎには早々と見切りをつけ、部屋から本来の仕事道具を持ってきた。

客なんてどうせ来ないのだ。店番も、仕事をしながらやって悪いことはないだろう。

近年、印刷という方法で紙に大量の文字を写すことができるようになったが、それでも流麗な写字を好む者もいる。ユーフェミアの筆跡は割と評判が良く、指名で注文を受けこともある。そういう時は大抵、期限が切られる為かなり忙しくなる。無理な注文は断るようになっていたが、せっかく気に入って注文をしてくれるのだ。できるだけ請け負うよう努力はしているが、最近は時代の波が確実に押し寄せてきているのを感じる。いつか写本は廃れていくのだろうが、それが遠い未来なのか近い未来なのか想像はつかない。ただ、必要とされる限りユーフェミアはこの仕事を続けるつもりだった。

写本を作るのは殆どが上流階級で、金銭に余裕のある者ばかりだ。

印刷の技術が発達したからと言っても、やはり本は高価なものなので、庶民が手にできるような物ではない。

本はいくつかの工程を経て作られるのだが、ユーフェミアは決められた枠内に文章を書き記していく写字職人だ。その後、好みによって金箔などの装飾が施され、綴じられ、一冊の本ができて上がる。だから写本といえども何人もの職人の手を経るだけあって、その値段は庶民には馴染みのない可愛げのない金額となってしまうのだ。

仕事道具を抱え階段を降りながら、羽根ペンの先が少し痛んでいたことを思い出し、先にそちらの手入れをしようと決める。

綺麗な筆跡を作るには、やはり仕事道具の手入れも怠るわけにはいかないのだ。

「ナイフはどこだったかしら？」

確かどこかで見た覚えがあったのだが、どこに収納したのだったかしらと記憶を頼りに、いたるところの引き出しを開けていく。

壁に新たに設置した引き出し付きの戸棚を探していると、背後でコトリと音がした。

もしかしてお客さんが来たのかしら、と振り返る。

ディーンから店番をする上で言われた注意事項は一つのみ。その場で売るな、だ。

それを聞いた時は思わず笑ってしまった。値段が分からない物を売れるはずがない。どの商品にも値段は表示されていないのだ。ただ、素人目でも高いということが分かるだけ。

つまりユーフェミアが店員としてする仕事は、客の求める商品と客の名前を聞くこと。それのみだ。日を改めてディーンが交渉にあたるとのことだった。

楽な仕事だ。退屈なことを除けば。だがユーフェミアには本来の仕事がある。住処を得るために店番をし、食いつないでいくために写字職人として仕事をする。一石二鳥とはこういうことを言うのだろう。

時間の有効活用。

時は金なり。

世の中にはいい言葉があるものだ。

「いらっしゃい——ませ……」

音がした方に笑顔で振り返って、思わず首を傾げた。

声が尻すぼみになったのも仕方がないだろう。

なぜなら、そこには誰もいなかったのだ。

が——。

削る予定のペンを置いていた机の上には、探していたはずのナイフが置いてあった。

「……」

ユーフェミアは数度目を瞬き、うふふと笑う。

「嫌だわ。出しておいて忘れるなんて」

独り言が多くなりつつあることは気にしない。肌が粟立っているのも気のせいだろう。

考え方を変えればとても便利ではないか。そうに違いない。

椅子に座ってペン先を削りながら、それにしても、と昨夕のことを思い出し、静まっていた怒りが再燃する。

昨日、朝一番にディーンは現れたのだが、馬車から下りてきた彼が腕に抱えていたものを見て思わず一步下がってしまったのは仕方がないだろう。

濃灰色のフロックコートに鮮やか過ぎるそれは、ディーンの腕に収まり良く座っていた。

金色の髪に美しく澄み切った空色の瞳。薄紅色のドレスを身につけ、にこやかにほほ笑む彼女。

「彼女はイヴァンジェリンだ」

思わず釘づけになってしまった視線の先に気づいたのだろう。簡単に紹介された後、差し出された彼女を恐る恐る抱きかかえると、適度に重みがあり、まるで本当の子供を抱えているような気分にな

る。

しかも本来あるべき体温はなく、それでもかすかに温かいと感じるのは、馬車の中でずっとディーンに抱えられていたからだろうか。彼の体温が移ったと考えた方が、この先無難に過ごせるに違いない。「彼女もその――商品なの？」

腕の中のアンティーク人形を見下ろし、思わず小声になる。彼女に聞かれるとあまり良くない気がしたのは直感だ。

「なぜそう思う？」

意外そうにこちらを見下ろし、それから視線を彼女に向ける。その眼差しは優しく、思わずディーンから視線を外した。

見てはならないものを見た気がした。

「わざわざあなたが抱えてきたから、気に入っているのかと思って」
二十代後半の青年が人形を気に入っているという考えは、本来なら恐ろしく奇妙で奇抜な話だ。しかし個人の趣味は様々だ。もしかしたらそういう趣味を持ってもおかしくはないかもしれない。実際、彼の視線は少し違和感がある。

視線の持つて行き場に困り、仕方なく腕の中の人形を見下ろして
いると、彼は小さく笑った。

「やはり女性の方が人形は似合うね」

「いえ、私が聞いているのはそんなことじゃなくて」

ユーフェミアの脇を通り抜け、店の中へと歩いて行く店主を追い
かける。開店を明日に控えた店の中には当然客は一人もない。

「イヴァンジェリンは特別だ。彼女は売り物ではないが、彼女が選
んだ者なら私は喜んで送り出そう」

店内を眺めながら、商品の一つ一つ確認しつつ彼は言う。

「……まるで花嫁の父親みたいな言い方ね」

ぽつりと呟くと、ディーンは面白そうに口の端を持ち上げた。

「的を射た言い方だ」

ユーフェミアがイヴァンジェリンを渡すと、奥のソファに他の人形たちと共に丁寧^{オナー}に座らす。確かに周囲の人形たちとは違う存在感

がある。これほど精巧な人形は滅多にお目にかかる代物ではないだろうし、ディーンが特別だと言うのも分かる気がする。

しかし先ほどのディーンの言い方に引っかかりを覚える。

彼女が選ぶ、とは一体どういう意味だろう。

本当に生きているのだろうか。

まさかね、と思いながらその日の夕方。その意味を知ることになった。

02. その日は薄く紗を掛けた雨が降っていた 後編

太陽も西に傾き、ほんのりと残照に輝く空はすでに夜に近い。

明日は開店日だというのに、その空模様から雨が降りそうだと予測をつける。

ディーンはイヴァンジェリンを置くと、夕方にもう一度様子を見に来るとだけ言い残し、一度帰ってしまった。開店の準備といっても、別にするにはもうないので来る必要はないのでは、と思ったのだが。

夕闇の中、店内を見渡し、取りあえず戸締りだけはしっかりと確認する。高価なものばかりで、泥棒に入られたりしないだろうか？ 新たな仕事に対するユーフェミアの不安はそれが全てだ。弁償などするようなことになれば、一生働いても返せないだろう。

そろそろナフムが現れる頃だと思い、ディーンが来るまで夕食の準備でもしていようと、二階に上がる階段へと向かっている時だった。

『ちょっとあなた！』

可愛らしい少女の声が空気を揺らした。最初は空耳かと思い、一階を見渡したがもちろん人のいる気配はない。

首を傾げながら階段に一步踏み出した時、再びその声は耳に届いた。

『あなたよっ、ユーフェミア』

高く澄んだ声音は可愛らしくあったが、そこに含まれるのは怒気だ。

錯覚ではない――。

振り返り、息と唾を飲み込む。

考えられるのは昼間、ディーンが持ってきたイヴァンジェリンというアンティーク人形だ。他の人形たちからも幽かな気配を感じたが、彼女の存在感は他の比ではない。

薄闇の中、ソファに座る人形たちを前にすると、かなり不気味だった。独特の雰囲気気圧されそうになる。イヴァンジェリンは特にだが、他の人形たちの出来もかなり精巧なのだ。

しかしユーフェミアはイヴァンジェリンだけに視線を注ぐ。

見た目は人形そのものだ。昼間、抱えた時の感触からもそれは疑いようがなかった。

『な、なにを見てらっしゃるの？』

再び声がして、ユーフェミアは肩から力を抜いた。

「話す時に口が動くかと思ったのよ」

想像してみたい。陶器の口が切れ目もなく動いたらどれほど恐ろしいか。生憎、彼女の口は動いていなかったが。

『……わたくしが怖くないの？』

先ほどまでの怒気がなりを潜め、意外そうな声が届いた。

その質問には腰に手を当てて胸を張った。

「昔から時々不思議なことは体験していたし、今は亡くなった祖父と暮らしているもの。少々のことでは驚かないわ」

二階を指差し答えると、イヴァンジェリンも同意した。

『あの気配は、あなたのおじいさまでしたの』

「血はつながってないけどね」

ナフムは昔、ユーフェミアの母の実家で世話になっていたと聞いている。ただその後、母の実家は没落し、当時、婚約をしていた母のお腹にはすでにユーフェミアがいたと聞いたことがある。婚約は破棄され、途方に暮れる母をナフムは引き取り、お嬢様であった母に庶民の生活を教えていたが、慣れない生活がたり、結局ユーフェミアが十歳のころ他界してしまった。ナフムはそれからユーフェミアが一人でも暮らしていけるよう様々なことを教えてくれたが、死んでからも側にいてくれるのは、きっと心配しているからだろう。一瞬お互いの間に沈んだ空気が漂う。しかしそれを壊したのは、イヴァンジェリンだった。

『それは立ち入ったことを申しましたわ……って、違いましたわ！』

話をそらさないでくださる？」

「何かしら」

言われてみれば、イヴァンジェリンがなぜ怒っているのかを聞く為にここに来たのだ。

ユーフェミアはイヴァンジェリンをそっと持ち上げた。

『な、何をなさるの！？』

「あなた、自分では動けないんでしょう？ 上から見下ろされるのは嫌でしょうから、ちよっとこっちに来てもらおうわ」

有無を言わず自分の所定場所になる机にイヴァンジェリンを座らすと、ユーフェミアも側にあった椅子に腰かけた。

その間も、彼女は何か喚いていたが取りあえず無視をする。

「さあ、どうぞ」

やっと落ち着いて正面を向くと、イヴァンジェリンの声は一際高くなった。

『もっと丁寧に扱って下さらないっ？ わたくし、繊細ですよっ！』

「はいはい。で？」

所詮、表情のない人形だ。いや、あるにはあるのだが緩やかに口角が上がり、柔らかく笑んでいるのだ。声だけが怒っても、その声は可愛らしい少女のもので、ユーフェミアにとって害はない。見ている分には本当に可愛らしいのだ、彼女は。

それにこうして話し相手をしているのも彼女に興味があるからだ。極めて冷静に促すと、一瞬彼女の高まった怒りを感じたが、すぐにイヴァンジェリンは声高にまくし立て始めた。

『あなた、デイン様に馴れ馴れしすぎますわ。もっと離れて話しなさい。それに聞きましてよ。あなたは雇われている身でしょう？ もっと立場をわきまえなさい！ それに名前も呼び捨てなんて失礼ですわ！』

意外にも彼女のような存在から、まともな言葉が返ってくるとは思わなかった。だからつい感心してしまったのだが、彼女が誤解し

ている幾つかの点を先に訂正させてもらう。

「雇われているのは少し違うわね。立場云々はともかくとして、助けてもらったことに関しては頭が上がりえないわ。それと、呼び捨ての件については彼がそれでいいと言ったのだけど？」

『ディーン様が？ ……そ、そう』

肯定の返事が返ってきたが、すぐに、どうして、と小さな呟きが聞こえる。

戸惑いと共に少しだけ彼女の怒りが弱まったような気がして、ユーフェミアはにんまりと笑った。

彼女の台詞の裏を返せば、近づくなということに違いない。あまりにも直接的過ぎるイヴァンジェリンのディーンに対する好意を微笑ましく思うと同時に、ディーンの彼女を見る眼差しを思い出す。

もしかして、相思相愛だろうか。

だがユーフェミアの中に浮かぶ——どちらかというところと正常な人間としての嫌悪に近い——感情は、すぐにそれを否定する。

確かにディーンは変わっているかもしれないが、娘を嫁に出す心境だと言っていた。出来ることなら、その言葉を信じたい。

とは言うものの、目の前で沈みがちな人形を見て、ついからかいたくなってしまったのは、彼女があまりにも愛らしかったからだ。

「あなた、彼の事が好きなのね？」

『っ！』

言葉にならない驚きが空気を伝わる。

『な、なんて無礼なの！ いきなり人の心に踏み込むなんて！ 淑女としてあるまじき言動よ！』

果たして、人、なのかどうなのかはさておき、少なくとも彼女が今までどのような所にいたのかだけは判明した。

彼女ほどの人形ならば、常に上流階級の家に置かれていただろう。紳士淑女の生活を目の当たりにしていたのなら、今の台詞も納得だ。暗くなった室内に、ユーフェミアは立ち上がる。

『な、なんですか？』

びくつく彼女を見下ろし、くすりと笑ってみせた。

途端、彼女の恐怖が伝わってきて、ユーフェミアは耐え切れなくなって吹き出した。喋る人形に怖がられようとは思わなかった。

「明かりを点けようと思っただけよ」

夕方に来ると言ったディーンは未だ来ない。予定が変わったのかもしれないし、そうでないのなら来た時に室内に明かりが灯っていれば、遠慮なく入って来ることができだろう。そう思って、入口の扉だけは鍵をかけていないのだ。

ランプに火を灯し、机の側に持ってくると、ふわりと明るくなった室内を見渡してからイヴァンジェリンを見つめる。

まさに陶器のような肌に空色をした瞳。金の髪はゆるく巻かれている。薄紅色のドレスは上質の布地でつくられ、ふんだんにレースが使っている。顔立ちも美しく、優しい眼差しをしている。女の子なら一目で彼女の事を気に入るだろう。事実、ユーフェミアも子供だったなら、きっと欲しくてたまらない。

しかしディーンは彼女を売りものではないと言った。もしかして彼もイヴァンジェリンと話することが出来るのだろうか。噂で言われているように、彼が変人と呼ばれるようになった経緯を信じるなら有り得ないことではなのかもしれない。

そうすると、一体どういうつもりで彼女をここに持ってきたのだろうか。

ユーフェミアの特殊な感覚は、気づいた時にはすでにあったものだ。しかしそれは人より鋭い程度で、頻繁に不思議な出来事に出会うわけでもなかった。だから死んだナフムが当初気づいていないと思ったのも無理はない。

だがこの五年。幽霊となったナフムと暮らすようになってから、見える頻度が上がったような気がする。特に夜は絶対に出歩けない。それは防犯面だけのことを言っているのではない。今でも時々思い出している、身の毛がよだつような経験をしたことがあるからだ。

『ちよつと、ユーフェミア。ディーン様がいらっしゃったようよ。』

出迎えなさい』

イヴァンジェリンからディーンのことをもう少し探りたかったのだが、時間切れのようだ。表に馬車の止まった音がした。

それにしても。

なぜ彼女に命令されなければならないのだろう。

釈然としないまま、ランプをもって扉へと向かった。

『な、なななぜ……、——どういうつもりですか!? ディーン様
っ!』

ディーンが彼女と話せるのかどうかはすぐに知れた。
劈くような悲鳴が響き渡る。

机の上にはシンバルを持った猿のぬいぐるみ。気配はイヴァンジェリンと同等のもの。

つまり——。

『よう! あんたがユーフェミアか?』

カチャッとシンバルを鳴らし、楽しげな声を上げる。所詮おもちやのシンバルだから大きな音は鳴らないが。

「彼はリックだ」

馬車から下りたディーンが手に持っていたものに嫌な予感を感じたが、当たって欲しくない予感ほど当たるもので……。

紹介をしてくれるのは有り難かったが、ちらりとイヴァンジェリンを見ると、どうやらかなりの衝撃を受けているらしい。言葉もなく震えているように思えるのは気のせいだろうか。

「ええっと……ディーン。ちょっと、いいかしら?」

机から離れ、彼らに話が聞こえない場所までディーンを引っ張っていく。その僅かな間に、彼らの会話から彼らの仲がどういうものを察するには十分だった。

『やっと静かに過ごせると思っていましたのに!』

『うるせえな。こっちだって清々してたんだぜ? やっと小姑がい

なくなっただと思っただ」

『なんですって!？ 誰が小姑なのですっ?』

『ああ、ホントにうるせえ』

辟易したリックの声音とイヴァンジェリンの怒りに、知らず眉間に皺が寄る。

彼らから十分離れて、素直に後ろをついてきたディーンを振り返り、思わず睨んでしまったのも仕方がないだろう。

イヴァンジェリンではないが、ユーフェミアも先ほど彼女がした問いと同じことを店主に投げかける。

「一体、どういうつもり?」

「何かな?」

涼しげなその顔からユーフェミアの質問の意味を知っていて、あえて誤魔化しているのは目に見えている。

先ほどのイヴァンジェリンの言葉から、すでに彼にも人形たちの声が聞こえているのは分かっているのだ。しかも勝手にシンバルを鳴らす猿を見て説明もなしとは、考えられることは一つだ。

「あなたにも彼女たちの声が聞こえているんでしょう?」

あえて、あなたにも、の部分を強調してみた。

だが、こちらを見た紺色の瞳は興味深げに見返すだけだった。

「さてね。そう言うきみには聞こえるというのかい?」

質問に質問で返すディーンに、大人げなくもカッとする。

しらを切るつもりなら、ユーフェミアも出来るだけ隠そうと思っていたこの感覚のことを話すつもりはなかった。言いかけてしまったが、そういうつもりならこちらだってしらはつくれてやる。

「……さあ? どうかしら?」

「先ほど、あなたにも——と聞こえたのは私の聞き間違いかな?」
しっかり聞いているあたりに憎さを覚える。

「そうね。きつと聞き間違いで、私が聞いたのもきつと近所の子供の声だったでしょう」

先程からのらりくらりとかわされ、イライラする。

両腕を組んで睨んでやると、ディーンは肩をすくめて苦笑した。

「機嫌を損ねてしまったかな。それに、きみの感覚が鋭いことはもう知ってるよ。もしかするとイヴァンジェリンやリックの声も聞こえるかもと思っていたんだが……どうやら当たりだったようだね」

知っていて、あえて自ら話させようという魂胆に、ユーフェミアは身体中の血が煮え滾るのが分かった。親しくもない他人に、自分の弱点となるかもしれないことを告白しろと言うのか！

「あなた、一体どういうつもりなのよ」

「どういうつもりもこういうつもりもないな。ただ骨董品店を開いただけだ。それに――きみにも見えないものはあるようだし」

意味深な言葉を口にする、ユーフェミアの背後に視線を送る。その視線の意味に気づき、ぞわりと冷たい何かが背筋を上っていった。

背後を振り向く勇氣はなかった。思わず一步前に出かけ、目の前に忌々しい男がいたことを思い出し、何とか踏み止まる。

「おや、残念」

何が残念なものかと、勇氣を出して一步下がる。目の前の男より、背後の何かの方がまだましだ。

今更ながら、彼の心証はユーフェミアの中で最低なものになりつつあった。

「――背後の彼も含めてだが、ここにいるものたちは決して悪意はない。きみを傷つけるようなことはしないだろう」

どうやらディーンはユーフェミアを上回る感覚を持っているようだ。

だが悪意がないというのは納得いかない。いや悪意はないかもしれないが、敵意はあるように感じられる。特にあの薄紅色のドレスを着た人形から。

「雨が降ってきたみたいだね。リックも連れてきたことだし、きみの機嫌がこれ以上悪くならないうちに私は退散することにしよう」
耳を澄ますとかすかな雨音が聞こえる。

ディーンはイヴァンジェリンやリックにあまり喧嘩をしないよう注意だけすると、入口に向かった。

ユーフェミアは腕を組んだまま、それをただ目で追うことしかしなかった。

03. 濡れた髪の毛 前編

大体、謎ばかりなのよ――。

削り終わったペン先に満足し、刃に付着した汚れを拭き取ってナイフを折りたたむと、今度こそ何処に片付けたのかをきちんと記憶し、出た塵を集めて屑入に捨てた。

昨日のことを思い出すと仕事をする気も失せてしまい、仕方なく椅子の背もたれに寄りかかった。

雨足がひどくなったのか、窓から見える通りは灰色に煙っている。もともと通りの石畳も灰色で、街全体が薄闇に閉ざされたようだった。

イヴァンジェリンやリックは、ナフムと同様に日が暮れてからではないと話せないことは昨夜のうちに確認済だ。ただ、ユーフェミアには見えない「彼」についてはナイフの一件から察するに、日の出日の入りは関係ないようだ。確かに、ナイフを投げて寄こさないところを見ると、悪意があるようには思えないが。

それにしても、と机に頬杖をつく。

「どうして私を知っていたのかしら」

取り立て屋たちに追われて路地裏で助けてもらった時、じっと顔を見つめて尋ねてきたのだ。そこまで特徴的な顔をしているとは思えないが、あえて言うなら母譲りの緑の瞳が珍しいのだろうか。バルフォアの街でも、きっと数えるほどしかないだろう。

頬に手を当て、首を傾げる。しかし緑の瞳であるからと言ってユーフェミアだと限定してしまうには安直過ぎる気がする。やはり顔に特徴でもあるのだろうか。

ふと、商品の中に鏡台があったことを思い出し、椅子から立ち上がった。

異国情緒たっぷりのそれは、厚みのある板の表面を花や鳥の形に

彫った中に、真珠のような光沢のある貝片を彫った形に合わせて埋め込まれていた。表面は平らに磨いて特殊な加工が施してあるらしい。木自体は黒く艶があり、白い貝と黒い木の相反する色合いが何とも美しく、当然、値段もそれなりのものだろう。それが蓋になっており裏面に鏡が貼り付けてあって、上に開いて使用するようになっている。

木の表面を爪で傷つけないよう気をつけながら蓋を持ち上げ、ユーフェミアは鏡を覗き込んだ。

「っ！」

思わず叫びそうになり、なんとか息を飲み込む。視線を下げ、とにかく鏡を視界に入れないようにした。

今、見てはならないものを見なかっただろうか。

背後に、何かがあった。あれがディーンの言う「彼」だろうか。

悪意はないと言ったが、あれでは怖すぎる。見えなくて良かったというか見たくない。

背後にいたそれはまだ若い青年で、金色の髪は雫が滴るほど濡れて顔の上半分は隠れ、水を吸った服もぐしょぐしょだった。しかもなぜか泥まみれで、まるで馬車に水を跳ねられたような有様だ。

ゆっくりと視線を逸らせたまま鏡を閉じ、気づかないフリをする。見えなかった。見なかった。見ていない。

偶然、鏡を通したから見えてしまっただけかもしれないし、骨董品の鏡には何か不思議なことが起こってもおかしくなさそうだ。

ゆっくりと息を吸い、勇気をふりしぼって振り返る。

「ほら、誰もいない——って、あなた誰!？」

髪から水を滴らせ、床に水たまりを作りつつあるその青年を見て、思わずあとずさる。

だが、すぐに分かる。彼は生きている人間だ。生ものだ。間違いない。

それが分かった途端、強気になれた。そしてあまりのひどい格好に思わず顔を顰める。泥まみれで店内に入ってくるなど非常識だ。

「あの――」

「ちよつと、あなた！ そんな恰好でお店に入つてこないで！」

用件を聞くよりも、まず先に彼の身を何とかしなければならぬ。たとえ客だろうと商品を汚されては堪らない。すでに彼が立っている場所は泥水まみれで、その後片付けも早急にしなければならぬ。内心舌打ちしながら扉を開ける。

雨はやはりひどくなっている。まさかとは思ふものの、どう考えてもこの中を歩いて来たとは思えない。

青年を振り返ると、少し慌てたように店の奥にあとずさっている。

「あの、僕は」

「追い出したりしないわよ。もうっ、あなたが歩き回ると床が汚れるじゃない。取りあえず、こっちに來て上着を脱いで！」

店の奥はイヴアンジェリンや他の人形たちがいる。そんなところに泥水が撥ねようものなら……考えただけで頭が痛い。

開店日早々、なんてついてない。

黙って見つめていると、青年は洩々入口まで戻つて來た。

上質な布地であつただろうスーツは水氣を含んでヨレヨレになり、生地には小さな砂が入りこんでいる。

勿体ない――。

内心浮かんだ言葉を口にしないよう唇を引き結び、戸惑いながらもたもとと上着を脱ぐ青年を手伝う。その下のベストにまで雨が滲んでいるのを見て、取りあえずその場で待てと告げる。

二階へと駆け上がり、髪を拭く為の布と必要と思えるものを抱えて階段を降りると、階段下に移動してきた青年がいて、ユーフェミアは目を吊り上げた。

「あの――」

「だから、あの場所から動かないでっ」

机に荷物を置き、布を頭からかけてやる。

「……それで、あなたはどちら様かしら？」

自分のことぐらい自分でやつてもらい、持って下りてきた雑巾と

バケツで床にできた水たまりを拭いていく。

「僕はロジャーといいます。あの――ディーン様の秘書をしています」

布の向こうからくぐもった声が聞こえる。

「そう。それで、ロジャーさんは何をしにいらっしゃったのかしら？」

雇い主の名に胸に黒いものが込み上げ、ついロジャーと名乗った青年にあたってしまい、手を止めて彼を見上げた。

「ごめんなさい。こんな言い方失礼だったわね」

「いえ。ディーン様はよく誤解される方ですから」

どうやらこういうことはよくあるらしい。

その落ち着いた声音に、このような一方的な感情に気を悪くしなかった青年が気の毒になってしまった。つまり慣れているのだ。

そんなロジャーに同情すると同時に好感も覚える。昨日から、まともな会話の出来ない人や人形、ぬいぐるみとしか話していなかった為、普通の会話が出来るなら、どれほどずぶ濡れだろうが歓迎だった。

「それで、用件は何かしら？」

すっかり気分を良くし、床を綺麗に拭き終わってバケツを持って立ち上がると、ロジャーはそうでしたと言って、髪を拭っていた布から顔を出した。

その容貌に思わず目を見張る。

先ほどまで滴が垂れるほど濡れていた為、拭かれた髪はぼさぼさではあったが、それが彼の印象を悪くすることはなかった。むしろ無防備で庇護欲を誘うには十分な容色だった。ロジャーの穏やかな性格を表しているのか、女性的ともいえる美しさはその澄みきった瞳にも現れている。あまり認めたくはないが、ディーンもどちらかと言えば美形の部類に入るのだろう。だが彼の場合どこから見ても男性的で庇護欲など微塵も感じない。むしろ押しが強すぎて人の意見など聞く耳を持たない態度には反発を覚えるだけだ。

開いた口が塞がらない体験を、こんなに短い期間に二度もするのは……。

ちなみに一度目は路地裏で助けてくれた人物がバルフォアの有名な名を告げた時だ。

「ユーフェミアさん？」

「あ、ええと、それで用件は？」

きめが細かい肌をまじまじと見て、若い……、と内心羨ましく思いながら問う。

「実は――」

ロジャーが口を開きかけたその時、濡れた上着の水気を叩くために開けていた扉から、黒い大きな影が入ってきて視界の隅をかすめた。思わず悲鳴を上げると、金髪の青年を腕に抱え込んでいた。本来なら逆の行動を取るべきなのだろうが、なぜか頼りなげなロジャーの風情に、母性本能が疼いたのだろう。

持っていたバケツがひっくり返る音がする。それと同時にロジャーの慌てた声も。

だが――。

金色の濡れた頭を抱えていると、聞き覚えのある声が耳に届く。「いつまで経っても迎えに来ないから何かあったのかと心配していたんだが……むしろ私は邪魔者だったかな？」

こちらもずぶ濡れ状態で扉から悠然と入ってきたディーンを見て、安堵すると同時に彼の足もとに新たにできた水たまりに目を見張った。

「今、床を拭いたばかりなのに！」

バケツをひっくり返した責任も、この際押しつけてやる！

事情を聞くと、馬車が故障したらしい。

御者が何とか修理を試みているが、雨も本格的になっており作業は思う様に進まないとのことだった。

昔、祖父が使っていた傘があつたので出してくると、ロジャーは濡れた上着を着て雨の中、馬車に戻って行ってしまった。

あの時、ひっくり返したバケツの水は見事ロジャーの足にかかり、必死に謝るユーフェミアに大げさなほど手を振って気にしないで下さいと言ってくれた。本当にいい人なのだと思う。

靴から不思議な音を立てながら店から出ていこうとしていたロジャーは、馬車が直ったら先に屋敷に戻って仕事を片付けるようディーンに言い渡されていた。

「あなたはどうするつもりなのよ？」

当然、聞いてもおかしくない質問だろう。馬車を返してどうするつもりなのか。

嫌な予感に、自然と眉間に皺が寄る。

「本当なら客先に出向く予定があつたが……この格好では無理だね。仕方ないから予定を変更するしかないな」

聞きながら、先ほどのロジャーと同様に扉の側でコートを脱がせ、水気を飛ばす。干すにしても、さすがに滴が垂れるまま室内に持ち込むと後が大変だ。そう言えば、まだ床も拭かないといけない。

余計な仕事が増えたことに溜息をつきつつ、ディーンの返答に胡乱な視線を投げつける。

「……予定変更って？」

「まさか追い返すつもりじゃないよね？」

そのまさかです、とは言えないまま無言でいると、濡れた髪をかき上げながらこちらに意味ありげな視線を向けてくる。

「先ほど、ロジャーにはいたく積極的だと思ったのだけど？」

何をどう見てそういう考えになるのか理解不能だ。

「何か勘違いをしてるでしょう」

「私は積極的な女性は嫌いではないよ」

一歩近づくとディーンに、素知らぬ顔をして一歩下がる。

「生憎、私は興味がないの」

「それは私に対しての言葉かな？ それとも恋愛に対して？」

その質問に視線を上げる。

これ以上、無駄な会話をする気はない。ふと胸に過った想いととも、さっさと打ち切るためにもはっきりと告げる。

「どちらも」

鬱陶しいとばかりに、ある程度水気を切っていたコートをディーンに渡し、机の上にロジャーの為に持ってきていた布を持って戻る。「そうはっきり言われると傷つくな。それでも女性には評判がいい方なんだけどね」

少なくともバルフォアの街では女性からも噂通りの評判しか聞いたことがない。

布を渡し、代わりに再び濡れたコートを受け取って、階段脇にある扉へと向かう。そこは地下室への扉で、干し場は地下にあるのだ。「だったら私なんかを相手にするより、他の女性でも口説きなさいよ。その方が余程建設的ね」

「なるほど。きみは建設的なのではなく、現実的だけなのか」

その言葉に含まれた棘に気づき、思わず足を止めた。頭の中で反芻したディーンの言葉に、ゆっくりと振り返る。

「……何が言いたいのかしら？」

コートから落ちる滴が床に新たな水たまりを作りつつあったが、彼の口ぶりはどこか引つかかる。現実的で何が悪いというのか。

ディーンは髪から滴が落ちるに任せ、振り返ったユーフェミアに得意気な笑みを浮かべた。

「こう言うっては何だけど、きみと同年代の女性はすでに家庭を持っている者がほとんどだろう？　そう言った女性はある意味建設的と言えるね。きちんと自分の将来を見据えて、身の丈に合った相手を選んでいるからね」

「それが何？」

ユーフェミアも家庭を持つことを全く考えなかったわけではない。それこそ年頃には、真剣に考え、悩んだこともあったのだ。

きっとこの後続くのは、今の生き方を否定する言葉だろうと予

測はついた。だがあえて、ディーンとの会話を打ち切らなかったのは、どうして現実的だといけないのか、彼の見解を参考程度に聞いてみようと思ったからだ。

「きみを現実的だと言ったのは、今を一人で生きていくためのことしか考えていない。恋愛やその他の楽しみも知ろうともしないで、常に目の前の利益を追うことしか見ていないだろう？」

「その何が悪いっていうの？」

女一人で生きていくには、まだまだ余裕などない。女だからだと軽んじるの方が遥かに多いのだ。そして泣く目に会うのもいつも女ばかり。

「悪いとは言っていないよ。ただ、人生もっと楽しんだ方がいいと言っているんだよ」

その言葉で、ようやく彼が本来言いたかったことを理解し、思わずフツと鼻で笑ってしまった。

「要するに――」

向けた眼差しが侮蔑を含んだものになってしまったのは仕方ないだろう。

「あなたと恋愛ごっこをするべきだと言いたいのかしら？」

「まあ、そうなるかな」

今までの言葉の応酬も、結果的にはこの男を喜ばせただけなのか。ユーフェミアが足を止めてしまった時点で、どうして得意気に微笑んだのかやっと分かった。

「却下よ。あなたも早く髪を拭いた方がいいわ」

言い置くと、今度こそくると背を向け、足を止めることなく地下への扉を真っ直ぐに目指した。

03. 濡れた髪の毛 後編

通りの向かいにあるユーフェミアの幼なじみの家は、どういうわけか仕立屋だ。

夜逃げしたバック家に一階を貸す時も、商売敵である古着屋だと言ったにも関わらず、反対するどころかいい競争相手だと快諾してくれたほど彼ら一家は気前がいい。

「なんだか面白いことになってるじゃない？」

ケイトはユーフェミアが渡したディーンの服を採寸しながら、ニヤニヤ笑っている。

コートを下に干して戻ってきたあと気づいたのだが、男物の服などユーフェミアは当然持っていない。ナフムの物もほとんど処分してしまっていたのだが、幸いにも数着ある。が、どう見てもサイズ的に違いすぎる。だからと言って濡れたままの服を着せておくわけにはいかないだろう。

入れたくはなかったが仕方なく、ユーフェミアの生活空間である二階へと案内し、暖炉に火を入れ取りあえず毛布を渡す。

服はどうするかと問うと、仕立屋で――標準の体形に合わせて用意している簡易的な注文品で手直しをあまり必要としない――服を買ってきてくれと、それは全くもって不承不承といった感じで言ってくれたのだ。贅沢を言うなど言いたかったが、やはり彼は特注品にししか手を通さない人種なのかと、どこかで納得もしていた。

簡易的な品物とはいえ手足の長さに丈を合わす必要はある。ユーフェミアが採寸出来れば良かったのだが、生憎専門外だ。仕方なく着ていた服を持っていくしかなく、脱がして現在に至る……。

今、彼は暖炉の前で「彼」とチェスをしているはずだ。

商品の中にチェス盤があり、驚いたことに「彼」は二階にも移動可能らしく、ディーンは「彼」を相手にまったりと過ごしているというわけだ。

まったくこちらは雨の中、どれほどの被害を被っているのやら。開店早々、昼過ぎには店を閉め、ユーフェミアはケイトを相手に愚痴っていた。

採寸が済んだケイトは針子たちに指示を出すために一度離れたが、すぐに戻ってきた。

それほど手間はかからないようなので、このまま待たせてもらうことにした。

「面白いことなんてないわよ。なんだか最近ついてないなあ……」
待っている間、ケイトの娘で五カ月になるリリーを抱いてあやす。仕立屋の跡取り娘だったケイトは、十歳も年上の旦那さんが見習いとしてケイトの家に修業に来ていた頃から、見ているこちらが引いてしまうほど熱烈に追いかけまわし、落とした旦那さんをどのような方法でか婿養子に入れることに成功したのだ。現在一人娘にも恵まれて、これでもかと言うほど幸せを全身から醸し出している。

一方、ユーフェミアは最近疲れているのか、時々その輝きが目に痛い。だが、澄んだ瞳で見上げてくる赤ん坊は別だ。見ているだけで癒され、ちょっと高めの体温がまた心地いい。何を思ったのか、ほにやりと笑う顔には思わずつられてこちらも笑顔になる。

「やだっ、かわいすぎる!」

「そうでしょう、そうでしょう。かわいいでしょう? だから早くユーファも結婚しなって」

幼なじみの親馬鹿ぶりには目を瞑り、後半部分に顔を上げる。

「いやよ。結婚はしない」

昔から言い続けている言葉を口にすると、困ったようにケイトはため息を吐く。

「まだそんなこと言ってる。それとも噂通り、このままデイン・ラムレイの愛人になっちゃうの?」

幼なじみの爆弾発言に、思わず目を剥いた。

「は? 愛人? 何それっ!」

寝耳に水とはまさにこのことを言うのだろう。一体何がどうなっ

てそんな話が出てきたのか。

吃驚してケイトをまじまじと見る。

「やだ、知らなかったの？　うちに来るお客さんかなり噂してるんだけどなあ。まあ……私はユーファから事情を聞いてたから分かってるつもりだけど……。だって彼、最近よく来てたじゃない、開店準備で。あの人はそれなりに地位もある人でしょ？　それにあの容姿！　女なら誰でもうっとりしてところじゃない？」

染まった頬を隠すように手を当て、思い描いているのか視線が空中で止まっている。一児の母だというのにその顔はまるで夢見る少女だ。奥にいる旦那さんの視線が痛い。

「どこが！？」

思わず全力で否定すると、冷めた瞳で見返された。

「ユーファってば目が悪い？　顔はいいと思うわよ」

「……まあ、悪いとは思わないけど」

ケイトの反論に押されるように洩々認めると、彼女はにんまりと笑った。一方、旦那さんはあきれたように首を横に振っている。そんな顔で見ないで欲しい。

「ほら。そう言うことね。年頃――は過ぎてるけど、いい歳の娘のところを訪ねてくる地位も見た目もいい青年。出資した自分の店を愛人に任すってよくある話じゃない？　噂ってすぐに広まるものよ」

どこか納得できないまま、やはり納得できない肩書に首を傾げる。

「でも、なんで愛人？」

不思議に思っただけ。

ディーンは確か独身だったはず。愛人とは既婚者に使われる言葉ではなかっただろうか。

「さあ、その方が設定上面白いから？」

深く考えていない様子でケイトは愛娘の頬をつついていっている。なにが設定上よ、とあきれていると、チラリとこちらを見上げてきたケイトが身を乗り出してニヤリと笑った。その瞳は楽しげに輝いている。

「で、本当のところどうなのよ？」

噂の真相を確かめていることはすぐにわかった。

「馬鹿言わないで」

否定の言葉を口にする、ケイトは頭を軽く横にふりながら、

「よねえ……」

と、どこか諦めたように同意した。それを見て、ユーフェミアはリリーに話しかけた。

「困ったお母さんだねえ」

「困ってるのはユーファでしょう？ 愛人なんて噂が立ったら本当にお嫁にいけないわよ」

心配してくれているのは有り難いが、それに関しては別段気にしていない。嫁に行く気などさらさらないのだ。というより、むしろこの噂は利用できる。

「いかないから別に構わないわ。それに放っておけばそのうち消えるわよ」

噂なんて何日で消えるのだったかしらと呟く。

もうっ、と怒り気味に頬を膨らますケイトに、むずがりはじめたリリーを慌てて渡す。

そうこうしているうちに、針子さんたちの腕の良さなのか、一刻も経たないうちに服は仕立て上がっていた。

出来上がった服一式を、少しの間だからと皺になるのも構わずに、濡れないように別の布で包んでもらい、土砂降りの雨の中を通りを突っ切り、我が家に駆け込む。

肩が濡れて服の色は変わってしまったが、取りあえず胸に抱えていた包みは無事ようだ。

あとは皺にならないうちに早くディーンに渡して、着替えてもらわなければ落ち着かない。

居間に入ると、毛布にくるまったディーンは一人楽しげにチェス

を打っていた。

それは不気味な光景に思えたが、「彼」がいると知っていればそれほどおかしいものには見えない。やはり、ディーンが変人の異名を持っているのも、その感覚のせいなのか。この光景など特に事情を知らない者が見たら、明らかに気味の悪い人に見えてしまう。

それはユーフェミアにも言えることで、この目に関しては細心の注意を払うようにしていた。

「着替えはここに置いておくわよ」

包みから取り出して、ソファの上に皺にならないよう置いていると、ふと近くに気配を感じて振り仰ぐ。

「なに？」

毛布にくるまったディーンが側に立っていて、その視線はユーフェミアの頭に向かっていている。

「座って」

「え？」

毛布から手を出してソファを指差すが、彼の意図が何なのか分からず怪訝な顔を見ると、有無を言わさず腕を取られ、座らされる。

「ちょっと、何なのよ？」

強引な扱いに文句を言おうとしたが、すぐに背後に回った彼が、結い上げていた髪を解きはじめてギョツとする。

「何するの！」

「悪かった。きみをこの雨の中に外出させるなんて配慮に欠けていた」

ゆるゆると解かれていく髪は濡れているため、ともすると指に引っかかる可能性もあるはずなのに、その手つきはどこまでも優しく丁寧だった。

髪から伝う滴が頬を流れる。

予め用意していたのか、布で包むように水気を取るディーンになれるがまま、無言で床を見つめる。

背中が強張るほど神経が髪に向かっていている。

別に謝って欲しいわけではない。彼が横柄な人間であることは知っている。むしろそのままそこにいて、普通のことを口にしないでほしい。でないと自分がとても酷い人間に思える。家のことにしても助けてもらいながら、意識的に線を引いて出来るだけ関わり合いにならないようにしているのに……。

いたたまれなくなって目を閉じる。

そしてゆっくりと息を吐くと、目を開けた。

「もういいわ。あとは自分でするから、あなたも着替えて」

立ち上がろうとしたが、しかしそれは叶わなかった。軽く肩を抑えられ押し戻される。

「前から思っていたけど、きみの髪は蜂蜜色だね。母親も同じ髪色だった？」

それは不意打ちだった。

びくりと身体が震える。肩に置かれたままの手は、きつとそれに気づいたに違いない。

母のクリスティアナは見事な金色の——ロジャーと同じ色の髪だった。少し色の抜けたとも言えるようなユーフェミアの髪色とは明らかに違う。それはつまり——。

『誰じゃ、おまえさんは？』

突如思考を遮る声に、ハッと顔を上げた。

今日は一日中雨が降っていて、あまりにも暗くて日没の時刻だと気づかなかった。

ナフムがもの珍しそうにこちらを見ている。そして、肩に乗ったディーンの手存在に気づいたのか、つかつかとやってくるとパシリとその手を叩く——ふりをした。

『気安くよそさまの娘に手を触れるんじゃないわい！ まったく、今時の若いもんは……』

ディーンにもナフムが視えているらしく、肩にかかっていたかすかな重みが消えた。その隙を見逃さず、ソファから立ち上がる。

「おじいちゃん。彼も視える人だから、適当に相手してあげてて。」

私は夕飯の支度をしてくるわ」

背後にいるディーンを振り返らず、ユーフェミアは逃げるように居間を後にした。二人の間に流れる気まずい雰囲気など気づく余裕もなかった。

居間から出た扉の前で、ユーフェミアは身を竦めるように腕を抱えた。そして下ろした髪を手にとって眺める。

もしかして彼は知っているのだろうか。ユーフェミアが確信を持ってないまま恐れている、口に出すこともできない秘密を――。

04. こんなものじゃ懐柔されないって言ったけど 前編

どうして知っているの――。

夕飯を作るとは言ったものの、ここ数日シチューを温め直しては食べるという生活を送っていたので、実際のところ準備などない。しかし薄暗くなりつつある台所で、じっとまな板を眺めながら考えていた。

落ち着いて考えれば別におかしなことを聞かれたわけではない。それに蜂蜜色の髪などどこにでもある色だ。いや、蜂蜜色という綺麗な表現はおこがましい。単なる金髪でも色が抜けたような中途半端な髪色なのだから。

カタリと音がした。

ハツとして振り返るとディーンが台所の入口に立っていた。着替えは済んだようで、さすがにいつもの正装とまではいかなかったが、それなりに見られる姿になっていた。

「私もあるのかな？」

気がつけば火にかけていた鍋の中味はふつふつと煮立っている。部屋の中はすでにシチューの香りが充満していた。

「……あなたの口に合うものなど、ここにはないわ」

不意に、先程肩に置かれた手の感触を思い出し、顔をそらす。決して力を込めて押さえられたわけではなかったが、逆らえない何かがあoの場にはあった。それがひどく恐怖を煽る。

さっさと帰ってもらった方がいい。それでなくとも気分が悪い。あのことを考え出すと心の中はいつも燻り、暗澹となる。

だがディーンは遠慮もなく台所に入ってくると、鍋の中を見下ろして首を傾げた。

「今日は開店日だというのに、お祝いはしないのかい？」
言われ、口を閉ざす。

考えてもみなかった。もしかして、その為に彼は留まっていたのだろうか。確かに馬車の故障は急なことだったかもしれないが、どちらにしても来る予定だったと？

途端、いつも通りの食卓が恥ずかしくなる。いい歳をして、気が回らないにも程がある。

だが、口から出る言葉はどこまでも可愛げがなく――。

「だ、だって、あの店はあなたのお店よ。私は別に関係ないし……」
「それを言われると身も蓋もないが、少なくともきみも開店を楽しみにしていたと思っていたのは私の勘違いかな？」

それには、もう口を開くことはできなかった。

確かに楽しみにしていた。だが……。

胃の中で消化不良をおこしているような、胸の上に重い石が乗っているような、そんな心地がして気分が悪い。ぐるぐる、むかむかする。風邪のひき始めのように、体温まで下がった気がして指先を動かすことさえ億劫だった。

だが、行きつくところまで行くと、プツリと何かが切れたように浮上してきた。

考えても仕方がないことは、今は考えない。それにこういう時は、全く違う何かをするに限る。

どうにでもなれ、という気分で正面からディーンを見据えた。完全に塞ぐ気分が晴れたわけではなかったが。

「分かったわ。今からご馳走を作ってやろうじゃない。そのかわり、あなたも手伝いなさい。店主！」

そう指を突き付けて、宣言した。

とは言ったものの、ユーフェミアが実際にしたことと言えば、野菜を千切って皿に盛ったサラダぐらいで、後は食卓について台所で無駄なく動くディーンを目で追っていた。

その手際は誰と比べるまでもなく実際に見事なもので、手伝えと

言ったものの手持無沙汰になったのはユーフェミアの方だった。

僅かな食材でいかにご馳走を作るのか、という技を目の前で繰り広げられ、少なくとも敗北感を味わっていた。

小麦粉は常備してあるのでバターと混ぜてパイ生地を作り、生地を寝かしている間にスープを作っていく。出来たパイ生地には先程まで温めていたシチューを包み、こんがり焼き上げれば、その香ばしい匂いに胃袋がグツとつかまれる。

パンにオリーブオイルとガーリックを混ぜたものを塗って焼き上げれば、さらに食欲をそそり、完全に白旗を上げるしかない。

「あなたの職業は何だったかしら？」

少なくとも料理人ではなかったはず。

お金持ちであるため、料理人ぐらい雇っているはずだ。それとも給金をケチって毎日料理しているのだろうか。

食卓の上に並べられていく料理を睨んで、半ば不貞腐れているとナフムがやってきた。

『ほほう、これはこれは』

その口調は褒めているとしか聞こえない。

「……おじいちゃん」

苦虫を噛み潰したような声で訴えると、ナフムは優しく笑み、手をユーフェミアの頭へと乗せる。そして相反する眼差しをディーンに向けた。

『こんなものでわしやユーフェミアを手なずけようったってそうはいかんぞ！』

「おや、駄目ですか？」

しれっと答えるディーンに、さすがにユーフェミアも黙っているわけにはいかなかった。

「ちよつとばっかし料理が上手だからって、何だって言うのよ。見た目じゃなくて、要は味でしょう」

言いながら、立ち上ってくる香りに、お腹が鳴りそうになり、慌てて押さえる。

ディーンが向けてきた眼差しも、どこまでも余裕で余計に腹立たしい。

絶対に味も保証付きだということは、作る過程を見ていたら分かる。

食卓に用意された席はきちんと三人分。言わなくてもナフムの席も準備され、ユーフェミアは思わず沈黙する。

毎晩、夕食はナフムと取っており、きちんと皿を用意するようにしていた。実際にナフムが食べることはできないが、一人の食事は美味しくない。雰囲気だけでも二人で食事をした気分を味わいたかった。ちなみに、ナフムの分は翌日の昼に食べるようにしていたが、ナフムも用意された席に、当然のような顔をして着く。

こんなことで懐柔されるほどユーフェミアもナフムも甘くはない。

「せめてお酒があつたらもう少し雰囲気が出るんだけどね」

食事を進めながら、ディーンが呟く。

綺麗な食べ方――。

ぼんやりと眺めながら思う。

ナイフやフォークの使い方も、おそらくマナー通りなのだろう。庶民から見ればそれが正しいのかどうかは分からないが、控え目に言っても美しい所作だと思う。

「お酒なら料理酒があるわよ」

ユーフェミアは飲もうとは思わないが、多分料理酒でも飲めくはないだろう。一応気を利かせて言ったつもりだったが、ディーンは苦笑しながら辞退の言葉を口にした。

「いや、いいよ」

その言葉を最後に、静寂が落ちる。

ナフムは食事を始めてから、じっとディーンを見て、何かを考え込んでいる。首を傾げているところを見ると、何かを思い出そうとしているようだ。

考えの邪魔をするのも悪いし、ユーフェミアもディーンを相手に話すこともなく、目の前の料理を攻略する。

思った通り味はいい。シチューも昨日とは味付けが変わっている。あのわずかな間に何か細工をしているようには見えなかったのだが、眉間に皺を寄せると、目の前から楽しい声が降ってきた。

「今、何を考えているか当ててみようか？」

「何よ、突然」

眉間に皺を寄せたまま見上げると、余裕ぶった表情で見下ろしてくる。

「シチューの味が違う。何をしたの、ってね」

「そ、それは、今食べてるから……」

当てるのとは違うだろう。単に推測しただけだ。

ムツとして黙ると、ディーンが自分の眉間を指で叩いた。

「それもあるけど、ここに皺が寄ってる。きみは私にヘンな対抗心を持つてるから分かりやすいね」

対抗心というよりはむしろ敵対心だ。しかもそう簡単に分析されてはたまらない。まだ出会ってからそんなに日数は経っていないのだ。一体何が分かると言うのだろう。

それに――。

ふと思ひ出す。

取り立て屋に追われていたあの日。ユーフェミアのことを知っているような口ぶりだった。

今まで聞く機会はなかったが、今が丁度いい機会なのかもしれない。

ナイフとフォークを一度皿に置くと、正面から黒髪の青年を見た。やはり、あの日まで出会ったことはないはずだ。認めたくはないが、彼の夜のような紺色の瞳は印象的だ。たとえ忘れていても、見れば必ず思ひ出すだろう。

じっと見つめていると、ディーンは珍しく柔らかな笑みを浮かべた。それはとても魅力的に見えるはずなのに、やはり心の底が冷え

ていく。

「どうかしたのかい？」

ナイフとフォークを同じように皿に置いたディーンは、食卓に片肘をついて、その手の上に顎を乗せた。完全にくつろいだ姿勢で、じつとこちらを見る瞳が、話を促している気がする。

その余裕のある態度に確信する。

彼はやはり何かを知っている。ユーフェミアの知らない何かを。何を聞かれても答えるだけの――^{かわ}躲すだけの準備があるのだろう。

だが、彼が正直に話してくれるとは思えなかった。いつも肝心なことはぐらかすばかりで、こちらの苛立ちが募っていくばかりだ。だから慎重に聞かなければ、また誤魔化されてしまう。

どう攻めていったらやろうかと考え、取りあえず無難な質問をすることにした。

「あの日……あなたに助けてもらった日、あなたは私を訪ねるつもりだったと言ったわ。どうして私を知っていたの？」

これはあの日の出来事でうやむやになっていた事だ。今更言い逃れのできる話ではない。

「ああ、そのことか。……そういえば、忘れていたな」

「忘れる程度のことだったの？」

その程度の用事で、ユーフェミアの家を買い戻してくれたというのだろうか。それでは割が合わないのではないだろうか。

訝しんで見つめると、彼は一つ溜息を落とした。

「どうしてきみはそう私に突っかかるかな。それでも結構きみを気に入ってるし、仲良くしていきたいと思っているんだけどね」

表情を曇らせて声音を落とすそのわざとらしい態度に、刺々しい眼差しを向ける。

「話をそらさないで」

同情を買おうたって、そうはいかない。

突っぱねると、ディーンはやれやれといつも調子に戻って肩をすくめた。

「忘れる程度、というわけでもないよ」

「じゃあ、どうしてそんなにどうでもいいことのように言うのよ」

「別に急ぎではないから」

ゆったりと告げられた言葉に、またしても話の論点がずれていることに気づく。

食卓の下で手をぎゅっと握り締め、湧き上がってくる苛立ちをどうにか押さえこみ話を修正する。

「何の用があったの？」

どうしても詰問調になる口調に、彼はユーフェミアの感情を読み取ったのか、今度はすんなりと答えを口にした。

「きみに仕事の依頼をするつもりだったんだ」

「仕事？」

一瞬、骨董品店の店員のことが頭を過ったが、それは行き掛かり上なっただけで順番が違うと首を振る。どう考えても写字職人としての仕事の方だ。

「きみの筆跡は、きみが思っているよりかなり有名だよ。だからね、ある人への贈答品プレゼントにと思ってね」

意外な返答に、目を瞬く。それで彼が自分を知っていたのか。納得できないこともない。しかし、それだともう一つの疑問に答えが出ない。

おそらくディーンは嘘をついていないが、まだ本当のことを言っていない。

気を緩めないまま、冷めた眼差しを向ける。

「そう。それで私を知っていたのね。でもそうすると、どうして私の感覚のことまで知っているのかしら？」

昨日からずっと不思議に思っていた。ユーフェミアのこの感覚は亡くなった母と、ナフムしか知らないことだ。しかも、昔はここまですでに感覚が鋭くなかった。

警戒も露わにじっと見つめていると、ディーンは再び溜息を零した。

「きみはこの街で、死者と関わりを持ったことが全くないと言い切れるのかい？」

回りくどいその言い方に、おさまりかけていた苛立ちが再び膨れ上がる。

彼は答えを知っているくせに、どうしてそのような質問をするのか。

激高しそうになる感情を抑えると、自然と声が震える。

「……冗談じゃないわ。どうして好き好んで彼らと関わりを持たなければならぬのよ」

身にまとう雰囲気怪しいと思いつつも、彼らがそのような者だと気づかずに話した事はある。周囲に誰もいなくて、気づいた時の恐怖を思い出し、思わず腕をさする。

イヴァンジェリンやリックとは明らかに性質が違う。もっと陰湿で未知のものだ。正体が分からないものほど恐ろしいものはない。だから「彼」も実のところ恐ろしい。

震える唇が言葉を紡げずにいると、ディーンがニヤリと笑った。

「つまり、彼らに聞いたんだよ」

「彼……ら？」

まさか、という思いで見つめると、彼はわずかに身を乗り出してきた。

「蛇の道は蛇ってね」

「あなた——彼らに近づいて平気なの？」

恐る恐る尋ねると、ディーンは食卓から腕を下ろし、椅子の背もたれにすがった。

「子供の頃からある感覚だからね。割と悪意のあるものとそうでないものの区別はつくかな」

「……そう」

言われてみれば、彼は幽霊屋敷と言われる家に住んでいるのだ。本当に幽霊が出るのか興味はあるが、彼が住んでいるぐらいだ。たとえ出たとしても今の話しからすると悪意のあるものではないのだ

ろう。

だが、ここ数年、感覚の鋭くなったユーフェミアには恐怖の方がはるかに勝っている。

側にいるナフムにしても、ずっと暮らしてきた家族だからこそ怖くないのだ。当時、怖さよりも寂しさの方が勝っていたから、受け入れられたところもある。

イヴァンジェリンやリックもまだいい。彼らは喋るだけで何も出来ない。多分、人形に取りついてしまった何かなのだろう。しかも見た目が彼らの恐ろしさを半減させている。

どこでユーフェミアの話を聞いたのか、もう少し詳しく問い詰めようとした時、ふとナフムが動いた。

『……思い出したぞ』

今までずっと考え込んでいたナフムが、顔を上げてディーンを見た。

だが、一度ちらりとこちらに視線を送ると、わずかにためらいを見せる。

「どうしたの、おじいちゃん？」

ナフムは逡巡した後、再びディーンを見た。眉間には皺が寄っている。それでもう一度気づかう様にこちらに視線を送ってから口を開いた。

『……どこかで聞いた事のある名じゃとずっと思っておったわい。

……ラムレイは、この国——フェアクロウに領地を持つ貴族。……おまえさん、ラムレイ家の者か？』

その言葉に、ユーフェミアはナフムに向けていた笑みを消した。貴族。

「——どういうこと？」

口から出た声はどこまでも低く抑揚がなかった。

商売で財を成したとばかり思っていたが、実は違っていたのか。ナフムがどうしてこちらを気遣う様子を見せたのか、分かった。ユーフェミアは自らの生い立ちから、どうしても貴族というもの

が――好きにはなれなかった。

04. こんなものじゃ懐柔されないって言ったけど 後編

「そう怖い顔をしないで欲しいな。別に隠していた訳じゃない」

吐き気がしそうなほど膨れ上がる不快感を必死で押し留めていると、ディーンは未だ余裕のある態度を見せるかのように足を組みかえた。その行動だけでユーフェミアの心が拒否反応を示す。

そのことに気づいたのかどうか。

ディーンは息を落とすようにして微かに笑うと、視線をナフムに移動させた。

「確かに貴方の言う——子爵の位は持っていますよ。ですが、貴族と言っても全ての貴族が恵まれているわけじゃない」

バルフォアは自治権が与えられている為、領主ではなく市民によって街が動く。だが、街から一步でも出ると、そこはレイヴンズクロフト侯爵の領地だ。しかし侯爵の采配がいいのか、その地は豊かで、貴族というのは皆そうなのだろうと多くの者は思っている。

だから、この街一番の金持ちだと言われている男の口から出た言葉を、素直に信じる気にはなれなかった。

ナフムも何か思うところがあつたようで、しばらくは黙っていたが、ふいに立ち上がるとディーンを見下ろした。

『じゃが……。いや、何を言おうとおまえさんが貴族であることに変わりはないわい』

最後は切り捨てるように言い放つと、空気に溶けるようにすうつと姿を消した。

珍しく怒っているナフムを見たおかげか、少しだけユーフェミアは冷静になる。嫌悪感は拭えないが、言いたいことがあるなら聞いてやろうと視線を向ける。

しかし口はききたくはなかった。

黙っているとディーンは参ったなと呟いた。

「先程も言ったけど、別に隠していた訳じゃない。領地は本当に貧

しくて、領民からの労力だけではとてもじゃないが維持が難しい。
だから他からの収入を求めて商売を始めたんだ」

「……」

「王都では拠点とする地を確保するにも場所代が高い。だからバルフォアを拠点とすることにしたんだ。ここは王都にもほどよく近いしね」

「……」

「偶然、商売が当たった私は運が良かったんだろう。おかげで何とか先祖から受け継いできた領地を守ることが出来ているからね」

「……」

「――もうそろそろ何か言って欲しいな」

困ったように眉尻を下げるディーンに、わざとらしく深々と息を吐き出して見せた。

それは嘘ではないかもしれない。

だが頭の奥で警鐘が鳴っている。信用してはならないと。

「だったら、どうしてこの家を買ったりしたの」

今の話が真実だとすると、そのようなお金などないはずだ。

その質問にわずかに目を見開いたディーンは、きみを侮っていたよ、と呟いて、降参と言うように両手を上げた。そしてやっと本音を口にする。

「下心が全く無かったわけじゃない」

「それはどういう――」

意味と尋ねようとして、彼の瞳が不敵に輝いていることに気づく。

「きみの筆跡はきみが思っているよりも有名だ」

だから、ユーフェミアを知っていたと言った。それは分かる。だが、なぜここで彼は余裕を取り戻しているのか。

「それがどうだっていうの？」

見えない話に知らずうちに口調が強くなる。

「きみの筆跡を売るつもりだと言ったら？」

「売る？」

「つまり、私と専属の契約をしてもらおうと思ってね。きみに来る仕事はすべて私を通すことになる。家を買ったのは先行投資だ。まさか……嫌とは言わないよね？」

嫣然と、勝ち誇ったように笑むディーンを穴があくほど見つめた。言わない、のではなく、言えない、の間違いだ。

これはどう考えても一種の強迫だろう。

だが、ユーフェミアの心に生まれた感情は、憤りではなかった。

そんなに世の中上手くいくはずないと思っていたが、結果的に自身を助けたのが自らの筆跡だったとは。偶然ディーンの目に止まっただけなのかもしれないが、この家で今も生活出来ているのはこの筆跡あったること。自分自身の力だったのか。

なるほど、と思う。

ここまで潔く下心があると言われたら妙に納得してしまう。胸の中の靄が晴れていくようだ。

ユーフェミアはふっと肩から力を抜くと、ディーンを見た。この男の人間性はかなり問題あると思うが、商売に関しての手腕は右に出るものはいないと聞いたことがある。ならば、彼の下で働くのも悪くないのかもしれない。

「わかったわ。あなたと契約する」

その夜色の瞳をしっかりと見つめると、ユーフェミアははっきりと告げた。

食器の片付けを済ますと、一階にいるディーンを放っておくわけにもいかないだろうと勝手に理由付け、ランプを手取る。

すでに夜の帳は下りている。

足元に注意して階段を下りながら、考えに耽る。

契約のことは後日、詳しく決めることになり、勢いで了承したのは早計だったかと反省する。ナフムと相談してからでも遅くはなかったのでは、と思ったがあの祭りだ。

それにしても、と小さく呟く。

ディーンは最初から迎える時刻を決めていたらしく、やはり開店祝いに来るつもりだったのだ。

食事が終わり、片付けまで手伝ってくれようとするディーンをさすがに台所から追い出した。ただでさえ、料理では負けた気分であるのに、このようなところまで手伝われたくない。丁重に断ると、一階にいと告げて引き下がってくれた。

日も暮れたので、イヴァンジェリンやリックも話し出す頃であったし、別に放っておいても問題なかったのかもしれないが、日頃、彼らがどのような会話をしているのか興味があったのも事実だ。

一階の奥のソファが置かれた場所に、明かりが灯っていた。

たまにカチャっという音が聞こえるのはリックだろう。それに対して、一々イヴァンジェリンの苛立った声が聞こえる。

「迎えはまだなの？」

ランプの明かりと足音で気付いたのだろう。ディーンはソファの背にもたれ掛かっていた身体を起こす。

『ちよっと、ユーフェミア。ディーン様を追い払うようなことを言うのは止めてくださらない？』

すかさず飛んでくる敵意に、近くのテーブルにランプを置くと、腰に手を当て、上から彼女を見下ろした。

「あのね、一人暮らしの女性の家に夜遅くまでいる男性の方がどうかしていると思わないの？」

『それは……そうですね、でも！』

彼女としては少しでも長く一緒にいたいのだろうが、ユーフェミアの体裁も少しは考えて欲しい。ただでさえ、愛人という妙な噂が立ち始めているのだ。気にはしていないが。

わざとあきれた眼差しを向け、彼女の矜持を揺さぶってみる。

「淑女的にどうなの、そのあたりは」

『……』

完全な無言が返ってきて、心の中で勝利を噛みしめる。やみつきになりそうな満足感に浸っていると、リックがカチャカチャとシンバルを鳴らした。

『おお！　すげえな、おまえ！　イヴァンジェリンをやり込めるなんて、ただ者じゃねえな！』

日頃は逆にやり込められているのだろう。リックの素直な賞賛の声に、ユーフェミアは少しだけ得意気に胸を反らと、今まで黙っていたデインが面白くなさそうに口元を歪めた。

「きみは私には反発するくせに、彼らとは上手くやってるんだね」
拗ねているとも取れる発言に、ユーフェミアは真顔で応える。彼のご機嫌を取るつもりは毛頭ない。

「だってあなたとの会話は遠回りすぎて、はつきり言って疲れるのよ。その点、イヴァンジェリンもリックも嘘はつかないし」

きっと、そのもって回った受け答えが、上流階級の会話なのだろう。本心をやんわりと誤魔化すような話し方は庶民のユーフェミアには無理だ。向かない。疲れる。

「私は嘘をついていないけどね」

「でも、まだ何か隠してるでしょう」

ジッと見つめて言うのと、その紺色の瞳がスッと細くなる。口元もゆるく弧を描く。

長い脚を組んでソファに座るその姿さえ、分かってしまえば確かに貴族的だ。仕事で何人か貴族を客にしたことがあるが、身に纏う雰囲気皆似通っている。

『ちよっと、何見つめあっているのよ！』

『おまえ、もう少し黙っとけよ！　いいところで邪魔すんじゃないって』

何を勘違いしているのか、イヴァンジェリンとリックが騒ぎ立てはじめる。それと同時に、表に馬車が止まった気配を感じ、ユーフェミアは言い合いを始めた二人を放っておくと、ランプを持って扉

へと向かった。

「ああ！ ジュリア！ ここにいたんだね！」

馬車から下りてきたロジャーを店内に案内したところ、ディーン
の横にいるイヴァンジェリンに目を見張るや否や、彼はすぐに彼女
の元に駆けつけた。

途端、イヴァンジェリンから悲鳴が上がる。

聞き覚えのない名前に首を傾げてディーンを見ると、彼は肩をす
くめてイヴァンジェリンに視線を送る。どうやらジュリアと言うの
はイヴァンジェリンのことらしい。

『嫌ったら嫌ですよ！ ディーン様！ この人、どこかにやってち
ようだい！ ユーフェミア！ お願いだからロジャーをわたくしか
ら遠ざけて下さらない！？』

半狂乱状態のイヴァンジェリンに、ユーフェミアは目を丸くする。
一体何事なのだろう。彼女がリックとは違う意味でロジャーが苦手
であることは今の台詞から分かったが、ここまで取り乱すとは。

当然、彼女の声はロジャーに聞こえていないようで、彼は恭しく
その小さな手を取る。途端、響く悲鳴――。

いくら精巧に出来ていても、イヴァンジェリンは人形だ。もしも
彼女が実際に生きている人間ならば、かなり絵になる姿だが、同じ
くそれを見て嘸し立てるリックを見下ろし小さく呟く。

「ロジャーって実は変態……」

『まあ、否定はしないぞ』

カチャッと鳴るシンバルに合わせたように、ソファから立ち上が
ったディーンがユーフェミアの隣に立った。

そして砂を噛んだような顔をしているユーフェミアに苦笑しなが
ら説明する。

「ジュリアは実際にいる女性だよ。ロジャーが想いを寄せる相手と
いうか、その彼女にイヴァンジェリンがとてもよく似ていてね。ま

あ……なかなか会うことの出来ない女性だから」

つまり身分違いか、もしくは相手の女性は既婚者か。

イヴァンジェリンを代用にして報われない恋心に向けても、彼女にとつては迷惑でしかなく、しかも人形だ。やはりどちらにしても報われないのであれば、憐れとしか言いようがない。

見た目も良く、性格も良さそうな人だと思ったのだが、なるほど。残念な人だったとは。

「ロジャー。もう帰るよ」

身を翻してさっさと扉に向かうディーンに、ロジャーは泣く泣く立ち上がる。

「ああ、ジュリア。また来ます」

『もう来ないで!』

甲高い悲鳴が、ユーフェミアの耳に突き刺さる。

「ユーフェミアさん。どうか彼女を売らないで下さいね」

憔悴しきった子犬のような眼差しに、悪いと思いながらも乾いた笑みを向ける。

「え、ええ。大丈夫だと思うわよ。ディーンも売り物ではないって言ってたし」

「はい。では失礼します」

ペコリと頭を下げてディーンを追うロジャーの後を、呆れながらも、見送るために一歩遅れてついて行った。

外はすっかり雨が上がっていた。

ディーンはまだ馬車に乗っておらず、外に出てきたユーフェミアに夕食の礼を告げてきた。

「今日は一緒に開店を祝ってくれてありがとう」

あれが祝う雰囲気だったのかと言えば異存はあるが、ここは大人として反論するべき場所ではないだろう。わざわざ礼儀として言っているのだから、素直に返すべきだ。

だが内容的には不本意だった。ひどく敗北感を感じるのはなぜだろう。

だから視線が合わせられない。あさっての方を見ながら口調も無愛想になる。

「別に、私が料理したわけでもないし、ほとんどあなたが準備したことじゃない」

「それでも、しようと言ってくれたのはきみだろうか？」

どうやっても言い返されてしまうことに、ユーフェミアは口を閉ざす。

だから深々と息を吐き出すと、正面からディーンを見上げた。今回ばかりは負けを認めるしかない。

「ええ、そうよ。こちらこそ開店を一緒に祝ってくれてありがとう。料理も、とても美味しかったわ」

半ば投げやりに告げると、ディーンは満足そうに頷いた。

言わされた形になってしまったが、今お礼を言っておかないと、きっと後々まで後味の悪い思いをすることになっただろう。このような失態を次回は犯さないようにしないと、と思っていると、ふと視界が陰る。

何、と思うのと、視界から影が遠ざかっていくのは同時だった。

頬に触れた柔らかく温かい感触に、思わず手を当てる。

「どういたしまして」

たとえそれが挨拶だろうと、ユーフェミアは目を丸くする。

この人は今、何をしたのだろう。

「おやすみ。ユーフェミア」

そう言って、馬車に乗り込んだディーンを見送り、しばらくの間、立ちつくしていた。

が――。

向かいの家の二階にいる人影を見て、ハッとする。

ケイトがリリーを抱いたまま、にんまりと笑っていた……。

05. 触れる指の温度 前編

思い出の中の人は、すでに色褪せて――。

ディーンと専属の契約を交わすことになり、取りあえず現在引き受けている仕事を片付けなければならなくなった。

連日連夜、仕事を片付けつつ、筆跡に間違いがないかをナフムと二人で読み合わせて校正作業をしていく。

だから自ずと夜中にその作業を行うことになってしまいうのだが、枚数が嵩張ると明け方近くまでかかることもある。

文章の抜けがないかを確認するには、読み上げることで見つけることが出来るが、綴りの間違いはやはり一文字ずつ調べなければならぬ。だからユーフェミアの作業はそれ以降も続く。

だが静まり返った夜は、目で文字を追いつながら、ふと心の中が虚ろになることがある。手も止まってしまう、意識はとろりとしたものに包まれ、夢と現実の狭間をさまよう。そしていつもたどり着くのは、ディーンと出会ったあの日ののだ。

彼のことを考えると心の中はざわつき、常に不安がつきまとう。もちろん、恋情とかそういう感情からではない。そんなものがあれば、今すぐ川に流して来ても全く惜しくはない。

強いて言うなら、強い警戒心。

普通に考えれば、面倒見のいい人に見える。

家を失いそうになったユーフェミアの借金を肩代わりし、家賃の代わりに楽な労働の提供と、仕事を認める契約までしてくれている。その契約が本当にディーンに有利に働くものなのかどうか、あの後我に返って、自分の筆跡に対してそこまで自惚れてはいけなく考え直したが、すでにナフムが亡くなって五年。女性が後ろ盾もなく一人で暮らしていくには確かに現実は厳しい。

だから、愛人と言う噂を利用しようと思っていた。あえて否定も

せず、肯定もせず、ただやり過ごす。

今までならば近所の人たちも、みな口を揃えて早く結婚しろと言っていたが、噂のおかげなのか誰も何も言わなくなった。愛人という立場が決して褒められるものではないことぐらい知っている。だが相手はバルフォアで一、二を争う金持ち、ディーン・ラムレイだ。むしろ羨望や妬み交じりの視線を向けられることの方が最近では多くなっている。

この生活を守っていく決心をしたからには、それも甘んじて受け入れる覚悟はしていた。

だが、心のどこかで常に何かを見落としているような不安もあったのだと思う。

それはあの日――開店日に、ディーンの身分を聞いた時から、心の奥底でじわりと何かが湧き出し、次第にそれは広がっていった。

ただの商人にしては、その身を包む雰囲気明らかに違う。爵位をもつ貴族だと聞いて、納得せざるを得なかった。そして、どうしてもっと早くに気づかなかったのだろうと後悔もした。

一方、もしも気づいていたら、どうしていただろうとも考える。

だが、結局は自らの考えを否定するしかなかった。

この家がディーンの手に渡った時、家を出ることを選んでいたとしても、きっと彼は契約の話を持ち出し、全く係わりのない生活にはなっていないかと思う。

つまり、それが不安の元なのだ。

ディーンと出会ったことで、否が応でも彼が自分の生活に関わってきている。軋み始めている。それが怖い。

ただ普通の人生を歩みたい。それが自らの願いで、亡くなった母の願いでもあったというのに。

ユーフェミアは疲れて熱をもった目を閉じ、眉間を指で揉んだ。少し痛いのが気持ちいい。

凝った肩を叩きながら、椅子から立ち上がる。

窓の外を見ると、空は白み始めていた。夜明けまでにはもう少し

時間があるだろう。

ユーフェミアは静かに決心すると、彼らと話をするために一階に足を向けた。

『あら……まだ仕事をしてらっしゃったの？ 睡眠不足はお肌の大敵ですよ？ ただでさえ、いい歳なのですから気をつけなさい』

気づかってくれつつも、ちゃっかりその中に棘を含ませることを忘れない人形にイヴァンジェリン気のない返事をして、彼女の座るソファに腰を下ろした。その態度に、イヴァンジェリンの感情の揺れが伝わってくる。文句の一つでも言ってくるかと思ったが、彼女は口を閉ざしたままだった。

代わりに、カチャッと小さな音を立てて、リックが己の存在を主張する。

『お？ 珍しいな、こんな時間に』

二人を近づけると喧嘩をするかな、と思ったが、かまわずリックを手に取ると膝の上に置いた。

『おいおい、どうしたんだ？ そんな神妙な顔をして』

『そうですわよ。いつもの元気はどうしたのですの？ 眠いのなら休んだ方が良くってよ？』

珍しく意気投合を見せる二人に苦笑する。

彼らと知り合って、まだわずかな期間しか経っていないが、こうして話することは嫌いではない。むしろ気に入っていた。彼らの目的を見て見ぬ振りをして、この曖昧な時間を楽しんでおけばいいのかもしれない。

だから、本当は話すべきではないのだろう。

彼らはディーンと話しをすることが出来る。ということは、今から話すこの不安は筒抜けになる可能性が高い。

だが、このままではディーンの思惑がどこにあるのか分からない。自らの秘密を打ち明けたなら、わずかでも代わりに何かを教えてく

れるだろうか。

馬鹿な事をしている自覚は十分にあった。

「少しだけ、私のことを話してもいい？」

多分、彼はこの秘密さえ知っているような予感がする。もしかしたら目の前の二人も何か知っているのかもしれない。

だが、もう何もせずにじっとしていることは出来なかった。だからと言って、彼に直接何かを問う勇氣はない。彼らがそういうものであるからこそ、打ち明けられることだってある。

彼らに否定の言葉はなかった。

ユーフェミアはソファにもたれ掛かると、天井を見つめながら口を開いた。

ユーフェミアの母親は、エヴァンス伯爵の娘だった。

つまり、貴族だった。

過去形であるのは、すでにエヴァンス家自体がなくなってしまっているからだ。

過去の詳細なことは分からない。ただ、王都にある屋敷にも領地にもいられない事態になったと聞いた。

家族は離散し、行く当てのなくなったクリスティアナを、当時王都にある大学で教授として勤めていたナフムが引き取ったという。すでにこの時、クリスティアナはユーフェミアを身ごもっていた。

ナフムはかつて、クリスティアナの父であるエヴァンス伯爵に世話になったことがあり、その縁で大学の教授になれたという恩がある。しかも、クリスティアナを幼いころから知るナフムには、彼女に勉強を教えていたこともあり、まるで我が子のような親しみを感じていた。

一方、クリスティアナの婚約者であったダルトン男爵は、身重のクリスティアナに手を差し伸べるどころか、関わりを否定し、さっさと他の女性と結婚してしまった。

当初お腹の子供の父親は多くの者がダルトン男爵だと思い、クリスティアナに哀憐の眼差しを向け、中には援助を申し出してくれる者もいたが、生まれた子供を見て、それが見当違いであることを知った。

ユーフェミアは瞳こそクリスティアナと同じ色だったが、髪色は母親とも、父親と言われていたダルトン男爵とも違う色。

つまり、彼女は婚約者を裏切り、他の男性と親密な関係になったことになる。

世間では不義を働いた女性に風当たりは強い。

ユーフェミアがまだ幼かった頃、どういう理由なのか母親の知り合いである貴族に何度か会ったことがある。その度に向けられる視線は、蔑み以外の何ものでもなく、それ以来貴族に対して苦手意識が植え付けられたと言ってもいい。

そのような扱いにも、クリスティアナは笑って耐えていたとナフムは教えてくれた。それはつまり、ユーフェミアはきちんと望まれて生まれた証拠であり、愛されていたということだ。だから胸を張って生きていいと。

もちろん本人のクリスティアナからも、たくさんの愛情をもらった記憶はある。

父親のいないユーフェミアは近所の子供たちから苛められたことも多々あった。泣く泣く帰ったユーフェミアに、やられたらやり返しなさいと、一緒に仕返しをしに行って、本当にやり返してしまったこともある。

子供の喧嘩に口出しするものじゃないと、後々ナフムに叱られていたクリスティアナの姿が今でも思い出せる。心配してこっそりと扉の影から覗いていると、こちらを見て悪戯っぽく笑ってみせ、それをまたナフムに見つかって叱られていた。

それは思い返せば本当に平凡で、どこにでもある小さな幸せだったのだろう。

差し伸べた手を握り返してくれる手も、抱きしめてくれる腕も、

頬に落とされるキスも、何もかも、行動の一つ一つ全てに愛情が溢れ、思い出す日々全てが明るい日差しの中にあった。

思い出の中の、彼女の愛情を疑った日などなかった。

しかし、そのような生活も長くは続かなかった。

実際には慣れない生活にクリスティアナの身体の方が先に悲鳴を上げてしまったのだ。

床から出られなくなったクリスティアナは、よくユーフェミアに言っていた。

「ユーファ……。決して高望みをしてはいけないわ。今ある生活を守りなさい。そうすればきっと、あなたは幸せな一生を送れるわ」

何かを思い出しているのか、そう言った彼女の笑みはいつも泣き笑いのようだった。それは、まるでクリスティアナが高望みをしてしまったかのように聞こえ、ユーフェミアは幼いながらも頷くことしか出来なかった。

まして日に日に弱っていく彼女に何が言えよう。聞くことなど出来はしない。

結局、クリスティアナの口から父親に関する言葉を聞き出せることなく、彼女は永遠の眠りについた。

05. 触れる指の温度 後編

『それはつまり……あなたのおじい様もご存知なの？』

話を聞き終わったイヴアンジェリンが躊躇いがちに声をかけてきた。

リックに至っては無言だ。彼はこのように重い話は苦手なのだろう。それはそれで構わない。

「分からないわ」

『分からないって……。聞いたことはないの？』

呆れた声音に、どう答えていいものかと悩む。

だが、意外にもリックから真剣な雰囲気を感じ、手の中のぬいぐるみを見下ろした。

『怖いのか？』

それは限りなく、胸に抱く感情に近い。

「……そう、怖いわ。でも——」

『もしかして知りたくなかったりするのかしら？』

相反する感情は、長年の付き合いだ。

知りたい。でも知りたくない。

クリスティアナの言うように、静かに平凡に暮らすのが一番なのかもしれない。何も求めず、今の生活のまま。

だが、すでにこの生活に軋みが出始めているとすると、それを正すことはもう出来ないのかもしれない。

だから——。

ユーフェミアはぐっと顔を上げた。

ここからが本題だ。

「……ディーンは、どうしてあなたたちをここに連れて来たのかしら？」

売物でもない人形を置く意味は、果たしてあるのだろうか。

もしもユーフェミアにこの感覚がないのであれば、最適な監視役

ではないだろうか。現にあったとしても、監視はされているのだらう。

これは直感だが、この監視と自分の生い立ち——つまり、父親のことが関わっているような気がするのだ。

そう思ってしまうのも、ディーンに髪色を指摘された時、彼はあえて母親と同じ色かと聞いたからだ。つまりユーフェミアには母親しかいないということを知っている。ならば、クリスティアナの髪色も知っていてもおかしくない。それなのに、わざわざ聞いてきた意味は、ユーフェミアが父親を知っているかどうかの確認だったのではないだろうか。

『もしかして、ディーン様を疑っていらっしゃるの？』

恐々とした声がユーフェミアの耳に届く。

それと同時にハッと息を飲む音が手の中から聞こえた。

『あいつが父親か！？』

イヴァンジェリンに反して、リックの短絡的思考に思わず目をむく。

「『それはない！！』」

はからずもイヴァンジェリンと声が重なる。

『チッ、冗談だよ』

あの驚きから、かなりの本気が窺えたが、取りあえず手の中のぬいぐるみは取り合わないことに決め、イヴァンジェリンに向き直る。「教えて欲しいの。ディーンが何を知っているのか。あなたたちに何を聞いているのか……」

今、自分は彼の掌の上にいるような気がする。すべての運命は彼が握っている。

『……もし、それを知っていたとして、どうしてあなたに教えなくてはなりませんの？』

「イヴァンジェリン！」

『教える義理などありませんわ』

素っ気ないにも程がある。

仕方なく手の中のぬいぐるみを見下ろす。

「リック」

『お、俺は知らねえ』

動揺にまみれた口調が何を示しているか。

思わずぎゅっと手に力を込める。

『おい！ あいつのことなんかより！ 父親の手がかりとかねえのかよ！？』

苦し紛れの言い逃れにしては、先程の冗談を入れても、本音を吐いてくれたような気がする。リックの放った二つの台詞。つまり、彼らはユーフェミアの父親が誰かを知らない。

ディーンもそうだとは言い切れないが、やはり何か目的があって自分の側にいるような気がする。それは、彼が貴族だと知ってしまったから過敏に反応しているだけかもしれない。だが、イヴァンジエリンやリックをわざわざ監視役に置いているぐらいだ。間違いはないはず。

手から力を抜くと、わざとらしく咳払いをするリックを見下ろす。返事の代わりに額にかかる前髪をつまむ。

「手がかりは——この髪色と……」

自らの掌を見つめる。

もしかしたら、過去に一度だけ、会ったことがあるかもしれない。それが父親だと断言できないのは、クリスティアナがそう言わなかったことと、ナフムがその人と激しく言い争っていたからだ。

それが同日の出来事であったか記憶は定かではない。なぜなら、ユーフェミアは当時まだ三歳かそこらだったのだ。

だから記憶の中のその人物の顔も、歳も何もかも記憶の彼方に行ってしまったのは仕方ないだろう。

唯一、髪の色が一緒だと話した記憶はある。

抱き上げられた腕は力強く、いつもより目線が高かった。

地面に下ろされ、もっと抱っこをしてほしくて見上げた先にあった指の先を握ると、とても温かかったことを覚えている。大きな手

のひらが自分の手を握り返してくれたことも嬉しくて、その瞬間、その人のことが好きになった。だが、それ以来会うこともなく、顔も名前も記憶から薄らいでいった。

『それじゃ、手がかりがないのと一緒だな』

『そうかしら？ 言い争っていたのなら、やっぱりおじい様に聞けばそれが誰なのかはつきりするでしょうし、一番早いのではないのかしら？』

イヴァンジェリンの言っていることはきっと正しい。それが出来れば、今までこれほど悩んだりしていない。

『どうして聞けないの？』

もっともな質問に、ユーフェミアはもう一度曖昧な笑みを向けた。「――やっぱり……怖いよ。答えを知った先に、自分がどうしたいのか分からないのよ」

このままの生活を望むなら、知らなくてもいい問題だと思う。それならば、知ってしまったらどうなるのか。自分は何かを望んでしまふのだろうか。

それに今まで聞かなかったことを突然ナフムに聞くようなことをしたら、この生活に不満があると思ってしまうかもしれない。決してこの生活が嫌なわけじゃない。

実は父親かもしれない人の手がかりはもう一つある。

クリスティアナの取った行動だ。

その人の帰り際に、スカートをつまみ、まるでお姫様のようなお辞儀をしたのだ。

初めて見る母のその行動に一瞬にして目は惹きつけられた。あの頃は無邪気にも、ねだってお辞儀の仕方も教えてもらったほどだ。

だが大人になってからよく考えてみると、庶民へと身を落としたクリスティアナが取る行動ではない。

いつもユーフェミアを蔑んだ眼差しで見ていた貴族たちに、彼女は一度としてそのようなお辞儀をしたことはなかった。ということは、ユーフェミアに対しての不快感を示さなかった相手に対して礼

儀を取ったのか、それ以外に考えられることは、全てにおいて優先すべきほど高い身分の持ち主か――。

『――あなたって意外と臆病者ですわね』

どこか嘲笑の混ざった声音に、意識が引き戻される。

視線をイヴァンジェリンに向けると、実際には見下ろしているはずなのに、なぜだか見下されているような気がした。

表情を動かせないはずの彼女が、どこかあきれているように見える。

『知りたいと言いながら尻込みしてる。それは単に逃げてるだけでしょう。自分のことを知ろうともしないで、ディーン様のことを知りたいなんて百年早いですわ』

突き放す口調は、どこまでも容赦ない。

言葉が出なかった。

確かに、彼女の言うように躊躇いはある。これは、逃げているのだろうか。

呆然と彼女を見つめていると、ふわりと彼女の雰囲気が変わるのが目に見えた。甘く、柔らかい、少女のようなものに。

『――わたくしはディーン様を信用していますわ』

声を落としたイヴァンジェリンが囁くように言った。

『わたくしは動けないからディーン様の行動の全てを知っているわけではありませんわ。でも、あの人の周りにいる人は誰も、彼のことを悪く言わない』

手の中のリックも反論をしないところを見ると、同じ考えなのだろう。

悪い人ではないと思っていいいのだろうか。彼が何を考えているのか分からない。ただ、自分が望んでいることは一つだ。それを守ることが出来るなら、彼を信用してもいいのかもしれない。平凡な人生が送れるなら、利用しようとしていないなら――貴族の前に引き出さないなら……。

窓から白い光が差し込んで来る。

夜が明ける。

眩しさに目を閉じ、これだけは彼らに伝える。

「私は、あの人のすべてを信用したわけではないけど、これでもあなたちは信用しているのよ……」

明けた一日の始まりに、返事はなかった。

そのまま寝入ってしまい、このままでは風邪をひくと思いながらも、重い瞼は開いてくれない。

ゆるく、髪が梳かれる。

温かい指先が、額に触れる。

記憶の底をたどる様に、あの日のままのあの人が現れる。

「エド……」

どこか戸惑ったように笑う人。

向けられた空色の瞳は春の晴れ間のように温かくて、その手が離れていかないよう手を伸ばす。

母も祖父もいなくなった。そのような温かい眼差しを向けてくれる人は、もう、貴方しかないのに……。父親だと思っているのは自分の願いかもしれないけど。

だけど、手は空を切る。

望むものは昔から決して手に入らない。手に入ったと思ってても、それは決して長続きしない。

——今あるものだけでも守りたい。もう、大切な人を作りたい。いい。

だから、一人で生きていく……。

閑話

翌日。

店番の合間に睡魔と闘いながら、作戦を練ってみた。

確かに、イヴァンジェリンの言ったことも一理ある。だが、よく考えてみると、それとこれとは話が違うような気がしてならない。彼女の言い分は、なぜかユーフェミアを好敵手視した牽制ライバルのように聞こえたからだ。そのような感情はまったく持ち合わせてなどないのに。

本当にいい迷惑だ。

にこやかに、優しく、ねだるように――。

「ねえ、イヴァンジェリン」

彼女のいるソファに、昨夜と同じようにリックを膝に乗せて座ると、二人はあきらかに狼狽した様子を見せる。

『な、何を企んでいらっしゃるの？』

『おい、気持ちわりいぞ。そんな猫なで声――』

リックに最後まで言わず、手にキュツと力を込めると、彼は息を詰めるように言葉を止めた。

イヴァンジェリンからも、微かに息を飲む音が聞こえる。

「そんなに警戒しなくても。あなたに聞いてみたいことがあったのよ」

声を出さずに笑うと、一拍後、彼女は慎重に口を開く。

『――どのようなことですか？』

注意深くこちらを窺う様子に、今度はニヤリと笑う。

昼間に散々考えた。

こちらがディーンの思惑を知ろうと躍起になってしまったから、彼らも反対に口を閉ざしたのだ。要は、自分から話させればいい。

「私にはディーンのとこがいいのかさっぱり分からないんだけど、どこがいいわけ？」

常々、謎ではあったのだ。イヴァンジェリンにしろ、幼なじみのケイトにしろ、男は顔が良ければそれでいいのだろうか。

『……あなた——わたくしに喧嘩を売りにいらしたの？』

イヴァンジェリンにしては珍しく、滅多に聞けないほど低い声音に、そこに彼女の怒りを感じる。

失敗したかしらと、慌てて、だが慎重に、今度は言葉を選んだ。

「悪い人じゃないってあなたが言っただけでしょう？　だったら、あなたが思うディーンの良さ……いえ、魅力を教えてよ」

自分で言っておきながら、肌が粟立ちそうになった。何を言っているのだと思いつつ、自らの発言を我慢しきれなくなりそうになり、思わず両手でギュツとリックを握り締めると、手の中からは、ぐええという声にならない音が漏れる。

こちらの気も知らず、イヴァンジェリンは一瞬無言になった。

またもや失敗したか、と気を揉んだのと、彼女が呟いたのはほぼ同時だった。

『み、りよく……』

うつとりと、それは溜息交じりのなにものでもなかった。

かかった、と内心ユーフェミアはほくそ笑む。

が——その後、すぐに後悔した。

『今頃そのようなことを言い出すなんて、あなたもまだまだですね。ディーン様の魅力を理解できないなんて、女としてどうかしていると思えませんか。でも、どうしてもおっしゃるなら教えて差し上げないことはありませんわ。もちろん、あなたが理解できるとは到底思えませんけど。大体、あの紺色の瞳に見つめられて心が動かされないなんて……。ああ、思い出ただけで心が震えて、胸が痛くなってしまうのに。でも、ディーン様にそう言うとは必ず仰って下さるのよ。会えない時間があるからこそ、会えた時間が最上に思えるのだと。全くその通りですわ。女性にはとても紳士的で、

かといって男性とも機知に富んだ会話をなさるのよ。その上——」

最初こそ、人形相手に語るディーンの言葉に彼も実は変態なのだろうか、とか、ではロジャーはどうなのよ、と心の中で突っ込んでいたが、つらつらと語られる話に耳を傾けていると、次第に瞼が重くなってきた。

興味のない話というのは最上の子守唄だわ、と何気に思いながら、ふと手の中のぬいぐるみを見下ろした。

珍しくシンバルも鳴らさず沈黙を守っている。

どうしたのだろうか、小声で話しかけてみるついでに、この演説がどこまで続くのか聞いてみる。

「ねえ、リック。いつまで続くの？」

『っ——おまえな！ 一番聞いちゃいけないことを聞いたって、それはないだろ！？』

「……ああ、やっぱりそうなんだ……」

なんとなくそうではないかなと思っていた。

ぼんやりと、まズったなあ、と頭の片隅で考える。

『どうしてくれるんだよっ。このままだと朝まで喋り続けるぞ！』

その言葉に、乾いた笑みをリックに向け、すぐに心は決まった。リックをソファに下ろす。

『おい？』

彼の頭をポンポンと叩いて、にっこりと笑う。

「あと、お願いね。昨日も徹夜だったじゃない？ 今日ほもう休むわ」

『おいっ！』

「じゃ、おやすみ」

リックの非難は取りあえず棚に上げておく。

未だ延々と話し続けるイヴァンジェリンは、ユーフェミアが立ち上がったことにさえ気づいていない。

一度、階段の下で振り返る。

まだ彼女は薄ら寒い言葉を喋り続けている。

うん、やっぱりー！。

欠伸を噛み締め決心する。

彼のことは自分で調べよう。一つ勉強になったと頷き、階段を上った。

06. よく分らないひと 前編

やられたらやり返す——それが母の教え。

今現在、ディーンについて分かっていることは、名前と住んでいる場所、社会的地位ぐらいだろう。つまりバルフォアの街の一住民として聞き及んでいることぐらいしか分かっていないのだ。

イヴァンジェリンから聞いた話によると、彼の周囲にいる人は——きつと近い人だと思うのだが——彼のことを悪く言う人はいないらしい。逆を言えば、彼を知らないから悪く言うのだと言われているようなものだ、自分のように。

ぼんやりと考えながら、クライトンの街を歩く。

クライトンはバルフォアから馬車で一時間ほどの場所にあるフェアクロウの王都だ。

依頼されていた原稿の納品にやってきたのだが、これが個人で引き受けた最後の仕事だった。

バルフォアからは乗合馬車を利用して来たのだが、郊外に向かうには街中を突っ切る必要がある。こちらそのまま馬車を利用する手もあったのだが、通りに並ぶ店を眺めながら歩くのも実は楽しみにしてきたのだ。仕事代が入ったら帰りに何か買って帰ろうかな、と目星をつけるためでもある。

バルフォアも商業で賑わいを見せる街ではあるが、やはり王都となると並外れた違いを見せつけられる。まず街の作りからして違う。道幅も馬車が余裕ですれ違えるほど広く、人通りも多い。一つの店の規模も違う。建物もほとんどが四階以上あり、ここに暮らす人たちの格好もどこかお洒落で洗練されたものに見えてしまう。

ユーフェミアもクライトンに来る時は客先に赴くこともあり、服装にはかなり気を使っているつもりだがやはりどこか違うのだ。今は冬場で、コートを着ているおかげで多少の誤魔化しがきくから助

かっているが。

歩きながら通りに立ち並ぶ店の飾り窓を見やり、そこに写った自分の姿にうんざりする。

コートを新調したのは遠い昔、ナフムが生きていた頃の話だ。それでも流行りのない型と色なので流行遅れには見えないが、一言で言えば地味なのだ。今更新しいコートを買うだけの余裕もなく、取りあえず着つぶす気ではいる。たとえ買えたとしても、お洒落をしても行く場所も予定もないのだから必要ないだろう。

それでも街行く同年代の女性たちを見ると、気分が沈んでしまう。ただでさえ薄曇りの冴えない天気が続く冬場なのだ。綺麗な色味の服を着た女性たちが、色とりどりの花を通りに咲かせている様は見た目にも美しく、やはり羨ましく思ってしまう。いくら気にしないようにしていても、その中に混ざれない自分が何だかすごく惨めで、この場から逃げ出したくなってしまうほどに。

気を取り直してせめて手袋だけでも新調して帰ろうかな、と道の端を歩きながら顔を上げた時、見たことのある顔を前方に見つけ思わず立ち止まっていた。

どうしてこんなところで会うのだろう、と自らの不運さを嘆きたくなる。しかし、すぐに黒髪の青年が一人ではなく、女性と連れ立っていることに気づいた。

女性はまだ若く、年のころは二十歳前後ぐらいだろうか。上品な色合いの薄紅色のコートを着ている。

しかしその人物の顔を見て、ユーフェミアは思わず息を飲んでいった。

「イヴァンジェリン……？」

腕に抱えられるサイズの人形ではなく、彼女は等身大の人間として歩いていた。

陶器のような白い肌と、うっすらと赤く染まる頬。空色の瞳と薄紅の唇。生きているのが不思議なほど整った顔立ちは、まさに人形のような。どこからどう見てもイヴァンジェリンにしか見えない。

いや、あえて言うなら髪色が金髪ではなく赤みがかった金髪だ。それを結い上げているのだから、イヴァンジェリンに似ていると思ったのは錯覚だろうか。

だが、似すぎている。

驚きのあまり声も出せずにじっと見つめていると、聞き覚えのある声が耳に届き我に返った。

「ユーフェミアじゃないか。どうしたんだい、こんなところで」

視線を一度彼の方に向けたが、自然と目は彼女の方に行ってしまう。

赤みがかった金髪の彼女は、ディーンの台詞に澄んだ空色の瞳をこちらに向けると、パツと顔を輝かせた。

「貴女がユーフェミア様ですのねっ。こんなところでお会いできるなんて！」

いつもはかすかな微笑みを湛えているだけのその顔が、くると表情を変える様には驚きを隠せない。ユーフェミアが戸惑いを隠せずにいると、ディーンは苦笑しながら紹介をしてくれた。

「彼女は、ジュリアーだ」

どこか引つかりを覚えるような言い方に首を傾げる。だが、すぐにその名が、ロジャールがイヴァンジェリンを想い人の代わりに呼んでいた名だと思い当たり納得する。

「あなたが……」

「ジュリアと申します。ユーフェミア様」

礼儀正しく几帳面にも礼を取る彼女に、ユーフェミアも慌てて頭を下げる。

どこからどう見ても彼女は上流階級だ。着ているものも、その身から放たれる雰囲気も明らかに違う。

ロジャールが恋に落ちるのも納得だ。同性のユーフェミアから見ても可愛い人だと思えてしまうのだから。その微笑みは、老若男女を問わず心が蕩かされてしまうだろう。

なんて可愛いらしいの、とぼんやりしていると、現実を引き戻す

ように彼女の隣で咳払いをし、己の存在を主張している男がいたことを思い出す。

「相変わらず、きみは酷いな。挨拶を返してくれないどころか、私のことを視界にも入れてくれないなんて」

「……あなたね。何言ってるのよ」

げんなりとしつつも、視線を移動させる。彼を見る目がどうしても陰を含んでしまう。

この二人がどういう関係にしろ、彼女の前で誤解を生むような発言は控えて欲しかった。不用意な発言でこちらにとばかり来るのはごめんだ。

ちらりとジュリアの様子を窺うと、彼女は微笑ましいものでも見るように小さく笑うだけで、気分を害した様子はなかった。

「仲がよろしいですね」

話し方もイヴァンジェリンと似ているというのに、声に含まれる強さが違う。

イヴァンジェリンは澄ましたところがあるが、ジュリアは嫌味もなく親しみを込めた温かみを感じる。

その態度にちらりとディーンを見やる。

以前、彼は女性に好評だと言っていたが、それは男女関係のことではないのだろうか。あの話の展開からすると、恋愛を遊びのように言っていたからそういう意味だとばかり思っていたのだが。

ジュリアには相手にもされていない様子が内心ほくそ笑む。

だが、ふと飾り窓に映った自分の姿が視界の端に入り、そうではないと気づく。

ジュリアが相手にしていないのは自分の方なのかもしれない。彼女は上流階級で、多分貴族だ。冴えない色味の地味な女など、ディーンが相手にするはずがないと考えていてもおかしくはない。

彼女から見下げられているような感じは受けないが、そう考えってしまう自分がいて情けない。その事実一度気づいてしまうと、場違いな態度を取っているのではないだろうかと心細くなる。

周囲を見渡すと、明らかに一級品を身につけた男女と対等に話している自分は異質ではないだろうか。通り過ぎる人々の目を引いているような気がする。

「ところでユーフェミア様。今からどこに行かれるご予定があるのですか？」

不毛なことをぐだぐだと考えていると、いつの間にか隣に来ていたジュリアに腕を取られる。ふわりと女性らしい甘い香りが鼻腔をくすぐり、思わずロジャーにも勿体ない、と思ってしまった。

ユーフェミアは不相应な呼び方に眉尻を下げて見せる。

「あの。その様付けは止めてもらってもいいですか？」

「ご迷惑でしたか？」

「いえ、何だか慣れなくて。呼び捨てか、もしくは……ユーファと呼んでいただいた方が落ち着くというか……」

「まあ！ ではユーファ姉さまとお呼びしても！？」

予想外の反応と、期待を込めた瞳で見つめられ、どうして否と言えようか。

先程まで考えていた彼女が自分を相手にしていない、という考えが恥ずかしくなる。真剣に自分の言葉を受け取ってくれている相手に対し、あまりにも失礼だったかもしれない。

一方、出会ったばかりだと言うのに、ここまで親しみを込められることを疑問に思う。名前を知っていたということは、ディーンが何かを彼女に話したことぐらい想像つくが、一体、何を吹き込んだのやら。

取りあえず、ユーフェミアに拒否権はない。

「……お好きなように呼んで下さい」

上流階級の人間と会う機会がそう何度もあるわけではないだろう。半ば押され気味に諦め半分で頷くと、彼女はふわりと花が綻ぶような笑みを浮かべた。

「ではわたくしのこともジュリアと呼び捨てで。それと敬語も必要ありませんわ」

わたくしの方が年下ですし、と続ける彼女にユーフェミアも同じ言葉を返す。

職人であるユーフェミアは労働者階級だ。本来なら接点のない階級で、まして一生のうち世間話をする機会など無いに等しい。ユーフェミアの方から率先して彼らと付き合おうという気はないので、この場限りの出会いということになる。それならば、と思って口にした言葉にも関わらず、彼女の方は嬉しそうに頬を染めた。

女性としての見本が目の前にある、と思いつつ、この後の予定を聞かれていたことを思い出し、手に持っていた封筒を見せる。

「今から届け物をしに行かなければならないのよ」

「……そうなのですか——それは、とても残念ですわ……。せっかくだから一緒にお買い物でも、と思ってましたのに……」

心から残念そうに、だけど諦めきれない、という素振りでおもユーフェミアのコートの袖を握りしめるジュリアに戸惑いつつも曖昧に返事を濁す。

上流階級の人間と買い物など冗談ではない。

何か一品買うにしても、数日かけて働いた仕事代が、あつという間に無くなってしまうだろう。ましてやどのような店に入ると言うのだろう。ジュリアやディーンのように見るからに高級品を身に付けている者と、自分のような身なりの者では、貴族の子女が外出の際に付くという付添人にさえ見えないだろう。果たして店に入れてもらえるかどうか。そこから問題だ。

いや、そこまで酷い格好をしているつもりもないのだが——。

先方に連絡しておいた約束の時刻も迫っている。

曖昧に返事をしたことで、さすがにジュリアも引き下がってくれた。

しかし。

「いつかユーファ姉さまのところに遊びに行ってもいいですか？」

思いがけない提案に驚きつつも、これはきっと社交辞令だと思い、頷き返す。まさかバルフォアまで来るはずはない。

だが、今まで黙っていた目の前の男が珍しく渋い顔をした。

「ジュリアー……。それは――」

「口出しは無用です。――……」

一瞬、二人は視線を合かし、気まずそうに口ごもると、ぎこちなくこちらを見た。

何だろう、この雰囲気。

なぜか二人の邪魔をしている空気がそこはかたなく漂う。ユーフエミアは触れてはならない何かを感じて、それじゃ、と片手を上げた。

「時間がないので、ごめんなさい」

何故だかいたたまれなくなる。

彼らの間に流れるのは、秘密を共有する空気だ。もちろん、その秘密に触れたいとは思わない。だが、疎外感を全く感じないかと言えば嘘になる。

足早に二人と別れ、人ごみに紛れた後、別に関係ないし、と小さく呟いた声は、側を通った馬車の車輪が軋む音にかき消された。

06. よく分らないひと 後編

仕事代も無事に手に入り、行きがけに目星をつけておいた手袋を買えると思うと、郊外の道を歩く足取りも軽くなる。

この辺りはまだ高級住宅街で人通りも少なく、たまにすれ違う人は散歩でもしているのだろうか。皆ゆったりと歩いている。

冬も始まったばかりで色づいた葉も散りゆく季節。

鉄柵の間から見えるどこの屋敷の庭も掃除が大変なのだろう。使用人たちは箒を手に、忙しく落ち葉を掃き集めている。しかし掃いた端から葉が落ちてくるのだ。終わりの見えない作業に、広い庭があるのも考えものだ。横目で眺めつつ通り過ぎる。

そんなことを思いながら歩調を速める。

帰りも乗合馬車を利用するつもりだが、日が暮れる前にはバルフォアに着きたかった。冬場は一段と日没が早いので、自ずと人ならざる者が動き出す時刻も早くなる。彼らとの邂逅を可能な限り避けるならば、買い物する時間を絞るしかないだろう。

馬車の出発の時刻まで時間に余裕があったら、仕事用の新しいインク壺も見てみようかな、などと考えていると、通りを一台の馬車が追い越して行った。

馬車などどれも似たようなものだ。

頭では分かっているものの、微かに見えた御者の姿が今ではすっかり顔馴染みになってしまったリオンに似ていたような気がして、それだけで眉間に皺が寄ってしまう。

もうこれは条件反射だ。

初老に差しかかったばかりのリオンとは決して仲が悪いわけではない。顔を合わせれば挨拶もするし、世間話しにも花を咲かせるほどの仲だ。ただ、どうしてもリオンの顔を見ると、彼に附随する人物を思い出してしまい、いつだったかその話題が上った時には頭を下げずにはいられなかった。

つまり、リオンの姿を見れば、ディーンがいる確率は十割なのだ。ゆっくりと速度を落として止まった馬車に、自然とユーフェミアの足も止まる。

馬車の扉が開く前に、御者台から挨拶代わりに帽子を振る手が見えて、どうして肩を落とさずにいられようか。それはリオンがいつもユーフェミアにしている挨拶だった。

扉が開くと予想通りの人物が姿を現す。

ユーフェミアは一拍置いて表情を改めると、諦めて歩み寄った。

「ちょうど良かった。もうバルフォアに帰ってしまったかと思っていたんだよ」

馬車から下りたディーンは、そのまま扉を片手で押さえるとこちらに手を差し伸べてきた。

手袋をはめたその手を見て、その意味を計りかねる。だが取りあえずその手は見なかった事して、開け放たれた馬車の中に視線を送った。

乗合馬車とは違い、見るからにクッションのきいた座り心地の良さそうな椅子だった。きつと振動も少なく、長時間乗っていても腰が痛くなることはないだろう。

だが、もしかしたらそこにいるかもしれないと思っていた人物の姿はなく、少しだけ気が抜けてしまった。

「ジュリアは一緒じゃないの？」

尋ねると、彼は肩を竦めた。

「彼女は家の者が迎えに来てね。あれからすぐに別れたんだ」

「そう……」

気のない返事をしつつ、自分に向けられた手にやっと視線を戻す。どういう経緯で二人が街中を歩いていたのか知る由もなかったが、単なる知り合いにしてもディーンの彼女に対する態度は淡白だ。二人の関係を色々と想像していたのだが、どうやら恋人という立場ではないらしい。確かにジュリアもディーンに対して冷静すぎるほど素っ気なかったような気もする。

しかし……。

いつまでも手を取らないでいると、ディーンは苦笑しつつも近づき、背中を軽く押すようにして馬車へと促してきた。

「送っていこう。ついでだから」

目の前に開いた空間を眺めて、しばし考えた。

乗合馬車もタダではない。片道分の料金も馬鹿にならないことを考えると、ここは素直に送ってもらった方がいいのかもしれない。だが、片道一時間の道のりをこの男と同じ空間に、しかも二人きりでいることに我慢できるかどうか自信がなかった。

精神的な安らぎをお金で買えるのだとしたら、馬車代も安いものかもしれない。

一人で納得すると、隣に立つ男を見上げる。

「せっかくだけど、買い物をするように思ってるから」

背中に回され腕を軽く押しやって、断りの言葉をやんわりと舌に乗せる。

決して嘘は言っていないし、手袋が欲しいのも本当だ。

断る理由が苦痛だからでは、さすがに失礼だということぐらいユーフェミアにも分かっている。

本当なら送ってもらうその時間が、彼の思惑を探ろうとしているユーフェミアにとって、絶好の機会であることも承知している。だが、移動する馬車内で彼の口車に乗っておかしな話になった時、口では勝てる気がしないし逃げ場もない。もっと慎重に場所も選ばなければならぬような気がする。

今回はその機会を見送るだけだ。イヴァンジェリンが言うように、決して臆病風に吹かれたわけではない。

さっさと挨拶をしてこの場から離れようと考えていると、まるでその考えを見透かしたように腕を捕まれた。

「それなら私も付き合おう」

何かを企んでいるような笑顔を向けられ、ユーフェミアがわずかにひるんだその隙に強引に馬車に押し上げられていた。

「え、ちょっと、ディーン!？」

「座って」

狭い馬車の中で中腰のまま振り返ると、ディーンも戸口に足をかけ乗り込もうとしていた。完全に逃れることは無理だと見て取ると、仕方なく進行方向に背を向けて座る。

椅子は思っていた以上にクッションがきいていて、座り心地は想像以上だった。これだと本当に馬車に乗っている気がしないかもしれない。やはり乗合馬車とは大違いだ。

扉が閉まると、ゆっくりと動き出す。

斜向かいに座ったディーンを見ると、満足そうな笑みを浮かべている。

逆にユーフェミアは渋面を作ると、苦々しく言い放った。

「相変わらず、強引ね」

「強引ぐらいじゃないと、きみは相手にしてくれないだろう?」

ぬけぬけと言つてのける目の前の男に、返せるものは溜息ぐらいしかない。

彼の言い分からしてみても、素気無くされている自覚はあるのだろう。それならいっそのこと、放っておいてくれればいいのに。

口には出さないが、胸中で呟かずにはいられない。

視線を目の前の男から窓に向け、流れる景色を見つめる。こうなつてしまつては仕方がない。

「ところで何を買うつもりなんだい?」

笑顔で尋ねてくるディーンに、もはや逆らう気力はなかった。

クライトンの中央通りで馬車から下りたものの、ユーフェミアはすでに帰りたくてしやうがなかった。

「ねえ、ディーン。無理だから、絶対に。買い物はもういいから帰りましょう」

斜め前を歩くディーンの背中に小声で声をかける。

彼が入ろうとしている店はすぐ目の前だ。

つい先程、馬車からディーンの手を借りて下り、彼の視線が向いた先の店の看板を見て、ユーフェミアは青くなった。

——王室御用達……。

一介の庶民が常識的に考えて一生、縁のある店ではない。

店員だって見るからに貧乏そうな人間を相手にするはずはない。上流階級を相手にする店は、決まって客の足元を見るのだ。見下げられるのはごめんだった。惨めな気分になると分かっているのに、店に入りたくなどない。

「ディーンっ……」

なんとか呼び止めようと声を上げかけたが、ディーンが扉に手を伸ばすより先に内側から扉が開いた。

店から出てきたのは穏やかな雰囲気を湛えた白髪の初老の男性だった。にこやかにディーンを出迎え、その背後にもう一人、こちらは三十代ぐらいの凛とした女性が姿を現す。

「これは、ラムレイ様。わざわざ足をお運びいただきなくても、連絡を下さればこちらからお伺い致しましたのに」

「いや、急に思い立ったからね」

ディーンと懇意なのか、一通り挨拶を交わすと白髪の男性はユーフェミアに視線を移動させ、穏やかな眼差しのまま軽く礼をした。彼の背後に控えている女性も、どうぞ、と笑顔で店の中へと促す。

「ユーフェミア、入ろう」

振り返ってこちらを向いたディーンに、道の真ん中に突っ立っていたユーフェミアは、ためらいがちに小さな声で無理だと告げる。この際、泣きごとだろうがなんだろうが無理なものは無理なのだ。見下げられなかったことはさておき、要は先立つものの問題だ。仕事代が入ったからと言って、全額を手袋にさく予定はない。今後の生活費もかかっているし、何より仕事代を注ぎ込んでも買えるかどうか……。

「心配は無用だよ。この店に連れて来たのは私だから責任は持つよ」

確かにディーンなら手持ちは大丈夫だろうが、足りなかったからと言って借りるのもどうかと思う。

「それは駄目。借りるつもりはないわ」

借金なんてこりごりだ。取り立て屋たちに追いつて立てられたことが脳裏に甦り、気分が滅入りそうになる。しかしディーンはおかしなものでも見る目でこちらを見返したただけだった。

「――貸すつもりはないんだが……。まあ、取りあえず見るだけでもいいんじゃないか？」

先程から黙ってこちらのやり取りを見ながら、開けた扉を押さえていた初老の男性は、ためらうユーフェミアに頷いて見せる。

扉の側いた女性店員に視線を向けると、彼女も笑顔で一つ頷いた。

「……見るだけぐらいなら」

そこまで言われて渋るほど大人げない態度もどうかと思い、内心絶対に買わないぞと心に決める。

ディーンや店員に促されるように一步を踏み出し、結局店内へと足を踏み入れた。

何かが激しく間違っている、と鏡を前にしたユーフェミアは疲れきった自らの顔を見つめた。

身体に巻き付けられた布地はどう見てもドレス用のものだ。冬の普段着用の布地ですよ、と言われ、あっという間に身体に沿うよう、まるで本当にドレスを着ているかのように巻き付けられる。

翡翠色の布地に幅広のレースを要所につけられ、これは絶対に普段着では着られないと確信する。

出迎えてくれた女性店員に、布をあててみるのは無料タダなんですから、と力説され、言いなりのまま、すでに両手では足りないほどの回数は布を巻き付けられている。

手袋を見るはずだったのに、なぜ服をあつらえるような状態になっているのだろう。しかも奥から他の店員が帽子まで持ってきて頭

にのせている。

ディーンは白髪の男性となにやら話しながら、時々こちらを見ては、それは駄目だ、とか、色違いはないのか、と口を出してきている。

一体、何を考えているのか。

女性店員の口調や態度から察するに、別に売りつけようとしているわけではないようなのでまだ安心できるが、ディーンのために着飾らされているような気がして納得がいかない。

いい加減ぐったりとしてきたところで、ディーンが更に奥から違う布を運んできた店員を止めてくれなければ、逃げ出していたかもしれない。

「何なのよ、一体……」

よたよたと近寄ると、白髪の男性が椅子を用意してくれたので、礼を言って腰かける。

文句をこぼしながら、このようなことの原因となった男を見上げた。しかしディーンは、先程ユーフェミアが身につけた布を見ながら、彼がいいと言ったものばかりの布を見て女性店員と何かを話していた。

ぼんやりとそれを見ながら、もしかして、と考える。

あの布は誰かに贈る予定なのかもしれない。その誰かがちょうど自分と同じような身体的特徴の為に代わりに付き合されたのかも、と。

全く、いい迷惑だ。

「お疲れになりましたか？」

白髪の男性が紅茶の入ったカップを側のテーブルに置いてくれた。

「少し……」

本音は大いに疲れたのだが、彼に文句を言っても仕方がない。

苦笑混じりに誤魔化すと、ところで、と男性は軽く咳払いをした。勧められるままにカップに手を伸ばしかけていたユーフェミアは、何だろう、と男性を見上げる。

「つかぬことをお伺い致しますが、ここ一、二年の間に極度にお痩せになったりとか……その、体形が変わられたことなどございませんか？」

おかしなことを聞くな、と思いつつも、いいえ、と答える。

ここ一、二年、服も新調していない。去年の冬服がきつくもなくゆるくもないところをみると、体形は変わっていないのだろう。

自らの身体を見下ろしながら、もしかして今着ている服のサイズが合っていないのだろうかと不安になる。そんなユーフェミアに男性は安心したようにほっと息をついた。

「さようでございますか。では、大丈夫でしょう」

何が大丈夫なのだ、と首を傾げていると、ディーンがやっとこちらを向いた。

「では手袋だけ持って帰る手配をしてくれ」

「かしこまりました」

軽く頭を下げた男性は、ユーフェミアにも目だけで礼をすると仕事に戻っていった。

逆に近づいてくるディーンに呆れた眼差しを送る。

「まったく、誰のものを見立てたのか知らないけど、そういうつもりなら最初に言って欲しいわ」

カップの中から立ち上る湯気に息を吹きかけながら、一応文句を言ってみる。自分のではないが、やはり綺麗な布地を見るのは実のところ楽しかったのだ。

「ん？ あれはきみのだけど？」

さも当然のように言われて、一瞬時が止まる。次の瞬間、口に含もうとしていた紅茶を吹き出しそうになってしまった。

「な、何言ってるの？ 待ってよ。どうして私がドレスを買う必要があるのよ。私が見に来たのは手袋よ？ あなた、一体何着頼んだの！？ って言うか、そんなお金ないわっ。払えない！」

一応声は押さえたつもりだったが、気が動転しているため次第に大きくなっていく。それと同時に血の気が引き、かすかに身体が震

える。

布のあの手触り。あれはユーフェミアが普段着にしている布地ではない。薄くて光沢があり、しかも織り目自体に模様が施されているものもあった。きつとユーフェミアの想像することができないような金額に違いない。

店に入る前、借金するつもりはない、とはっきり言っただけだったのに。

ディーンはちらりと背後を振り返ると、女性店員が重ねている布地を見る。

「取りあえず三着だったかな？ もちろん、まだ後で追加する予定だけど。お金のことは心配しなくていいよ。きみに頼みたい仕事が出来たから、きっちり働いて返してもらおうつもりだし、そのことについては帰りの馬車の中で話そうと思ってたんだよ」

「待ってよ！ 仕事って、引き受けること前提なの！？」

「引き受けてくれないと困るな。って言うか、もう引き受けてしまったし？」

いっそ清々しいほどの口ぶりで言っただけのディーンに、ユーフェミアは開いた口が塞がらなかった。

思えば、家の件にしてもそうだった。当人には相談もなく決めて、あとで否と言えなくする。先行投資と言えは聞こえはいいが、一種の騙しうちだ。

「ああ、ついでに採寸もしておくかい？ バルフォアの仕立屋の奥さんに、一応きみの採寸表をもらってきておいたんだけど……」

その言葉に、いつぞや二階の窓でほくそ笑んでいたケイトの顔が脳裏にちらつく。

彼女のことだ。きつと嬉々としてディーンに教えたに違いない。がつくりと肩から力を抜くと、力なく首を横に振った。どうしてこんなことになってしまったのか。

あとは彼と関わるようになった自らの不運さを呪うことしか出来なかった。

07. 罎に掛けて雁字搦めに束縛してあげる 前編

いつも必要なことは言ってくれないのね――。

結局その後、仕立て上げる予定のドレスにバックや靴を合わせ、その他の小物類も揃えて店を出た時には、周囲はすっかり夜の気配が満ちていた。

すでに空には月が昇り、青白い光を地上に落としている。

凍てつくというほどの寒さではないが、吐く息がかすかに視界を曇らせる。

あれから更に生地を選び、やはり採寸をしておこうという段になると、目の色を変えた店員たちに着せ替え人形よろしくいように弄ばれることとなった。

だからなのか、力仕事をした後のような倦怠感が全身を覆っているのは。

もはや最後の方は抵抗する気も起きず、どうせ勘定はすべてディーン持ちならば好きにしてくれと諦めの境地に至った。これだけの買い物が、仕事とどのような関わりがあるのか考えただけでも恐ろしい。一体、どんな仕事をさせようとしているのか。

王宮へと続く中央通りには等間隔にガス灯が灯り、人通りもほとんどない。周囲を見渡すとちらほらとそれらしき気配を感じて、ユーフェミアはリオンの回してきた馬車に早々と乗り込んだ。今更乗合馬車で帰ろうなどとはもちろん思わない。

進行方向を背にして座ると、昼間とは違って隣にディーンが腰を下ろしてきた。二人が並んで座っても余裕はあるのだが、向かい合わせの席は荷物が置いてあるわけでもなく空席だ。訝しむようにして隣を見ると、ディーンは肩をすくめて「彼」の存在を口にした。

「隣り合うなら女性の方がいいだろう？」

どこまで本気なのか。

あいにくユーフェミアには「彼」を見ることは出来ない。だからディーンが本当の事を言っているのかどうかも分からない。たまに気配を感じることはあるのだが、いくら目を凝らしてみてもやはり見えないのだ。

「彼」についてディーンから聞いた話によれば、いる時もあるかもしれない時もあるらしい。昼夜関係なく現れ、場所にこだわることもなくユーフェミアの側ならこうしてクライトンにまで付いてくる。決して害をなすものではなく、普通の霊と少し違い、ただ側にいるというのだ。

ディーンは気にする必要はないと言ったが、そう言った彼自身がかくして避ける態度を取っているとやはり気になってしまう。それにどうして見る事が出来ないのだろうか。感覚は昔に比べると強くなっているというのに。

眉間に皺を寄せて「彼」がいるだろう場所をじっと見つめていると、隣から小さな笑い声が降ってくる。

「睨まないでくれ、って言っているけど？」

「……別に、睨んでなんか……」

このまま「彼」について考えても何かが分かるわけでもない。詳しいことはディーンも話さないし、彼らと関わることがいいことだとはユーフェミア自身思っていない。

取りあえず当面の問題を片付ける事の方が先だろうと、気を取り直して、それよりも、と先程ディーンが店内で話しかけたことを口にする。

「あれはどういうことなの？ 仕事って言っていたけど何をさせるつもり？」

勝手に仕事を引き受けたことについては、本来ユーフェミアの知ったことではない。

ディーンと交わした契約にしても、主に筆跡に係わることに ついてだ。当然、今までの写字の仕事から、ディーンの仕事関係で筆跡を必要とする書類の作成も含まれている。だが、そのどこにドレ

スを身に付ける項目があっただろうか。

雇い主である以上、多少のことなら目を瞑る覚悟もしていたのだが、この度、桁違いな金額が動いたことについてユーフェミアは納得していない。

先程の店で用意された布地は、極上の手触りのものばかりだ。繊細で緻密な模様に編み上げられたレースは、一体いくらするのだろう。レースに憧れない女性はいないと言われているが、もちろんユーフェミアも例外ではない。あまりの素晴らしい出来栄に、あの瞬間目も心も奪われたが、実際に似合う似合わないは、また別の話なのだ。

隣に座った男は、視線を正面に向けると珍しく困ったように息を吐き出した。その紺色の瞳は周囲に同化し、完全に夜の色を湛えている。

「仕事っていうか……まあ、きみにとっては仕事だと考えた方が納得できると思ったからそう言っただけなんだが……。昼間に会ったジュリアのことは覚えているかい？」

「ええ、イヴァンジェリンに似た彼女ね」

確認すると、ディーンは一つ頷く。

「彼女からの招待で、きみを是非に、と言われたんだよ」

「……招待？」

あまり面白くない方向に話が進みそうで、自然と声が落ちた。

おそらくジュリアは貴族だ。ディーンの話しぶりからすると、同じ貴族でもかなり気を使う相手だということが窺える。ユーフェミアが貴族と関わりを持ちたくないことは、彼自身が身をもって知っているはずだ。だからあえて仕事だと言ったのだろうか。

いつもの軽さがなりを潜めている態度に、取りあえず耳を傾ける。「彼女は時々コックス地区にあるベレスフォード邸で過ごすのだが――ああ、ベレスフォード邸というのはね、王弟殿下にあたるフラムステイード公爵の別邸になるんだ。だけど、旅行好きな公爵は滅多にその屋敷に帰ってくるのがなくてね。ジュリアは公爵に縁の

ある人だから、時々息抜きにベレスフォード邸を借りているんだよ」最初こそあまりにも雲の上の人の話しに息を止めてしまったが、ディーンの説明に、知らず力の入っていた身体から力を抜いた。

もしも王弟殿下に会わなければならないなら、断固拒否しようと思っていたのだが、どうやらその心配はなさそうだ。いや、ただの庶民が会えるはずはないのだが。

「彼女はなかなか外出のままならない身でね。ベレスフォード邸で過ごす時だけが唯一の自由な時間と言ってもいい。だからその時間を、是非きみと過ごしたいそうなんだ」

つまり、ジュリアがその屋敷で過ごす数日間、彼女の相手をする仕事、ということなのだろう。

聞いただけではそれほど難しいことのように思えない。確かに相手が貴族の令嬢ならば気を使うだろう。しかしジュリアに関して言えば――わずかな時間しか話さなかったのではつきりとは言えないが――彼女の人間性にそれほど問題があったようには思えない。それにコックス地区と言えば、バルフォアとクライトンを結んだ街道から少し東に向かった場所だ。ほぼクライトンの外れと言える。それほど遠出にならない距離に安堵する。

しかし、公爵家の別邸とは……。

ユーフェミアは思わず呻いた。

思っていた以上に、話は想像を上回っていた。

だがふとディーンの説明に矛盾を感じ、首を傾げた。

「でも、今日は――」

街中で彼女を見たが、それはどういことだろうか。

思わず口を挟むと、彼は困ったように笑った。

「……それ以外は大抵、監視の目をかいくぐって抜け出しているらしいね」

監視と言う不穏な言葉とは裏腹に、昼間に出会ったジュリアは至って普通の様子だった。落ち着き、逃げ隠れする様子もなく、ある意味彼女の容貌は人目を引いていたようにも思える。

あれが逃げ出した後の態度なのだろうか。

疑問ばかりが募っていく。

ディーンの話からすると、かなり不自由な生活を強いられている気がするのだが。

「抜け出すって、閉じ込められているとかじゃないのよね？」

「それはないが……なんて言ったらいいのかな。……常に誰かが側にいて、安全の為に行動が制限されているんだよ」

普通の貴族の令嬢というのは、そう言うものなのだろうか。

あまりにも違う生活環境に、思考が追いつかない。

「なんだか王女様みたいね」

まるで物語の中の話のようだ。非現実的過ぎる。

「……そうだね」

ディーンも同調したものの、それでもまだどこか歯切れが悪い。

彼の整った横顔を眺めながら、これはまだ何かある、と束の間口を閉ざした。

互いの間に落ちた沈黙は、馬車の車輪や馬の蹄の音でかき消される。

視線を窓に向けると、月明かりで微かに外の景色が見えた。

しばらくして、ディーンが諦めたように口を開く。

「実はいくつか問題があるんだ」

視線を正面に向けたままの彼は、珍しく言い淀んでいる。そんなに言いづらいことなのだろうかと黙ってその続きを待っていると、ようやく夜色の瞳がこちらを向いた。

「おそらく、彼女の兄もやってくるだろう」

それがどのように問題があるのか、ユーフェミアには分からない。首を傾げると、ディーンは自嘲気味に小さく笑った。

「会えば分かる。ただ……、私やジュリアを恨まないでくれたらありがたいな」

「なによ、それ……。さっぱり分からないじゃない」

恨む前からすでに胡散臭い男を見やる。

ユーフェミアが軽口をたたいた為か、ディーンのまとう空気が柔らかくなったような気がした。面白いものでも見るような目でこちらを見ている。

和らいだ空気に、ならばついとばかりに不満を口にする。

「それに、どうしてドレスをあんなに沢山買う必要があるのか分からないわ。公爵様の御屋敷って言っていたけど、格式ばった場所だから？」

そのような場所に招待されること自体場違いだろう。出来ることなら辞退したい。

ディーンは悪戯っぽく笑うと、しれっと言っただけ。

「いや、今日はきみに不快な思いをさせてしまったから、そのお詫びだと思ってくれないかな」

「――お詫び？」

不快な思いならいつもしているが、なぜ今日に限るのだろうか。何事かあっただろうか、とドレスを買うよりも前の出来事を思い浮かべる。

だが、これと言って何かされたような記憶はない。

「……何かあったかしら？」

首を傾げながら呟く。別にとぼけたつもりはなかった。

ディーンはユーフェミアの態度に、盛大な溜息をついた。

「私がきみ以外の女性と連れ立っていたのは事実だ。きみが怒っているのも無理もない。だけど彼女とは何でもないんだ。信じてくれないかな」

まるで浮気をした男が必死に恋人、もしくは奥さんに釈明している台詞に聞こえるのは気のせいだろうか。

その上、わずかに身を乗り出すようにして、自らの潔白を切々と訴えかけているつものようだ。

――信じるも何も、別にどうでもいいのだが。

「はいはい」

なげやりな返事に、切なげな表情をされた。どこまで本気なのか

しら、と呆れてしまう。

「もう、いいわよ」

どうだって、と続く言葉は飲み込んでおく。

これ以上、馬鹿げた会話につき合いたくない。

しかし――。

「では、私の為に着飾ってくれるんだね？」

「は？」

耳に飛び込んできた単語に、ユーフェミアは思わず目を見開く。

今の会話からどうしてそうなるのだろう。

馬鹿なことを、と噛みつこうとしたが、声は口から出なかった。

薄闇の中、視界がディーンの手を捉えると、顔のすぐ前をかすめるようにして長い指先が、ユーフェミアのほつれて落ちてきていた前髪をすくい取った。横に滑らすようにして耳にかけると、今度は頬をかすめるようにゆっくりと離れていく。

一連の動作に、思わず息を止める。

「私も行くし……心配するほどのことはないかもしれないけどね」

いつもより低く聞こえる声が、ユーフェミアに不確かな感情を呼び起こす。

もしかして、本気で心配してくれているのだろうか。

「……さっぱり分からないわ」

思わず呟いた言葉を、苦情と聞きとったのかどうか。どうやら彼の耳にはその言葉の意味が届かなかったようで素通りされた。

「とにかく、きみは私の相手だけをしてくれていたらいいいよ」

臆することもなければ、それが当然という態度で口元をゆるめる。それはいつものことながら、うんざりするほどの甘さを含んでいる。前言撤回だ。心配などやはり思い違いだったようだ。

外の気温と同じほど冷ややかな眼差しと口調をまとうと、容赦なく突き放す。

「ジュリアからの招待なんでしょう？ どうしてあなたの相手をしなければならぬの。それは失礼でしょう？」

たとい何か問題があろうとも、こちらが出来る限り礼儀に則った態度を取っていれば、重大な問題が起こるとは思えない。確かに貴族は苦手だが、招待主はジュリアだ。その兄に対しても、全く知らぬ存ぜぬで過ごすわけにはいかないだろう。

そう思っの発言だったのに、ディーンは心底傷ついたような顔をした。

「分かっているのかい？ ジュリアの招待とは言っても、遠まわしに彼女の兄――アシュレイにきみを紹介しているようなものなんだよ？ こんな役回りをする羽目になった私をきみは少しも憐れんでくれないのかい？ しかも、きみが私以外の男をその瞳にうつすと思うと、とても穏やかではいられないよ。もしもきみが彼に恋心でも抱くようなことがあったら、私はきっと死んでも死にきれない」芝居がかった大袈裟な台詞まわしに、逆に心の底が冷えていく。果たして、こんな嘘くさい台詞に騙される女性がいるのだろうか。だが、もしかしたらいるかもしれないと思うと、それはそれで止めを刺しておく必要があるかもしれない。

「どうでもいいけど、死んでまで私の前に出てこないでよね」

死者になった彼とまで関わるのはごめんだ。

冷たく言い放ったその一言に、ディーンは一瞬目を瞬いた。だが、苦笑すると軽く頭を横に振り、それからしばらくは口を閉ざしたままだった。

07. 罫に掛けて雁字搦めに束縛してあげる 後編（前書き）

※ディーン視点です。

07. 罎に掛けて雁字搦めに束縛してあげる 後編

窓から入ってきた月の光を受け、鈍く輝く蜂蜜色の頭が不安定にくらくらと揺れているのを視界の端に止め、どうやら眠りの淵をさまよっているらしいと気づいた。

頭を引き寄せ肩にのせると、最初こそムツとしていたが、しばらくすると眠りが深くなったのか穏やかな表情になる。

馬車の微かな振動が眠りを誘ったのだろう。

無防備にも寝顔をさらす彼女に、かすかな苦みが込み上げる。

確かにこんな時間まで連れまわしたのは自分なのだが。

二人の間にわずかにできた空間に、力なく落とされたユーフェミアの手を取ると、薄闇の中、指の一本一本を確かめるようにたどっていく。

身の回りのことを全て一人でこなしているため手は酷く荒れてしまっている。これではいくら着飾ったとしても彼女の身元を暴いてしまうだろう。仕事柄、指にできたタコは皮膚を固くし、本来なら細く美しい指であるにもかかわらず余計な装飾としてその見た目の邪魔をしている。爪も長くない。生活感に溢れた指先は、乾燥で皮が剥けて痛々しいほどだ。

自分の知っている人物とよく似ていながら全く違うその姿に、デインは冷えたその指先を温めるように両手で包み込んだ。

それでも、ユーフェミアの幸せはそこにあるのだろう。

ふと先程立ち寄った店の店員たちの態度を思い出し、苦笑が漏れた。

なぜあれほどユーフェミアに親身だったのか。彼女は全く理解していない。

当然、子爵^{自分}という後ろ盾があったのも確かだ。だが、彼女が布に身に当てた時、今まで想像すらしなかった姿が見えた気がしたのだ。日頃、その仕事を専門としている店員たちは言うまでもなかった

のだろう。彼らが目の色を変えるほど、ユーフェミアは雰囲気を持っている。貴族よりも貴族らしく、ジュリアとはまた違った意味で存在感を放っている。

日頃からあまり着飾ることをしない彼女は、周囲に溶け込むように一見したところ目立たない。だがおそらく、彼女のもっている本来の美しさに一度気づくと、その透き通った輝きから目が離せられなくなってしまう。それは貴族社会に潜む穢れを知らないからこそ無垢な輝きなのかもしれないが。

そう考えて、苦笑する。

今から自分たちのすることは、ユーフェミアからその輝きを奪ってしまうことになるのかもしれない。

ジュリアとの計画をアシュレイに嗅ぎつけられたことは予定外だったが、彼女にとってそれが吉と出るか凶と出るかは分からない。できることなら彼女ともう少し信頼関係を築いておきたかったのだが、このままだと彼女は逃げ出してしまうかもしれない。

それを、惜しい、と自分に思わせるほど、ユーフェミアの価値は稀少だ。彼女がもっと欲深い人間なら、もっと早い段階で目的を打ち明けることもためらわなかっただろう。

彼女はごくごく庶民的な小さな幸せしか望んでいない。それを思うと何も知らない彼女を巻き込むことが、彼女が本心から望むべきことではないかもしれないと、何度も計画の白紙を考えそうになってしまったが。

思わず握っていた手に力がこもってしまい、ユーフェミアが小さく呻いて眉根を寄せた。

目が覚めるだろうか、としばらく様子を窺ったが起きる気配はない。

頭を引き寄せた時、先程耳にかけた髪が落ちてしまったのだろう。額にかかっている長めの前髪を指ですくい取る。柔らかい、絹糸のような髪だ。ほんの少し癖はあるが、それがユーフェミアの雰囲気随分柔らかくしている。

日頃の彼女は、年頃の女性が一人で暮らしている為か人一倍警戒心が強い。それが悪いとは思わないが、ただ、冷たい印象を与えてしまうのだ。その上わざと人を寄せ付けないようにしているようにも見える。こうして寝顔を観察していると、決して彼女の顔自体がきついわけではないのに。

眠っているのをいいことに、いつもは絶対に触れることのできない頬に手を伸ばす。甲で軽く撫でると、寄っていた眉根がゆるみ、肩にかかった重みで、身体力が完全に抜けたことが分かった。その上呼吸も深くなり、再び深い眠りに落ちたようだった。

普段とはあまりにも違う様子に軽く目を瞠る。

この危機感の無さはどういうことだろうか。

日頃はあれほど警戒心が強いくせに、不用心にも程があるだろう。だが、考え方を変えようと、多少なりとも信頼してもらっていると取れなくもない。もしくは、全く意識されていないか……。

自らの考えに、軽く失笑する。

断然後者だな、と一人納得をする。

決して自分は悲観的な方ではない。

意識されていないというのも、男として、という意味ではない。ユーフェミアの中では、彼女は労働者階級、ディーンは上流階級という位置づけが明確に成されている。二つの階級は決して交わることはない、彼女は微塵も疑っていないのだ。

確かにこのままでは交わることはないのかもしれない。だが、変えることができることを彼女は気づいているのだろうか。

頬に這わせていた手の親指でゆっくりと彼女の唇をなぞると、まるで誘うように固く閉じていた唇が微かに開く。

どこまでも隙だらけなユーフェミアに、軽い苛立ちを覚える。

ディーンはそれを、無防備な彼女が悪いのだと決めつける。

ユーフェミアの運命は、すでに動きはじめてしまった。いくら彼女が普通の暮らしを望んでも、もう彼女の望むように生きられない可能性の方が高い。今更どう足掻こうと、彼女自身に止めることは

できないのだ。

ディーンもこの期に及んで彼女を憐むようなことはしない。そのような資格がないことぐらい承知の上だ。なぜなら自分もユーフェミアの運命を動かす側の人間だからだ。

頬に添えていた手を滑らして顎を持ち上げると、軽く身を屈める。薔薇色の唇からこぼれ落ちる息は甘く、どこまでも自分を誘う。

引き寄せられるように唇を重ねようとした時、足に軽い衝撃を受け、何かが転がったような音が聞こえた。視線だけ動かすと、足元には先程買い求めた手袋が袋のまま転がっていた。

まったく――。

小さく息を吐き出す。

すっかり忘れていた存在に、やむを得ず彼女から手を放す。正面に視線を向けると、空色の瞳と視線が合った。

「……あなたのことをすっかり忘れていましたよ」

ユーフェミアには「彼」と説明をしている男は、小さく鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

滅多に話すことはないが、「彼」が何気に彼女を守っていることは知っていた。彼女の周囲に集る害虫を、こ^{たか}うやって追い払うように。

「わかっていますよ。彼女の了解がなければ手を出すなど言いたいのでしょうか？」

返事はなかったが、文句もなかったので間違いではないようだ。

やれやれ、と息をはく。

た^とえ「彼」がいくら邪魔をしようとも、ユーフェミアのこの先の道は決まっている。そうなるように仕組まれているとも知らずに、彼女はこの手を取らざるを得なくなる。そして彼女も自らそれを望むだろう。それが彼女の最善の道なのだから。

ディーンは薄く笑うと、ユーフェミアの手に自らの手を絡ませるよう握り直した。

閑話

『何ですって!？ ディーン様と泊りがけで旅行!？』

空気さえ切り裂くような悲鳴混じりの声に、ユーフェミアは咄嗟に耳を覆った。

夜半――。

一階のソファでいつものように膝にリックをのせて話していたのだが。

少なくとも旅行なんて言葉、使ってはいない。そのような楽しいものではないのだから。

もしかして彼女に話したこと自体間違っていたのかも、と軽く後悔する。しかしあとの祭りだ。

実際、ジュリアの招待で家を数日間留守にする事実是不変。店にある骨董品は、値段は分からないがかなり高価なものに違いなく、もしも何かあったならば、と考えただけでも血の気が引いていく。

店の前の通りは昼間であれば行き交う人も多いのでおかしな事をする輩はいないだろう。念のためケイトにも気にかけてもらうようお願いしているのだが、やはり夜は人目も少なくなるのだ。無難に彼らに頼むしかないと思ったのだが……まあ、動けないのだから何も出来ないかもしれないが。

耳を塞ぐ為にリックから手を離してしたせいで膝の上から転がり落ちた彼はそれでも口笛を吹いてみせた。

『やるじゃねえか!』

「あ、あのね、そうじゃなくて……」

呆れ半分、恐れ半分に耳から手を外し、リックを拾い上げる。

イヴァン・ジュリン

人形には恐ろしくて視線を向けることはできない。だから手の中のリックを見つめていたのだが、彼女の方から怨みがこめられた歯ぎしりの音が聞こえてくるのは気のせいだろうか。

ぞわりと肌が粟立つ。

呪いの人形だと言っても過言ではないだろう。

『そうじゃないのでしたら、何だって言うのですっ!?』

金切り声を上げる彼女に、リックがこええ、と小さく呟くのが聞こえ、咄嗟にぬいぐるみの口を手で覆う。今、そんなことを言ったら火に油を注ぐだけだ。

彼女が叫び出す前に、もう一度簡単に説明をする。

「だからね、ある貴族の令嬢に招待されて、彼女の相手をしに行くのよ」

本音はユーフェミアだって行きたくないのだ。だが仕事なのだから仕方ないではないか。そこを分かって欲しいのだが、無情にもイヴァンジェリンは更に激怒する。

『貴族の令嬢ですって!? まさかディーン様を狙う女狐ではなくて!?!』

「あのね、招待されたのは私だから」

どうしてそう言う話になるのだろうと呆れていると、逆に彼女は鼻でせせら笑った。

『あなたは本当に愚か者ですわ。将を射んと欲すればまず馬から、という言葉があるでしょうっ?』

イヴァンジェリン側の耳だけを押さえながら、それでいくと自分が馬になるのか、と何気に思う。

フツと笑みを浮かべ、取りあえず彼女の怒りを押さえることを考える。

どうして、こうも彼女に対しては悪戯心が沸き起こるのか不思議なのだが。

「ねえ、もしその貴族の令嬢が本当に女狐だったらどうするのよ?」ニヤリと笑いながらちらりと横目で窺うと、微笑みを浮かべた——ジュリアによく似た——彼女が息をのんだ気配が伝わってきた。

『……ディーン様が、そのような女狐に騙されるはずは……』

「分からないわよ? ディーンも男なんだから、女の私から見ても、

可愛いっ、て思える女性から言い寄られたら悪い気はしないんじゃない？」

ユーフェミアの言葉に、イヴァンジェリンは黙り込んでしまった。あえてあなたに似た女性よ、とは言ってやらない。無暗に喜ばすようなことしたら最後、また延々とディーンの話をされそうだ。

彼女の身体から発する気配は未だ変わらず、何かを考えているのだけは窺える。

取りあえず大人しくなったことをよしとしつつ、リックの口から手を除けた。

要は、二人のうちのどちらかに留守番の話が伝わればいいのだ。確かにリックでは心許ないが、言わないよりはマシだろう。

ぬいぐるみを見下ろすと、ユーフェミアが口を開くより先に彼が話し出した。

『おいおい、大人げないな』

どうやら馬扱いされたことに対する意趣返しと思ったのだろう。中らういえども遠からずだが、呆れた声音に手の中を見下ろす。

大人げないのはお互い様だ。

「年齢だけなら彼女の方が上でしよう？」

いつだったか聞いたことがある。

実際にいくつなのかは知らないが、五十年ぐらい前にこの街であった事件のことを実時間リアルタイムで知っているのだから違わないだろう。

そういうリックも大して変わりはないはずだ。

『ユーフェミア』

と、そこにわずかに震えるような声が耳に届き、リックとの会話を遮られる。

これは相当怒ってるな、と思いつつ、無言で彼女の次の言葉を待つ。

『わたくしもその貴族のところに連れて行って下さい』

珍しく謙虚な口調で、だが明らかに不本意そうな気配が全身を覆っていた。

「ええっ？」

『おい？』

戸惑ったリックの声に、我に返る。

まさかそう来るとは思わなかったが、さすがにそれは無理だろう。ただでさえ、ディーンがあつらえたドレスが先日、山ほど届いたばかりだ。荷づくりも大変だと言うのに彼女を連れていく余裕はない。それに――。

知らず口元が歪む。完全に心の中で楽しんでいた。

「ロジャーも一緒だけどいいの？」

告げた言葉に、彼女は小さな悲鳴を上げて言葉を失った。

「あれ？ イヴァンジェリン？」

様子を窺うように名を呼んでみたが、返事はない。

どうやら完全に意気消沈してしまったらしい。彼女を覆っていたピリピリした空気が完全に霧散してしまったている。

さらに何度か呼びかけたが返事はない。

ちよつと調子に乗り過ぎてしまったらしい。

表情が見えない分、手加減が難しい。

どうやらイヴァンジェリンの珍しいお願いは、彼女にとって本当に最後の希望だったようだ。そこまでディーンに入れ込むなんて、ある意味奇特な人形だ。

可哀想なことをしたかしら、と多少の罪悪感を覚えているところに、手の中から溜息混じりの声が届く。

『おまえって恐ろしい女……』

「ん？ 何か言った、リック？」

口元だけで笑ってやり、手に少しかだけ力を込めてみる。こんな時だけ仲がいいのはずるい。

リックは乾いた笑みをこぼし、殊勝な口調で言い切った。

『……留守番の役目は引き受けたぜ』

つべこべ言わずに最初からそう言っておけばいいのだ。

08. いつか余裕ぶったその顔を驚かせてやろう 前編

聞いてない――。

どうして二人の名前を聞いた時に思いつかなかったのだろうとあまりの迂闊さに地団太を踏みたかった。

とにかくこの場から逃げ出したい、というのがユーフェミアの本音だ。

まるで王女様みたいね、と言った自らの言葉が頭の奥で反響している。もう少し真剣に考えていればこのような事態に直面しなくても済んだのかもしれない。

知っていたら……当然仮病を使ってでも断ったに決まっている。

クライトンの外れに建つベレスフォード邸は、遠目からでもその大きさは見て取れた。

邸は、ゆるく弧を描いたギボン川からわずかに内側に入ったなだらかな丘の上にあった。岸边から邸まで敷き詰められた芝生は冬場でも枯れないのだろう。この灰色の景色の中、緑が一際目を引いている。

馬車には当然ディーンとユーフェミア、そしてゆるみきった顔を隠そうともしないロジャールが乗っていた。

この度の招待の話を聞いたロジャールは、今回の主賓がユーフェミアだと知ると、朝一番に骨董品店にやって来るやいなや、土下座せんばかりの勢いで連れて行ってくれと頼み込んだのだ。もちろんユーフェミアとしても知り合いは多い方が心強い。二つ返事で承諾すると、喜色を露わにしたロジャールは見るからに舞い上がり、今にもユーフェミアの手を取って踊りだそうとしたほどだった。

まあ好きな女性に会えるなら浮かれるのも当然だろう。

一方ユーフェミアは準備をする段階になってさえ、届けられたドレスが目に入るたびに複雑な心境に囚われていた。

先日、馬車でディーンから言われた戯言タラゴトさえなければ、ある意味ここまでの抵抗はなかったのかもしれない。

彼の為に着飾る――。

もちろん、そんなつもりは毛頭ない。

常識として、贈られたドレスを贈った本人の前に着て立つという行為がどれほど勇気のいることか。それが恋人とか家族なら意味のあることだと思うのだが、しかし相手はディーンだ。彼の本心がいまいち分からない上、ユーフェミアとしてもディーンのことは雇い主以上の感情は生憎持ち合わせていない。

よくよく考えれば、ドレス自体受け取るいわれもなかったのだが、自分に合わせてあつらえたと思うと、悲しいことに貧乏人の性か、今更返すのも勿体ないという思いの方が先に来てしまったのだ。我ながら現金なものだ。

悩んだ末、かなり不本意ではあったが、その中でも最も大人しい色で、なおかつデザインも大人しいものを選んだつもりだ。これはドレスではなく仕事着だと言い聞かせながら袖を通して見たものの、襟元や袖口にあしらわれたレースをどこかで引っかけないかと気が気ではなかった。こんなにもひやひやする仕事着は本来有り得ない。しかしいざ着てみると、浮き立つ心は押さえられなかった。新しい、それも今まで着たこともないようなドレスだ。髪もいつもとは違うようにもとお洒落に結い上げてみたくなるのが女心と言うものだろう。ちょっと試しに編み込んでみたが、途中で鏡をのぞいて早々に諦めをつけた。結局どんなに着飾っても鏡の中の自分が急に美人になるわけではないのだから。

ベレスフォード邸に着くまでの約一時間。ある意味、地獄だったと言ってもいい。

ロジャーは蕩けきった顔のままジュリアの素晴らしさや会える喜びを語り、ディーンもユーフェミアが着ているドレスを見て嬉しげ

に頬をゆるめると、終始賛辞の言葉を述べていた。

何の拷問だ、と思いつつ、当初は気乗りのしなかった今回の招待も、むしろ早く目的地に着かないかと思わずにはいられない程だった。

しかしジュリアの出迎えてベレスフォード邸に踏み入った時から、ユーフェミアははっきり言って、男二人の存在を完全に忘れ去った。そこは紛れもなく非日常の世界だった。

目に入るものすべてに圧倒された。

今まで仕事で貴族の邸に足を踏み入れたことは何度もあったが、大抵が玄関入ってすぐの広間^{ホール}までだった。それでも今まで見てきたどの邸とも違う。物の良し悪しは分からないが、細部にわたる細工の一つ一つから違う。

床は白と黒の二色で幾何学模様が描かれ、目の錯覚だろうか。見た目よりも奥行きを感じる。左右の壁はシンプルに白一色。しかし壁際には古の神々らしき彫像が飾られ、全体的に上品で、派手さがないぶん繊細さが際立つ。天井も白一色。しかし小さな浮彫が描かれ、窓から入ってきた明かりがそこに陰影を出し、その緻密さがくつきりと浮かび上がる。

ありとあらゆる物に目を奪われるユーフェミアにジュリアは一つ一つ丁寧に説明をしてくれながら――半分以上よく分からなかったが――居間への扉をわざわざ開いてくれて、さらに中へと促した。

一歩踏み出したユーフェミアは、思わず目を見開かずにはいられなかった。

どのように表現したらいいのだろうか。今までのシンプルさと違って、彩りが目にも鮮やかだった。

床は顔が写るのではと思えるほど磨かれ、壁に添うように天井まである丸みのある柱は、緑がかった大理石だ。部屋の中央には、深みのある艶やかな光沢を放つ木製のテーブルとソファが置いてある。本当にここで人が暮らしているのだろうか。あまりにも日常からかけ離れ過ぎていて、まるで別世界へと迷い込んだような気分にな

る。

店にある骨董品が高級品だと思っていたが、こうして見ると確かにあれは骨董品だ。良質なものではあるだろうが、目の前の部屋に置かれている家具と比べるとその差が歴然だ。

ただもう溜息しか出てこない。

あまりにも見惚れていて、だからそこに先客がいることに気づかなかった。

風景の中に溶け込むように、男はくつろいだ格好でソファにふんぞり返っていた。

まだ若い。ジュリアとさほど変わらないように見える。

しかし、男と視線が会った瞬間、ユーフェミアは思わずたじろいでしまった。

何なの……。

最初に湧き上がった感情は不快感としか言いようがなかった。無遠慮に見つめてくる眼差しは、こちらが気づいたからといって逸らされることもない。表情さえ変わらないことに、次第にそれは畏怖へと変わっていく。

だがすぐに、その瞳に蔑みが含まれていること気づいた。冷ややかで遠慮がない。上から下まで一通り眺め、目を眇めた男から突き刺さすような敵意を感じ、ユーフェミアは思わず一步下がっていた。珍しい淡褐色^{ヘーゼル}の瞳をした男は、身動きの出来なくなったユーフェミアを見て、やっと表情を動かした。それは嘲るような暗く澀んだ笑みだった。

「何をつっ立っているんだ。もしかして挨拶の仕方も分からないのか？」

眼差しと同じく冷ややかで、どこまでも高慢な物言いに、まさかと思う。

思い当たる人物は一人しかいない。これが話に聞いていたジュリアの兄なのだろうか。

ならば挨拶をしなければならぬ、と頭では思うものの、上から

押さえつけるような圧迫感に喉元が締め付けられる。

「あ、の――」

ふいに、かつて母と訪れた屋敷でよく向けられていた視線を思い出した。当時は母の背に隠れてやり過ごしていたが、今は遮るものが何もない。

見下げるような、馬鹿にするような、虫けらを見るような眼差し。どうしてそんな目で見るの、という疑問と、とにかく早く何か言わなければ、という思いで気ばかりが焦る。だが焦れば焦るほど言葉が出てこない。

挙句、息苦しさまで感じてしまい、じわりと嫌な汗が全身に滲んだ。

部屋の外でディーンと何かを話していたジュリアが、ようやく異常に気づいたのはそんな時だった。慌てたように部屋に飛び込んでくると、すぐに事態を察したのか二人の間に立ち塞がる。

「アシュレイ兄さま！　ここで何をなさってるの！？」

ジュリアが庇うように一歩前に出てくれなければ、ユーフェミアはもしかすると倒れていたかもしれない。極度の緊張のあまり、知らず息を止めていた。

華奢な身体が視界を遮ると、止まっていた時が動き出す。

気づくと、全身が小刻みに震えていた。

正直、恐ろしかった。まさかあのような視線に再び晒されることになるとは思いつかなかった。

何とか息を整えると、意識を正面に向ける。だが、ふいに肩をつかまれハッとした。背後を振り仰ぐと、そこには真剣な顔をしたディーンが立っていた。視線はジュリアを越え、ソファに向けられている。

「もう到着していたのか」

「なんだ。いたら悪いのか？」

男は余裕のある口調で、十分過ぎるほどの刺を含ませていた。

「もう、兄さまっ。いい加減になさって！　それが初対面の女性に

対する態度ですよ!？ そんなだから女性にモテないのです!」

腰に手を当てて堂々と言い放ったジュリアに、場の空気がふと変わった。わざとなのか、どうなのか。目の前にはジュリアの背中がある為、彼女の兄――アシュレイがどのような表情をしているのか分らない。

最初から機嫌が悪かったのかいつもなのか知らないが、もっと不機嫌になってしまったのではないだろうか。いくら妹でも、今のようない方をされたらやはり怒ってしまうだろう。

もしもユーフェミアが男でジュリアにこうもはつきり言われたら逆に落ち込んでしまうかもしれないが。

内心ハラハラしながらアシュレイの出方を窺っていたが、心配は杞憂を終わった。

アシュレイの方から小さな溜息が聞こえると、ソファの軋む音がしてジュリアの向こうに立ち上がった彼の姿が見えた。

淡い金色の前髪を鬱陶しそうに掻き上げると、ゆっくりとテーブルを回ってこちらに近づいてくる。

その動作はゆったりとしていて、こちらに向けられる眼差しは先程のような威圧的なものではない。いや、お互いに立っているからだろうか。正面から見ると、むしろ友好的にさえ見える。

先程の視線は思い違いだったのだろうか。

アシュレイが立ち上がった時、思わず肩に力が入ってしまったが、心配するほどのことはないのかもしれない。

じつとアシュレイの行動を目で追いつつ、彼が何をするつもりなのかそれでも身構えてしまう。目の前に立ち、正面から見下ろされ、こちらに差し出された手が何を意味しているのか分らず困惑すると、さらに一歩近づいた彼に、右手を取られた。

「はじめまして。アシュレイだ」

横柄な口調は変わらないものの軽く頭を下げた彼は、そのままユーフェミアの右手を自分の唇に引き寄せた。目でそれを追いながら、思わず悲鳴を飲み込んだ。

持ち上げられた指先に込められた力は、手を取る、というようなものではなかった。まさに押し潰すという言葉に相応しく、骨が軋みを上げる。

ゆっくりと離れていくその淡褐色の瞳をただ、息を殺して見つめた。

上流階級の挨拶など、知らない。どうすればいいのか分からない。ただ、ジュリアの手前、騒ぐことなど出来なかった。

「アシュレイー」

苦々しげな声が頭上から聞こえた。

その上、肩に置かれた手にかすかだが力がこもったように感じた。もしかして彼は気づいただろうか。だとしてもジュリアの前で何も言って欲しくなかった。無用な心配はさせたくなかったし、何より初っ端から気を使わせてしまったのは先が思いやられる。

一方、指先に走る痛みの為、気づくと緊張は取れていた。おかげでやっと言葉が滑り出る。

「……はじめまして。ユーフェミア・エヴァーツです。あの、この度はご招待に預かり、身に余る光栄です……」

正直、なんて言ったらいいか分からなかった。取りあえず教本通りの挨拶になってしまったが、貴族の邸に招待されることは、本音はさておき光栄なことには違いないのだろう。

ジュリアもアシュレイの態度に満足したのか、今度はさっさと彼を追い払いにかかる。

「もういいですわ。兄さまはどこか余所で過ごしてくださいね」

「何なんだ、それは」

「同じ邸に滞在するのに知らない殿方がいらっしゃるのは、ユーファ姉さまが不安でしょうから紹介しただけですもの。それに、いつまで姉さまの手を握ってらっしゃるの？ 過度な接触は女性に嫌われますわよ？」

言外に紹介したくなかったと言っているように聞こえた。しかも明らかにこの部屋から追い出そうとしている。だがそこには兄妹な

らではの気安さが窺える。

未だアシュレイに力を込められている手も早く放して欲しかったが、ユーフェミアとしては肩に乗った手の方も気になっていた。

いつまで肩に乗せておく気だろうか。

ジュリアの台詞に素直に手を放したアシュレイとは逆に、やはりディーンは何時まで経ってもそのままだった。ジュリアの言葉が聞こえなかったはずはないだろうに。

アシュレイはぶつぶつと文句を言いながらも素直に居間から出ていく。どうやら妹には甘い兄の様子に、小さく笑う。アシュレイから取り戻した手を、空いたもう片方の手で握りながら。

ふと和んだ空気が漂ったところで、アシュレイが扉のところで足を止めた。何を思ったのかこちらを見て――ユーフェミアよりわずかに視線が上を向いているところを見ると、ディーンに用があるのだろう。人の悪い笑みを浮かべると静かに言った。

「そうだ、カーティス。あとで久しぶりにチェスに付き合え」

それは本当に何気だった。

聞き覚えのない名前に目を瞬く。

ジュリアが表情を凍らせ、わずかに視線を揺るがしながらこちらを向きかけ、何とか思い止まったことでそれが誰に向けられた言葉を察する。

そして、アシュレイの勝ち誇った顔――。そこにある意図。

遠ざかる足音に、今まで扉の外にいたのだろう。そつと顔をのぞかせたロジャーが恐る恐る口を開いた。

「ディーン様。あの、今の方はアシュレイ殿下でいらっしゃるんですよね？」

ロジャーの放った台詞に、心臓が大きく脈打つ。

ジュリアとアシュレイ――。

この国に暮らす者なら知っていて当然の名前。

まるで頭を殴られたような衝撃に、思わず足がふらついた。なぜ今まで気づかなかったのか。

受けた衝撃の強さに思わず口を手で覆うと、呻くように呟いていた。

「王女……さま？」

もしも背後にディーンがいなかったら、その場にへたり込んでいたかもしれない。腕を捕まれ、身体を支えられながら、それでも勇気を振り絞ってジュリアを見つめた。

気まずそうに視線をそらした彼女は、まるで叱られた子供のように身体を小さくすると、ためらいがちに一つ頷いた。

「――黙っていてごめんなさい」

謝られても、正直どうしていいのか分からなかった。呆然とジュリアを見つめることしか出来ない。

名前を前もって聞いておきながら、気づいて当然のことに気づかず、抜けているにも程があるではないか。この場合、むしろ謝罪しなければならぬのは自分の方ではないのだろうか。

当然、ディーンやロジャーもジュリアが王女であることは知っていたはずなのに、なぜ何も言ってくれなかったのか。しかも、先程の聞き覚えのない名前。明らかにディーンに向けられたものだ。

――あまりにも知らないことが多すぎる。

現実を付けつけられ、今になってやっと知らないことを甘受していた自分に気づくとは。

ユーフェミアが関わろうとしなくても、相手が関わってくる以上知らなかったでは済まされない事態もこの先起こるかもしれない。まして相手がとんでもない人たちならなおのこと関係ないなどと言っているだけになる。

先程アシュレイに取られた手を軽く握る。咄嗟に隠したが、鈍い痛みが走っていた。まるで本気で骨を砕こうとしたように込められた力は見事な加減で、ユーフェミアに何かの警告を告げているような気がした。

なぜこんな目に会わなければならないのか。

正直、貴族と関わるのは嫌だ。だが、この扱いはあまりにも馬鹿

にしすぎではないか。ジュリアにしても騙すつもりではなかったのかもしれない。だが、彼女が王女というなら、なおのこと知っていれば自然と自らに降りかかる火の粉を振り払えるかもしれない。

あまりにも打算的な考えに苦笑が漏れる。だけど――。

ちらりと背後を振り返る。

今、身体を支える男だけはなぜだか許せない。話す機会も時間もいくらでもあったのだ。どうして黙っていたのか。先程の名前が何なのか、聞き出して、絶対に目にもものを見せてやる、と密かに誓ったのだった。

08. いつか余裕ぶったその顔を驚かせてやろう 後編

ジュリアが王女であるとか、ディーンが嘘をついていたかもしれないという色々な葛藤はぼつさりと切り捨て、むしろ怒りを込めて目の前の王女を見つめた。

ジュリアはあの後ひたすら謝り続けた。王女らしさは微塵も見せず、むしろ普通の少女のようにユーフェミアの顔色を窺いながら説明をさせて下さいと言ってきた。

一方、当のディーンは何かをジュリアに小声で告げると、ロジャーを連れてさっさとその場から姿を消したのだ。事もあるうに王女であるジュリアに全てを押しつけて。

現在、場所を居間から移し、ベレスフォード邸の裏庭にある大温室にいます。

大、とつくだけあってユーフェミアの家が何軒入るだろうというぐらい大きい。天井部分の高さは、普通の家の三階はあるだろうか。白く塗られた骨組とガラスで作られた囲いの中は温かく、見たこともない植物に溢れていた。

状況がこのような時でなければ、ゆっくり見て回りたかったのだが、気分はそれどころではない。

温室の一角に設けられたベンチに腰かけて、隣に座る王女を見やる。

きゅっとスカートをつかみ、うつむき加減に思い詰めた表情で地面を見つめるジュリアを、王女さまと呼んだ方がいいのだろうかと思う。逡巡した後、半分は嫌味を込めてそう呼ぶと、今にも泣きそうな顔をした彼女に呆気ないほど簡単にほだされてしまった。

ずるい。

「ユーファ姉さまをこちらに招待したのは、実は折り入って協力して欲しい事があったからなのです」

目元に滲んだ涙を拭いながら、いきなり話し始めようとしたジュ

リアを慌てて止める。

王女からの協力を簡単に引き受けていいとは思えない。王女という身分なら、どのようなことも簡単に出来てしまうのではないだろうか。それなのにわざわざ庶民のユーフェミアに協力など――しかも折り入っては怖すぎる。

じっと彼女の様子を窺いながら、まず確認させてもらうことにした。

「私に？」

「はい」

「他の人じゃ駄目なの？」

聞きながら、何となく駄目だろうという予感はした。

「ユーファ姉さまじゃないと駄目なのです」

両手を胸の前で組むジュリアは縋るようにこちらを見つめる。潤みの残る瞳で、そのような表情をされると、無条件に何でも聞いてあげたくなってしまうではないか。

まずいと思いながら、慌てて視線をそらす。

王女に協力など庶民のユーフェミアが役に立てるわけがない。まづ有り得ないだろう。それとも、これは命令なのだろうか。

ふと思ひ立ち、顔を上げる。

「――拒否権はあるの？」

もしもないと言われようものなら、すぐにでも退出させてもらうつもりだった。

「……無理強いは致しませんわ」

答えたその口調は硬い。表情も同様で、ユーフェミアはしばらく考えた後、諦めて息を吐き出した。

「とりあえず話を聞くだけ。でもその前にディーンが先程呼ばれた名前と、あなたたちの関係について教えてくれる？」

どうしても王女である彼女に協力を乞われることに納得できなかった。

しかしそれ以上に、彼らの関係は気になっていたのだ。子爵であ

る彼と、王族である彼女たち。気軽に名前を呼びあう関係は、親密さを窺わせる。

一体、どのような知り合いなのか。聞きたくはないが知ると決めたのだ。巻き込まれるなら知っておいかなければいざという時逃げられない。

ジュリアは少し考えた素振りを見せた後、口を開いた。

「……話はとても複雑なのです。すべて繋がっていると聞いた方がいいのですけど――……分かりました。ユーファ姉さまがディーンと呼ぶあの方のことからお話します」

空色の瞳の色を濃くしたジュリアに、ユーフェミアは頷いてみせた。

「つまり、彼の本名はカーティス・ディーン・ラムレイで間違いなのね？」

口に出して彼の本名を辿っていく。それはとても奇妙な感覚だった。名前一つの事なのにすごく遠い人に感じてしまう。

胸に生じた違和感に首を傾げつつ、やはり嘘をつかれるのは気分がいいものではないからだと認識する。騙されていたと一度感じてしまうときつと些細なことでも彼を信用出来なくなる。仕事のことを考えると、やはり信頼関係が崩れるのは良くないだろう。

しかしよく考えてみれば、イヴァンジェリンやロジャールが彼をためらいもなく、まして言い間違える事もなくディーンと呼んでいたのだから嘘ではないことぐらい分かって当然だったのだが。

ジュリアの話によると、ディーンはラムレイ家に養子として引き取られたらしい。とは言っても、彼と養父とは血の繋がりがあり、ディーンの実母の兄がその養父にあたるという。養父――つまり伯父から与えられた名前が、カーティスというものだったのだ。

どういう理由から名前を使い分けているのか。それはジュリアにも分からないらしい。ただ察するに、貴族社会ではカーティスを名

乗り、商売をする場ではディーンで通しているのではないか、とのことだった。

だからジュリアやアシュレイがカーティスと呼ぶのも間違いではなく、ユーフェミアがディーンと呼ぶのも間違いではないのだ。

さらにジュリアは説明を続けた。

「カーティスは兄の遊び相手として王宮によく連れて来られていたのです」

「アシュレイ殿下の？」

「いえ、もう一人の兄、ブライアン兄さまのです」
つまり、王太子、ということか。

遊び相手という事は、子供の頃からの知り合いなのだろう。

「幼馴染？」

王族に対してその言葉が適切なのか迷ったが、ジュリアは頷いた。
「わたくしやアシュレイ兄さまにとって、カーティスは兄のようなもののなのです」

そう言いながらも、ジュリアの瞳に影が走ったことにユーフェミアは気づかなかった。

ただ、今回のこの場で、彼の立場を追々説明するつもりだったらしい。最初からユーフェミアに気まずい思いをさせるつもりではなかったのだとジュリアは何度も繰り返した。

それには少々面食らう。

別に気まずい思いはしていないし、ディーンが何かを隠していることは分かっていたので、そこまでのショックは受けなかったが。

……ショック？

それはない、と軽く頭を横に振る。

そんなユーフェミアの行動に、ジュリアは怪訝な顔をする。それにもまた頭を横に振り、ショックでないなら何だろう、と考える。

胸の中に湧き出すこの感情はどこか後ろめたい何かを訴える。あえて名前をつけるとするならば、それは多分、ディーンに対する罪悪感だ。

知らなければならなかったのは確かだった。

だが単純に知ってやろう、と思った自分はなんて図々しい人間だったのだろうとも思う。彼が本名を告げないことに、知られたくない理由がそこにあるとなぜ考えなかったのか。

実際にジュリアがその背景にある事情を話してくれたわけではないが、彼女の口ぶりから何かがそこに見え隠れすることぐらいユーフェミアにだって分かる。どうして伯父に付けられた名前を厭うのか。もちろん、単なる想像でしかないが。

もしかしたら立ち入ったことを聞いてしまったのかもしれない。知るという行為は、相手に踏み込むということだ。彼らの内面に関わり、相手に対する責任も生じてくる。不用意な発言をしたとしても、知らないからこそ許されることもあり、知っていて見て見ぬ振りをするなど、単なる好奇心を満たした結果でしかないだろう。そう考えると、ユーフェミアが自らの為に相手を知ろうとしていることは、とても無責任なことなのではないのだろうか。

必要以上にユーフェミアに踏み込んで来るディーンは、黙っていることはあっても多分嘘をついているわけではないのだろう。ある意味、誠実とも取れる。では、自分はどうかだろう。彼らのことを知っても逃げ出さずに正面から向き合うことが今後もできるのだろうか。

思わず口を片手で覆うと、無理かも、と呟く。

正直、自信はないし、知ることに対して途端に気が引けてしまう。

自分はディーンに対して無関心でもあったが、知らないことを嵩に来て、彼の好意に甘えていただけのような気がする。

そう考えると、確かに気まずい。

沈んでしまったつもりはなかったが、黙り込んでしまったユーフェミアを気づかい、ジュリアは話を打ち切った。

「着いて早々にこんな話をしてしまって、お疲れになりましたよね？
本当はまだまだお話しすることはあるのですけど……時間さま

だあることですし、お部屋にご案内しますわね」

心配を表情に滲ませるジュリアは、先に立ち上がるとベンチに座ったままのユーフェミアに手を差し伸べた。

まるで立場が逆転したその行動に、なぜだか苦笑が込み上げる。

「王女さまって、もっと高飛車なのかと思ってた」

彼女の手を握りながら立ち上がると、大きな目を更に大きくした彼女がすぐに笑みを深くした。

「そんなことないですわ。わたくしだって分をわきまえておりますのよ？」

「分をわきまえるって？」

ユーフェミアが目を瞬かせると、耳元に唇を寄せ、小さく呟いた。「これでも失恋したことだってありますのよ」

そう言っ、悪戯っぽく笑ってみせる彼女に、もうその残滓は見えない。それはすでに過ぎ去ったものなのだろうか。

確かに痛みを知ったからこそ学ぶこともある。それは、ユーフェミアにも心当たりがある。

だが、恋愛に関してジュリアは別だと思っていた。世の男が彼女を前にして彼女からの好意を断るなど考えられない。どう考えても断るのは彼女の方だろう。

「もったいないわ。ジュリアを振るなんて。その人は見る目がないわ」

心からの呟きだったが、ジュリアは首を横に振った。

そして静かな目を見ると、その人のことを思い出しているのか、とても大人びた顔を見せた。

「彼の心にずっと誰かがいたことは知っていましたわ。もちろん権力で彼を縛ることも可能でしたけど、それでは残るのは虚しさだけですわ。それはわたくしの望むものではありませんもの。それに、王女であるわたくしを正面切って振ったのです。大した人物だと思いませんか？」

だから彼に恋をした自分の目は確かだったと、彼女は高飛車に言

って見せた。それは強がりだと分かってしまったが、ユーフェミアは素直に頷いた。

しかし彼女は突然何かを思いついたようにパッと顔を輝かせると、今度はユーフェミアの手を引いて再度ベンチに腰を下ろす。

「次はユーファ姉さまの番ですわ」

「はい？」

彼女につられて座りなおしたが、意味が分からず問い返すと、ジュリアは興味津々といった様子でこちらに身を乗り出してきた。

「わたくし、懂れておりましたの。女同士での恋の話！」

「ええっ!？」

突然のことに、視線が泳ぐ。

人に話せるような恋愛経験は、はっきり言ってしていない。二十五にもなつて、だ。

笑って誤魔化そうとしたが、彼女の瞳に宿る期待の強さに、がくりと項垂れる。

まさか王女さまとこのような話をする破目になるとは。

もう一度、ちらりとジュリアの顔を窺ったが、にっこりと笑いながら今か今かと待っている。

これは話さなければ納得しないだろう。それに、王女さまの失恋話を聞いて、ユーフェミアが話さないのは公平ではないような気がする。

深々と溜息をつくと、一応念を押す。

「面白い話ではないのよ？」

「人の経験談は勉強にもなりますわ」

からりと告げられ、覚悟を決める。

本当に、面白い話ではないのだ。

「――十八歳の頃よ、その人と出会ったのは。その頃、私は職人としてまだまだ駆け出しで、仕事も全くなかったわ。でもね、本を作る過程って沢山の人が関わっているのよ。伝手を頼ってどうにか仕事を回してもらったりしていたの。彼もそうだった。画家の卵で、

画家としてまだ身を立てられないから、写字をした後の装飾を請け負っていたのね。仕事の流れから、私と彼はよく会うことが多かったのよ」

そこまで喋って、一息をつく。

今では完全に過去の話なのだが、話し出すとあの頃のなんとも言えない甘酸っぱい感情を思い出す。

「何となくなんだけど、もしかしたらこの人と将来は結婚するのかもしれないと思っていたわね。決して燃え上がるような想いだったわけではなかったけど、とても居心地のいい関係って言えばいいのかしら。二人でいると落ち着けたわ。だけど一年が過ぎた頃、あの人の画家としての才能を認める人が現れたの。その人に彼は留学を進められて――それで、おしまい」

「え？」

あまりにも呆気なかったのだろう。きょとんとしたジュリアに、軽く笑って見せる。

「別に勉強にもならない話でしょう？」

忘れたつもりだったのだが、未だに苦い思いが込み上げてくる。

本当はまだ続きがあるのだ。

互いに待つとも待ってくれとも言わなかった。勉強する彼の邪魔にはなりたくなかったし、その頃からナフムの体調が思わしくなかったからだ。ただ、彼が出立する時、待つのが当然のような雰囲気だった。最初こそ手紙のやり取りはしていたが、次第に疎遠になり、ユーフェミアもナフムの看病の為にそれどころではなくなつて、気づいた時には彼が帰ってくるはずの三年はとうに過ぎていた。

帰ってきたとの連絡もなく、突然街中で再会した時、彼の傍らには彼の子供を抱く女性がいた。その時、完全に終わったのだと気づかされた。

決して聞いていて気分のいい話ではない。後学の為にという彼女に、わざわざするような話ではないだろう。

もしも、この先彼女が同じ状況になった時、不安を煽るだけだ。

とは言っても、王女さまにそのような状況がくるとは思えないが。

「ユーファ姉さま？」

心に湧き出してきた痛みを隠すように、先にベンチから立ち上がると、今度はユーフェミアが彼女に手を差し出す。

「部屋に案内してくれるのでしょうか？　どんな部屋か楽しみだわ」
半ば強制的に話を打ち切る。

ジュリアはどこか納得がいかない様子だったが、ユーフェミアの態度に何を感じたのか。諦めたように手を取ると、立ち上がった。

そして笑顔で爆弾を落とす。

「分かりましたわ。案内します。ですけど、私の部屋の隣とカーテイス様の部屋の隣。どちらがよろしくて？」

さらりと笑顔で言ったジュリアに、当然、彼女の名前を告げたのだった。

08. いつか余裕ぶったその顔を驚かせてやろう 後編（後書き）

ジュリアが王女だと知り、呆然としてしまったユーフェミアをジュリアに任せた後、ディーンはアシュレイの後を追うように居間を出た。

彼がいるだろう部屋に目星をつけ、扉を開けたその場にまるで待っていたかのようにチェス盤を前にして座るアシュレイに厳しい眼差しを向ける。

「彼女に何をした？」

挨拶の為にアシュレイに手を取られたユーフェミアの肩が、ある瞬間強張ったことを彼女の肩に置いたこの手を感じ取った。

ユーフェミアは咄嗟に空いた片方の手で隠していたが、その指が赤みを帯びていたのを目に留めた時、彼女にとってやはり思わしくない事態になってしまったかと、わずかばかり気が咎めた。

「何をしたって？ 挨拶だろう」

悪びれもしないその口調に、彼が幼い頃に偶発的に知ってしまった件を未だ引きずっているのだと諦めに近い心境で再確認した。日頃の彼はもっと落ち着いているが、今は全身から刺々しいものを放っている。

ジュリアでさえもう割り切ってしまったというのに、いつまで引きずっているのか。

アシュレイの気持ちも分からなくはないが、今回のようなことを見逃すことは出来なかった。これから先、ユーフェミアの協力を得る為ならば、わずかな障害でも取り除かなければならない。でなければ、今までの苦労が水の泡になる。

「挨拶で女性にあのような手荒なことをするのはどうかと思うよ。弱い者いじめと変わらないだろう」

「つい力が入ってしまったただけだろう」

自らの行動を正当化するその態度に、ディーンは目を細めた。

いい大人になってまで、まだそのような子供じみた言い訳をするのか。

「彼女のあの手は、彼女の生活を支える大切な商売道具だ。もしも使い物にならないようなことになれば、あなたはその手で一人の国民の生活を壊したことになるんだ。人間としてあるまじき行為だと思わないのか」

王族だからといって、何をしてでも許されるわけではない。

女性が一人で生活をしていくのがどれほど大変なのか。ユーフェミアを見ていたらよく分かる。それに彼女が培ってきた職人としての経験が役に立たなくなった時、彼女の矜持など脆く崩れ去ることなど目に見えている。その時、彼女はもうやって生活していくのか。労働者階級からさらなる低みへと落ちるしかない。

もう少し自分の立場を深く考えてから行動して欲しいと、常々この第二王子に対しては思う。

彼女が筆跡を生かす仕事をしていることぐらい知っているのだから、考慮に入れてもいいはずだ。どのような理由があるにしても一人の生活を――国の基盤を支えている彼女たちの生活を、王族や貴族が脅かすことがあってはならない。

アシュレイはどうやらその言葉でやっとハッとしたように、悔恨を淡褐色の瞳に浮かべた。

こういう自らの非を認める素直なところは昔から変わっていない。デインは取りあえず、もう一釘さす。

「あなたも王族として、もう少し柔軟な考え方をするべきだろう。それと否定的な感情を剥き出しにするのは控えた方がいい。徒に敵いたずらを作りかねない」

それは彼女に対してだけ言えることではない。自らの些細な言動で、取り返しのつかなくなった人間を幾人も見てきているのだ。

内心、彼女に対して少しでも風当たりが弱まれば、と思ったのは事実だ。自分たちの目的を知っているアシュレイならば、この件に關しては遠まわしに自分が敵になる可能性もあることを告げたつも

りであつたのだが。

しかし――。

「確かに、私もあの女が生きることまで否定したいわけではない。

……分かった。手荒な真似はしないよう気をつけよう。だが、私があの女を氣にくわないことに変わりはない」

きっぱりと告げるアシュレイの根は深い。これはまだ一波乱あるな、とディーンは溜息をこぼした。

09. 気付いたら、もう遅い 前編

恨まないけど、いたたまれない――。

出来ることならアシュレイと顔を会わせたくないというのが本音だ。だが、同じ邸で過ごすからには不可能な場合もある。

それが食事時だ。

こちらは客であるため時間をずらすことも憚^{はば}られる。ベレスフォード邸に仕える者たちからしてみれば、ジュリアやアシュレイも客であることに変わりはないのだろうが、彼らは王族だ。その王女からの招待を受けたとはいえ、庶民のユーフェミアが彼女の兄と同席するのを嫌がるなど不敬極まりないことに違いない。

もしそれがたとえ不敬などと思われなくても、わざわざ時間をずらすなど、ベレスフォード邸に勤める彼らの仕事を増やすだけだ。それを考えると、ユーフェミア一人が食事の間我慢すれば全て問題なくなるのだ。

カチャカチャと皿にあたるナイフとフォークの音が食堂に響く。いつかディーンと二人だけで開店祝いをした夕食とは大違いだ。

食事のマナーは見様見真似でなんとかやり過ごしているが、ジュリアたちと比べると申し訳ないくらいお粗末である。意外だったのはロジャーだ。こういう場に慣れているのかユーフェミアほど手こずっているようには見えない。

手を休め、落とした視線の先はナイフを持つ手に向かう。

昼間、挨拶と称してアシュレイに力を込めて握られた指先を見下ろす。咄嗟にあの場の雰囲気壊さないよう痛みを隠したが、しばらく赤み残り、鈍い痛みもなかなか取れなかった。今ではすでに落ち着き痛みもないが、そういう手荒な振る舞いが怖くないわけではない。

警戒心を持って食堂に向かったが、しかし顔を合わせた時は意外

にも何もなかった。

いや、なさすぎた。

無言で食事をするわけにもいかず、ジュリアの手前話しかけたが、とにかく無視された。それはいいないも同然で、慌ててジュリアが言葉を引き継いでどうにか会話を成立させる始末。

嫌われているという段階ではない。何か気に障るようなことした覚えもなければ、身分をわきまえていないから、という理由でもないのだ。

なぜならロジャーとは普通に会話をしているのだ。しかも談笑まですしている。笑っているのだ。

これにはさすがに絶句した。

それ以降、ユーフェミアは食事に専念することにした。

見たことも味わったこともない料理の数々だ。この際、嫌なことから目を背けても誰も文句は言わないだろう。さすが公爵家、と内心褒めそやしながらとにかく料理に舌鼓を打つ。

ちなみに、もう一人の人物については、ユーフェミアは完全にアシュレイと同じ態度を取っている。

話しかけられてもいいないも同然。

別に怒っているわけではない。

ジュリアから聞いた話を、少し心の中で整理する時間が欲しいのだ。

この状況に置かれてもなお、ユーフェミアは一步を踏み出せない。自分でも何を恐れているのだろうと思うぐらいだ。

考えられるのはジュリアが言っていた、話は複雑で全てが一つに繋がっているということ。それが、ユーフェミアでなければ彼女に協力できないということ。

とても嫌な予感はある。

知らなければ火の粉を払えないと思ったが、きっと知ってしまったら泥沼から抜け出すことさえ出来なくなってしまう。

そんな予感だけは人一倍強く感じる。

きっとディーンもそれに関わっている。彼のことを知ると言うことは、必然的にジュリアの目的に近づくことだ。

取り留めもないことをぼんやりと考えていた為、完全に手が止まっていた。正面に座るディーンがこちらを見て何かを言いたそうな様子に、諦めて息を吐く。

「何？」

視線を合わす勇気がなく、葡萄酒の注がれたグラスに手を伸ばす。あまりお酒を飲んだことはなかったが、思ったよりも飲みやすく、頭の奥を麻痺させる感覚が、不安な感情を鈍らせる。

「いや、少し飲み過ぎのようだけど、そろそろ違う飲み物にした方がいいんじゃないか？」

心配する素振りに、カチンとくる。一体、誰のせいでこんなにも不安定な状況に陥ったのか。

「あなたに心配——」

「カーティス！」

いわれはない、と続けようとしたが、かぶせるように遮られ、またですか、と苛立ちが増す。

先程からジュリアやロジャーと話そうとするたびに、アシュレイが割り込んで来るのだ。相手が王子だと思おうと譲るしかない。

どういう嫌がらせだ、と思いつつ口を閉ざした。それがアシュレイの思惑だと知りつつも。

給仕が空になったグラスに葡萄酒を注いでくれ、ユーフェミアはためらいもなく喉に流し込む。

鼻に抜ける香りはかすかに果物の甘さを残し、ささくれ立った感情をやわらかく包み込むと、同時に愉快的気分にしてくれる。

「ユーファ姉さま、大丈夫ですか？」

目を丸くしたジュリアが、隣から心配を滲ました声を掛けてくる。

「ふふ……。美味しいわね、このお酒」

胃の中も熱いが、頬も熱い。

これが酔っぱらうということだろうか。マナー違反かもしれない

が、少し席を外した方がいいような気がしてジュリアに断りを入れた。アシュレイの視線が痛すぎて、いたたまれない。これは今後の対策を練らないと、と思いつつ席を立つ。

が、ふわりと視界が揺れた。

軽い眩暈のような感覚に、咄嗟に椅子の背もたれをつかむ。

これは、まずい。

軽く息を吐くと、出来るだけ何事もなかったように背筋を伸ばす。いくらいたたまれないからと言っても、お酒を飲み過ぎて失態を犯すのは、アシュレイに更なる弱みを見せることになる。なんだかそれはかなり腹立たしい。

可能な限り真っ直ぐ歩く努力をしながら、ユーフェミアは食堂から事実上、逃げ出した。

しかしながら、食堂から出るとすぐに壁に手をついた。思ったよりも目が回る。

今はまだ気持ち悪さはないが、きつと動くと酔いが回って気持ち悪くなるだろう。

そのまま壁に寄りかかり、軽く息を吸い込む。

食堂の外は空気が冷え、熱くなった頬に心地いい。

「馬鹿みたい……」

ぼつりと呟く。

何の為にここに来たのか。単にジュリアの話し相手ではなかったのだろうか。

だが、実際に来てみたら彼女の兄には嫌がらせを受け、ジュリアやディーンも何か思惑があって今回の招待を画策したようで、居心地が悪い。

本音はもう帰りたい。

貴族は嫌いだ。関わりたくない。

だけど、ジュリアは嫌いにはなれない。何かに利用しようとして

いるのかもしれないが、彼女から向けられる気持ちは偽りではない。純粹に慕ってくれていると信じたい。

吐く息が酒臭く、最悪だ、と呟いた時、食堂の扉が開いた。

「大丈夫かい？」

全く、どうしてこういう時に限ってこの人が来るのか。

「問題ないわ。ああ、ごめんなさい。お酒臭いわ」

目の前の空気を手で払い、苦笑する。

「歩ける？」

ゆっくりと近づいてくるディーンに、目の前の空気を払ったその手を更に横に振る。

「今は無理。動く気持ち悪くなりそう」

正直に告げると、ディーンは肩をすくめてユーフェミアの隣に立ち、同じように壁に寄りかかる。その瞳はどこを見つめているのか。視線を追うと、暗くなった窓の外に向けられていた。

ユーフェミアは頭の中にかかる靄を払いながら、言葉をつかみ取る。お酒を飲んでいるからだろうか、いつもより気安く感じてしまうのは。

「ねえ、本当のあなたはどちらなの？」

昼間に聞いたディーンの名前は、どちらも彼のものだ。それは分かっているが、どうして使い分けているのか。聞いてしまうのは簡単だが、聞けば一步を踏み出してしまう。踏み込んでしまう。それは彼らの思惑に近づくことになる行為だと知りつつ、それでも感情に従ってしまう。

「どちらとは？」

「貴族と商人」

カーティスとディーン。

彼はどちらで呼ばれたいのか。

「……きみにはディーンと呼んで欲しいな」

向けられた眼差しはどこか暗い。

「それは商人として向き合いたいということ？」

ユーフェミアに最初に告げた名を望むのであれば、なぜこの場に連れてきたのか。貴族の邸に王族の人間。周囲を上流階級に囲ませ、一体どうしたいのか。

それとも単に、貴族としての彼をユーフェミアが嫌っていることを知っているからだろうか。

「さて、ね……。そんなことより、かなり酔ってるね」

「誤魔化するの？」

再度の問い詰め、彼は小さく笑っただけだった。

その瞳はユーフェミアから逸らされると、窓の外へと向かう。何を考えているのか、珍しく表情までも暗い。

だからか。それ以上追求してはならないような気になり、ディーンと同じように窓の外を眺めた。外は暗く何も見えない。闇がただ広がり、一点の灯りさえない。まるで自分の置かれている状況のようだった。

「アシュレイ……様は、いつもあなの？」

自分だけが嫌われていると思うのは、何となく傷つく。一般庶民に伝わってくる王族の姿など、尾ひれがついた眉唾物だということが良く分かったが。

「いや、そんなことはない——と言ったらきみを傷つけてしまうか。……きちんと理由があるにはあるが——ちよっと、子供じみているとは思うんだけどね」

苦笑を洩らすディーンに思わず向き直った。

「なによ、それ」

聞き捨てならない台詞に、感情が高ぶる。お酒のせいだろうか。うまく感情が制御できない。

「一体、どういう理由だって言うのよ」

嫌な思いをしたのだ。それぐらい聞いてもいいだろう。

しかしディーンは、挨拶の為にアシュレイに取られたユーフェミアの手を取ると、軽くその手——指先を撫でた。まるで、昼間の痛みを知っているかのように。気づいていたかのように。

「取りあえず、私としてはきみが彼に好感を持たなかっただけ嬉しいんだけどね」

顔を覗き込むように見つめられ、咄嗟にその手を振り払う。

「またそうやって誤魔化す！」

「……本当に、酔ってるね。動けるようなら、もう部屋に戻った方がいい。送っていいこう」

どうしても理由を話そうとしないディーンについて苛立ちをぶつけてしまう。回りまわって彼が悪いのだと、理由づけて。こんなところに連れて来られて、こんな目に会うなど理不尽だ。

「結構よ！」

きっぱりと拒否すると、彼は意外にもにっこりと笑んだ。それはどこか楽しげで、黒い。

「いいのかい？ この邸はかなり古いけど、本当に大丈夫？」

その意味するところを察して、一気に周囲の気温が下がったような気がした。

「……もしかして、いるの？」

どこ吹く風というようにしれっとした顔をして、ディーンはこちらを見下ろすとほくそ笑んだ。

「――いるね」

はつきり告げられ、頬が強張る。

食堂に来る前はまだ日暮れ前だったが、今はもう窓の外は完全に夜に閉ざされている。

冷えた廊下が、別の意味でひやりとする。

遠くで物音が聞こえる。足音が響く。それが使用人のものだと分かっている、ここが見知らぬ場所というだけで恐怖が増す。

周囲に視線を走らせながら、知らずディーンに寄り添っていた。

「きみの方から抱きついてくれるなんて感激だね」

決して抱きついていないわけではない。少しだけ彼の方に寄っているが。

馬鹿なことを、と思いつつも、視界の端に過る影に乾いた笑みを

漏らした。

冗談じゃない。いつまでもこんなところに留まっておくなど言語道断だ。

非常に不本意だが仕方がない。揺らぐ視界に瞬きながら、思いをそのまま声に滲ませ、彼を見上げた。

「ディーン……」

果たして、揺れているのは自分なのか、ディーンなのか。

未だ酔いは冷めない。

ユーフェミアの言いたいことを汲み取ったらしい彼は、仕方ないなど呟きながらも、どこか嬉しそうに腕を伸ばしてくる。その腕は檻のようにユーフェミアに触れることなく囲いこみ、身に触れる空気の温度がわずかに上がったような気がした。

「もう少しこのままでもいたかったが、そのような表情をされると、まるで理性を試されているような気がするね」

そう言いながらも、互いの身体の間に来たわずかな距離は縮まることはなく――ユーフェミアは身体に回された腕とその言葉に眉間に皺を寄せて見上げた。

その意味するところが決して分からないわけではない。それでも一応、嫁き遅れと言われる年齢だ。だが、軽々しく口にしていい言葉ではないはずだ。相手にするほど心安い間柄でもないし、自分がそのような対象になるとも思えない。

背中に回された腕を軽く押しのけると、簡単に檻は開く。ユーフェミアは身体の向きを変えようと、一歩離れて目線で促す。すると、性懲りもなく片手を取られた。

一瞬振り払うべきかどうか悩んだが、すかさず腕自体を支えるようにぐつとつかまれ、真っ直ぐ歩けない自分の為だと気づいた。結局、おぼつかない足ではそれに頼るしかなく、ユーフェミアはふらつく頭を空いた片手で軽く押さえると、やっとその場から動きだした。

09. 気付いたら、もう遅い 後編

翌日――。

冬の合間の暖かい日差しに恵まれ、邸の裏を流れるギボン川を上流に向かって散策することがジュリアの一存で決まった。邸の者にピクニックバスケットを用意してもらい、要はぶらぶらと散歩をしましようとのことだ。

大温室を抜け、周囲を見渡すと、丘陵地に建つ邸からは川がベレスフォード邸を中心に半円を描くように流れていることが見て取れた。遠くから見た川沿いには木があるなど思う程度だったが、実際にその場を上流に向かって歩いていくと次第に木は本数を増していき、周囲は森のような様相に変わっていった。

なぜかこの散策にはアシユレイもついてきていた。だが、昨夕とは違い一言も喋らない。不気味なほどの静寂を守り、一定の距離を離れてついて来ており、その上ユーフェミアが誰と話そうとも邪魔をすることはなかった。

別に何か悪いことをしたわけではなかったはずなのに、なんだか居心地の悪さを感じる。だからと言って、無暗に話しかけて返り討ちにされてもたまったものじゃない。おそらくこのピクニックはジュリアが自分の為に計画してくれたことだ。

そう思いつつ折角だから楽しもと思っていたのに、今日は今日でジュリアとばかり話していると、ロジャーの恨めしい視線が突き刺さってくる。仕方なく気を利かせて二人が話すようにもっていくのだが、気づくといつの間にか再びジュリアと話しているのだ。

やむを得ず背後について来ていたディーンのところまで下がり、二人を眺めることにした。

こうして見ると、ジュリアは王女というよりも、どこにでもいる可愛いらしいお嬢様だ。しかし現実には彼女は王女で、ロジャーの想いが叶う日は確実に来ることはないだろう。

森に分け入ると、落ちた葉を踏み分けながら、鳥の囀りに耳を傾ける。

冬とはいえ、頭上は葉で覆われ、隙間から木漏れ日が差し込んでいる。

前を行く二人の上にちらちらと瞬き落ちる影は、それさえ彼らの美貌を彩る道具でしかない。

もともと容貌のいいロジャーとジュリアが並ぶと、まるで一枚の絵のようだった。ただ一つ残念なことは、姉妹のようしか見えないことだ。

冬の木漏れ日にロジャーの豪華な金髪がきらきらと輝く。男だと分かっていても、あまり異性を感じさせず、ユーフェミアも意識したことがない。きっとジュリアも同じ感覚なのかもしれない。

「もったいないな……」

思わずこぼすと、隣を歩いていたディーンが耳ざとく拾う。

「何が？」

「ロジャーよ」

視線を前に固定したまま、少しだけ声を潜める。

ジュリアが王女でないなら、是非ともロジャーを勧めたいほど彼がよい人であることはユーフェミアも分かっている。仕事に対して真面目だし、ユーフェミアへ回す仕事の指示も適切だ。分からないことに対しても真剣に考えてくれるし、疑問にも一つ一つ丁寧に答えてくれる。いつも穏やかで、腹が立つことはないのだろうかと思えるほどだ。

ただ、ジュリアのことに關しては周りのことが目に入らなくなるようだったが、そこまで想えることも逆に羨ましい。

そのことをディーンに告げると、彼も前を行く二人を見ながら満足でもない顔をした。

「妬けるね。きみがそこまでロジャーを評価しているなんて」

口ではそう言っているが、彼も同じなのだろう。

「ジュリアもロジャーの良さに気づけばいいのに」

王族と労働者階級の者が、こうして身分を気にせず同じ場所で遊んでいるなど、本当は奇跡なのかもしれない。だから、この貴重な時間をロジャーは少しでも多くジュリアと過ごしたいのだろう。彼女と仲良くする自分を妬んでしまうほどに。

ぼんやりと二人を眺めていると、隣から予想外に真面目な答えが返ってくる。

「彼女も気づいているよ。ただ、ロジャーに深く関わっていないし、相手がそれなりの立場でない限り、彼女は頑なに相手を意識しないようにしているんだと思う。それに、なによりも理性が働くならば、ロジャーに魅力を感じていない証拠だろう」

はっきりと言いつけた口調は、どこまでも現実的だ。貴族社会において恋愛結婚する方が珍しいことぐらいユーフェミアだって知っている。だけど庶民の中で育ったユーフェミアには、そこまで冷徹に割り切れるものは持ち合わせていない。

「ひどい言い方ね」

「そうかな？ 王女である彼女は自分の立場をよく理解しているよ。自分の結婚が政治的な意味合いが強いことも知っているし、当然、周囲もそれを期待している。お互い妥協するなら、彼女はそれなりの相手を選ばなければならない。――そう、まだ、相手を選べるだけいいと思うよ」

かなり生々しい問題を日常会話のごとく言われ、貴族社会の一端にわずかばかり怯んだ。

ユーフェミアの知る結婚は、決して利益だけを目的としていない。ケイトたちのようにお互いに幸せがもたらされるものだとはかき思っていたのだ。

昨日のジュリアとの会話が甦り、思わずムツとする。

「だったら、ジュリアは本当に好きな相手と結婚できないの？」

ジュリアが認めた人は、彼女を受け入れなかった。結果として、そういうこともあるだろう。だが、もし彼女の理性が働かなくなるほどの相手と出会い、その人と想いが通じ合い、それが周囲に認め

られない人だったら……。

そこにあるのは不幸な結末なのかもしれない。

「だから彼女は相手を選ぶ」

まるでユーフェミアの考えを読んだかのように、ディーンはこちらを見ながら当然のように答えた。それが最良の選択だとも言うように。

一瞬、言葉に詰まる。

だが、結局はディーンの言葉を受け入れられないと軽く首を横に振った。

「分からないわ」

上流階級と労働者階級。

結局は考え方も違えば、生き方も違ってくるということか。

こうして今は一緒に過ごしているが、やはり根本的なところは相容れることは出来ないのかもしれないと思うと、少しだけ寂しさを感じてしまう。

「たとえば、きみの言うようにこの先ジュリアが理性をなくすほどの人物と出会ったでしょう。しかし周囲は反対している。だが彼女は王女だ。自分の立場も理解している。愚かな行動はしないだろうし、周囲もさせない。そんな彼女にきみは彼女の感情を優先してもいいと言いうことが出来るのかい？」

聞かれ、すぐに頷くことが出来なかった。

彼女が一介のお嬢様だったら、言えていたかもしれない。しかし、彼女を取り巻く環境が自分とジュリアの隔たりを厚くしている。遠まわしに彼はジュリアの肩に責任という二文字が乗っているの事を言っている。

まさに考え方も生き方も違うのであれば、自分のこの考えは彼女にとって責任を放棄しろと言っていることになるのではないだろうか。

「すべては彼女が決めることだ」

ジュリアを見ながら、思いのほか穏やかな口調で言う。

聞きようによつては突き放すように聞こえるかもしれないが、そこには紛れもなくジュリアに対する信頼が見えた。彼女の選択がきつと正しいと、彼女自身が幸せになれる選択をするだろうと信じているように聞こえる。

ジュリアが彼を兄だと慕うように、ディーンも彼女を妹のように思っているのかもしれない。

ユーフェミアは気持ちを入れ替え、再度、前に行く二人を見つめる。

王女だろうと庶民だろうと一つだけ分かったことがある。

「結局は、他人のことに口は出せないのね」

「そういうことだね。身分は取りあえず置いておくとしても、色恋に関しては特に個人の問題だからね」

そう締め括ったディーンはなぜかその時、ジュリアを見ながら苦々しい笑みを浮かべていた。

ぶらぶらと目的もなく歩き、お腹がすいたので昼食を取るという、なんとも非生産的な時間の過ごし方に、ユーフェミアは絶対に貴族にはなりたくないと思った。

どうやらこれが貴族的な時間の潰し方らしい。

時間の有効活用を信条に生活しているユーフェミアには到底合わない。なんて贅沢な時間の使い方なのだろう。

小さな森を抜けると再び野原が広がった。しかしそこはもう人の手の入った庭とは違い、自然に伸びた枯草が地面を覆っていた。

ジュリアと相談し、風避けになる木の側でバスケットを広げることにした。

用意されていた昼食はサンドイッチで、具材は分厚い肉や彩りのいい野菜が挟んである。貴族は時間の使い方も贅沢だが肉の厚さも贅沢なのね、と思いつつ、ジュリアと話しながら準備をした。

ボトルワイン一本と、人数分の皿やグラスの入ったバスケットは

かなり重かったのではないかと思うのだが、それを一人で運んできたロジャーは、再び溶けそうな顔をしてジュリアを見ている。この邸に来てからというものの、ジュリアの視界に入らないところでは常にその顔だ。

大方準備も済み、一人離れて川辺に立つアシュレイを見る。

ギボン川はそれほど大きな川ではない。川幅は大人の足で十歩もあれば余裕で渡れるほどだ。しかし水量はかなりある。アシュレイはゆったりと流れる水面を眺めて何かを考え込んでいるように見えた。

昨日とは違い、大人しいものだ。

ピクニックにはついてきたが後ろを離れて歩いており、時々ディーンとは話していたようだったが、昨日の夕食時とは違ってユーフエミアが誰と話していても邪魔をしない。

だからと言って、こちらを見る眼差しに含まれる敵意は少しも減っていないかったが。

ディーンやジュリアは、子供じみた当てこすりのようなものだから、と言うが、理由も分からずに自分の暮らす国の王族に嫌われるなどユーフエミアにしてみればたまったものではない。

仲良く、とまではいかないまでも、普通に、接して欲しいと望むのは国民として望み過ぎだろうか。

せめて嫌っている理由ぐらい分かればいいのだが、ディーンたちの言うように子供じみた理由なら、お互いいい大人なのだから表面だけでも友好的に付き合うことも出来るはずだ。

少しだけ唸ると、すぐに決断する。

「アシュレイ様を呼んでくるわ」

昼食の準備が整い終わったのを見て、ジュリアに告げた。

彼女は驚いたように顔を上げたが、すぐに困惑したような笑みを浮かべる。無理をしなくてもいい、とその顔には書いてある。

「大丈夫よ。呼んでくるだけだから」

まさか皆の目の届く場所であからさまな非道な行いはしないだろ

う。ジュリアたちが一様にこちらを見つめているのを確認してからユーフェミアはアシュレイの元へと向かった。

だが、まさか、ということは起こり得る可能性もあるということ
で――。

あつ、と思った時には地面から足が離れていた。

一拍後、全身を覆う水の冷たさに、心臓がぎゅっと痛くなる。

どうしてこのようなことになったのか。

事実だけ述べるなら、アシュレイと言い合いをした直後、川に落ちたのだ。

それは状況的に非常に悪かった。

互いに声を荒げていたわけではないが、言い合う声はきつとジュリアたちにも聞こえていただろう。

だけど。

口を噛みしめると、わずかなためらいが現状を招いてしまったことを後悔する。

死ぬかもしれない。

あり得ないと思う反面、脳裏に過った言葉は、一瞬で恐怖を招くに十分だった。

どうすればいいのか直後分からなくなった。怖くて全身が硬直する。沈む勢いが強くて、このまま浮き上がることが出来ないのではないだろうかと思えた。しかもその時、口から漏れ出た空気が泡となって水面に向かっていくのを視界にとらえ、ひどく焦るあまり、愚かにも喘いでいた。

当然、肺に流れ込んできたものは求めるものではなく。

あまりの苦しさに、吐き出そうにも吸い込もうにもどうにもならなくて、ますます頭が混乱する。

嫌だ。怖い。助けて。

それでもとにかく本能が空気を求めるまま、ようやく浮き上がり

始めた身体が水面に近づくにつれ、広がったドレスの下衣を必死にかき分けながら水から顔を出した。

「姉さまっ！」

ジュリアの声を耳にしたが、返事を返せるほどの余裕などなかった。

濡れた肌に触れる空気は凍えるほどで、その上求めていたものはむしろ身体が受け付けなかった。

気管に入った水を押し出すように、せっかく吸い込んだ空気が咳と一緒に吐き出され、喉の奥がひりつく。

じわりと目の奥が熱くなる。

それは生理的なものの以外の何物でもなく、胸の中では純粹に、助かったと思っていた。

落ち着いてくると、周囲を見渡すほどの余裕が出てきた。

深さも胸の辺りまでで、思ったより流れは早くない。そのことに安堵したものの、あまりの水の冷たさにどんどん体温が奪われ、思うように手足が動かないことに気づく。

「姉さまっ、こちらに！」

川岸にドレスが汚れるのも厭わず、膝をついて必死に手を伸ばすジュリアが、ゆっくりとだが後方へと向かいつつあることに、自分がゆっくりと流されていることを知った。

まずいな、とは思うものの、水をかく指先が凍るような水温に痺れてくる。

懸命に腕を動かすが、一向に岸边に近づけない。

誰かが川に飛び込んだ音が聞こえたと思ったが、どうやらユーフエミアが水面に顔を出す間に流されてしまった為か、離れた所で水をかき分ける音がする。

これはまずいかも、と思った時、ふと足に何かが触れた。

背中を這い上がる、寒さとは違う冷え。身体の芯からの嫌悪感に顔が引き攣る。

ふくらはぎをつかむ、はっきりと手だと分かるその感覚に、脳が

思考を停止し、全身が拒絶反応を示した。

「――っ！」

声にならない悲鳴が、口から漏れる。恐怖が、身体の動きを止める。

どうしてこんな時に。

まだ日が高い時刻なのに、なぜ、と思う。同時に、水中の暗闇に時刻など関係ないのかと、どこかで納得している自分がいた。

「ディー、ン！」

水中に引き込まれる、と思った間際、なぜだか彼の名が口を突いて出ていた。

どうして彼なら助けしてくれると思ったのか。

再び水中に沈んだユーフェミアは、確かに自らの足をつかむ影を見た。

悲鳴すらも喉に張り付き、再び鼻腔に水が入り込む。

今度こそ駄目だと思った。

ただひたすら怖い。

息が苦しくて、喉の奥が痛くて、それでも沈みそうになる意識に櫂を飛ばして、水面に揺れる太陽に向けて手を伸ばした。

水底を自由な片足で蹴ろうとしたが、ドレスが絡み付いて上手くいかない。

暴れれば暴れるほど、息苦しさは増していく。

次第に指先さえ動かす力もなくなり、身体中から抜けていく力に、絶望に近い諦めが襲いくる。

意識が薄れていく、その瞬間――。

ふっと身体が浮き上がるような気がした。

「ユーフェミア！」

厳しい声で名を呼ばれて、頬にあたる風の冷たさに本能的に息をした。

喉の奥が詰まった感覚に咄嗟に咳き込むと、生温かい水が口の端を伝い落ち、やっと求めていたものが肺に入りこむ。途端、心臓が

激しく脈打ち始める。

うつすらと目を開けると、怖いほど真剣な顔をしたディーンがいた。

まだそこは川の中で、抱えられるようにして彼の腕の中にいた。頬に温もりを感じ、彼の片方の手が添えられていることに気づく。冷えた身体に足の感覚はすでない。まだ何かが足をつかんでいるような気がして、目の前のディーンに縋りつく。

「駄目……、早く――」

岸に上がらないと、と告げたいが咳き込みすぎて声がかすれる。彼は言いたいことを理解してくれたのか、一つ頷いた。ユーフェミアを両手で抱え上げると、岸に向かって歩き始めた。そして小声で呟く。

「大丈夫だ。『彼』がなんとかしてくれる」

濡れた黒い前髪から滴が落ちて、腕に抱えられたユーフェミアの頬で小さく跳ねた。

見上げたディーンの様子は、いつものように余裕が見えず、その瞳は怒気を孕んでいるように見えた。

身体はだるく、身を預けた状態のまま、視線だけでこの原因となったアシュレイを探す。

川岸に立ちすくむようにこちらを見つめ、青ざめるアシュレイに、わずかに微笑んでみせた。

あの瞬間、驚きに目を見張りながらも、咄嗟にこちらに手を伸ばしたアシュレイの手をつかまなかったのはユーフェミアだ。昨日の件が脳裏をかすめ、瞬間的に躊躇ってしまったのだ。

ただ、こちらに延ばされた手は、傍から見るとどう見えるか。突き飛ばしたように見えないだろうか。

その為にディーンが怒っているなら、誤解を解かないといけない。だけど、徐々に瞼が重くなる。思いがけない急激な心労に、意識がついてこない。

「ディーン……。彼、を――責めない、で……」

それだけ力を振り絞って告げると、ユーフェミアはゆっくりと目を閉じた。

10. 知りたいと願う罪惡 前編

死ぬかと思った――。

凍えるような寒さに目を覚ましたユーフェミアは、束の間、自分がどこにいるのか分からなかった。

目は開いているはずなのに視界は黒く、身動きしようにも拘束さ
れているかのようになりと身体は何かで固定され、訳の分から
ぬ出来事に混乱しそうになる。動転するあまり無意識に口元にせり
上がってきた悲鳴を何とか飲み込むと、まずは落ち着こうと動ける
範囲で深呼吸をする。

長時間同じ体勢でいたためか、首から肩にかけての筋肉がひどく
強張り、頭をかすかに動かしただけで首に痛みが走った。

反射的に顔を顰めると、仕方なくその体勢のままで周囲の様子を
窺うことにした。

身体に伝う振動から、どうやら馬車に乗っているようだと分かる。
視線だけを動かすと、窓の外を流れる景色に、先程視界が変だった
のは目がおかしくなったのではないのだと分かり安堵する。だが次
の瞬間、思いがけない状況に気づき愕然とした。

視界が黒いと思ったのは、誰かの胸に顔を埋めるように寄りかか
っていたからだ。しかも不自然な体勢の割に安定しているのは、背
中に回された腕ががっちりと身体を支えているからだ。

何があったのか状況が飲み込めず、恐る恐る視線を上げると、自
身を拘束する者の首筋に濡れて張りついた黒髪が見え、それだけで
この腕が誰のものをか悟る。

ユーフェミアの身体には見覚えのある上着が巻きつけてあり、す
ぐに記憶の端にロジャーの姿が引っ掛かった。

しかしながらその上着は気休めでしかなく、濡れたドレスは確実
にユーフェミアの身体から熱を奪っていた。すでに指先も足先も冷

え切り、痛みを伴っている。現実を思い出すと、途端歯の根が合わないような寒気を感じて、ぐっと奥歯を噛みしめた。

ディーンは湿り気を帯びた自らのコートをはおっていたが、顔色は酷く悪い。それは単に寒さの為なのか、それとも自分を心配して――。

あり得ないと考えを打ち切り、再度視線だけを動かし周囲を見渡したが、馬車には他に誰も乗っていないかった。

かすかに身動ぐと、身体に回された腕がわずかにゆるむ。

視線を下げたディーンと一瞬目があつたが、すかさず腕に力を込められ、身体がさらに密着する。咄嗟に非難を口にしようと口を開きかけたが、すぐにその理由を知ったユーフェミアはそのまま口を噤まざるを得なかった。

濡れてはいたが、かすかに感じる互いの体温が唯一の暖だった。

服越しに感じる体温はわずかにディーンの方が高い。

結局、身動ぐことさえためられ、邸に着くまでその体勢のまま終始無言を通すこととなった。

着いてからは待ち構えていた邸の者たちに早急に運ばれ、強制的に湯に浸けられた。その上、十分温まるまで出てはならないと見張りを付けられ、足し湯までされ、おかげで指先の感覚までしっかりと甦り、ようやく生き返った心地がした。

しかし部屋に戻ると、今度は待ちかまえていた医者に診察をされ、特に異常が無いことがわかると、今日はとにかく温かくして休みなさいと言われ、やっと安心した邸の者たちから解放されたのだ。

このような扱いをされたことのないユーフェミアはただ恐縮しっ放しだったが、休め、と言われてもまだ日は高く、心配したジュリアあたりが訪ねてくる可能性を考えると着替えるのもどうかと悩む。使用人が部屋を退室する前、何か温かい飲み物でも持ってきてきましようかと尋ねられたが、水を飲み過ぎたらしく食欲はなかった。部屋は十分過ぎるほど温めてあり、ユーフェミアは横になるべきかどうか迷ったが結局は寝台の端に腰かけるにとどめた。

死にかけたと思えば、身体に残る疲労感が瞼を下げようとする。確かに体調は万全ではないが気にかかるほどではない。

一人部屋でぼんやりしていると、ふとあの時、川縁でアシュレイと交わした会話が甦ってきた。

途端、ユーフェミアは後悔に呻き声を上げ、頭を抱え込んでいた。今思えば、何と大胆な事を言ってしまったのか。

アシュレイに散々なことを言われたといはいえ、もっと理性を働かすべきだった。矜持はないのかとか媚びているのか、と気分を害する事を散々言われても、どれほど我慢ならなかったとしても、黙っていればよかったのだ。

要するに――魔がさしたのだ。

「殿下のおっしゃる矜持とは何でしょう。王族や貴族の矜持など、生まれた時から庶民の私に持ち合せているものではありませんし、理解できるものではありません。ですが、庶民の私にも生きていく上で必要だと思う矜持は持ち合せております。失礼ですけど、殿下のおっしゃる矜持は、庶民の……特に労働者階級の女性の生き方を否定しているものに聞こえます。殿下は私たち女性がどのような苦勞をしているのか本当に知っていらっしゃるのでしょうか。もしもそれも知らずにそのようなことをおっしゃるのであれば、私たち庶民を――いえ、女性を見下げているとは思えません。そのような方に一体国民の誰がついて行くでしょう？」

確かにアシュレイの言うように、労働者階級の女性の中には羽振りのいい男性に媚びを売って甘い汁を吸っている者がいないわけではない。だからと言って、彼女たちの生き方を非難するつもりはユーフェミアには無い。なぜなら元を糾せば、女性が生きにくい世の中であるから、アシュレイの言うような女性が多く出るのだ。そのような世の中を知りもせず、変える力を持っている王族である彼がただ非難を口にするのは許せなかった。

勢いで言ってしまったが、間違ったことを言っているつもりはなかった。それにユーフェミア自身、決して恥ずかしい生き方をして

いるつもりはないのだ。

胸を張ってきっぱりと言い切ったユーフェミアに、最初こそ驚きの眼差しを向けたアシュレイだったが、すぐにいつもの冷淡な笑みを浮かべると、両腕を組んで見下ろしてきた。

「では、おまえの言う矜持が何か見せてもらおうじゃないか。決して媚びないと言うんだな？」

「当たり前です。誰かに寄りかかって生きようなど思った事はありません」

淡褐色の瞳を正面から見返すと、わずかにその瞳が怯んだように見えた。それは一瞬のことで、すぐに逸らされる。

「だからと言って、おまえと馴れ合うつもりはないがな」

それだけ言うと、ジュリアたちの元に向かうつもりだったのか、アシュレイに行く手を退くよう軽く肩を押されたのだ。

いや、押す、と言うよりも、掠る、と言った方がいいのかもしれない。

たまたまユーフェミアの立っていた足場が悪かった為、前日の件を思い出し、身を引いたユーフェミアが足を滑らして川に落ちる結果となってしまったのだ。

思い出し、アシュレイがどうしているか気になった。

きっと気にもしていないだろうが、あの時、川岸に立つ彼の顔が青ざめていたように見えたのは気のせいではないだろう。

ディーンやジュリアに責められていなければいいが、と気を揉んだその時、扉をノックする音が響いた。

「はい？」

返事をする、すぐに扉は激しい音を立てて開き、血相を変えたジュリアが駆け込んできた。

ドレスの裾を翻し、その勢いのままギュッと飛びついてきて、勢いあまって二人して寝台に倒れ込む。

「ええっ、ジュリア!？」

「姉さま、生きてますよね!？」

頬をぱちぱちと叩かれ、怪我はないかと先程の医者よりも慎重に身体に触れてくる。

入口にはロジャーもおり、彼にも心配いらないと寝転んだまま笑顔を向けた。

「大丈夫よ、何ともない。身体だけは昔から丈夫なのよ」

身を起こしながら、ロジャーに上着の礼を言う。

「ユーフェミアさんが無事で何よりです」

彼も安堵の表情を浮かべながら、部屋の暖気が逃げてはいけな
いと思っただろう。入ってくると扉を閉めた。

「ごめんね。心配かけてしまったわね」

「いいえ。姉さまに大事が無くて良かったです。ですけど、アシュレイ兄さまは許せませんわ！　姉さまと同じ目に合わせてさしあげれば良かったですっ」

拳を握り締めて力いっぱい言い放つジュリアは、表情も険しく、激しい怒りをあらわにする。本気で言っているように聞こえて、ユーフェミアは慌てて彼女の拳を押し留めた。

少なくとも今回の件においてアシュレイは悪くない。むしろ助け
てくれる素振りを見せたのだから、責めるべきではないだろう。

「待って。違うのよ。落ちたのは私の不注意なのよ」

「庇う必要はありませんわっ」

力強く言い切るその眼差しは、いつぞやのアシュレイと同様冷や
やかだ。しかしその視線の先にいるのが自分ではないからか、身の
竦むような怖さは感じない。むしろ自分のためにこうして怒って
くれるジュリアに親愛さえ感じる。

彼女の怒りを宥めるように、ユーフェミアはざっと事のあらまし
を説明した。

ついでとばかりにアシュレイの所在を尋ねる。

「そう、図書室にいるのね？」

返ってきた返事に、昨日部屋に案内される前、通りがかったついでに教えてもらった場所を思い浮かべた。

この邸内の広大な図書室は、時間があつたら行ってみようと思っていた場所の一つだ。ちょうどいい、と寝台から下りると、ジュリアはふてくされたように視線を逸らした。

「ですけど、今はカーティスと話し中ですわ」

「ディーンと？」

確認しつつもジュリアの態度に、首を傾げる。

まるで彼らの話から閉め出されたような口ぶりだ。

聞いてはまずいような話をしているのだろうか、とためらいながら、それでも彼らの元に行く意思を示す。

「お邪魔かしら？」

「いいえ、大丈夫ですわ。きっとアシュレイ兄さまはカーティスに叱られている最中でしょうから」

わたくしも一緒に兄さまを罵ってやりたかったのに、とジュリアは頬を膨らませて呟いた。

その言葉にギョツとする。

確かディーンには彼を責めるなど言ったはずだったのに。

ユーフェミアは慌てて身を翻す。

「姉さま！ 無茶をしては駄目です！ 兄さまのことはカーティスに任せておけばいいんですわ！」

背後から腕をつかまれて、身体を気づかってか引きとめられる。

ジュリアにも説明したというのに、それでもこのまま誤解をさせておけというのだろうか。

どういうつもりなのか問おうとして、ジュリアはその眼差しから逃げるように顔を背けた。

「それに――……もう遅いです。兄の元に連絡が行ってしまったんですもの……」

空色の瞳に影を落としながら、次第にその声は小さくなっていく。赤みがかった金色の睫毛も弱々しく震えている。

「兄？」

「ブライアン兄さまです。わたくしたちに何かあればすぐに王宮へ

と連絡が行くことになってますの。だから……もうすぐ、兄さまがこちらにいらっしゃいますわ」

彼女の告げた言葉に目を見張った。

王太子まで、ここにやってくると言うのか。

噂では人間的にもよくできた人物だと聞いているが、噂と現実の違いはアシユレイで立証済みだ。

王太子が来る、ということがどういう意味を持っているのかユーフェミアには理解できなかった。ただ問題があれば、という言葉とジュリアの態度から、あまり好ましくない事態であることぐらい想像できる。

「姉さまはこちらにいらしてください。もしかしたら会う必要が出てくるかもしれませんが、その……姉さまがお会いしたくないのであれば、わたくしから話しておきますから」

どうやら昨日、彼女たちの正体を知って腰を抜かしそうなほど驚いたユーフェミアを気づかってくれているらしい。

ユーフェミアは腕からジュリアの手をそっと外すと、彼女に向き直った。

正直、歓迎すべきことではないが、必要があるならば会わなければならぬだろう。もしもアシユレイ一人が悪者にされるような事態になるならば、きちんと誤解だけは解いておきたい。ユーフェミアが足を滑らしたせいで、この事態を引き起こしたのだから、きちんと責任をもって弁明するつもりだ。

「いいえ——必要があるなら会うわ」

なんだか次第にやっかいなことになりつつある現実にも、もしかして自ら首をつっこんでしまっているのかしら、とユーフェミアは首を傾げて自問自答した。

10. 知りたいと願う罪惡 後編

午後の日差しが差し込む図書室は明るく、裏庭に面した窓の外は緑の芝生が広がっていた。膨大な蔵書は天井まで埋まり、仕事柄嗅ぎ慣れた紙とインクの匂いはユーフェミアの緊張を解してくれる。

窓辺近くに置かれたソファに、王太子は姿勢を正して座っていた。その正面にユーフェミアが座し、隣にはジュリア。背後にはディーンが立っている。アシュレイとロジャーは現在同席していない。王太子を目の前にしたユーフェミアは、不思議な感覚に囚われていた。

穏やかな眼差しに見つめられながら、対面したブライアンにユーフェミアはずっと目を奪われていた。

髪の色はアシュレイと同じ淡い金髪、瞳の色はジュリアと同じ空色の瞳。その色合いに、押さえきれないほどの懐かしさが込み上げる。

自分がどう挨拶をし、何を喋ったのか。まるで夢の中にいるかのようで、現実感がない。

不躰だと分かっていたが、視線が――ユーフェミアの全てが彼の一動作に引きつけられる。彼の発する声が、耳に心地よく残る。

「……さま、ユーファ姉さま？」

ジュリアの声と、突然背後から視界を覆われた手に、ユーフェミアは強制的に現実に戻らされる。暗くなった視界に、一体、今まで自分は何をしていたのかと慌てる。

「あ、え？」

目を覆う手を除ければ、背後から覗き込んで、どこか不機嫌そうな顔をしたディーンが視界に飛び込んできた。その距離は思いのほか近い。手を離せば、その手はそのまま肩に置かれる。

「どうしたんだい？ きみが呆けるなんて珍しい。一体、何に見惚れていたのかな？」

ディーンの意地悪な口調にどこか違和感を覚えながらも、ユーフェミアはいつものように反論する余裕さえなく、再びブライアンに視線を向けた。自然と心が向かう。

記憶の底から甦る、懐かしい人にそっくりで。

自分と同じ色の髪と、春の晴れ間のような温かい空色の瞳。

年齢も、当時のあの人と変わらない。

エド……。

心の中で名前を呟く。

「……そんなに似ていますか？」

まるでユーフェミアの心の中を見透かしたように、ブライアンは微かな笑みを浮かべる。それはどこか困惑していて、ユーフェミアに更なる追い打ちをかける。

それだけで心臓が痛くなる。泣きたくなくなるような衝撃に、心が打ち震える。

たまらず息を押し殺す。

でないと、本気で泣いてしまいそうだった。

「兄さま……。もしかして、ユーファ姉さまは――」

ジュリアが落ち着かすようにそっと背中を撫でてくれながら、何かに気づいたのだろう。問いをブライアンに投げる。それに、彼は静かに頷いた。

「彼女は一度、会っているはずです。もう忘れてしまった可能性の方が高いと思っていましたが……覚えていたのですね？」

今更、誰を、と聞くのは愚問だった。最後の方は、確認というより確信に近い。

ユーフェミアは込み上げる感情を抑え込むよう息を飲み込み、頷いた。

忘れるはずはない。ずっと心の奥に引っ掛かっていたのだ。

あの人の事を知っている人がいる。そう思うだけで、心が浮き立つ。

「どうして、あなたは……いえ、あの人のことを知っていらっしゃ

るのですか？」

気のはやる。

知りたいと、心が渴望する。

その気持ちが表れていたのか、背後から軽く肩を引かれて、前に身を乗り出していたことに気づいた。

落ち着くように肩を軽く叩かれ、ユーフェミアは先走る気持ちを我慢する。

ブライアンはわずかに視線を下げると、小さく苦笑する。

「アシュレイの非礼を本人の代わりに詫びるつもりだったのですが、どうやらあなたはそのようなことよりも『あの人』のことが気になるようです」

言われ、ユーフェミアはアシュレイを弁明するつもりでここに来たことを思い出した。

当初の目的をすっかり忘れていたことを見透かされ、出来ることなら両手で顔を覆ってしまいたかった。代わりに羞恥を耐えるようにスカートを握りしめる。

当然、ブライアンの詫びを受け入れるつもりは当然ない。が、本来の目的は果たすべきだ。

気は半分以上削がれていたが、気を引き締めるとぐっと顔を上げる。

「あの、王太子殿下がアシュレイ殿下の――」

先に片付けるべきことを口にしようとすると、ブライアンからすぐに手を上げ止められた。

「ここは王宮ではありません。そんな堅苦しい敬称は必要ありません」

確かにここに王太子がいるのは、きっと公なことではないのだろう。本来なら護衛と称して数人の近侍に囲まれている、と確かジュリアが話していた。

彼は一人でベレスフォード邸にやってきたのだ。つまり私的に来たと思っていいたいだろう。

躊躇いながら、ユーフェミアは言を繋いだ。

「アシュレイ様の件をどのようにお聞きになったのかは存じませんが、川に落ちたのは私の不注意です」

非は自分にあるとはっきりと告げる。

正面から見つめると、ブライアンの眉がわずかに持ちあがる。

「アシュレイを責めるなど？」

話が早い。

結論を先に言われ、ユーフェミアは目をそらすことなく短く首肯した。

するとブライアンの瞳に、興味深げな色が浮かんた。まずジュリアを見、次いでディーンを見て、再びユーフェミアを正面から見つめる。

「なるほど。アシュレイがあなたに反感を持つはずだ」

「……はい？」

思いがけない返事に、気の抜けた返事をしてしまった。数度彼の言葉を頭の中で繰り返したが、意味するところが分からない。反感を持たれていたのは知っているが、どこからそういう結論になるのか。

ディーンやジュリアは大人気ない理由だと言っていたが、結局それも分からずじまいだった。

できることなら分かるように説明して欲しかったが、それを王太子である彼に求めるのはさすがに躊躇われた。

だが、きちんと戸惑いが伝わったらしい。ブライアンは、ゆるく口角を上げると簡単に説明をしてくれた。

「私たちの周囲には大きく分けて二種類の人間がいるのです。媚びる者と縋る者。私たちの顔色を窺い、媚びへつらいながら私たちの持つ特権のおこぼれにありつこうとする者。もう一つは、私たちに縋り、揉め事を回避しようとする者。王宮にはそのような人間ばかりだと言っても過言ではない」

その中心にいるはずなのに、ブライアンは顔色を変えることなく

淡々と告げる。慣れてしまったというよりも、それを当然の世界として受け入れているように聞こえた。

ユーフェミアにしてみれば受け入れがたい世界だった。まるで自分のために他人を利用するのが当然だと言っているようだ。

ふと、アシュレイに川岸で散々罵られた言葉の数々を思い出し、ブライアンが今言った言葉が混じっていたことに気づく。アシュレイが自分をどういうつもりで罵ったのか、理由は分からないまでも気持ちだけは分かったような気がする。

王族は庶民から見たら遥かに恵まれた生活を送っているとばかり思っていたが、この邸に来て彼らを知れば知るほど、同情に近い感情を覚えてしまうのは、きつとおこがましいことに違いないだろう。だが、思わずにはいられない。

自らの意識に沈もうとしていたところを、ブライアンの声で立ち戻る。

「あなたのように媚びるでもなく、継るでもない者は私たちにとって、とても稀な存在だ。そのような汚れ切った世界を見て育ったジュリアやアシュレイが、あなたに好意を持つことはおかしくはない」

ゆつたりと話すブライアンの声は耳に心地よく、思わず聞き入りながら、畏れ多い褒め言葉に慌てて首を横に振る。だが、すぐに信じがたい言葉があったことに首を傾げた。

「あの、アシュレイ様も？」

声が疑ったものになってしまったのは仕方がない。昨日から散々な目にあつたのだ。あれが好意から来ているものとは到底信じられない。

「ええ。弟の場合は少し色々なものが混ざってしまって、反感を持つに至ったのだと思います」

やはり反感なのか。

洗面を作ったまま、取りあえず納得する。完全に理解したつもりはないが、アシュレイの根底に好意があるならば、まだ関係改善に余地はある。

苦笑を浮かべたブライアンは、話し終わるとジュリアに視線を向けた。

「それでもまだ、きみたちの目的に彼女を巻き込むつもりなのかい？」

優しい口調だったが、それはどこか冷酷な響きを持っていた。

好意を持っているにもかかわらず、目的の為ならばユーフェミアを利用するのかとブライアンは聞いているのだろう。だが、ジュリアは言っていたではないか。強制はしないと。話を聞くだけというのは約束したのだから、ユーフェミアは彼女が出した結論に異論を唱えるつもりはなかった。

ジュリアはかすかに青ざめたが、ちらりとユーフェミアの背後に立つディーンに視線を向けると、コクリと頷いた。

それを見て、ブライアンは深く息を吐き出した。

仕方がないというように。

「……つくづく私も甘い。どうやってそこにいるカーティスのような人間になれるのだろうか」

どう言う意味なのか分からなかったが、困ったように一人呟くブライアンの声は、決して小さくはない。

「ブライアン、それはどういう意味かな？」

言葉を返すディーンもどこか楽しげだ。笑い合う二人を見て、本当に幼馴染なのだとはつきりと感じる。

この邸に来てから、ユーフェミアはディーンとの距離をありありと見せつけられ、実際にその身分の差を感じていた。今まで気安く接してきたが、王族の中に入っても違和感がない。確かに彼は上流階級なのだ。

そこに寂しさを感じないと言えば嘘になる。ユーフェミアにとってディーンは、すでに知り合いの域を超えている。いつも反発しているが、向ける感情は友人に対するそれに近いものがある。だが、現実とは違うのだ。その上、違う世界を垣間見た後悔が押し寄せてくる。この邸に来るべきではなかったのかもしれない、もう何度も

思っていた。

「さて、話を戻そう。アシュレイの件はあなたがそう言うのであれば、その言葉に甘えてなかった事にしよう。それで、あなたは『あの人』の何を知りたいのですか？」

やっと話が戻り、正面から聞かれ、ディーンやアシュレイのことは取りあえず保留する。

今までは正直、エドのことと父親のことが結びつき、考えるたびに暗い気持ちに囚われていたが。

心臓が徐々に早鐘を打ち始める。

ずっと知りたかったことが、まるで薄いカーテン越しに影だけが透けて見ているような気がした。しかも手を伸ばせば届く位置にいる。

こうしてあの人によく似たブライアンを目の前にして、今となつてはその答えは予想がついているが、そうなるとカーテンを開けるのが怖くなる。知りたいけど、知りたくない。

腿の上で握っていた両手がかすかに震える。

この期に及んで緊張してきた。あれほど川の水を飲んだというのに喉に渴きを覚える。

正面から見つめくる視線から逃れるように、ユーフェミアは自らの両手に視線を落とし、声を絞り出した。

「……私の記憶の中の人が、本当に——エドワーズ国王であったのか……」

言葉にしてしまえば、もう取り返しはつかない。

ブライアンはそんなユーフェミアの恐れに気づいたのか、安心させるように小さく笑った。

「それは間違いない。父はあなたを引き取りに、一度バルフォアに赴いている」

短い言葉だった。だが、すべてを説明しているかのようだった。

息を飲み込むと、一つの言葉を繰り返す。

「引き取る……」

「ええ。私なりに調べたのですが、あなた言う『あの人』が父であることに間違いはないでしょう。ですが――…あなたはこの続きを聞く勇気が本当にあるのですか？」

尋ねられ、咄嗟に言葉が出なかった。ブライアンはユーフェミアが何を躊躇っているのか分かっている。その躊躇いを知っていてなお、選択させてくれるというのか。

それはとても親切で、残酷だ。

情けない顔をしているとは思ったが、それでもゆっくりと顔を上げると、ブライアンは穏やかに笑んだまま、容赦なく切り込んでくる。

その春の日差しのような眼差しだけは真剣で。

「たとえばあなたの望まない答えだったとしても」

それはどこまでも冷ややかに、現実を突きつけて。

「全ての生活が一変するようなことになっても」

まるで悪魔の囁きのように甘美で、同時にユーフェミアにとっては恐怖の宣告に近く。

「あなたはそれを全て受け入れる覚悟があるのですか？」

正直に言うと、分からなかった。

それでも知りたいと思うのは、悪いことなのだろうか。

覚悟と言われても、知って何が変わるのか。周囲が変わるのか、自分が変わるのか。

思いは決まっているのに、ブライアンの言葉が頭の中を混乱させていた。

だが、先程まで背中を撫でてくれた手が熱を伝えて、促しているような気がした。肩に置かれた手に力が加わると、更に頭の中が静まっていく。

一度目を閉じ、息を吸うと、ゆっくりと視線を上げた。

空色の瞳を真っ向から見つめ、静かに息を吐き出す。

「私は……知りたい」

告げた言葉は思ったより小さくなく、その場に静かに落ちていく。

ブライアンは膝の上で両手を組むと、その答えが分かっていたように、ゆっくりと目を閉じた。

11. 零れて乾いてく涙は、見ない振りに決めて 前編

今この瞬間が、怖い――。

次にブライアンが目を開いた時、その瞳は先程まで見せていた厳しさを完全に拭い去っていた。

ユーフェミアを見ていながら、どこか違う何かを見ているような眼差しで、口元には穏やかな笑みまで浮かべている。

先程までとはあきらかに違う雰囲気ユーフェミアは困惑した。

「あなたは――母から聞いた、あなたの母君とそっくりだ」

苦笑と共に呟かれた言葉を、ユーフェミアは数度頭の中で繰り返した後、思わず目を見張っていた。

どうしてここで母が出てくるのか。いや、それよりも国王ではなく王妃がクリスティアナのことを知っていた事実が混乱する。

ブライアンの様子から、王妃が彼女の子供たちである彼らに悪意を込めて母のことを話したわけではないことぐらい容易に想像できる。でなければ、彼らが、これほど穏やかな表情をしているはずがない。

彼らの母親でもあるパメラ王妃――。確かに、ユーフェミアの母クリスティアナが生きていたら同じ年頃だろう。とても穏やかで美しい人だと噂で聞いたことがある。その王妃であるパメラが母を知っているとは。

驚きのあまり二の句が告げずにいると、ブライアンは身体から力を抜き、ソファの背もたれにすぎると、やがてゆっくりと話し始めた。

「母はグラッドストン公爵メイナード家の出で、あなたの母君のエヴァンス家とも懇意だったと聞いている。交流のあった両家に同じ年頃の娘。過去にも先にも親友と呼べたのは彼女だけだったとよく聞かされていたよ」

視界の端で、隣に座ったジュリアの頭が同調するようにかすかに動く。

彼らは子供の頃からクリスティアナの話が聞かされていたのだろうか。

ブライアンの瞳がわずかな間、遠くを見つめた。それはとても穏やかで、ユーフェミアが想像していた――憎しみを込められた感情はそこに見えなかった。

一方、クリスティアナとの思い出を辿りながら、いくら考えても母の口から王妃の名を聞いた記憶はなかった。

事実、聞かされたところで、庶民の中で育ったユーフェミアが母と王妃が親友だと言われても信じなかっただろうし、そのようなことをユーフェミアがうっかり周囲に漏らし、聞き付けた何者かに自分たちを悪用されることを恐れていたのかもしれない。母の立場を理解するには自分は幼過ぎたし、母が亡くなるのも早過ぎたのだろう。母の口から何一つ、父親のことでさえ聞いたことがなかったのだから。

どこかおもやするものを抱えながらも、再び口を開いたブライアンの話に耳を傾ける。

「母は幼少の頃にはすでに父と婚約を取り交わしていた。社交の場に出る歳になると、王太子の婚約者として扱われ、同年代の娘を持つ親やその娘自身から、隙あらばその地位から引きずり降ろそうと何度も嫌がらせを受け、どれほど挫折そうになったかと言っていたことがある。だが、絶対的に味方となってくれた親友がいたから乗り越えることができた」と聞いている」

それがクリスティアナなのだろう。

ブライアンの口からさらりと語られた上流階級の黒い部分は、ユーフェミアが想像できるようなものではないし、想像したくもなかった。だが何となく、母がパメラの味方となっている姿は想像ができた。きっと母の事だ。他の貴族の令嬢に口でも――もしかしたら手でも負けはしなかったことだろう。

どこまで彼らは母の話を聞いているのか分からなかったが、どことなく決まりが悪くて身を縮こまらせた。

しかしブライアンの声音が穏やかだからか、いつの間にか緊張がほぐれていることに気づく。

気を取り直して顔を上げると、ブライアンはこちらを見てかすかに微笑んだ。その顔はやはりエドに似ていて切なくなる。

「だが、実質あなたの母君——クリスティアナが社交界にいたのは約一年。母と共にその美貌で社交界でも注目を浴びていたクリスティアナは、忽然と姿を消すことになった——ある噂と共に」

「……噂？」

思わず眉を顰めていた。

その口ぶりから、噂が決してよくない手合いものであることだと分かる。

ちらりと隣を窺うと、ジュリアも組み合わせた手に視線を向けたままでいつもの元気はない。

ユーフェミアにもその噂がどのようなものであるか、ある程度予測はつく。

一般に、貴族の娘が社交界に出ると言われているのが十四、五歳だ。ユーフェミアはクリスティアナが十七歳の時の子供なのだ。時間的には合っている。しかもこの会話の流れからいくと、やはり……。

「常に母の側にいたクリスティアナと母の婚約者である父が顔を合わす機会はいくらでもあったはず。まして周囲は敵だらけ……。先程も言いましたが、どうにかして母を婚約者の立場から引きずり降ろそうとしている連中にとって、母の味方であるクリスティアナの汚名は、親友と婚約者の両方に裏切られた母を社交界に居づらくさせるには恰好の材料だったのだろう——事実、クリスティアナは君を身籠っていた」

当時、クリスティアナと王太子であるエドワーズが二人だけで会っている姿は何度も目撃されている。しかも、婚約者のいる者同士

が人目を忍ぶようにこつそりと。それは次第に人の口に上るようになり、さらにクリスティアナの婚約破棄と妊娠の発覚――。

その上、生まれた子供は王太子と同じ蜂蜜色の髪。

「おそらく事実関係から推測するとあなたは父の血を引いている」

「……え？」

頭の中でたどり着いた結論に、ブライアンは早合点を止める。

思わず聞き返と、彼は困ったように笑った。

「私も様々な手段を使って調べた結果です。父の補佐を長年している父の友人に聞いたこともありますが、なかなか事實は教えてもらえなかった。むしろ私に気づかうところが余計に認めているように思えて、何度も食い下がったところようやく認めた。だが母はあなたの髪色が父や私と同じでも、親友であるクリスティアナを未だに疑ってはいない」

それは現在も、と言うことだろう。

しかしふと疑問に思う。

彼らが調べなければならぬほど、事實は巧妙に隠されていたという事なのだろうか。二十五年以上も経った今では噂の大きさがどれほどのものであったか計れないが、確かにそのおかげでユーフェミアは静かに暮らしてこれたのだ。

ならばなぜ、ブライアンやジュリアは、クリスティアナやユーフェミアの存在を知ることができたのか。

ユーフェミアのわずかな表情の変化に気づいたのか、ジュリアは静かに話し出した。

「……昔、母が仕舞っていた過去の日記を見つけてしまったのですわ」

どこか虚ろな遠い目をしてぼつりとジュリアはこぼした。

「ブライアン兄さまやアシュレイ兄さまと、母の私室で遊んでいた時です。母はその時留守で……偶然、侍女たちもいなかったのです」

あまり感情のこもらない訥々とした調子でジュリアは話す。
続きの間である衣装部屋に入りこみ、美しく豪華な色とりどりの

ドレスをかき分けてジュリアが隠れる場所を探していると、実家から嫁入り道具を入れて持って来たという箱を見つけた。

ジュリアが隠れるにはちょうどいい大きさのその箱を開けると、中には意外にも数冊の本が入っているだけだった。だが普通の本とは装幀からして何かが違う、興味を引かれて手にとって開いてみると、中は職人が書いた文字とは明らかに違う、母の筆跡と思われる字で何かが書かれていた。

まだ簡単な文章しか読めなかったジュリアは、取りあえず兄たちに見せることにした。

そしてそれがパメラの昔の日記であることを知った。

日付は、パメラがまだ結婚する前。

主にその日の他愛ない出来事や親友のクリスティアナのこと、時には社交界での嫌がらせが綴られていた。

だが、次第に親友の名前が日記から減っていつていることに気づく。

『まさかクリスがあの方の子供を身ごもるなんて……。私は二人の関係を知っていながら何もすることが出来なかった。婚約も破棄され、公爵の怒りも買ってしまったエヴァンス家はもう……。わたくしに出来ることは――そう、一つだけ。クリスを信じることに。それが噂からも彼女を守る、唯一の手段……』

それを最後に、その一冊からクリスティアナの名前は完全に消えた。

ブライアンに読んでもらいながら、次第に二人の兄の顔色が悪くなくなっていくことにジュリアは気づいた。

書いてあることの意味はほとんど分からなかったが、兄たちの顔色から良くないことが書かれていたことに不安になってくる。

取りあえず日記を元の場所に戻し、母の私室から逃げるように出るとブライアンの部屋で口を濁す兄たちにしつこく問い質したのだ。知らされた事実に打ちのめされたのは、ジュリアだけではなく、話してくれた兄たちも同様だった。特にアシュレイの父に対する嫌

悪は酷く、その憎しみはすぐにクリスティアナに向くこととなった。それから、ブライアンは色々な手段を講じてクリスティアナのその後を調べ上げた。

王都からほど近いバルフォアで生活していること。すでにクリスティアナは亡くなっていること。ブライアンより一つ年上でユーフェミアという名の娘がいること。かつてクライトンにある大学に勤め、父の教師をしていたナフムという者と暮らしていること。

それは兄妹だけの秘密となり、それぞれの中で消化され、想いは次第に別々の方向へと向いていくこととなった。

ブライアンは父や母が静観しているならば静観を続けようと。アシュレイは嫌悪感から決して認めてはならない存在へ。ジュリアは次第に姉への思慕に変わっていった。

「だから——ユーファ姉さまは、わたくしの本当の姉さまなのです！」

ずっと会いたかったのだと涙を浮かべて手を取られる。

だが、ユーフェミアは覚悟をしていたものの、告げられた事実に戸惑いしか覚えなかった。

二十五にもなって、いきなり弟や妹ができたと言われても、実感はわかない。どういう態度で接すればいいと言うのか。

ただ話の中で、一つだけ納得できたのはアシュレイの態度だ。

きつと彼は潔癖であるが故、怒りという形になって向けどころのない感情をユーフェミアに向けてしまったのだろう。ブライアンから聞いた経緯からは、憎しみを持たれてしまうのも分からなくはない。母は親友の婚約者を——彼らの母親から一時的にしろ奪い、子供まで産んでしまったのだから。

ユーフェミアからしてみれば、ディーンやジュリアの言うように『子供っぽい』理由では片付けられない。受け入れられないと言うのも仕方がないと思う。

重い息を吐きながらユーフェミアは俯く。

知ってしまった後、何かが自分の中で変わるかもしれないと恐れ

ていたが、今もってユーフェミアの心を占めるのは、やはり恐れしかなかった。

父親が誰かを知りたかったのは確かだ。記憶の中にいるあの人ならいいのに、とずっと思っていた。

だが、実際にあの人が国王であったなら、どうすればいいのだろう。もう一度会いたいと思っていたが、それは無理だ。会えるはずがない。

心の中が突如、虚ろになってしまったような気がした。

「さて――あなたは自分の生まれを知ってしまいましたが……少し脅し過ぎましたかね？」

ブライアンに言われ、指先を痛いほど握りしめていたことに気づく。手のひらに食い込んだ爪は痛みを感じないほど、二人の話に動転していた事実を教えてくれた。

「姉さま……」

ジュリアがそっと力を入れ過ぎていた手を開いてくれる。痛ましげな眼差しに、そんなにひどい顔をしているのだろうかと思う。

大きな衝撃を受けたのは確かだが、まだ現実としてユーフェミアの中に受け入れたわけではない。

「ブライアン」

突然、背後に黙って立っていたディーンが口を開き、すっかり彼の存在を忘れていた事に気づく。

ディーンがこの場においてブライアンが話したという事は、この内容を彼も知っていたのだろう。回らない思考を何とか動かしながらゆっくりと振り返ると、ディーンは安心させるかのようにいつもの余裕のある笑みと視線をユーフェミアに向けたまま、ブライアンに話しかける。

「彼女はまだ休養の必要な身体だ。続きはまた今度にしてくれないか」

「そうだったね。――分かったよ。私は明日の午前中までなら時間が取れる。それまでならば、あなたの為にいつでも時間を取るつも

りです——姉上」

呼ばれた敬称に、ユーフェミアの身体はびくりと震えた。

そうであるかもしれないが、王太子であるブライアンから敬称で呼ばれることに強い抵抗を感じた。彼らは十数年という長い間、ユーフェミアの存在を知っており受け入れていたかもしれないが、ユーフェミアにとってはほんの少し前に知ったばかりだ。まだ他人としか思えない。

困惑を顔に浮かべて、ユーフェミアは首を横に振る。

「私はまだ、現実を受け入れられておりません。たえそうであっても、名前で呼ばれた方が落ち着きます」

言葉を慎重に選びながら、素直にそれを口にした。

「……わかりました、ユーフェミア殿」

頷いたブライアンが、かすかに残念そうに見えた気がしたが、それはディーンによって瞬時に意識がそらされた。

「ユーフェミア」

ブライアンの返事とほぼ同時に名を呼ばれ、腕を引っ張られる。

反射的にソファから立ち上がったが、話の内容が強烈過ぎた為か、それともやはり溺れた影響なのか、足に力が入らずふらついてしまった。

しっかりしないと、とは思うものの頭の奥が麻痺したように働かず、ディーンに支えられて何とか立っていられる始末だ。

だが、背後から肩に手を回すように身体の向きを変えられ、完全にブライアンたちに背を向ける格好になってから、突如頭の中が鮮明になる。

「ちよっ——」

「では、先に失礼するよ」

こともなげに平然と言ったのけたディーンに目を見張る。幼馴染かもしれないが、絶対に王族に対する態度ではない。

残された二人の様子が気になって顔だけで背後を振り返るが、二人はまるで驚いた様子もなく、そのことにユーフェミアの方が驚愕

する。

ジュリアに至っては視線が合うと、ゆっくりお休み下さい、とまるで親切にも声をかけてくる。

だから、そのまま押されるように図書室を出たユーフェミアの耳に、ブライアンの呟いた言葉は届かなかった。

「カーティスは、どこまで本気なのだろうね」

「……わたくしにも分りかねますわ」

兄妹はあきれたように顔を見合わせた後、小さく笑いながらも疲れた様に身体中から力を抜いた。やはり日頃から張りつめた場に慣れている二人にとっても、思った以上に緊張する会話であったことには違いなかった。

11. 零れて乾いてく涙は、見ない振りに決めて 後編

西の空へと向かう夕日が次第に赤みを増しながら、廊下に長い影を引きはじめていた。

「あの、ディーン……。一人で歩けるから離してくれないかしら」
時折すれ違う使用人たちの視線がはつきり言って痛い。見て見ぬ振りをしながら、ユーフェミアの肩にチラリと目をやり、口の端をかすかに持ち上げ、愛想良く笑む彼らのその眼差しは、あきらかに好奇の色が混ざっている。

離して、というよりも、離れて、と言いたいのだが。

図書室を出るまではジュリアやブライアンの手前、振り払うのもどうかと思いい甘んじて肩を抱くことを許していたのだが、廊下に出てほっとしたのも束の間、いつまで経ってもその手は離れない。

片眉を上げてしばらくその手を睨んでみたが、その手の持ち主は視線に気づいているはずなのに肩を押して歩き始める。

反対側の身体の側面は、完全にディーンとくっついている。この距離は、傍から見れば仲睦まじい恋人同士に見えないだろうか。

立ち上がった時にふらついてしまった為、ディーンとしては支えてくれているつもりかもしれないが、必要以上にくっつくとかかなり歩きづらい。

その上こんなに寄り添うと、馬車で暖を取る為に余儀なく抱きしめられていたことが頭に掠め、途端ディーンと顔を合わせるのが恥ずかしくなる。

「無理はしなくてもいい。何だったら馬車の時のように抱えてもいいんだけど？」

いつもより近い位置でディーンの声が響く。

今まさに思い出していたことを言われ、ユーフェミアはむしろ顔が見られない位置にいて良かった、と赤みを帯びた顔を何気なくそらした。

先程ブライアンから聞いた話はかなり衝撃的だったが、現在そちらにまで気が回らない。それもこれも隣を歩くこの男のせいだ。

馬車の中で必要以上に身体を密着せざるを得なかったあの状況は、今思い出してもひどく落ち着かない。

肩に回されたこの手が身体を支える為に、きついほど強く抱き締められた時、一瞬、何かを錯覚してしまいそうになった。

川で気を失ってしまったことを、もしかしたらディーンは心の底から心配してくれたのかもしれない、と。それはユーフェミアが彼の心を、少しでも占めているという意味で。

まさか、であるが。

「そう言えば、足は大丈夫なのかい？」

考え込んでいたため返事が遅れ、肩を抱かれた手に力を込められ、さらに彼の方に身体が寄る。そのまま顔を覗きこまれ、いつもより近くにある夜色の瞳にわずかにたじろぐ。

だが、すぐに視線をそらしてしまった。気恥かしさの方が先にくる。

「……大丈夫よ」

照れを隠そうとして、ついぶっきらぼうに言い放った。

足は、冷え切った身体を湯で温めていた時、つかまれた箇所を確認したが、かすかに赤くなる程度で誰にも気づかれなかった程だ。痛みもないし、すでに忘れ去っていたと言ってもいい。

「本当に？」

疑うように見つめられて、ますます素気無くする。一方、心臓はユーフェミアの感情とは逆に次第に早く脈打ってくる。

「ええ。問題ないし、歩けないわけじゃない。だから離してくれない？」

丁度いいとばかりに、再度願い出た。

だがディーンは、肩を抱く手に力を込めることで返事を返してきた。否、と。

不快とまではいかないが、無意識に身体が強張る。ここまですく

ついでいながら意識しないなど不可能だ。まして肩を抱くディーンに悟られないなどあり得ない話で、まったくもって忌々しい。

頭上から漏れた小さな笑い声に、込み上げる怒りを押さえつけ、悔しさにギリリと奥歯を噛んだ。

「あのね、ディーン」

誤解をして欲しくなくて、何か言わなければと口を開く。
しかし。

「ユーフェミア」

かぶせるように彼の強い声に遮られた。さっきまでの雰囲気とはうって変わって、その強さに彼が何を話そうとしているのか気づき、口を閉ざす。

ふと視線を上げると、そこは二階へと続く階段の手前で、数段上ると広めの踊り場があり、そこから左右へと別れ、先は二階へと向かっていた。壁には明かり取りの窓から差し込んだ傾きかけの陽光がますます赤みを増して、ユーフェミアの上に降り注ぐ。

ぼんやりとその赤を見上げて、家にいればもうすぐイヴァンジェリンやリックが目覚める頃だと気づく。彼らは何を話して夜を過ごしているだろうと、思いを馳せる。

ふいに頬を撫でられる感覚に、いつの間にか肩から手は外され、わずか手前――近すぎるほどの距離にディーンが立っていた。

「こんなことになって、私を恨んでいるかい？」

その顔がどこか悲しげに見えるのは、夕日が彫の深い彼の顔に影を落としているからだろうか。

頬に触れる手から逃れるよう顔を背けると、かすかに彼の瞳が暗く沈む。

いつもの余裕はどこに行ったのか、宙に止まったまま行き場を失ったその手は力なく落ちた。

目の端にディーン存在を留めながら、視線を床に落とす。

先程から考えないように、触れないようにしていたのに、どうしてディーンはいつも人が油断したところを切りこんでくるのか。ユ

「ユーフェミアが質問してもかわすくせに、ここぞという時は容赦ない。――今は、何も考えたくない」

知りたいと願ったのはユーフェミアだ。

自分がこの世に生まれてきたことが、人道にもとる行為の結果であるかもしれないことなど、とうの昔に覚悟をしていたつもりだった。だが、与えられた事実は予想以上にユーフェミアを打ちのめし、勝手に傷ついているだけであることは分かっている。ユーフェミア自身を否定されたわけではない以上、傷つくのは間違っている。

しかし、この心の中に湧き上がる感情は何なのか。

もしもエドが国王でなかったら？

おそらく話を聞いた時点で、すぐさま会いに行っていたかもしれない。娘だと認めて欲しくないと言えば嘘になる。いや、誰よりもエドに父親であって欲しかったのかもしれない。それがままたらないから、こんなにも傷ついて、諦めて、悲しいのだ。

だから、ここでディーンに当たるのは八つ当たりでしかない。

いつものディーンのように軽口を叩いて、普段通りに接して欲しいのに。

「……分かった。では、少し昔話をしようか」

察してくれたのか、引いてくれたディーンにホッとする。

恨んでいるとかいないとか、考えたくないというよりも、実際には周りの人の事まで考えられなかったのだ。

くると身体の向きを変えたディーンは階段に足を掛け、手をユーフェミアに差し出すと無言で促す。

この邸に来るまで、馬車の乗り降りでも何度も取ってきた行動なので、さすがにユーフェミアも学んでいる。素直に手を乗せると、安堵したように小さくディーンが息を落とした。

彼はどこに向かおうとしているのだろうか。

手を引かれるまま、ユーフェミアは夕日に赤く染まった階段をディーンに連れられるまま上って行った。

三階はベレスフォード邸の最上階らしく、現在旅行中のフラムスティード公爵——ブライアンの話からするとユーフェミアの叔父になるのだろう——の居住空間になっていた。

公爵の息子は現在留学中で、それをいいことに旅行好きの夫婦は留守がちらしい。邸の者は働き甲斐がないと言っているほど彼らは家を空けていることが多いと聞いた。

その三階の廊下には、ほぼ等身大と思えるほどの代々の公爵一家の肖像画が掛けられていた。

現在の公爵の前で足を止めたディーンは、肖像画を見つめていたユーフェミアを振り返るとそっと髪に触れてくる。

「王族の血を引く者は、大抵が蜂蜜色の髪をしている」

言われ、今通ってきた廊下に掛けられた代々の公爵の肖像画が皆、暗い髪色をしていたことを思い出す。現在のフラムスティード公爵は王弟になり、今は亡き王太后の生家である爵位を継いだのだ。

ジュリアにしても、赤みがかった金髪は、ストロベリーブロードきつと王妃に似たのだろう。だが、自らのこの髪色は——。

沈みかけた心は、ディーンの声で現実に取り戻される。

「そんな暗い顔をしないでくれ。きみが私を責めていなくても、きみにそんな顔をさせてしまった自分を懲り殺したくなるよ」

「でも、私は……」

この先、どうすればいいのか分からなかった。

正直、ブライアンがどうして素直にユーフェミアの出自を話してくれたのか分からなかった。たとえユーフェミアが王族の血を引いていようと、彼らに得になることはおそらく何一つないだろう。隠されても不思議ではなかったはず。

だから、真実を話してくれたことに余計にでも戸惑い、彼らが何を求めているのか底知れない恐ろしさを覚える。この先、自分が望むように生きていいのか悪いのか、それさえ今のユーフェミアには判断できなかった。

「ユーフェミア」

強く名を呼ぶその声に、かろうじて視線だけを上げる。

正面から見つめてくる夜色の瞳は、ユーフェミアの揺らぐ心を惹き付ける。

「私は、きみがたとえ誰の血を引いていようと、きみの生き方を尊敬しているよ」

思いがけないディーンの発言に、うつむきかけていた顔をディーンに向ける。

いつも彼は本音を語らない。だが、この言葉に含まれる音は決して嘘から出たものではなく、彼の純粋な本音に聞こえた。

「ジュリアから私がラムレイ家に養子に入ったことは聞いたね？」

確認を込めて聞かれ、素直に頷く。

「では私がいずれ養父の持つている爵位である侯爵を継ぐことは？」
初めて彼から聞く彼自身の話に、目を見開いて首を横に振る。

侯爵。

昔話とは彼自身の事なのだろうか。そう思うとにわかに心がざわつく。

それに不思議だ。最初はディーンが自分の知らない秘密を知っているかもしれないと思って彼の事を知りたいと思っていたはずなのに、父親を知った今でも、彼の事を知りたいと知っていることに気づく。

夕日に染まる廊下は、階下の物音一つ届かない。ただ、互いの呼吸が聞こえそうなほど、静寂に満ちていた。

ユーフェミアが黙っていると、ディーンは公爵の絵を見上げながら、珍しく陰呑な光をその瞳に宿した。それは肖像画の中の公爵に向けられたものではなく、他の誰かに向けられたものだと言を聞くうちに知ることになった――。

12. きみのひかり、ぼくのくらやみ 前編(前書き)

※ディーン視点です。

12. きみのひかり、ぼくのくらやみ 前編

きみが心底うらやましいよ――。

思わずこぼしてしまった本音に目を瞬かせたユーフェミアを見て、ディーンは苦笑を禁じ得なかった。

ユーフェミアにとって今まで自分がどのように見えていたのか。心から信じ切っていない表情がすべてを語っている。分かっていたつもりだが、こうもあからさまだと心がまったく痛まないわけではない。

きっと彼女の事だ。上流階級は人を羨む前に何でも手に入れることが出来るとでも思っているのだろう。確かに金や権力を用いればあながち間違いではないが、自分にとってユーフェミアという人間に対してだけは全く当て嵌まらない。

ユーフェミアを羨むのは、何も彼女の身体に流れる血に対して言っているわけではない。

王族の血を引いていながら庶民として育ったユーフェミア。

彼女の今までの生活は、愛されているが故に与えられ、知らないところで守られてきたものだ。彼女は知らないだろう。

代わりに彼女に与えられたものは自由以外何一つない。職人としての実力も、一人で生活していくだけの力も彼女自身の努力の結果だ。

生きていく為に自ら働いて得た賃金で質素で堅実な生活を送りながらも、身分に縛られない自由を手にするユーフェミアを羨ましいと思ってしまうのは、自分と正反対の生き方をしているからに他ならない。

養子であろうがなかろうが、この身体に流れる血は間違いなく冷徹な養父サイモンの血を引いている。しかしサイモンに引き取られ

るまでは、自分もユーフェミアとそれほど変わらない生活を送っていたのだ。

バルフォア周辺の土地を治めるレイヴンズクロフト侯爵。それがサイモンのもつ肩書で、こだわり続けたものだ。

なぜその爵位にこだわっていたのか。今のディーンにはよく理解できる。

王都にほどよく近く、商業で栄えるバルフォアは街道の交わる地点でもあり常に活気に溢れている。そのような場所は自然と人が集まり、金の流通も激しい。結果、周辺の土地は潤い、領地は水源の確保など基本さえしつかりしていれば自然と豊かになり、その土地を持つ領主は自らの懐が痛まないどころか逆に膨れ上がる。しかしバルフォア自体には自治権が認められている為、実際に領地の収益につながることはない。

だから今でこそ領地は潤っていると言えるが、かつてはそうではなかった。

サイモンが爵位を継いだ時、領地は決して豊かではなかった。土地を整備し、作物の実りを多くするためには元手が必要で、金づかいの荒かった先代のおかげで侯爵家には資金が足りなかった。

そこでサイモンは貴族とのつながりを欲しがっている資産家に妹を嫁がすことにしたのだ。見返りとして、土地を改良する資金と、もともと子供を作ることのできなかったサイモンは、生まれた子供が男児であつたなら侯爵家の後継ぎとすることを条件とした。

そしてサイモンの妹夫婦の間に生まれたのがディーンだ。

カーティスという名はサイモンがレイヴンズクロフト侯爵の後継ぎとして名付けたものだ。ディーンという名は本当の両親が付けたもので、引き取られるまではそちらの名前で呼ばれていた。

しかしながら、本来なら見えないものが見えていたディーンは、実の両親から与えられるべき愛情を受け取った記憶はない。むしろ疎まれ、気味悪がられていたところがあった。その実、貴族に資産を提供できるほどの家に生まれながらも、侯爵家の後継ぎでさえな

かったら、もつとぞんざいに扱われていた可能性はあった。

侯爵と最初の取り決めどおり、ディーンが八歳になった時、体の良い厄介払いが出来るとばかりに、サイモンに引き取られた後は両親とは会うこともなかったほどだ。

ディーンにしてみれば、自分を必要としてくれるサイモンの期待に応えることが、いくら取り決めとは言え、引き取ってくれた礼だとずっと思っていた。

もともと両親にさえ与えてもらえなかった情を、養父になど最初から期待していなかった。そしてそれを期待できるような養父でもなかった。上流階級としての教育は厳しく、領地を守っていく観念を徐々に植え付けられていったが、それは決して非合理的な考えではなく、むしろ理にかなったものとして受け入れていた。

このような現実的な物の見方をするところは、資産家である実父の血を引いていたのだろう。

今思えば、どこか冷めたものの見方しか出来ない子供だった。

それと言うのも、ディーンから見たサイモンは、欲深い男だと子供ながらに理解していたからだ。

領地が潤い始めると、サイモンは次に更なる地位を欲しがった。おあつらえ向きに領地は王都に近い。つまり王宮に近いということ。サイモンは王宮の権力者と次第に親密になり、すぐに次の狙いを見つけた。

それは王女であるジュリアだ。

侯爵家に王族の血を入れる。同時に王女に相応しい身分を与えられることもある。それがサイモンの狙いだった。

まずは王太子の遊び相手となるようディーンに教育を施し、権力者に渡りあって上手くその立場を手に入れると、自然と王族に近づくことができた。そうなることも口の上の上手いサイモンのことだ。

あとは国王に取り入り、ディーンとジュリアの婚約を口約束まで漕ぎつけたのだ。

そこまで一息に話すと、すでに周囲は薄青い闇を落としつつあった。

途中、使用人が廊下で話す二人に気づいたのだろう。灯りを持って来てくれたが、込み入った話をしていることに気づいたのか、少し離れたところにランプを置くと、下がって行った。

ユーフェミアは最後の一言に驚いたように目を見開いていた。

深緑の瞳はランプの灯りを受け、更に深みを増している。

その瞳の中に、少しでも自分の欲する感情がないかと思わず探していた。

しばらく彼女は黙ったままだったが、こくりと喉を上下させると擦れた声を発した。

「婚約……してるの？」

かすかに揺れる瞳をどう捉えるべきか。嫉妬はなくても動揺ぐらいはしてくれているだろうか。

内心の期待を抑えながらも、小さな願望が胸に過る。

気づいた時には性質の悪い答えを試すようにぶつけていた。

「ジュリアが二十歳になったら、正式に決まるだろう」

嘘ではない。すでに社交界でも下火ながら噂は広まりつつある。

二十歳を目前に控えたジュリアと口約束だが婚約者の位置に誰よりも近い自分。まだ、抑えられているがそう長くは持たない。

こうしてベレスフォード邸で会ったことさえ、実際にはジュリアがユーフェミアを招待したわけだが、その場に自分がいるだけで曲解されてしまうし、噂を助長してしまう。

噂に後押しされることだけは、何が何でも避けなければならない。それが養父の仕組んだことだとするなら尚更だ。

「――そう」

ふいにそらされた視線は、肖像画へと向かう。

彼女の横顔から窺える感情の変化はない。たった一言の返事に、何を期待していたのか。彼女の心中を見極めるために煽っておきな

がら、望まない言葉に不満を覚える。

「少しぐらい嫉妬して欲しいな」

限りなく本心に近い言葉を、いつものように軽く告げると、彼女の瞳に陰呑な光が宿った。

「他人のものに興味はないの」

冷めた口調とは裏腹に、瞳にあるのは怒りだ。

何に對してユーフェミアが怒っているのか。今まで黙っていたことに對してか、軽口を叩く自分に對してか。

原因は色々考えられたが、何よりも無関心でいられるよりはいい。どのような感情であっても、その感情が自分に向いている限り、彼女の心の一部分を自分が占領することができるなら。

込み上げるのは喜びだ。

つい頬が緩むと、彼女の怒りは増していく。

それでいいと思いながらも、できることなら怒りではなく、違う感情で心を占めることができたらと思ってしまう。

だが、まだだ。

時期を見誤れば、彼女は手に入らない。

今は知らされた事実に衝撃を受けて心が不安定になっているが、きっと彼女はこの先も彼女自身の本質を変えることはない。王族であろうと平民であろうと、その芯の強さが何よりも彼女の魅力であることを自分は知っている。

彼女を手に入れるということは、その本質を曲げるということだ。いかにその芯を折らずにゆっくりと曲げていくか、それがどれほど時間のかかる難しい作業であることか分かっているつもりだ。

それに彼女は気づいていないが、着実にこちらに近づきつつある。「話を続けても？」

苦笑を洩らしながらも、どこまで話したかを思い浮かべ、自分と同様の目を持つ彼女だからこそ、知るべきもう一つの事実を今から告げなければならぬ。彼女を変える前に、逃げ出してしまうないように自由に飛んで行ける羽根を切り、手の中にとどめておくために

も。

「ええ」

胡乱な眼差しに内心ほくそ笑む。

軽く頷いた彼女に、デインはもう一つの驚くべき話を彼女に与えた。

12. きみのひかり、ぼくのくらやみ 後編(前書き)

※引き続きデイン視点です。

12. きみのひかり、ぼくのくらやみ 後編

話し終わっても、彼女は自分の告げた言葉を上手く飲み込めていないようだった。

数度瞬きを繰り返し、やがて深緑の瞳が信じられないと見開かれる。

「母が――王宮に、いる？」

衝撃の強さに、すでに表情を取りつくろうことさえ出来ず、不安げに揺れる眼差しはただ自分しか見ていない。

そのことに微かな愉悦を覚えてしまう。

思わずユーフェミアの頬に手を伸ばし、そっと触れていた。

わずかに赤みを帯びた頬は温かかった。はつきりと生をこの手に伝えてくる。

今でこそこうして温もりが甦っているが、気を失った彼女を馬車で抱きかかえていた時、ただでさえ白い肌が氷のように冷え切り、二度とその体温が戻らないのではないだろうかと思えたほどだった。いくら名を呼んでもピクリとも反応せず、蜂蜜色の睫毛に縁取られた深緑の瞳は閉ざされたままで、まさに死と隣り合っていることに嫌でも気づかされた。

だからこそ考えさせられたこともある。ゆっくりと時間をかけて彼女を手に入れる計略を立てていたが、この先何が起ころとも限らない。まさに不慮の事故がないとも言えないだろう。

だから、あのようなことがあったばかりに気が急いてしまう。

いつそのこと彼女の誇る尊厳を全て無視して捕らえてしまおうか。バルフォアに撒いた噂を真実のものとするのは簡単なことだ。しかし一方でジュリアとの計画を白紙に戻すという問題も生じる。

彼女の不安げな眼差しが自分の邪な考えを押し止める。

質問の答えを急かす。

自らの下劣な欲望を悟られないよう、離れ難い手を彼女から遠ざ

け、ディーンが再度告げた声は胸中とは違って至極素っ気ないものだった。

「そうだ。クリスティアナは今も王宮にいる」

それがどういう意味なのか、死者が見えてしまうユーフェミアなら分かるだろう。

緑の瞳が揺らぐ。瞬きをした瞬間、潤みを帯びていた瞳は水分を押し出し、睫毛を濡らすと雫となって頬を転げ落ちていった。顔を歪めることもなく、ただ呆然と目を見開いたまま涙を流す彼女の心はすでに許容量は一杯だろう。今日一日でどれほどの衝撃を受けたことか。

残酷なことをしている自覚はあった。

だがこれも、彼女に付け入る隙を作る為だった。

まして死者を見る目がある以上、彼女とのつながりは他の誰よりもより強く、彼女と唯一の秘密を共有する立場にいる優越感はこの上なく心地良い。

当然、クリスティアナの存在がユーフェミアの心をどれほど揺さぶるか。

この世にとどまっているなら母に会いたいと思うのは必然だろう。しかも、彼女はクリスティアナとつながりのある自分が必要とせずにはいられなくなる。彼女の心を絡め取るには、彼女の母親の存在が間違いなく何よりの効果を発揮する。

だが、筋書き通りに動く彼女を目の当たりにして、自らの心が疼くことは予想外だった。

「私なきみの存在を知ったのは、直接彼女に聞いたからだ」

それでも、かすかな違和感に気づかない振りをして、ディーンは告げた。

すべての始まりは、王宮でクリスティアナと出会ったことだ。彼女と出会わなければ、ユーフェミアの存在を知っても、ただ利用するだけの存在ぐらいにしか思わなかったかもしれない。用が済めば切り捨てることも厭わない養父のように。

そこまで考え、ふとディーンは自嘲した。

いや、それはないだろう。現に、クリスティアナを知っていても最初は利用するつもりだったのだから。

では、どこで変わってしまったのか。

ディーンは思いを馳せる。

養父の考えと違う道を歩み始めたのは、あの夜。

王宮で何かの夜会が開かれた庭でのことだった。

王太子と懇意であるということが、どれほど社交界で注目を浴びることになるのか。

まだ子供と言える年齢に近いディーンは、会場から逃げ出すように庭の片隅に隠れていた。

草木の茂みに身を潜め、追いかけてきた女性をやりすごす。

いずれ継ぐ爵位と王太子からの信頼。この二点において、ディーンはどうやら独身女性から優良物件と思われることを、はじめてその夜会で実感した。

話に聞いて何も知らないわけではなかったが、実際に女性たちに遠慮なく身体を触れられることに拒絶反応が起きたと言えはいいのだろうか。きつい香水の匂いにも気分が悪くなり、どのように逃げ出してきたのか記憶にはなかったが、とにかくディーンは夜会が終わるまでどこかに隠れていようと決めた。

だが逃げる場所も選ばなければならぬと、その直後学んだ。庭はその実、逢引現場だらけで、どこに行こうとも茂みには身を寄せ合う男女ばかりで、とにかく無我夢中で庭の奥を目指した。

追って来る者がいないか背後を振り返りつつ、黒髪と黒い夜会服が闇夜にまぎれることに感謝する。

一体どれほど奥まった場所に来たのだろうか。

会場からの音楽は微かに聞こえる程度だが、辺りにはすでに人はいない。灯りもかすかに届く程度で、ぼんやりと木々の輪郭のみを

目に映すだけだった。王宮は死者のたまり場のような場所だったが、さすがにここまでではそういう者たちもないようで、やっと落ち着くことが出来る。

昼間でも、ここに人が来ることはないのだろうか。

草が茂り、荒れた庭には人工池があった。水が張っており、その辺に一人の女性が立っていることに気づいた。

暗闇であるにも関わらず、彼女の姿ははっきりと見て取れる。

簡素な服は一瞬、王宮で働く下働きの者だろうかと思わせた。しかし、彼女の立ち姿は優美で、振り向いたその顔は化粧をしていなくても会場にいたどの女性よりも美しいことに気づき、身にまとう雰囲気から彼女が上流階級の者だと分かる。

見事な金髪を背中に垂らし、その双眸にある深い緑色がとても印象的だった。

ディーンと視線が合うと、彼女はにこりと人懐っこい笑みを浮かべた。

『あら、あなたには私が見えるのね？ 娘と一緒にだわ』

その言葉に彼女が既婚者だと分かり、少なからず安堵する。彼女が会場にいた女性たちと同じ態度を取るような心配がないことぐらい分かっていたが。

「あなたは――」

透けて見える彼女が何者なのか。

悪意のあるものではないことぐらい分ったが、彼女がここに縛られていることも同時に知る。

『私はクリスティアナよ。そういうあなたは？』

滑るように近づいてきた彼女だったが、近くに来てでも恐怖を感じなかった。

それどころか幽霊からまさか名前を聞かれるとは思わず、ディーンは言い淀んだ。

こんな幽霊は初めてだった。たとえ悪意のないものでも、どちらかと言えば、死者とは強い思いの塊だ。彼らは大抵自らの意識に囚

われて、他のことにまで気が回らない。

だが彼女の深緑の瞳は興味津々と言ったように輝いている。

「ディーン、です」

気づけば、養父に与えられた名前を避けていた。それは大切なものだからという理由からではなく、自分にとって馴染み深い本来の名前を――両親がくれた名前を、本来与えられるべき愛情と共に彼女の口から呼んで欲しかったからかもしれない。彼女が娘を持つ母親だと知ったばかりに。

『ディーンね……。それで、ディーンはどうしてここへ？』

問われ、一瞬躊躇う。

だが、彼女が死者であること。まして同じ目を持つ人間がそう多くないことを知っているディーンは、どうせ誰に知られることでもないと言夜会から逃げ出してきた経緯をぼつりぼつりと話した。

すべて話し終わると、しばらくの間静寂が落ちた。

だが、すぐに隣から小さな笑いかみ殺す声がする。

怪訝に思って顔を上げると、目が合った彼女は我慢ならないと声を上げて笑い出した。遠慮もなく、お腹を抱えて。上流階級の女性とは思えないほど気取ることもなく。

真剣に話したのに、と頬を赤くすると、それでも彼女は首を横に振る。涙が出るはずもないのに、目元を拭う仕草を見せる。

思う存分笑いとぼすと気が済んだのか、今度は急に真面目な顔をして、ディーンに指を突き付けてきた。

『駄目よ。なっていないわ。逃げると誰だって追いたくなるものよ。』

そういう場合は、あしらうのよ』

そう言って、クリスティアナはいくつかの例を教えてくれた。

つまり、逆に女性の方から遠慮してもらう例とか、女性の気分を害さない断り方とか、だ。

それを聞いて、やはり彼女が上流階級の者であることを確信する。着ている服は簡素だが、何か事情があるに違いない。

「あなたは どうしてここに？」

死者と深く関わりを持つべきではないと思いつつ、ディーンはそれでももう少し彼女と話していたいと思った。上品ぶらない彼女との会話は、昔を思い出し、久しぶりに清々しさを感じていた。

クリスティアナは最初見ていた場所に視線を送ると、小さく笑う。

『大切な人の一生を見届ける為よ』

「あなたの娘さん？」

近くにいるのだろうかと周囲を見渡すが、ここは王宮の庭の奥だ。こんな場所にいるとは思えない。

その問いに、クリスティアナの表情はやっと死者のそれになる。

瞳の奥に闇が広がる。

『……ユーファは強いわ。ナフムもいるし、大丈夫。でも――』

軽く首を振って、ディーンを見た。

その瞬間、その瞳はどこまでも穏やかな緑が広がり、ディーンの心をとらえる。

死者の瞳がこんなにも穏やかなのは初めてだった。それなのに、なぜここに縛られているのか。

大切な人が娘でないなら、それは一体――。

尋ねようとして、彼女の視線が自分の背後に向く。

『もう帰る時間ね』

そちらは会場の方だった。

名を呼ばれる声に会場での出来事を思い出し、一瞬身を固くしたが声はあきらかに男のもので、探しに来たのはどうやら侯爵の使いの者らしいと気づく。

ディーンはクリスティアナを見ると、思わず尋ねていた。

「あなたはいつもここにいるの？」

『ええ』

肯定の言葉以外、彼女は何も言わなかった。

それは決して、次を約束するものではなかった。

だが、それから王宮で夜会がある度に、ディーンは彼女に会いに庭の奥を訪れることとなった。

ディーンの手を握り、その手に願うように額を当てたユーフェミアは、震える声で嗚咽を漏らす。

「お母さん……」

本来なら、彼女もクリスティアナを見る目を持っている。だが、母親であるクリスティアナが亡くなったあと、ユーフェミアは一度も母親を見ていないのだ。まさかまだこの世にとどまっているとは思ってもいなかったのだろう。

いつも気丈に振る舞うユーフェミアが弱さをさらけ出す姿に、思わず抱きしめたくなる。もっと縋ってくれてもいいのにと、物足りなさをどこかに感じる。

まさか自分がこのような感情を持つようになるとは未だに信じられなかった。

まったく、いつからだろう。彼女をそういう対象としてみるようになったのは。

最初こそ、クリスティアナの娘だというだけの興味半分だったのに。だから五年。同じ街に住み、傍観していた。

情報は常に入るようにして、生活に苦しんでいるならば、少しぐらいの援助など容易いことだと考えていた。

だが、実際に会った彼女は上流階級の女性とは違い、盤上の駒のように容易く動いてくれない。一手をより複雑にしなければ自分の思い通りにならないことに気づき、知らずそれを楽しんでいる自分がいた。実際に彼女を知れば知るほど、人に頼ることなく自分で選んだ道をまっすぐに歩く彼女を心底羨ましいと、手に入れたと思った。

しかし最初のうちは、ただ珍しい手駒として手に入れたいしか考えていなかった。

言い方は悪いが、所詮、彼女も貧しさが染み付いている。身分や金銭をちらつかせば、すぐに考えを翻すだろうと思っていた。

同時に進んでいたジュリアとの共謀に彼女を巻きこむことにしたのは、彼女の身体に流れる血が最大の要因だが、そういう浅ましい考えもなくはなかったのだ。

だが、いつまで経っても彼女は折れない。その強さがどこからきているのか。知ろうとした時はすでに遅く、捉えるつもりが逆に捉われていた。気づけば、手駒としてではなく、何よりも自分の身近にいて欲しい存在になっていた。

こうしていつも手を伸ばせば届くところにいて、触れることがかなう距離――。

だが理性でそれを押し留める。

まずは心を捉えるために、隙だらけの彼女に今だとばかりに一歩踏み込む。

今までの散々のやり取りで、彼女が嘘を見抜くことは知っている。だから本心からの言葉を、先に口に乗せた。

「きみは生まれに囚われず、自分の生きる道を自分で切り開いてきた。私はそんなきみを羨ましく思うと同時に、尊敬さえしているよ」
だからこそ思う。養父のいいなりになどならず、きちんと自分の意思をもっていれば、ジュリアとの婚約を最初からしなくて済んだかもしれないし、彼女自身も傷つかなかったかもしれない。それこそもっと上手く立ち回って、もっと早くユーフェミアと出会えていれば――。

「きみはきみのままでいいんだ」

濡れた瞳が見上げてくる。

その瞳は先程までの、揺らぎはない。もう彼女の中では気持ちの整理がついている。これから成すべきことが、すでに決まっているに違いない。

「――本当に？」

空気に溶けるほどの囁きさえ、ディーンの耳は拾ってしまう。

確認を取るほど彼女の心は弱り、最後のひと押しが欲しいのだろう。その言葉を自分に望むということは、彼女の中で自分の地位が

少しは上がっているかと思っていだろうか。

そのことに小さく笑い、彼女の手を握り返す。

「変わる必要はない」

ユーフェミアが望まないのであれば、今までの生活続けることは可能だ。

おそらく彼女の出生を知っている誰もが、彼女が望むようにと願っている。

だが――。

「ユーフェミア」

誰よりも、彼女の自由を望まないのはディーン自身だ。自らが自由になるためにも、是非にも彼女の協力が必要なのだ。

その上でなお、彼女の自由を奪おうとする欲深さは、まったくもって養父と同じだ。それでも彼女が自らこの手をつかむよう、それが一番彼女にとって幸せなことなのだと思うせう、周囲を固めてしまう慎重さはもうどうしようもない。性分だ。

その為に布石を一つ打つ。

「ジュリアとの婚約を破棄する為にも、私の婚約者になってくれ」
告げた言葉に、ユーフェミアの涙は完全に止まった。

12. きみのひかり、ぼくのくらやみ 後編（後書き）

まるで仕切られた壁の向こう側でディーンが話しているような気がした。

聞こえてはいるが耳がその言葉を拾い切れない。切れ切れの単語を頭の中で繋いでいく作業を、わずかに遅れながらしていく。

とても重大なことを話していることだけは分かる。だが、次第に組み上がっていく内容を、頭が理解し切れない。

――母が、なに？

――今もいるって、どういうこと？

茫然と夜色の瞳を見つめる。

彼の口が紡ぎ出す言葉は、いつもユーフェミアの心を上滑りする。なのに今、頭では理解できなくても、どうしてこれほどまでに心に突き刺さるのか。幾重にも嚴重に鍵をかけ、守ってきた心の奥まで容易に進入し、一番弱いところを躊躇いなく突いてくる。

母が亡くなって、どれほどの年月が過ぎたことか。

その間、一度もユーフェミアの前に彼女は現れなかった。だからきっと心安らかに神のもとに召されたのだとずっと思っていた。

それなのに……。

沸き上がるのは、悲しみに塗れた疑問。^{まみ}

どうして一度でもいいから会いに来てくれなかったのか。

母が死に切れないほど残した想いとは何だったのか。

それがよりにもよって、王宮という場所なのは、娘の自分よりも気にかかる人がいたから？

それほどまでにクリスティアナにとって自分は軽い存在だったのだろうか。

ただ一度も、会いに来ることさえないほどに。

胸が張り裂けてしまっそうだった。

視界が霞む。

答えを教えて欲しくて、目の前の夜色の瞳に問う。

だがディーンは、真っ直ぐに自分を見ながら違う誰かを見ているように、その瞳に熱を込めた。

ああ、そうなのか——と。

ユーフェミアは溢れる涙を、目を閉じることによって押し込めた。それでも心の奥から溢れだす痛みは途切れることなく。

頬に延ばされた手を、咄嗟につかみ、逡巡した後、結局祈るように額に当てていた。

この手は、クリスティアナに延ばされたもの。

自分に与えられたものではない。

答えは彼からは貰えない。欲しくない。

だけど、母につながる唯一の標^{しるし}。

だから、この手を離すことは出来ない。

溢れる涙をこらえることなく、ユーフェミアはその手を握り続けた——。

13. 痛くもない腹の探り合い 前編

冗談でしょう――？

前日の夜もよく眠れなかったというのに、昨夜も眠りは浅く、何度も目を覚ました。

物音一つしない室内に響くのは、自身が寝返りを打つ度にする衣擦れの音と、口から漏れる溜息ばかり。

暗闇に仄かに浮かぶ天井を見上げていると、昨夜ディーンに言われた言葉が頭の中で何度もこだまする。

ユーフェミア自身、心がぐらついていたのは確かだ。

彼が自分に向ける眼差しに誰を重ねていたのかを知った時、同一の人物を慕うからこそ、今までとは違う関係を築けるのではないかと思う反面、彼に対するかすかな妬みが生まれたのも事実だ。

それは意外な感情の変化をユーフェミアにもたらした。

彼との間にあった垣根を一足飛びに飛び越え、今までなら無防備で不用心に思えていたことでも、たった一人の存在一つでユーフェミアの中でディーンに対する距離は確実に縮まっていた。

あえて言うなら家族に向けるものに近い。

度重なって告げられた真実は息苦しいほどの苦痛を与え、剥き出しにされた心を甘やかして欲しくて、母との時間を過ごした彼を妬み羨む気持ちもあったが、それよりも互いに秘密を共有しあう者として、そして彼女を慕う気持ちを分かりあえるという点においても、思わず目の前のその胸に縋りつきそうになっていた。

それはディーンが本音を見せてくれたからに他ならない。だから、そのまま甘えてしまおうかと思えたのに……。

あの一言は、ユーフェミアに現実を思い出させ、踏み止まらせた。ディーンに握られていた手をすかさず振り払ったとしても仕方のないことだろう。

心臓が飛び出しそうになったことは、もちろん秘密だ。

ディーンの明確な意図は、結局その場で教えてもらえなかった。いつものように余裕のある笑みを浮かべ、肩を竦めただけだった。明日になったらジュリアと三人で話し合おうということになったのだが、明日とはもう今日の事だ。厚いカーテンの隙間からはまだ朝日さえ差し込んできていないが、これ以上眠ることも出来そうになくて、ユーフェミアはあきらめて上体を起こした。

時計を見ると、おそらく邸の者も起き出す頃合いだ。朝食まで時間はある。何か温かい飲みものでも貰おうと、取りあえず身支度を済ませることにした。

両手にカップを握り、立ち上る湯気に息を吹きかける。

昨日、自らの出自を知った図書室に明かりを灯し、昨日と同じ場所に腰をおろした。

昼間はあれほど暖かい日差しが差し込んでいたというのに、夜も明ける前だからだろうか。窓の外は暗く、むしろ冷気が押し寄せてくる。

使用人が暖炉に火を入れてくれたが、部屋が暖まるにはまだ時間がかかるだろう。

火の爆ぜる音を聞きながら、寒さよけのストールを身体に巻き付け、カップに注がれた甘めのミルクティーを一口含む。

考えなければならぬことはたくさんあった。

だが、二十五年も一人で生活してきたのだ。今更何かを望まれているわけでもないことぐらい分かる。名乗りを上げるような馬鹿な真似をするつもりもない。平穏な暮らしを望むなら今のままが一番いいのだ。ディーンも言っていたではないか。このままでいいと。だけど。

ユーフェミアは深々と息を吐いた。

一番の問題は、そのディーンだ。

このままでいいと言いながら、彼の婚約者^{貴族}になれ、というのは如何なものか。おそらく協力して欲しいと言っていたのは、婚約者の演技をしろということなのだろう。もし了承すれば、それは否が応でもその世界に足を踏み入れることになる。

平穩を望む自分にとって、正反対のことになるのではないだろうか。

じわりと込み上げる不安と同時に、すでに引き返せない場所に立っている予感がする。

なぜなら、ユーフェミアの欲望が心の奥で密かに芽吹いたからだ。それは抗いたい魅力で、昨夜からユーフェミアの心の片隅で囁いている。

口では平穩を望みながら、一度だけでいいから、遠くから姿を見るだけでいいからと、エドワーズ国王に会いたいと思っている自分がある。そして何よりも、王宮には母がいるという。聞きたいことはたくさんある。だが庶民であるなら、決して立ち入ることの許される場所ではないし、まして国王に目通りが叶うわけでもない。

そう考えると、必然的に一つの道しか残されていないことに気づく。

ディーン^の婚約者としてなら、王宮に出入りすることも可能かもしれない。まして彼は王族と懇意だ。国王を垣間見る機会はあるかもしれないし、母にも会えるかもしれない。

ユーフェミアの考えが辿り着く先など、ディーンにはお見通しだったのだろう。

きっとこれは彼が用意した道に違いない。

周到に用意されていたことに気づいた時には怒りと通り越して呆れてしまったが、この用意された道がどこに向かっているのか。ディーンがどういう思惑でこの道を準備したのか。

互いの目的の為に、誰かを傷つけるわけでないなら、ユーフェミアとしても自分の小さな望みを叶える為にディーンたちに協力するのは願ってもないことだ。

カップをテーブルに置いて目を閉じる。そして自分の心の中でも一度問いかける。

それは最初から変わりはない。父親が誰であろうと、自分の生きる場所の一つ。

ゆっくりと目を開けると、肅然と決意を固める。

この気持ちが揺るがない限り、どんなことにも流されることはない。

ならば、二人に協力してもいい。

テーブルに置いたカップを手にとると、ユーフェミアは腹を括ってソファから立ち上がった。

耳には鳥のさえずる声が、夜が明けたことを告げていた。

図書室を出たところで、朝も早い時刻だというのに思いがけない人物とかち合った。

「……おはようございます」

一応挨拶はしてみたが、淡褐色の瞳はふいっと逸らされ、思った通り返事はない。

視線が逸らされたことをいいことに、思わずまじまじとアシュレイを見てしまう。

自分と同じ蜂蜜色の髪。淡褐色の瞳は屋内にいる為か、緑がかった見える。常にユーフェミアに対しては敵意をむき出しにしているが、目尻はどちらかというと下がり気味——要はたれ目で、普通にしていれば優しげに見える、女性からも人気がありそうに見えるのだが。

これが弟になるのか。

未だに現実を受け入れられていない為、やはり他人としか思えない。

こうしてみるとブライアンとアシュレイはあまり似ていない。蜂蜜色の髪は同じだが、瞳の色も顔立ちも似ていない。むしろアシュ

レイはジュリアとよく似ている。

と言うことは、イヴァンジェリンとも似ているのか……。

そう思うと、噛みついてくる所など可愛いものだと思えてしまうから不思議だ。

「……もう、いいのか？」

顔を逸らしたまま、アシュレイがポツリと漏らした。

「はい？」

一瞬、家にいる人形のことを思い出していた為、咄嗟に何に對して言われた言葉が分からず、ぼんやりしてしまった。しかし、すぐに何のことか思い当たる。

川で溺れかけたのは昨日の事だ。色々なことがありすぎて随分前のことのように思っていたが、アシュレイとはそれ以来会っていなかった。

「大丈夫です。あの――」

上目づかいで様子を窺う。

嫌われているのは仕方がないが、初日に骨が折れるのではないかというほど手を握られて以来、何かされるのではとつい警戒してしまう。現在もアシュレイと普通に会話をしているが、通常他の人と会話をする距離よりも一歩分離れている。まるで、お互いの心の距離を表しているかのように。

だが川に落ちそうになった時、助けてくれようとしたのも事実だ。「ありがとうございます」

礼を言い損ねていた事を思い出し素直に頭を下げると、ようやく淡褐色の瞳が正面から見つめてきた。

「……カーティスが煩いからな」

口では渋々といった様子だったが、その顔を見ると満更でもなさそうだ。

しかし、どういう心境の変化なのだろう。

少なくとも最初の刺々しさは見られない。むしろ先程は心配を匂わすことを口にしなかっただろうか。

その変化が、ディーンに起因するものであるのは少し意外だった。
「ディーンとは仲が良いんですね」

言った後、さすがに気安すぎたかと口を噤む。

アシュレイは嫌そうに顔を歪めると、不機嫌そうに胸の前で腕を組んで再び余所を向いた。

「あいつには敵わないからな」

どういう意味なのか計り兼ねる。確かに悪賢いとは思うが。

それが顔に出ていたのか、イラついたようにアシュレイは、わずかに強い口調で言い放つ。

「おまえもつくづく不運だな。いくらジュリアのこととは言え、カーティスは一度決めたことは何が何でも自分の思い通りにする。この場に担ぎ出された時点で、おまえに選択の余地はない」

嘲っているのか、同情してくれているのか。

思わず目を見開くと、アシュレイは言い過ぎたとばかりに苦々しく顔を歪めた。だが一度堰を切ったものは止まらないようで、さらに言葉は続く。

「昨日も言ったが、別におまえと慣れ合うつもりはない。血がつながっていると思っていい気になるな。もしもおまえが少しでもジュリアのことを思うなら、二人の茶番に付き合うのは止めた方がいい。私は最初からカーティスを止めるつもりでここに来たんだ」

「それは、どういう――」

冷静なアシュレイに対し、一方ユーフェミアは不穏なものを感じ、ざわりとしたものが心の奥で蠢く。

血が身体中を駆け巡るのに対して、心の奥は冷えていく。

「私がカーティスに敵わないからといって、おまえを牽制できないわけではない」

「ちょっと、待って」

ユーフェミアは一方的に告げられる内容に、無意識にアシュレイに一步近づいた。

途端、アシュレイの手が空を切ってユーフェミアがそれ以上近づ

くことを押し留める。

「ジュリアがカーティスと婚約していることをどれほど喜んでいたのか、おまえは知っているのか？」

「――え？」

完全な不意打ちだった。

ディーンとジュリアは共通の目的――婚約を破棄にする為にユーフェミアの協力を仰いでいたのではなかったのだろうか。

だが、ふとジュリアが先日話してくれた相手がディーンであることに結びつく。権力で縛ってしまうのが嫌だと言ったジュリア。その為に、わざわざ婚約者の手を離すのだろうか。

「そういう事だ。よく考えるんだな」

呆然とした表情から、ユーフェミアが知らなかったことに気づいたらしい。言い捨てるように言葉を放つと、アシュレイは背を向けた。

一方的に言われ、一人廊下に取り残されたユーフェミアは、先程腹を括った決意が早くも揺らぎ始めていた。

13. 痛くもない腹の探り合い 後編

鈴の音を転がすような笑い声を上げたジュリアは、堪え切れないとばかりに一頻り笑っていたが、ようやく笑いをおさめると、姉さま……と腕に縋りついてきた。

その顔はとても穏やかで、ユーフェミアの憂慮を吹き飛ばす。

「心配は無用ですわ。過去のことですもの」

ふわりと甘い香りが、身を寄せた彼女から漂う。

人形のように可愛らしいジュリアは、こう見えて実はかなり潔いかもしれない。

現在、温室にはジュリアと二人しかない。

ディーンは今朝早く、仕事上のことで何やら問題が生じたらしく、ロジャーと居間に籠って話しあっていたので、そのまま一足先にジュリアと一緒に温室にやって来たのだ。

温室は太陽が出ていれば上着がいらないほど暖かいが、空はあいにく雪が降りそうな重く立ち込めた灰色の雲に覆われている。それでも空気の流れもなく、室内を一定温度で保つために焚かれたストーブのおかげで邸の中よりは格段と温かい。

朝一番にアシュレイと交わした会話のおかげで、ユーフェミアは無意識に浮かない顔でもしていたのだろう。原因をジュリアに問い詰められ、初めは誤魔化したもののどこからともなく彼女は嗅ぎつけたらしい。怒られたアシュレイは、やってられないと昼前にブライアンと共に王宮へと帰って行った。それでも帰り際にちらりとこちらに向けた眼差しで念押しすることを忘れなかったが。

結局、更に詳細を問い詰められ、ユーフェミア自身の口から話す結果となってしまった。

ジュリアは身を離してベンチに座り直すと、真剣な色を湛えた空色の瞳を向けてきた。

先程までの甘えた雰囲気拭い去った彼女が、何を話そうとして

いるのかを察し、ユーフェミア自身も姿勢を正す。

「ユーファ姉さまでなければ無理なのです」

先日、この場で言った台詞とまったく同じ言葉を口にした。

「それは――」

今なら理由が分かる。

だが口に出すには憚られ、ためらうと、ジュリアが言を繋いだ。

「ええ。姉さまが、ひそかに王族の血を引いているからですわ」

きっぱりと言い切り、次の瞬間、瞳に影を落とす。

「そもそも、わたくしたちの婚約はすべてレイヴンズクロフト侯爵――カーティスの養父である侯爵が言い出したもの。たとえ口約束でも侯爵は、カーティス以上に計算高い方ですわ。まずは、というより、何をおいてもわたくしたちの婚約破棄を誰よりも納得させなければならぬ相手は侯爵ですの」

それはつまり、二人が婚約破棄を目的に動くことは王族側の反対はないと思っていいるのだろうか。ディーンからも口約束と聞いていたから、そこまで固い約束事ではなかったのかもしれない。

促すように相槌を打つと、ジュリアは続けた。

「ですけど、それはかなり難しいのです。侯爵を納得させるには、生半可な理由では不可能です。ならば、わたくしが他の誰かと早々に婚約なり発表してしまえばいいのでしょうか、王女という立場が相手を選ばすのです。一応、それでも候補を上げてはいますけど、わたくしの二十歳の誕生までには決まらないでしょう。そうなると、カーティスにわたくしの代わりとなり、侯爵の納得する女性と婚約してもらわなければならないのです。今現在、王族でわたくしに準ずる女性皆、既婚者ばかり。ですから――」

ジュリアの視線がユーフェミアに向けられる。

「つまり……私？」

まさかと思いつつ、次の瞬間、無理、と却下する。

名乗りを上げるつもりはないのだ。ジュリアの話からすると、王族にならなければならないだろう。それは出来ない。

小さく頭を振ると、ジュリアは困ったように、取りあえず続きを聞いて下さい、と告げた。

「結論から言う姉さまがカーティスの婚約者となって、公式の場で国王に認めてもらえれば、もう侯爵は口を出せません。その後、何か理由を付ければ婚約の破棄をすることも出来るでしょう。ですが、ここで何よりも重要なのは、ひそかに姉さまが王族の血を引いているということ。きっと侯爵のことです。王族に恩を売ることができると考え、最終的には認めざるを得ないでしょう」

「……恩？」

引っかかりのある言葉に、眉を顰めて聞き返した。

ジュリアは言いづらそうに、だが、濁すことはしなかった。

「……こういう言い方はとても不本意なのですけど。見方を変えれば、姉さまは王族に迎え入れられなかった王族です。それは今まで隠されてきたことから、姉さまの存在をこれからも公にすることはなくという王族側の意思表示とも取れます。つまり姉さまは、わたくしの姉といえども王族にとって——弱み、とも言える存在。そんな姉さまを王族としてではなく、侯爵家に迎え入れるということは、恩を売るに他ならないことですわ」

ですけど、とすかさずジュリアは続けた。

「決して姉さまはわたくしたちにとって弱みではありません。もしも姉さまがお嫌でないなら、王宮で一緒に暮らしたいと思っています」

じつとこちらを見つめてくる彼女の瞳は真剣だ。

そんなことをすればどれほど大変なことが起きるか、ユーフェミアも分かっている。

ジュリアが自分を傷つけないように言ってくれたことを察し、思わず頬が緩む。落ち着くように彼女の手をポンポンと叩いた。

「どうして私でないといけないのかは分かったわ。でも……」

言葉を続けようとして、温室の入り口に人影を見つけ口を閉じた。話が話だけに人払いはされており、ここも王弟殿下の邸で使用人も

心得ているだろうが念の為だ。しかしユーフェミアの心配をよそに、扉を潜ってきたのはディーンだった。姿を目に止め、視線でジュリアに報せる。

彼女も気づき、取りあえず会話を止めた。

「ひどいな。抜け駆けは良くないよ」

近づきつつ、彼の視線はジュリアに向く。

ジュリアもそれを受けて、不敵に笑った。

「あら。抜け駆けを最初にしたのは、あなたでしょう？ ユーファ姉さまの弱みにつけ込んで、理由を付けては毎日のように会いに行っていたではありませんか」

椅子に座ったまま、上目づかいに軽く睨むジュリアの言葉をしばし吟味する。

弱みが何を指しているのか。少し考え、すぐに借金の件だと思いが当たる。

今まで、その件に関しては自分の弱みと思ったことはないし、骨董品店を開くと決めたことも理由を付けたとは考えもしなかったが、なるほど。言われてみれば最初から企んでいたのかもしれない。

やはり侮れない、と思わずじとりと見つめると、ディーンは肩を竦めた。

「否定はしないよ」

開き直った態度に、ジュリアはあきれたように首を横に振り、ユーフェミアも開いた口が塞がらなかった。

そんなユーフェミアを夜色の瞳が見下ろしてくる。

「それもこれも、きみに会いたいのが為だと信じてくれないのかい？」
偽りの台詞に表面的な取り繕い。

どうして昨日は、こんな人に甘えてしまおうと思ったのか。それほど自分の心が弱っていたのか。

「ユーファ姉さま……。カーティスの言葉を信じてはなりませんわ」
どこから出しているのかというぐらい低い声を出したジュリアは、ベンチから勢いをつけて立ち上がると、ユーフェミアを背に庇うよ

うに二人の間に立つ。

腕には力が入っているのか、小刻みに震えている。

「まったくあなたという人は、いつも女性に対して調子のいいことばかり。もしも相手の女性が本気になってしまったらどうするつもりですか？」

あからさまに隙を含ませるジュリアに対し、ディーンは心外だとはかりに両手を広げた。しかしその顔にはどこまでも余裕がある。

「何だかその言い方は、私が女性に対して見境ないように聞こえるけど？」

「違うでしょう」

すかさず返したジュリアの言葉に、ふーん、違わないんだ、とユーフェミアは冷めた眼差しをディーンに向ける。

こちらを見たディーンは、何か言おうと口を開きかけたが、言い返しても結局は言い訳にしか聞こえないことに気づいたのか、大人しく引き下がった。

「……ジュリア。取りあえずその件は後にしよう。ユーフェミアの協力が得られなくなるとお互いまずいだろう？」

それでもちやっかりこの会話の責任を半分ジュリアに押し付けてしてしまうのは、ディーンの方が上手なのだろう。

ハッとしたように、くると身体の向きを変えたジュリアは、慌ててユーフェミアの顔色を窺う。

「姉さま！ その、カーティスは……女性の扱いに慣れておりますの。伊達に場数をこなしていませんわ！ 協力して下さっても、きっと不快な思いをさせるようなことはないと思いますの！」

両手を握りしめて力説するジュリアを見ながら、彼女の必死さが窺えて苦笑が漏れる。

「……ジュリア。それではあまり説得力がないよ」

ここにきてようやくディーンは苦々しい顔をする。

参ったとばかりに天を仰ぎ、息を吐き出すと、困ったようにこちらを見る。

「少なくともきみに対して嘘は一つもついていないよ」

「へえ、そう」

言い訳などどうでもいいと顔を背けると、ディーンは眉尻を下げた。

「ユーフェミア……。いや、取りあえず、言いたいことは山ほどあるが、それもまた今度にしよう」

やけにあっさり引き下がると、ディーンはジュリアに目くばせする。

それに頷き返したジュリアは、ユーフェミアの側から数歩離れた。代わりにディーンがユーフェミアの前に立ちふさがる。

「なに？」

ベンチに座っている為、背の高いディーンを見上げるには多少首が痛い。かすかに首を傾げるようにして見上げると、それに気づいたのか、彼は床に片膝をついて跪き、ユーフェミアに視線を合わせてくれた。

目が合うと、その瞳はいつになく真剣さを湛え、先程までの軽々しいものが取り払われる。

夜色の瞳はユーフェミアだけを見つめてくる。

何か、大切な話をしようとしていることだけは分かる。

息を詰めて、彼の言葉を待った。

「――きみに、正式に依頼したい」

それが何の話なのかなど、今さらだろう。

ユーフェミアは無言で続きを待つ。

「私たちの勝手な理由できみを巻きこもうとしているのはわかっているつもりだ。それでも、私たちに協力してくれないか」

声も真摯そのもので、ユーフェミアの胸の奥がかすかに軋む。

ディーンは視線を少しもそらすことなく、続けた。

「ジュリアの言うように不快な思いをさせるつもりはないし、きみの社会的地位を下げるようなことは絶対にしないと約束しよう。ただ、最初に言っておくが、多少のリスクがないわけではない。もし

かすると、きみにある程度の無理を強いることも出てくる可能性もある。それも踏まえて、私たちの計画に協力してもらいたいと思っているんだ」

「……そんなこと言って、私が拒否するとは思わないの？」
答えなど分かっていたが聞いていた。

拒否など出来ないよう、最初から仕組まれていた。ユーフェミアの心がどこに傾いているのかを彼は知っている。多少のリスクなどものもしない意気込みがユーフェミアの中に生まれていることも。ディーンは口の端を持ち上げた。その顔はどこまでも自信に溢れ、ユーフェミアの方が先に視線をそらしていた。

「きみは拒否しない」

耳に飛び込んできた言葉に、目を閉じる。
違うかい？ と問われ、ユーフェミアは諦めて視線を戻した。

「違うわいわ」

夜色の瞳を見てはっきりと告げると、ディーンは頬をゆるめた。
ただ、それだけ。

なぜ、とも、どうしても、とも聞かない。

彼はやはり分かっているのだ。

ユーフェミアは覚悟を決めると、ディーンの手を差し出す。そして、側に立つジュリアを見上げて、はっきりと告げた。

「わかったわ。あなたたちに――協力する」

14. 空を見上げて貴方を思う 前編

言ってしまった――。

口から出た言葉一つで、すべてが動き始める。

協力をする意味で差し出した手は、なぜかディーンに手の甲を上にして持ち上げられた。その所作の目的をユーフェミアが予測できなかったのは、ひとえに彼が目を奪うような嫣然とした笑みを浮かべたからだ。

ディーンはユーフェミアの手を自らの方に引き寄せると、そのまま手の甲に恭しく口づけを落とした。

それは貴族としての挨拶なのか、協力者として感謝を込めたものだったのか、ユーフェミアは口から出かけた悲鳴を飲み込むのがやっとで判断することは出来なかった。

一方、助けを求めるようにジュリアを見ると、彼女は彼女で胸の前で祈るように両手を組み、頬を薄桃色に上気させ、空色の瞳を輝かせている。その態度が予想以上に何かを期待しているような気配を匂わせ、ユーフェミアは開きかけた口を思わず閉ざした。

正直、反応の良すぎる二人に、しり込みしなかったわけではない。頭の片隅にも早くも辞退の二文字が浮かび上がったが、軽く頭を振って自らの目的を思い浮かべると、ふと先程ディーンが温室にやってくる前にジュリアとの会話が中断してしまっていたことを思い出した。

聞きたかったのは、今朝アシュレイから聞いた話の再確認だ。

アシュレイの言葉が未だ心の奥底に澱のように沈んでおり、何かの拍子にそれは舞い上がると、今までのジュリアの態度にどこか納得できない不可解さを感じてしまう。その違和感は何なのか。はっきりとした形が見えないながらも、ユーフェミアは取りあえず目の前の状態をどうにかすべく問い急ぐ必要があった。

「ねえ、ジュリア」

口を開きながら、ディーンの手の中にある自らの手を引っ張った。不自然に思われず、いかにして手を解放してもらうかという目論みだったのだが、軽くつかまれた指先は離されることはなかった。

その手を気にしつつ、今更だと思いつながら、ジュリアに感じた違和感とは違うもう一つの気になった件を口にする。

「どうしてジュリアは……いえ、あなた達は婚約を破棄したいの？」
当然、最初に聞いて然るべきことだった。

だが、上流階級の裏事情に首を突っ込むのは、庶民として分不相応な行為であるし、事実、身に危険が迫ることもある。うっかりで済まないかもしれない事態は出来ることなら遠慮したい。

しかし、この度はその限りではないだろう。すでに巻き込まれているし、おそらく身の危険云々も心配はないはずだ。協力する以上はある程度の情報は仕入れておくべきだし、口では関わりたくないと言いつつも、実のところまったく興味がないわけでもないのだ。つまり、好奇心から純粋に知りたかった。

ジュリアは目を数度瞬くと、一点の曇りもない笑みを浮かべた。

「先程も申しましたけど、このような男はお断りかたですの」

どこまでも柔和な雰囲気醸しながら、ちらりとディーンを見る瞳だけはどこまでも冷ややかだ。

ユーフェミアは首を傾げる。

それが通用する立場なのだろうか。ここ数日で仕入れた知識を総動員すると、ジュリアの言っていることは王女という立場上、単なる我儘になるのではないだろうか。

彼女は冷めた眼差しをディーンに向けたまま、先程ユーフェミアに言った台詞をまったく違う意味合いで言っただけだ。

「女性の扱いに慣れておりますのよ？ いえ、慣れているのは時と場合によって役に立つこともありますけど、裏を返せば一体どれほどの女性と遊んでこられたのでしょうか、ということですよわ」

「……」

思わずちらりとディーンを見てしまう。

ジュリアと同じ眼差しで。

たしかに彼女の立場を考えると、それが婚約を破棄する理由としては納得しかねるものではあったが、単に同じ女性としてなら共感できた。そんな男はお断りだ。

「――ジュリア」

苦々しい表情を浮かべたディーンは、ユーフェミアと視線が合うとスイツとそらし、ジュリアを咎めるような眼差しを向ける。

その視線を受けたジュリアはそっぽを向いた。

「姉さまにはもう話しましたし、カーティスも今更ですけど、確かに昔はあなたに淡い想いを抱いていたことがありましたわ。ですけど、所詮小娘の戯言と取り合わなかったのはあなたですし、わたくしも若気の至りですわ。……そうですね。もっと人間的に優れた方を選ばせてもらえる機会を与えて下さったあなたには感謝しますわ。ですけど、そうなるとこの婚約ははっきり言って邪魔なのです」にこりと笑っているジュリアから、何か得体の知れないものを感じる。

それは明らかにディーンに向けられているものではあるのだが、日頃の彼女とは何かが違うような気がして胸の中に蟠りわだかまを落とす。

「でも、ジュリア」

「姉さま」

ピシリと言葉を遮られる。

空色の瞳が、無言の力で発言を押し止める。

聞かないでくれとその瞳は告げていた。

どうやら彼の前で話したくないことらしい。口を閉ざすと、彼女は一度ゆっくりと目を閉じ、次に目を開いた時にはいつもの雰囲気に戻っていた。

「……ですから、姉さまが引き受けて下さり、これほど嬉しいことはありませんわ。もちろん協力のために姉さまがカーティスの毒牙にかかつては本末転倒ですし、出来る限りわたくしも姉さまの負担

を減らすつもりです」

ディーンを一瞥するとジュリアは唇を引き結ぶ。

完全に対決姿勢を見せる彼女に、懸念が必ずしも払拭できたわけではなかったが少しだけ胸をなで下ろす。

しかし、ジュリアの視線がずっと動き、冷ややかにその一点——ユーフェミアの手をつかむディーンの手——を見つめていることに気づいた。

すっかり忘れていたが、彼はまだ手をつかんだままだった。

「……いい加減、手を離してくれないかしら」

手を引くように引っ張るが、昨夜のように簡単にその手は離れない。むしろ、かすかに力を込められたような気がして眉を寄せる。

「ディーン」

少し強めに名を呼ぶと、それにかぶせるように彼はジュリアに向かって言った。

「少し席を外してくれるかい？」

先程までこの場でしていた会話を、まるで聞いていなかったかのような口ぶりと笑顔を彼女に向けた。

その笑顔にジュリアの眸がかすかに上がる。何か言おうと口を開きかけたが、吸い込んだ息を結局深々と吐き出すと、諦めたように了承した。

「……かまいませんけど、姉さまに何かなさったら容赦しませんことよ？」

「分かってるよ」

明らかに王女に対する態度ではない仕草で、空いた片手で彼女を追いかける。

少々のことには寛大なジュリアもそれには顔を顰めてみせた。だが、どうやらディーンとの付き合いの長さに言うだけ無駄だと思ったのだろう。

心配げな視線を一度こちらに向けたが、くるりと背を向けると温室から出ていった。

その間もずっと手を捕らわれていたユーフェミアは、なんとか取り戻そうと振ってみたり引っ張ってみたりしていたが、何だか遊ばれているような気分になって無駄な足掻きは止めた。

顔を上げると、こちらを見下ろすディーンと視線が合う。

その瞳が、誰を見ているのか。

どこことなく居心地の悪さを覚え、ジュリアが去った後、途切れたままの話題を探した。

そう言えば、ディーンが何故婚約を破棄しようと思ったのか、そのことさえユーフェミアは知らないのだ。それなのに協力を引き受けたことは早計過ぎたかもしれない。

しかし今更そんなことを思っても仕方が無い。彼らの婚約破棄の目的は、ユーフェミアの望みを叶えることに直接関わるものではないだろうし、知っていようといまいと結果は一緒だと思った。

が――。

やはり、知りたいのは好奇心だ。特に、ディーン理由は気になっってしまう。

彼もジュリアを追い払ったほどだ。何か話があるのだろうか。それはあまり人に聞かれたくない類の話なのかもしれない。つまり、クリステリアナの話の可能性も高い。だが、なぜだかそれを思うと、明らかにディーンに対する妬みが心の中に湧き出し、母のことを聞きたいと思う一方、耳も塞ぎたくもなる自分もいる。

だが、この沈黙は堪え難い。

「ディーン」

ユーフェミアは捕まれた手をくいくいと引っ張って、自らが座っているベンチの隣をもう片方の手で叩くと、ディーンはどこことなく楽しそうな顔をして隣に腰を下ろした。

それと同時にようやく手を解放され、ホッとしつつも、彼が落ちて着く前に彼の話から逃げるように質問を口にしていた。

「どうしてあなたは、その……婚約破棄したいの？」

視線をさまよわせ、ちらりと隣を窺う。

いつかディーンも言っていたではないか。

貴族社会の結婚に自分たちの感情が入ることはない、と。

ならば、二人は否と言えないのではないだろうか。

「ああ、それを今から話そうと思っていたんだ」

こちらを見たディーン的笑顔は清々しいほどさっぱりしており、逆にユーフェミアの胸に不安が立ち込める。その夜色の瞳の中にあるのは、紛れもなく自分の意思を貫き通す強さだ。

もしかして、いきなり核心をついてしまった？　と思わずユーフェミアは座ったまま、じりじりとあとずさっていた。

14. 空を見上げて貴方を思う 後編

「私はきみとの婚約をその場しのぎで済ますつもりはないよ」

耳に飛び込んできた言葉に、思わず目の前の男を凝視していた。

どこか不敵な笑みを浮かべるディーンに対して、ユーフェミアの頬は次第に強張っていく。

いつもと同じ軽口のはずなのに、中身の重さがまったく違う。その場しのぎで済ますつもりではないのなら、どういうつもりだというのか。

答えは一つしかない。

たどり着いた結論に、血の気が引く。

まさかと思いつつ、尚も違う可能性を考えてみる。

一体、なぜこのような話になっているのか。確か、彼とジュリアが婚約破棄をするに至った理由を聞いていたはずだったのだが。

ユーフェミアはこめかみを押さえ唸った。

「ちょっと、待って。意味が分からないわ。だってあなたたちは婚約を破棄する為の協力だって……」

もとを糾^{ただ}せばそうだったはず。

しかし告げられたのは、先程のその場しのぎではないという発言。ディーンは混乱するユーフェミアに尚も追い打ちをかける。

「ジュリアからどう聞いたのか知らないが、私はきみに婚約者になつてくれと昨夜言っただじゃないか」

「いや、でも、それはあなたのお養父^{とう}さまを言いくるめる為じゃないの?」

言葉は悪いが断りを入れられるほど構っている余裕はなかった。

彼自身も別段気にした様子も見せずに話を続けた。

「第一の目的はそうだが、これは国王さえ巻き込む話だ。国王を謀れば……いや、それ以上にきみと嘘の婚約をしたことが国王に露見したら私はただじゃ済まないし、何より私はもとから嘘を吐くつも

りはなかったよ？」

飄々とした態度で、こちらを楽しげに見つめてくる。

先程から彼の口調とは裏腹に、言っている内容が重みを増しているのは気のせいだろうか。ずしりと胃の辺りが重くなる。

つまり。

国王を謀らない為に保身で婚約を真実にするのか。いや、もとから嘘を吐くつもりはないということは、本当に彼自身の意志で結婚する気があるということだろうか。

——どちらにしろ、ユーフェミアにとって有り難くない話だ。

引きつる口元を無理矢理上げると、口からは乾いた笑みしか漏れなかった。

冗談としか思えない。

「……でも、私はあなたと結婚する気はないし？」

見解の相違は早い段階で解決しておくに限る。

今後のことを見据えても誤解されたままでは困るので、その点だけは分かってもらうつもりだった。

「今までは、だろう？」

「これから、よ」

強調された言葉をすかさず投げ返す。

一体、どこで齟齬が生じてしまったのか。

当惑するユーフェミアをよそに、ディーンは少しも狼狽せず、わずかに眉を上げただけだった。

「一つ聞いてもいいかな？」

「何？」

「どうして結婚するつもりはないんだい？」

「どうして結婚しなければならないの？」

一人で生活していけるだけの力を取りあえずあるつもりだ。

今の生活に不満はない。ならば、結婚などする必要がどこにあるのか。

上流階級のように義務的に結婚する必要は庶民にはないのだ。

それに昔から感じていたのだが、どうやら自分には家族との縁が薄いような気がしてならない。誰かと結婚して家庭を築いても、その先の幸せが見えないのだ。それは酷く心の中を不安にする。

本気でユーフェミアが言っていることによくディーンも気づいたのか、やっと面食らった表情を見せた。

軽く天井を仰ぐと、小さく何かを呟いた。

それがどこか呆れているように見えて、心の奥に痛みが生じる。

おかしいことを言ったつもりはないのに。

「私はあなたたちに協力するけど、あなたと——いえ、誰とも結婚するつもりはないのよ」

声に滲んだ不機嫌さに気づいたのか、ディーンはこちらを振り返ると、何かを決意したように頷いた。

「分かった。この際、きみの信条はどうでもいい」

そう告げると、なぜだかおもしろそうに見つめてくるディーンに、さらに不愉快さは増していく。

どうでもいいと言われたことにも腹が立つ。

「ユーフェミア」

まるで宥めるようにこちらに手を伸ばしてくる。その手が触れる前に払い除け、軽く睨みつける。

「……私が聞いている質問に、私の信条がどう関係しているっていうのよ」

当初の質問から離れてしまっていることに気づき、どうにか話を引き戻す。はつきり言って、まったく関係ないではないか。ディーンが婚約破棄したい要因と、ユーフェミアが結婚したくないことなど何の関わりがあるというのか。

ディーンはこちらをじっと見つめると、思わせぶりな笑みを口元に浮かべた。

「それは、半分はきみのせいだからだよ」

意表をつく台詞に瞬間言葉を失って、すぐに首を横に振る。

「まったく身に覚えがないんだけど？」

何故そうなるのか分からない。しかも婚約破棄の原因を人に転嫁するなどいい迷惑だ。その上、言葉の裏には責任を取れという意味合いが含まれているように聞こえるのは気のせいだろうか。

ディーンは軽く笑うと次いでその胡散臭い笑みを消し、ふと懐かしむような目をした。それは昨夜とまったく同じ瞳だった。

「きみの母親——クリスティアナに出会ってから、自分の考えと養父の考えに差があることに気づいたんだ」

神妙な様子を見せる彼に、騙されてはならないと思いつつも黙って耳を傾ける。

「それが年を重ねるごとに苦痛を伴うようになってね。ジュリアから異性として慕われていることにも気づいていたが、養父の思い通りになることに嫌悪を覚えて、どうしても彼女を受け入れることは出来なかった。だから、ジュリアから婚約の破棄を申し出られた時、むしろホッとしたよ。……そう、商売を始めたのも養父に反発してのことだ。表向きは自分の力試しと言っていたが、生まれた時から貴族社会に身を置いてきた養父はあまりいい顔をしていない。だが、商売はある意味、養父の目の届かない場所で自由な時間を持てたという意味でも、収穫のあるものだったよ」

そう言って、こちらに穏やかな目を向ける。

「自由な時間を持てたおかげで、養父の裏をかける。今回の計画はかなり前から準備をしてきたが、私の相手を務める女性がどうしても見つからなくてね。役に溺れることなく、養父に流されず、それでいて私の相手として周囲に納得させることができる女性はそうはいない。きみの存在は知っていたが、実際に人となりを知るまでは、きみを候補にさえ上げていなかった」

穏やかな瞳がこちらを見つめる。ユーフェミアを通して母を見ているのではなく、おそらくユーフェミア自身を。

そのことにどこか落ち着かない気分になれながらも、ベレスフォード邸に来てからずっと疑っていたことの答えでもあることに気付く。

つまり、出会い自体は彼が仕組んだものではなかったと？

本当に偶然だったと思っただろうか。

「ユーフェミア」

再度伸びてきた手が、今度は払い除ける間もなくユーフェミアの手を握る。

思わず身体に力が入り、その手を見つめながら全身がディーンの声拾い集める。

「きみがすぐに適役だと気づいたよ。私の持つ肩書を前にしても靡くどころかむしろ嫌悪した。だからと言って態度を変えることもなく……。きみを知れば知るほど、面白い女性だと思ったよ。役だけで終わらすには惜しいと思わずにはいられなかった」

思いのほか近くで聞こえる声にそっと視線を上げると、すぐ間近に夜色の瞳があった。

だが、その瞳はすぐに伏せられる。

「いや、そうじゃないな。途中から目的は関係なく、きみのことが気になって仕方がなかったよ。きみとの会話が楽しくて、仕事と称しながらも会いに行くのが待ち遠しくてたまらなかった」

語られる言葉が、ゆっくりとユーフェミアの心の中に落ちてくる。だがそれは、必ずしも滲み入ることはなく――。

ユーフェミアは軽く首を横に振った。

彼の言っていることは、特別だと言っているわけではない。物珍しいという意味でも取ることが出来る。

今までも、ユーフェミアに近づこうとする者は幼馴染であるケイトの言を借りると何人かいたらしい。しかも彼らからは最初に珍しいという言葉が大抵告げられていた。しかしすぐに興味を失ってしまうのか、知人以上の関係になることもなく、ユーフェミアもまたそれ以上の関係を望まない以上、どうにかなることはなかったのだ。だからディーンも一緒だろう。

面白い――物珍しいだけで、ユーフェミアも今までの者たちとそう大差ないと思っていた。

しかし――。

グッと手を強くつかまれ、自ずと意識を向かわされる。

再び視線を上げると、再度夜色の瞳と視線が合わさった。

「だから――」

思いのほかその声が強くて、ユーフェミアは咄嗟に自らの手を取り戻そうとした。視線を無理に外し、思わず誰かに救いを求めるよう温室の入口に目を向ける。

しかし、初めから込み入った話をする目的でジュリアが人払いをしていたのだ。当然、誰もおらず。

違うと言いながら、彼が何を言わんとしているのか本当はどこかで分かっていた。

そんなこと、正面切って言われた経験はない。

どうしたらいいのか、わからない。

聞いているのではない言葉を聞いてしまうような気がして、心が逃げ出そうとする。

物珍しいだけで済ませればいい。

しかしユーフェミアが逃げ腰なことなどディーンにはお見通しらしく、さらに手を強くつかまれた。終いには、もう片方の手を頬に添えられ視線を戻される。

今、認識できる視界にはディーンしかない。

逃げられない――。

息を飲んで見つめるユーフェミアに、ディーンは挑発的に微笑んだ。

「きみの信条がどんなものであれ、私はきみを手に入れるつもりだよ。もちろん、心ごとすべて。私のことも好きにさせてみるよ」

宣言された言葉は、完全にユーフェミアの心に深くに突き刺さった。じわりとそこから滲み出たものは痺れるような痛みを伴いながらも、なぜかとても心地良く、彼の発言に抗いたいの、どうしても口を開くことは出来なかった。

ぼんやりと見上げたガラス越しの空は、重苦しい灰色の雲に覆われ、外気との温度差が激しい為かガラスは白く曇り、外の景色を完全に遮断している。しかし冬だというのに常緑に覆われた温室は、上着を着なくても大丈夫なほど温かい。

一人、ユーフェミアはベンチに座っていた。

ぼんやりと霞んだ空を見上げながら、必死に心を宥めていた。

あの後、さらりと頬を撫で上げられ、完全に固まっていたユーフェミアは我に返ると共に、いつの間にか握られていた手が自由になり、後頭部に回された彼の手がディーンとの距離を縮めていることを知ると、咄嗟に目の前にあった彼の口元を手で覆った。

何をされようとしたのか、分からないはずはない。

あの発言に、この状況、この状態。

だからといって、ユーフェミアが触れることを許した覚えはない。

「調子に乗らないでっ」

言った瞬間、怒りがこみ上げてきた。

口を覆われたディーンは一瞬、目を瞬いたが、ユーフェミアが覆う手を取ると、かすかに笑みを浮かべたまま、なんとそのまま手のひらに口づけを落としてきたのだ。

「な、なな、何をするのよ!」

悲鳴を上げ、逃げるようにベンチから立ち上がった。

捕らえられた手を力任せに取り戻すと、完全に彼の手の届く距離から離れる。

「何って? 好きな女性にキスしたいと思うことはおかしいことかな?」

「許可した覚えはない!」

いや、それ以前に好きな女性って……。

瞬間、頬が熱くなる。

面と向かって言われ慣れていないと、照れくさいような面はゆいような、決して向けられる好意が嬉しくないわけではないが、この

歳になって舞い上がってしまうことがそれ以上に恥ずかしい。

それを悟られたくなくて、赤くなった頬を怒気で誤魔化す。

「は、話を元に戻すけど、つまりジュリアと婚約を白紙に戻すのは自分の為なのね？」

話からすると決して、ユーフェミアのせいではない。つまり、責任を取る必要もないはずだ。ディーン言う「その場しのぎ」もユーフェミアが否と言えば、丸く収まる話ではないか。

次第に本来の自分を取り戻すユーフェミアに、ディーンはベンチから立ち上がると一歩近づく。

「まあ、そうだね」

何気に距離を縮めようとする彼と同時にユーフェミアもまた一歩下がる。

二、三回それを繰り返し、結局引いたのは彼だった。

肩をすくめると、

「一応話は済んだが……私は欲しいと思ったものは必ず手に入れるから」

と、何気に捨て台詞に近い断言をし、去っていくその背中は何故だか楽しげだった。

それから一人取り残されたユーフェミアは、ベンチに座り直すと誰もいないのをいいことに顔を覆って悲鳴を上げた。

恥ずかしすぎるし、完全に高ぶった感情は静まらない。

顔も胸の奥も熱い。

一時そのままだったのが、ようやく顔を覆う手を除けると、ゆつくりと空を見上げた。白く曇るガラスの向こうで雪が降っていることに初めて気づく。

そう、浮かれている場合ではない。

ユーフェミアの目的は、あの人を一目見ること。そして母に会うこと。その為の一步を踏み出したというのに、どうやっても心の中からあの夜色の瞳が消えることはなかった。

15. 髪を撫でるその手を、愛しいと思ってしまった 前編

なんだか、違和感――。

五日ぶりに帰ってきた自宅は、ユーフェミアをあっという間に非日常から日常の世界へと戻してくれた。

夕暮れ時に現れた祖父のナフムもあまりにもいつも通りで、何故だか拍子抜けするほどだった。

「おじいちゃん……」

赤い日差しが斜めに差し込む居間に、ひっそりと佇むその姿に思わず涙ぐむ。

胸に湧き上がってくるのは確かに安堵感もあった。しかし、それとは明らかに違う感情も同時に湧き上がる。もつとどろどろとした、どちらかというの後ろめたいもので、唇を噛み締めないと思わずナフムを責めてしまいそうになる。

年月と共に色濃くなった床の板目に視線を落とし、自らの影だけが長く横引いているのを見つめる。

自分の生まれを知ってからずっと、考えずにはいられないことがあった。

――もしもディーンと出会う前に知っていたら、彼らを近づけることはなかったかもしれない。

平穏な生活を望むのであれば、ディーンたちとの関わりはひどく心を乱されるものだ。

だが、実際に彼らと関わってしまった今、もしも、はあり得ない現実だ。今更だと思いつつも、だからと言ってこのどうしようもない不安を消せるわけではない。

しかしいくら不安だからと言っても、ナフムを責めることなど出来るわけがない。彼は死者だ。本来ならすでにこの場にいる者ではない。自分を心配してこの世に留まってくれているというのに、何

故責めたてることなど出来よう。

むしろナフムが生きている時に、自らの生まれを知ろうとしなかったのはユーフェミア自身だ。現実から目を背けて逃げていただけなのに、それでも教えてくれていたらと思ってしまうのは、やはりナフムに対する甘えがあるからだ。

唇を噛み締めて床を見つめていると、透けた身体がふわりとユーフェミアの正面に回ってきた。

小柄なナフムはユーフェミアよりも背が低い。少しだけ手を伸ばすようにしてその手は蜂蜜色の髪に触れる。視界の隅では、いつものようにナフムの手がふわふわと揺れていた。

『どうしたんじゃ？ 楽しくなかったのか？ 何か嫌なことでもされたんじゃなかるうの？』

いつもと全く変わらないナフムに、内側に湧き出た負の感情を吐き出すように吐息した。

そして疲れたように笑った。

「大丈夫。ちょっと疲れただけ……」

ナフムは心配性だ。だからこうして自分の側にいて、いつまでも神の御許に行くこともできないのに。

これ以上、心配をかけるわけにはいかない。こうして側にいてくれるだけで十分なのに。

『そうか？』

尚も心配そうに見つめてくるナフムに笑顔を向けたが、幾分ぎこちなかったのかもしれない。誤魔化すようにソファに座ったが、あきらかに眉間に皺を寄せたナフムは何を思ったのか、ユーフェミアの少し上——背後に視線を向けた。その視線は鋭く、もの言いたげだったがすぐに首を横に振った。

『疲れたのじゃったら今日はもう休んだ方がいいぞ？ わしの晩飯はいらんからな？』

そう言って、再び頭を撫でてくれた。

その手つきはどこまでも優しく、ユーフェミアを甘やかす。

だから今まで気づくことはできなかったのだ。この皺だらけの手に、いつまでも縋りついて甘えていることは出来ないのだと――。

深夜。

疲れていたはずなのに目は冴える一方で、眠りは一向に訪れる気配もなくユーフェミアはランプを片手に一階へと向かった。

いつの間にか習慣になってしまっているなんて。

自らの行動に苦笑がこぼれる。

彼らも変わることなく、悪態をつきながらもユーフェミアを迎えてくれ、なぜだかナフムと対峙した時とは違い、むしろ彼らの方にほっとしてしまった。

だから思わずリックを力任せに抱きしめてしまい、あとで散々彼にシンバルが壊れるじゃないかと文句を言われたが。

いつものようにソファに腰を下ろし、膝の上にリックを置いてイヴァンジェリンに問い質されるまま、ベレスフォード邸での出来事を話していたのだが――。

『なんですって!? 婚約者っ!? ディーン様のっ!?!』

一言発する毎に震えながら高くなっていくイヴァンジェリンの声に、ユーフェミアはたまらずリックから手を離し、耳を押さえた。

ある程度は想像していたが、久々のけたたましさに思わず目も閉じる。

『おいおいおい……一体、何の冗談なんだ?』

流石のリックも呆れ半分、興味半分といったところだろうか。ユーフェミアの膝の上で横向きに転がりながらも、訝しむ声と同時にカチャッとシンバルを打ち鳴らす。

視界の端で、おろした髪がランプの明かりを受け、鈍く輝く。

一方、人形の瞳がユーフェミアの発言に陰呑な輝きを点したような気がした。

『どういうことですよっ!? 説明なさいっ!?!』

ジュリアによく似た人形は、穏やかに微笑みながら声高に命じた。

すべて話し終わる頃には、冬の深夜だからなのか、はたまた目の前の人形が発する何かなのか、さすがに寒さが身に凍み始めた。

両腕をさすり、それでもぶるりと一つ身震いするとシヨールをぎゅっと身体に巻き付ける。足元はすでに冷え切っているのどうしようもない。この状態で眠れるわけもなく、だからと言ってこの不安を彼らに話しても、どうにかなるわけではないことぐらい分かっていたが、それでも誰かに聞いて欲しかったのだ。

無意識に彼らを選んだのも、おそらく適役だからだ。

死者の声が聞こえる者はそういない。ユーフェミアが秘密の一つや二つ話しても漏れることはないだろうし、彼らが話す相手は所詮、ディーンぐらいだ。ナフムのように親身になって自分と同じように心を痛める心配もなければ、むしろイヴァンジェリンのように怒鳴ってくれるぐらいの方が、いっそ清々しい。

リックもきつと鼻で笑ってくれるだろう。

そうやって笑い飛ばして、大したことではないのだと思いたかったのに、むしろ鼻白んだのは彼らの方だった。

『あなたが……王女——』

『お姫様だったのか……』

二人して言葉を失い、ユーフェミアの方が慌てる。

「えっと、リック？ イヴァンジェリン？　そこでどうして黙っちゃうのよ？」

驚きで声が出ないというより、ユーフェミアに流れる血に対して畏怖を感じている様子の二人に、ユーフェミアの方が愕然とする。死者に王族とか身分とか関係ないと思っていた。

『あ、ああ。いや、うん……』

最初に立ち直ったのはリックだったが、なぜだか歯切れが悪い。

『小娘が、王女……』

イヴァンジェリンの内心が垣間見えた気がしたが、未だ放心している彼女はさておき、手の中のぬいぐるみを見下ろす。

「でもね、だからと言って私が私であることに変わりはないし、何かを望んでいるわけじゃないのよ。ディーンの婚約者になったからと言っても、これはお互いに利害が一致したからで……」

言いつつ、次第に頬に熱が集まり始める。

身震いするほど寒いはずなのに、じんわりと身体の奥が熱くなる。ディーンがベレスフォード邸の温室で宣言した言葉は、思い出すたびに胸の奥に熱を灯す。ただ、自分でも舞い上がっているだけだと頭で理解していても、心の奥が勝手にざわめくのだ。

『そう、利害の一致……』

ふふっと、ひそやかな笑い声が耳に届く。

それは低く、イヴァンジェリンの全身から発せられ、空気が揺れて伝わってくる。

『そこにあなたの感情はないと断言できるのね？』

冷ややかな問いに、咄嗟にリックを両手で握りしめると、迷うことなく頷いた。

だって迷う筈はない。例えば自分が何者であろうと庶民であることに変わりはないのだ。この場所で生きていくと決めているのだ。ただ一度、上流階級の婚約者になり、用が済めばこの茶番も終了だ。自分の目的を果たすために彼を利用するのだ。

そう、利用するのだから――。

すつと、胸の奥に灯った熱が消えていくのが分かった。

どこからともなく入りこんだ風が、蠟燭に灯った明かりをかき消すように、それは本当に唐突だった。

リックを握りしめていた手から力をぬくと、ふうっと長く息を吐き出す。

思い出した。自分の立場を。

自らに流れる血が何であれ、ナフムやクリスティアナが望んだのは、庶民としての自分。彼らはそこに、ユーフェミアの幸せがある

と見定め、ユーフェミア自身もそうだと思った。

「……私の生きる場所はここではないのよ」

たとえディーンが宣言したように彼のことをこの先好きになったとしても、彼の隣を歩けるわけではない。

最初から、答えなど出ているのだ。

『ちよっと待てよ』

ユーフェミアの気を引くように、膝の上でカチャッとシンバルが鳴る。

リックから聞こえる声はどこことなく不満気だ。

「リック？」

首を傾げて問うと、リックはもう一度カチャッとシンバルを鳴らした。

『イヴァンジェリン。おまえが口を出すことじゃねえだろ？』

『何ですって？』

途端、人形から鋭い怒気が向かってくる。

しかしリックはそれを軽くかわすと、今度はユーフェミアに意識を向けてきた。それはどこか怒っているようで、思わず身構えたユーフェミアは、コクリと息を飲み込んだ。

『おまえもな。こんな人形ごときに言われて何怖気づいてんだよ？』

「……べ、別にそんなことは——」

決してイヴァンジェリンに言われたからではない。

だが、何故だか反論する言葉が浮かばなかった。

『そんなんじゃ、あいつの婚約者なんてつとまらねえぞ？　ただで

さえ王宮は魍魎魍魎の住処だって言われてんのに……。あ、ちなみに魍魎魍魎は俺たちのことじゃねえぞ。生きた女だって話だからな。こいつに負けるようじゃ、おまえぐらい簡単に頭から喰われちまうぞ』

カチャッとシンバルを鳴らすと、なぜだかリックは不機嫌そうに締めくくった。

イヴァンジェリンも最初こそは金切り声を上げていたが、リック

のシンバルと共に急に静かになる。

彼の言った魑魅魍魎とは、想像したくなかったが誰のことを指しているのか。ベレスフォード邸で王太子であるブライアンから聞いた話で容易に想像がついてしまった。

彼の母親パメラ王妃は、婚約中にその座を狙う女性たちから嫌がらせを受けたと言う。

つまり――。

ユーフェミアはディーン自身の口から彼が優良物件だと聞かされていたのだ。彼の肩書はとても魅力的で、人当たりの良さも相まって――つまるどころ、ジュリアの言葉を借りるなら、女性の扱いに慣れるほど女性に不自由はしていないと言うことだ。

ユーフェミアの頭にはディーンが自ら率先して遊んでいたとばかり思っていたのだが、実情は違うのかもしれない。いずれ手に入る侯爵夫人の肩書を狙う女性がそれだけ多いと言うことではないだろうか。

もしかして王宮での第一関門は、身分云々もだが着いた瞬間、彼女たちに阻まれることもあり得ると言うことか？

考えた途端、血の気が引いた。

壁が高すぎる。

「はは……」

『笑ったって何にもなんねえぞ』

ぼそりと呟かれた言葉に、ユーフェミアは完全に頭を垂れた。

簡単にリックに言い負かされた。

だが。

『――なりませんわ。あなたが貴族の小娘に負けるなど、わたくしが許しませんわ！』

ふいにイヴァンジェリンから今までにない闘志の滾りを感じ、ユーフェミアは顔を上げた。

穏やかな表情の彼女からはとても想像できないほどの覇気を感じる。

「イヴァンジェリン？」

『わたくしに考えがありますわ。猿に口を出すなどは、もう二度と言わせませんことよ？』

根本的に何かが違うと思いながらも、そう言った彼女は高らかに笑ったのだった。

15. 髪を撫でるその手を、愛しいと思ってしまった 後編

「だからってどうしてあなたがここで夕食を食べているのよ？」

いつぞやの食卓同様、テーブルの向かい合わせに座る男にユーフェミアはすげなく尋ねた。

本日の夕食もほとんどがディーンのお手製だ。しかも何故だかお酒持参なところに計画的なものを感じる。ユーフェミアも勧められるまま飲んでいるが、どうしてもこの成り行きに納得がいかなかった。

「婚約者と少しでも長く一緒に過ごしたいからじゃないか」

さも当然という口ぶりで言っただけのディーンは至極満足げだ。

『誰も認めとらんぞ!!』

すかさず飛んだナフムの否定の声にも彼はどこ吹く風と言ったように人のいい笑みを浮かべ、その自信は一体どこから来ているのだろうと首を傾げたくなる台詞を吐き出す。

「彼女を幸せに出来るのは私だけですよ？」

『ユーフェミアが幸せかどうかを決めるのは、おまえさんじゃないわいつ。ユーフェミア自身じゃ!』

いくらナフムが声高に正論をかざしても、ディーンには一向に堪えないらしく、軽くかわしている。

当然と言うように大きく頷き、嘘くさい誠意をひけらかす。

「もちろん、私は彼女に対して努力を惜しむつもりはありませんよ」

『それはつまり、ユーフェミアが認めたわけじゃなく、おまえさんが勝手に言っているだけなのじゃな?』

疑念たっぷりの応酬にも、ディーンは余裕で肩を竦めたただけだ。

「いいえ? そんなことはありませんよ」

そんな言い合いを先程から延々と続けているのだ。ユーフェミアの目の前で。当の本人を無視したまま。

最初こそ、二人の言い合いに気を揉んでいたが、互いになんやか

んやと言いながら、どこか会話を楽しんでいるように見えなくもない。二人とも頭と口の回転が早い分、その掛け合いも歯切れがいい。次第に口を挟むのも馬鹿らしくなって、ユーフェミアは黙々と食事を済ますことにした。

ナフムにはディーンとの婚約のことは人助けだと説明したのだが、詳しいことは話していない。ただ、全てが済んだら、いつもの生活に戻るつもりだと話してある。

大人げなくも本気になって突っかかっているナフムにやれやれと思いつつ、食器を片づけにかかる。

昨夜、イヴァンジェリンに二つのことを言われたのだ。

一つは、ユーフェミアの心境をどのように解したのか、ナフムが出自を黙っていたことを決して責めない事。そして、正直に自分の生まれを知ったことを告げること。まだ、そのことは言えてもいないが、おそらく何かを感じている。夕刻、ナフムが現れた時、どこか悲しげな顔をしていたが、ディーンの姿をみるとすぐに血相を変えて、いつもの祖父に戻ってしまったので確認できていないが。

もう一つはディーンに直接話すから、彼が来たら引き止めろと言われたのだ。引き止めるまでもなく居座ったが。

一体、彼女は何を企んでいるのやら。

ぼんやりしながら冷たい流水で皿についた汚れを落としていた為、水の音でディーンが側に来たことに気づかなかった。

「手伝おう」

横から伸びてきた手が、ユーフェミアの洗っていた皿を奪う。

どうやら考えに耽り過ぎていたらしい。

シャツの袖を捲り上げ、そこから伸びた意外と逞しい腕に心の奥が再びざわめく様な気がして、振り切るようにユーフェミアは視線を上げた。

「ここはいいわ。イヴァンジェリンがあなたに話があるそうよ。先に聞いてきたら？」

台所は今まで一人で使っていた為、二人でいると意外と狭いこと

に気づく。その上、ディーンとの距離は思ったより近い。

追い払う意図を持って告げた言葉は、どうやら彼にもお見通しのようだった。

「別に片付けてからでも構わないだろう。私は少しでもきみと一緒にいたいのに」

どこことなく拗ねたような口調に、消えたはずの胸の奥の熱がかすかにぶり返すような気がした。

――これは錯覚だ。

言い聞かせながら視線をそらすと、素っ気なく告げる。

「はいはい。だったら、あなたは洗いものをお願いね」

濡れた手を前掛けで拭いて、くるりと彼に背を向けた。

背後で、小さな溜息が聞こえたような気がした。

ユーフェミアは突っ立ったまま、二の句が告げなかった。

絶句、とはこういうことを言うのだろう。息さえ飲み込み、瞬きも出来ずにただイヴァンジェリンを見つめることしか出来なかった。一方、ディーンはソファに座って長い脚を優雅に組み、肘掛に片肘を乗せた姿勢で、彼女の言葉を思索する素振りを見せながらも口の端を持ち上げた。

近くでカチャカチャというシンバルの音がするが、今はそれどころではない。

「何言ってるのよっ。どうして私がディーンの家で暮らさなければならぬのよ!」

つまり、イヴァンジェリン曰く、貴族の令嬢に対抗するためにはまず見た目から見下されないようにしなければならぬらしい。

もちろん、服装、所作、その他話し方やマナー、当然会話をすればある程度の知識も求められるという。

ついでに現在着ているくたびれた服についても、物言いたげに溜息を吐かれた。

家に戻ってきて以来、ユーフェミアは以前から着ていた服に戻していた。汚れても気にならないし、むしろディーンに贈られたドレスは庶民が着るには実用的ではない。

しかし。

『あのね、ユーフェミア。あなたもお父様に会いたいのなら、それなりの礼儀^{マナー}を身につけるべきではなくって？ もちろん、あなたの為でもあるのよ。社交界で恥をかい合わせる顔がなくなるのは嫌でしょう？』

至極まっとうな言葉に聞こえたが、裏を返せば彼女の意図は明白だ。

ユーフェミアがディーンの家で世話になると言うことは、彼女たちの本来の目的であるユーフェミアの監視も移動するということだ。ディーンの側にいたい彼女は、それを口実に彼の元に戻るつもりなのだ。

「だからってディーンの家に行かなくても、ここで出来ることだってあるでしょう」

自分の感情が不安定な今、できることならディーンと距離を置きたった。もっと冷静に、婚約者という立場を演じられるように。でなければどんな失敗を仕出かすか、その方が恐ろしい。

王宮に行っても、出来るだけ目立たないようにしていれば、それでも何とかするのではないだろうか。

イヴァンジェリンはそれを一笑に付した。

『まさか、あなた。マナーが一朝一夕で身につくとも思ってたっしやるのではなくて？』

馬鹿にしたように鼻で笑われ、そのまさかですとも言えずに、口を噤む。

『大体、手を荒らす水仕事など厳禁ですわ。当然、指にタコを作っている貴族令嬢なんてもってのほか。職人としての仕事もしばらくは控えなさい』

「ちよっと、待ってよ！ それじゃ、どうやって生活しろって言う

のよ」

それは聞き捨てならなかった。

収入が無くなってしまつては食べていくことも出来ないではないか。

『ですから、ディーン様のお屋敷に行くのでしょうか？　すべて使用人がやってくれますわ。あなたは朝から夜まで……いえ、夜から朝までみっちりわたくしが鍛えて差し上げますわ』

ふふつと笑つたその笑みに、なぜだか背筋が凍る気がした。

だが、これは決定事項ではない。イヴァンジェリンが勝手に言っているだけであつて、おしかける先の家主の許可がなければ話にならない。それに雇用主でもあるディーンから仕事があればやらなければならぬのだ。仕事をしないなんて契約違反だろう。

「ディーンも迷惑でしょう？　だから反対——」

「いや、妙案だな」

すかさず返された言葉に、ユーフェミアは思わず目を見開いてソファに座る男を凝視した。

「早くもきみと同じ屋敷で生活できるなんて夢のようだね」

「は？」

思わず、何かの聞き間違いかと聞き返す。だが、向けられた眼差しは逸らされることなく、ユーフェミアと視線が合うと今まで見たこともないような甘さを含んだ。

内心たじろぎながらも、彼は恥ずかしげもなく更に言葉を紡ぐ。

「もちろん、必要なものはこちらで手配するから心配はいらない」

「——あの？」

何か勘違いしているような発言に、眉間に皺が寄る。

ずっとお世話になるつもりはないのだ。ほんの一時的な話なのだから、余計なお金は使わないでくれないだろうか。

妙な誤解を正そうと口を開こうとしたが、ディーンの方が一步早かった。

「そうか。ナフム殿に話をしておかないといけないな」

「……ちよつと？」

ソファから立ち上がったディーンは、ユーフェミアの問いかけを無視して早速二階へと向かっている。

その行動の早さに、一瞬思考が追いつかない。

一体ナフムに何を話すと言うのか。いや、それよりもユーフェミアは承諾した覚えはないのだ。

「待ってよ。勝手にそんなこと決められても困るのよ！」

階段下でどうにか追いつくと、なんとか彼を引き止めた。

勝手に人の生活を乱さないで欲しい。やっとベレスフォード邸から帰ってきたばかりだと言うのに、これでは落ち着く間がないではないか。

不満を込めて見つめると、振り返ったディーンはいつも通りの余裕ある笑みを浮かべ、逆に問いかけてきた。

「なぜ？」

「え、なぜって……」

問われ、その理由が思い浮かばないことに気づく。

それこそ、疲れているとかでは理由にならない気がするし、一度協力すると言った以上、イヴァンジェリンの言っていることも理解できないわけではないのだ。せめてマナーぐらいは身につけておくべきなのかもしれないと、ベレスフォード邸で食事をする度にいたたまれない思いをしたユーフェミアは、思い知ったばかりだった。

言葉に詰まって視線を下げると、突然、目の前に垂れていた前髪を指ですくうようにして、耳にかけられた。

ハツとする程近くにディーンがいて、思わず一步下がる。

「……その警戒心も婚約者に対してどうかと思うけど……」

不満そうな声に、キツと視線を上げる。

傍から見れば確かに婚約者らしからぬ行動だろう。でも、仕方がないではないか。先日の温室での出来事がどうしても頭に過ってしまうのだから。警戒せずにいられない。

それに勝手にディーンが婚約者だと言っているだけなのだ。おそ

らく公にも近いうちに婚約者という立場になるのだろうか、もとから破棄する予定なのだからディーンに対して心を許すつもりはないだけ。

再び伸ばされた手に、思わず竦んで肩に力が入った。その一方で心臓が勝手に跳ね上がる。

しかし彼はユーフェミアの耳の――触れるか触れないかという体温だけを伝える距離でピタリと手を止めた。

「以前、きみの心を私に向けてみせると言ったが、その言葉でここまで怯えられるのはさすがに本意じゃないんだ」

「怯えてなんて――」

いないと続けようとして、今も硬直したように肩に力が入っている事実気づく。

ディーンに想いを告げられる前と変わりなく接しているつもりだったが、無意識のうちに避けていたのだろうか。いや、精神的に落ち着きたかったから逃げていたことは認めるが。

「少なくとも私は傷つくし、きみに嫌われたとは思いたくない」

だから必要以上に逃げないで欲しいし、一応婚約者という立場である以上信用して欲しいと静かな声音で告げられる。

その声はいつもの戯言を言う時の響きはなく、確かにどこか気落ちしたように聞こえた。

ユーフェミアは小さく息を吐き出すと共に、ゆっくりと肩に入っていた力を抜いた。

信用、というのはともかくとして、本当にディーンが自分のことを想ってくれているのなら、自分の取った「避ける」という行動は確かに彼を傷つけるものだ。もしも自分が想いを告げた相手に避けるような行動を取られたら、同じく嫌われたと思うかもしれない。きっと酷く打ちのめされるだろう。

「……ごめんなさい」

自分のことしか考えていなかった事に気づき、知らず謝罪の言葉が口について出ていた。自ずと視線も下がり、罪悪感まで込み上げ

てくる。

確かにこのままではいけないのかもしれない。婚約者という役目を引き受けたからには、ディーンに対する意識を入れ変えなければならぬのだろう。それは容易なことではないかもしれないが。

反省を込めてまんじりと考えていた為、耳の横にあったはずの手が、いつの間にか移動したことに気づかなかった。ポンっと頭の上に置かれ、驚いてディーンを見上げる。

どこか寂しげな表情を浮かべたディーンと目が合うと、彼はまるで子供をあやす様に頭を撫でる。先程耳に掛けたはずの前髪も再び眼前にぶら下がる。

「な、に？」

あまりにもらしからぬ態度に、目を瞬く。
しかし。

「きみが素直だと少し寂しいな」

相変わらずなその返事に、どういう意味よ、と問おうとして、ふと髪をかき乱すその手が、ユーフェミアが落ち込んだ時によくナフムが取る行動である事に気づく。

今彼の手は、ただ、その温もりだけをユーフェミアに伝えていた。いくら望んでも、今では決して感じることでできない温もり――。そのことにじわりと心の奥が疼く。

――つまり、彼は自らの感情を押しつけ、強要するつもりはないと言いたいのだろうか。……好きにさせてみせると言ったのに。

黙り込んでその判断に悩んでいると、やはり意外なほど呆気なく彼の手は離れていった。

不覚にもそれを寂しく思ってしまった。同時に、たったこれだけのことで無償に与えられる愛情に飢えていたのかと、自覚してしまった。

だから背を向けて二階に向かうディーンをそれ以上引き止めることはできなくて。もの欲しげに見つめている自分に気づかなかった。だが後々になって考えると、やはりこの時完全に言いくるめられ

ていたのだが、あとの祭りで。一人で勝手に話を進める男を前に当然なす術もなく――誰一人として味方となってくれなかったユーフェミアは数日後、ディーンに住む屋敷オールドリッジ邸での生活を開始することを余儀なくされてしまった。

閑話

バルフォアには子供から大人まで知っている怪奇譚がある。

それは現在街一番の金持ちが住むというディーン・ラムレイの屋敷にまつわる話である。

イヴァンジェリンが提案したユーフェミアの今後の課題は、その噂の屋敷オールドリッジ邸で居候をしながら特訓を受けることとなったのだが、実はユーフェミアには一つだけ気がかりがあった。

「ねえ、本当に幽霊が出るの？」

先程までディーンが座っていたソファに腰を下ろし、膝の上にリックを置くと、ためらいつつ彼らに尋ねた。

ディーンはナフムをどうやって言いくるめたのか、晴れ晴れとした顔をして迎えの馬車に乗り込む直前、屋敷の準備が終わり次第すぐにでも迎えたいから、いつでも来られるように準備をしてくれと言ってきた。

なんだかその言い方は、まるで花嫁を迎え入れる言葉のように聞こえなくもなかったが、人通りの少ないこんな時間に、隣近所の誰かが聞いているかもしれないと思うと、無駄に長く反論してはそれこそ人目を引くことになりかねないと、すぐさま了承の意を伝え、とにかくディーンを馬車に押し込むことを優先した。

結局のところ、オールドリッジ邸に居候することが決まってしまった今では、その件はすでに諦めの心境だが、この瞳を持つ限り気になるのはやはり幽霊が出るか否かだ。

『今更、何をおっしゃっているの？』

『俺らのこと何だと思ってるんだ？』

口々に言われ、その中与否定の言葉が一つも含まれていないことに気づき、がくりと頭を垂れた。

本当は分かっていたのだが。

ふと頭の片隅に、身の毛がよだつような過去が甦る。

完全に思い出す前に頭を横に振って記憶を隅に押しやると、調子よくシンバルを鳴らすぬいぐるみを見下ろした。

オールドリッジ邸の怪は、実はその背景に一つの事件が元となっていることも広く知られているのだ。

今から五十年ほど前。

街一番の金持ちとして名を馳せていたオールドリッジ卿は、その人望の厚さからも街の住民に広く慕われていた。

元来バルフォアは自治都市である。街は市制で動き、市議の一人でもあった彼は、顔も広く、オールドリッジ邸はいつも人の出入りが激しかった。

ある夜。

オールドリッジ邸から断末魔のごとき悲鳴が響き渡った。

それは一つではない。時を置き、二つ、三つと――また、ガラスの割れる音や何かを言い合う声、荒々しい物音が近隣の家では聞かれていた。

通報により慌ただしく夜警が駆けつけると、時すでに遅く、磨き上げられた床には一面に広がった血だまりと、壁や天井に飛び散った夥しい血のあとが乾く間もないほど生々しく、蝋燭の灯りを受け、壁を伝っていたという。

一家もろとも使用人一同。息をしている者はいなかった。

虚ろな瞳は何も映さず、犯人について語るものは誰一人としておらず。

後の調べで、金目のものを盗まれていたことから夜盗に入られたに違いないということで事件は幕を閉じた。

『ま、確かにいるな。ごちゃごちゃと』

だからどうしたとでも言いたげな声に、我に返る。

思わず眉間に皺が寄ってしまったのは言うまでもない。

「ごちゃごちゃって、何よ!? まさかオールドリッジ卿までいるとか言わないでよっ?」

リックを見下ろして、半ば冗談半分に言い放つ。オールドリッジ卿は五十年前に存在した人物とは言え、バルフォアでは口伝上の人物になりつつある。どれほど立派な人物であったか知らないが、そうは言っても手に力が入るのはやはり想像すると怖いからで。

噂では、オールドリッジ邸に入った夜盗は、かなりの悪行を働いたとのこと。

残されていた死体は、数を数えると人数分なのだが、どれがどの人物の部分であるのか判別が難しかったという。

それでもオールドリッジ卿は、頭と胴体が別れているだけで見つかったらしいのだが。

『当然いらっしゃるわよ。とても気のいい方ですわ』

イヴァンジェリンはうふと笑い、しかし何を思ったのか、スツと身体全体に冷ややかな空気を纏わせると、まさか、と確認してき

た。
『たかがあの屋敷の住人程度で、逃げ出すつもりではありませんわよね?』

逃げることなど許さないとでも言うような強い言葉に、ユーフェミアは言葉に詰まる。

『楽しい連中だぜ?』

リックが助け船を出してくれたが、幽霊が楽しいとはどうしても思えない。

「――あり得ない!」

そんなところで生活をしているディーンは、やはり変人だ。

彼がああ屋敷に住むようになって、パーティでも開いているかのような賑わいもあったとか、なかったとか……。そう言えば、イヴ

アンジェリンは言っていなかったか。夜から朝までみっちり鍛えてあげる、と。つまりそれだと彼らの生活時間と当然重なるということではないか。

ひやりとしたものが背筋を駆け上る。

イヴアンジェリンはユーフェミアの言葉に憤慨した様子を見せた。『あり得ないって、あなたね。わたくしたちの存在自体まで否定しないでくださらない？』

その言葉に、リックまでがシンバルを鳴らして同意した。

『見えるからには、仕方ないだろう？ 諦めて、あいつのように仲良くやっていけばいいんだよ』

つまり、ディーンは仲良くやっているのか。

なんだか眩暈がしてくる。

ただでさえ、考えなければならぬことが多いというのに、どうしてこう次から次へと問題が出てくるのか。

ユーフェミアは疲れた様に、ソファに突っ伏すと尽きることのない溜息を長々と吐き出したのだった。

16. 見せたくない過去も暴きたくて仕方がないくらい 前編

そこは、幽霊屋敷――。

オールドリッジ邸はバルフォアでも有名な幽霊屋敷だ。

街の一等地にあるその屋敷は現在街一番の金持ち、ディーン・ラムレイの持ち家でもある。

かつての持ち主であったオールドリッジ卿はある夜、夜盗に入られ、一家もろとも住み込みの使用人一同、すべて惨殺されたという。それは今から五十年ほど昔の話……。

オールドリッジ邸はバルフォアの中心地より少しだけ離れた閑静な住宅街にある。しかしそこは、街中であることに変わりはなく、当然クライトン郊外にあるベレスフォード邸のような広大な土地と邸を有しているわけではない。

バルフォアの拠点となる市庁舎広場には、街を東西に二分するよう南北に縦断する街道が走っている。多くの脇道がその街道から枝を張るように延びているのだが、広場から西へと延びる石畳の道をしばらく進むと、やがて人の背丈ほどの柵が左右に広がった場所に突き当たる。

黒く塗られた柵の向こう側が噂のオールドリッジ邸であるのだが、柵越しからは目隠し代わりに庭木が植えられているため、屋敷の全景を望むことは出来ない。かろうじて空に伸びる屋根の先端が見えるぐらいで、その距離感は微妙なものだ。だからこそ想像の種は尽きないもので、未だに幽霊屋敷としての噂は絶えることがない。

イヴァンジェリンの言うところのマナー養成強化合宿の場となる

オールドリッジ邸は、ユーフェミアの家とは広場を挟んだ対角線上にあると言ってもいい。

同じ街に住んでいるとは言っても、見えないものが見えてしまうユーフェミアが、わざわざ幽霊屋敷を見物に行くことなど当然あり得ない話だ。むしろ出来るだけ近づかないように心がけていたというのに、その屋敷でまさか寝起きをする日が来ようとは思ひもしなかったが。

考えただけで気が重くなる。

歩いてもたかが知れている距離をわざわざ迎えにきたディーンに、いつものごとく強引に馬車に乗せられ、なぜだか幼馴染のケイトとその娘のリリーに、片やニヤニヤ、片や満面の笑みを餞別代わりに見送られたのはつい先程の事。

重い気分のまま馬車に揺られ、ディーンとの会話に曖昧な返事を返しつつ、窓の外を流れる街並みを眺める。

ちょうど通りかかった広場は、昼時であるからだろう。先代の国王の功績を称える記念碑が建つ台座付近では、冬場であるにもかかわらず珍しく暖かい日差しが降り注いでいるからなのか、昼食を取る人々が思い思いにくつろいでいる。

そんな穏やかな日常を見てみると、つつい自分の置かれた現状に溜息がこぼれ落ちる。

何故、自分はこんなところにいるのか。一体、何をしているのか。望んでいることは小さなことのはずなのに、その代償の大きさにうんざりしてしまう。

しかし――。

ふと影を落とした記念碑を見上げる。通り過ぎざま、目に飛び込んできた太陽に手を翳しながらも、かつて会った記憶の中の人にもう一度会いたいと、諦めきれない自分がいるのだ。

決めたのは自分自身なのだからと何度も頭の中で繰り返したものの、一方、他にも方法があったのではなだろうかという思いもある。では、どのような方法かと問われると、少なくとも一介の庶民であ

る自分一人の力でどうにかできる事でないことも分かっている。やはりディーンやジュリアの力添えがなければどうにもならなくて、それならば無理を通すよりも彼らの言う通りにする他ないのだろう。そうして悶々としたままディーンの会話に生返事をしつつ、彼にもうすぐ到着することを告げられた。

見ればすでに屋敷のすぐ側の道沿いを走っており、しかも身構えた割にはあっさりとオールドリッジ邸へと到着してしまった。

常日頃から一等地だと言われているため、庭木の向こう側には広い庭が広がっているのだと勝手に想像していたのだが、実際は違ったのだと、その日ユーフェミアは初めて知った。

と言うのも、通りに面した門から正面玄関までの道はゆるく曲がっており、馬車の窓から見えていた門が覆い繁った庭木に隠されるとどなく、身体に伝わっていた微かな振動が止まり、到着を知らされたからだ。

ついに到着してしまった噂の屋敷に恐々としながらも、観念して馬車から下り、全貌を現した建物を見上げて、ユーフェミアは言葉を失った。

二階建ての煉瓦造りの屋敷は明るい日差しが降り注ぎ、庭木が生い茂っているように見える庭も、良く見ると手入れがされている。冬場ということもあり花こそ咲いていなかったが、おそらく春になると庭木は大量の花房を付け、他の花々と競うように咲き乱れることだろう。

この煉瓦造りの屋敷と計算されたように作られた庭が、その情景を容易に思い起こさせ、ここが本当に幽霊屋敷だとは思えなかった。促されて足を踏み入れた玄関ホールもベレスフォード邸を見た後では質素だと思えなくなかったが、華美ではないというだけであって把手一つにしてもきちんと磨かれ、正面に延びる二階への階段の手すりも照明の明かりを受け艶やかに光っている。想像していたような薄暗さはどこにも見当たらない。

階段脇を通り抜け、部屋に案内されながらも、噂に聞く五十年前

の事件の痕跡を恐る恐る探してしまっただ、当然見つからなかった。

「本当は私の部屋の隣にきみの部屋を用意したかったんだけどね」

どこか残念そうに言いながら、一階の客室に案内してくれるディーンを背後から睨む。

それは何の為に、とは口が裂けても聞きたくはない。ちなみに彼の部屋は二階にあるらしい。いつでも歓迎すると言われたが、きつと用はないに違いない。

先程紹介されたばかりの執事のアドルフは、ユーフェミアのわずかばかりの荷物を持って後ろをついてきていたが、主人の軽口を諷めるようにわざとらしく咳払いした。

初老に差し掛かった彼は、まるで古木のようにひよろりとしている。一見したところ柔和に見えるが、真っ直ぐに伸びた背筋はたとえ主人の命令でも間違ったことには従わないという確固たる意志の強さを感じさせる。

どうやらユーフェミアの部屋が一階となったのは彼の指示ようだ。あとできっちりお礼を言っておかないと、と心に留め置き、ディーンの話に取りあえず耳を傾ける。

アンティークショップ
骨董品店にやってくる時もそうだったのだが、彼は日に二度やって来ることはあっても長居をすることは決してなかった。来る時間もまちまちで、どうやら客先との待ち合わせ時刻の合間に寄っていたらしい。話を聞くと、昼食や夕食は外食をすることが多いとのこと。つまり、日中は留守がちということだ。

そのことにホッと胸をなで下ろす。

ディーンはチラリとこちらに視線を寄こすと、どこか残念そうに呟いた。

「少しぐらいは寂しがって欲しいね」

「……寂しがると仕事の邪魔になるでしょう？」

わずかなためらいの後、ボソリと落とした言葉は、決して本心ではない。一応「婚約者」ということなのでそれらしく答えてみたのだが、言うまでもなく棒読みにししか聞こえなかったようだ。

背後でアドルフが再び小さな咳払いをする。

ユーフェミアがディーン婚約者となった経緯をある程度知っている彼は、ユーフェミアの教育係の一人でもある。

「どうやら今の受け答えでは不合格らしい。だったら何と答えれば良かったのだろう、と首を捻ってみたが、齒の浮きそうな言葉は浮かんでくるものの、実際にそれを口にした自分を想像して鳥肌が立ってしまった。」

ありえない。

そして気づく。もしかして目の前を歩く人物に多少なりとも感化されているかもしれない……。よくも常日頃からあのような齒の浮きそうな台詞が言えたものだ。

ある種、感心しながら適当な言葉を考えてみたが、これといった言葉は浮かんでこない。それでもディーンはユーフェミアが返した言葉に多少の努力を認めてくれたようだった。

「うん。だったら夕食ぐらいは一緒に取れるようにロジャーに時間の調整を頼んでおこうか」

やはり彼は、転んでもただでは起き上がらない性質らしい。一歩も二歩も上手をいくその返答に、お構いなくと言いかけ、ふと思いついて声を出さずに密かに笑う。

駄目だと思いつつも、やはり、どこかでやり込めてやりたいという思いがあるのか、むくむくと反抗心が湧き上がってくる。

わざとらしく聞こえないよう注意しながら、今度は逆にできるだけ声調を抑えて告げる。

「それは駄目よ。……あのね、私がここに厄介になることで、あなたに仕事上の付き合いをおろそかにして欲しくないのよ。気に掛けてくれるのは嬉しいけど、気持ちだけで十分よ」

考えつく限り、思いやった言葉ではある。一応、婚約者らしい言葉とは言えなくもないだろう……。多分。

「……もう一言あると嬉しいんだけどね」

「まだまだでございますね」

前後からそれぞれ溜息混じりの答えが返され、どこがいけないんだと再び頭を悩ませた。

それでも気を取り直した彼は、ちょうどユーフェミアの為に用意された客室に着いたこともあり、扉を開けてくれ、どうぞと促してきた。勧められるまま一步踏み込む。

白い薄地のカーテンがまず目に飛び込んできた。

落ち着いた色調の家具は、どこかユーフェミアの自宅の居間を思わせた。ソファの色合いといい、床に敷かれた絨毯といい、まさかという思いが過る。似ているが偶然だと思いたい。

冬のやわらかい日差しが差し込む部屋は明るく、あらかじめ暖めておいてくれたのだろう。暖炉の側で火の状態をみていた女中が身を起こし、目が合うと彼女は静かに微笑んで、軽く頭を下げてきた。「彼女はノーリーン。きみの身の回りの世話をしてくれる者だよ。困ったことがあれば遠慮なく彼女に言えばいいから」

紹介されたのは、おそらくユーフェミアと同年代と思える女性だった。

まとめ上げた髪は見事な金髪で、思わず目を奪われるほどの容貌だった。部分部分の造りは派手ではあるが控え目な化粧で落ち着いた印象を与え、まとめた髪も服装もお仕着せである為、逆にそれが彼女の美しさを際立たせている。澄んだ瞳は吸い込まれそうで、誰が見ても美女だと口を揃えて言うだろう。

こんな身近にこんな美人がいるのであれば、ディーンも彼女に婚約者の役目をしてもらえばいいのに、と自分の目的を忘れてチラリと思う。

気のせいかもしれないが、視線を交わしあう二人の間に流れる雰囲気、かなり親しみを込めたもののように思える。

雇い主を前にして緊張しない女中は珍しい。良好な雇用関係が保てていると考えれば納得できないこともないが、ジュリアの言葉がどうしても引っ掛かってしまう。

女性の扱いには慣れている――。

……どういう意味に取ればいいのやら。

それに、彼女としても同じ庶民出の女の世話をしろと言われて嫌ではないのだろうか。大体、身の回りの世話をする者なんて必要ないのだ。自分のことは自分で出来るのだし。

どこからともなく湧きあがってくる苛立ちに、気づかれないように小さく息を吐く。

状況的に今更何を言っても仕方がないことばかりだ。

だが、ふと視線を感じ、顔を上げると無遠慮に見つめてくるノーリーンと目が合った。

その視線は悪意のあるものではないが、むしろ興味をもって見つめられ、その顔立ちが頭の片隅に何かを告げた。

「……あの、どこかでお会いしたことありました？」

こんな美人を忘れるはずはないのだが、なぜだかぼんやりとして思い出せない。同じ街にいるのだから、どこかですれ違っているもおかしくはないのかもしれないが。

うーんと唸りながら首を傾げると、ユーフェミア以外の三人が、ほぼ同時に笑い声を上げた。

「ロジャーも憐れだね」

「不肖の弟がいつもお世話になっております」

「ノーリーンはロジャーの姉でございます」

三者三様の返事が戻ってきて、あっと声を上げた。

言われてみると、確かにロジャーに似ている。しかしロジャーとは違い、その瞳の強さが彼女の芯の強さを表しているようで、庇護欲とは無縁の――きちんと自立した女性に見える。

つまり自分と同種の人間だろう。

それなら話は早いかもしれないと、先程の不満をものは試しに申し出てみた。

「身の回りのことは自分で出来ますから――」

「駄目でございます」

全部を言う前に、理由も聞かず、有無も言わず、にこりと笑っ

て却下される。

「でも」

「聞き入れることはできません」

言いたいことは分かりますけど、とその瞳は告げていた。

何を言っても譲ってもらえそうにない頑ななその様子に、仕方がないと肩を落とす。彼女もこの仕事で賃金を得ているのなら、ユーフェミアとしても同じ働く身として彼女の立場を理解できないわけでもない。

簡単に引き下がったユーフェミアに、ディーンもなぜか気を良くしたようで、ノーリーンに向き直った。

「彼女のことは任せたよ」

「承知致しました」

きつちりと丁寧な礼をとり、早速アドルフからユーフェミアの荷物を受け取った彼女は、まずはお部屋の説明をしますね、と言って、促されるというよりもむしろ強引に、奥の部屋へと連れて行かれた。

16. 見せたくない過去も暴きたくて仕方がないくらい 中編

「実は私もこちらのお屋敷に来て、まだ数日しか経っていないんですよ」

奥の部屋——つまり寝室で、まず着替えをと言われ、ノーリーンに手伝ってもらいながら、驚くべきことを彼女は話し出した。

「え？」

ユーフェミアは天蓋のついた寝台の柱に両手でつかまり、言われた内容に思わず振り返った。

ディーンとは長い付き合いのような雰囲気醸し出していたのに、たったの数日とはどういうことだろうか。ロジャーの姉というぐらだから、以前から顔見知りだったのかもしれないが、やはりジュリアの言葉が脳裏をかすめ、邪推をしたくないが自らの考えに思わず眉間を寄せてしまう。

背後でコルセットを締め直していた彼女はそれには気づかなかったようで、紐を結び直すと寝台の上に広げてあったドレスを数着抱えて戻ってきた。

「それ以前は、王宮で働いておりました」

胃の辺りから締め付けられる苦しさに喘ぐように息をしていると、さらりと告げられ、思わず聞き逃しそうになってしまった。

「……王宮？」

息を吐きながらポツリと漏らした。

王宮で働いていた人が、どうしてこんな街中の小さな屋敷にいるのか。もっといい働き口はあっただろうに。

「どうして……辞めたの？」

忙しく立ち働く彼女はその問いに小さな笑みを浮かべ、わずかな間手を休めると、少しだけ考える素振りを見せた。

息苦しさしか感じさせないコルセットを忌々しく思いながらふと視線を動かすと、ノーリーンの抱えているドレスが目に入った。ど

れも見覚えがなく、自分が持って来たものではないように思えて、嫌な予感が過る。

この屋敷に厄介になることが決まった時、以前ディーンが仕立ててくれた衣類だけは運んでおいてもらったのだ。どうせ自宅では着る機会はないし、はつきり言って収納しておく場所もない。部屋の片隅に積まれた箱を見る度に誰かを思い出していたたまれない気分になるし、これ幸いと思ったのだ。

だが彼女が抱えているものは、自分が持って来たものではない。おそらく新調されたものであることに気づいて、さらに眉間の皺が深くなる。

ノーリーンは色味を見る為か、先程の質問には答えないまま再び忙しなく動き出した。ユーフェミアの身体の前にドレスをかざしては次々を取り替えていく。一回りして、どれがいいか悩んでいるようだったのでユーフェミアは仕方なく、薄紫色の一着を指した。それが最もレースが少なく、機能的だと思ったからだ。

「あの、ディーンが何かしたの？」

気になって再度、先程の質問を繰り返した。無理矢理辞めさせられた、ということはないだろうが、もしかして王宮よりも給金がいとか。バルフォアで街一番の金持ちなのだから考えられないことではない。

これ以上の邪推は止めたいと思いつつ、ドレスを頭からかぶせてもらう。

「いえ。ディーン様は関係ありません。……むしろ恩人ですわね」

きっぱりと言いつつも、ノーリーンの声は和らぐ。

「恩人？」

顔だけ向けると、彼女は視線を合わせながら頷いてみせた。その表情には感謝の念が現れており、あの胡散臭いディーンに対して、どうしてそんな感情を抱けるのかと疑問ばかりが浮かぶ。

だが、そう言えばかつてイヴァンジェリンが言っていたではないか。彼の周りの人間は、彼のことを悪く言わないと。なぜそう思う

のか。騙されているだけではないのだろうか。

もっと詳しく聞こうと口を開きかけたが、それよりも先に彼女は口を濁した。

「……まあ、王宮は色々ある場所ですから。——いえ、そんなことよりも」

ドレスの背中の釦を止めながら、語調を強くする。

「王宮での作法は人より少しばかり詳しいですから、ちょっとしたことでぐらいいたらお教えすることができると思いますわ」

次は髪ですね、と言い、てきぱきとユーフェミアを鏡台の前に引っ張っていく。

ドレスを頭から被ったため確かに髪はほつれていたが、これぐらい手で直してしまえば許容範囲だろうと思っていたユーフェミアに対し、ノーリーンは笑顔で却下した。

先程からその笑顔には何となく逆らう気にはなれず、素直に椅子に座ってしまう。

「綺麗な蜂蜜色ですね」

一度すべて下ろし、櫛で梳きながら彼女が口にしたその言葉に心臓が大きく脈打つ。

ふとベレスフォード邸でディーンが口にした言葉を思い出し、咄嗟に返答に困った。

王族の髪は大抵が蜂蜜色——。

ノーリーンは自分のことをどこまで知っているのだろうかと不安になる。王宮に勤めていたなら、王太子であるブライアンやアシレイ、国王であるエドワーズの姿も目にする機会は当然あったはずである。ならばこの髪色も馴染みが深く、不思議に思ってもおかしくはない。いやそれよりも、この屋敷の人間は一介の庶民であるユーフェミアが侯爵家の跡取りの婚約者としてこの屋敷に住むことをどう思っているのだろうか。

鏡の中の彼女を見上げると、その視線には気づかずどこか楽しげに髪を結い始めている。

心配のし過ぎなのだろうか。

動揺していることを悟られないよう鏡の中の彼女から視線をそらすと、まずディーンに確認をとらなければ、と密かに思った。それと同時に、すっかり忘れていたあのことを思い出し、もう一度鏡の中の彼女を見つめた。

「どうかなさいましたか？」

こちらを見ずに、ノーリーンは丁寧な髪をまとめ上げていく。

もしかして先程からチラチラ彼女の事を見ていた事に気づいていたのだろうか。

それならば仕方ないと意を決する。

「ノーリーンさんは、その、この屋敷にやってきて数日って言うていたけど、あの……」

どうしても歯切れが悪くなってしまふのは仕方ないだろう。いくら噂と言っても、いい大人が幽霊が出るのですかと聞くのはかなり抵抗がある。

彼女は手を止めて、澄んだ瞳で鏡の中から促してくる。

困惑しながらも、実際に死者が見えるユーフェミアにとってその件は切実なのだ。思いきって一氣に言った。

「あの、本当にここは幽霊が出るのですか？」

鏡の向こうの彼女は意表をつく質問であるにもかかわらず、表情一つ変えず——いやかすかに意味ありげな笑みをその桜桃色の唇に浮かべた。

「さあ、どうぞございましょう。まあ……何もないとは申しませんが、王宮に比べれば可愛いらしいものですから」

そう言い終わると、意味深な言葉を笑みで隠し、すぐに慣れますよ、とつけ加える。

頬が引き攣るのを隠せない。それは慣れるどころの話ではない。

「ノ、ノーリーンさんは、見えるのですか？」

「いいえ。見えないですけど、不思議なことが周囲では起こりますしね。深く考えても仕方がないことですし、害があるわけではない

ので気にしておりません」

再び手を動かし始めた彼女を鏡越しに見て、強い、と思う。確かに彼女の弟であるロジャーも、この件については何も言っていた記憶がないが、姉同様単に気にしていないだけなのか。それとも彼の事だ。気づいていないだけの可能性もある。

はあ、と深々と息を吐き出し、それにしても、と眉間に皺を寄せ
る。

先程の彼女の言葉を思い出し、ここの幽霊が可愛いつて、王宮つてどんなところなのだろうと、思わずにはいられなかった。

着替えを済ませたユーフェミアは、先程疑問に思った件をディーンに尋ねようと思ったが、アドルフから彼がすでに外出してしまつたことを告げられた。

仕事だから仕方がないと思いつつも、相変わらず肝心なことを話してくれないのだと不満に思う。

先日は信用して欲しいと言っていたが、何も言ってくれのではそれも無理な話だ。まだ何かを隠しているのではないか、他にも何か目論んでいるのではないかと疑ってしまうのも仕方がないだろう。まあ、確かに聞かなかった自分も悪いのだが。

望むところではないが、生憎ここは彼の住居で、これから嫌でも毎日顔を合わせなければならぬのだ。ディーンが帰って来次第聞けるし、まあいいかと気を取り直すと、ディーンからの伝言をしたにも関わらずその場に佇むアドルフを見やる。

他にも何か用事があるのだろうかと思いつつ、一方丁度いいとばかりに、ディーンに自分のことをどのように聞かされたのかを尋ねてみようと思った。

「あの……」

アドルフの視線がこちらを向く。

声をかけたものの、どうやって聞き出せばいいものなのか思いあ

ぐねてしまう。こういう時、ディーンならきつと上手くやるのだらう。

アドルフの視線を感じながら、それでも何とか質問を口にする。

「アドルフさんは……どうして私がディーンの婚約者になったのか、ご存知なのですよ？」

まさか自分の生まれまで知っているとは思わないが、ディーンがジュリアとの婚約をなかったものにしようとしていることは知っているはずだ。その為に、ユーフェミアが協力者としてこの場にいることも。

アドルフは表情をゆるめると、微かに顎を引いた。

そして。

「ユーフェミア様。最初に申し上げておきたいことがあります」

真っ直ぐにこちらを見つめてくるアドルフの視線は穏やかだったが、どこか申し訳なさそうにも見えた。

「はい」

思わず身構えてしまう。

「私はこちらの屋敷で執事をしておりますが、もともとはラムレイ家に仕える家令でございます」

「……はい？」

一瞬、言われた意味が分からなかった。当然のことを言われて、それが何を意味しているのか。

聞きなおしたユーフェミアに、アドルフは少し考える素振りを見せ、もう一度今度は分かるように説明してくれた。

「私はラムレイ家の家令でございます。つまりレイヴンズクロフト侯爵にもお仕えしている身である為、カーティス様に関わるすべてを報告する義務がございます。当然ユーフェミア様、あなたのこと」

その口調はどこまでも穏やかだった。だが告げられた内容を理解した途端、頭を殴られたような衝撃を覚えた。

ディーンはそんなこと一つも言っていなかった。養父を言いくるめる為だとばかり思っていたのに。裏をかくのではなく、真っ向勝負！？

「あの人は、そのことを？」

まさかとは思いつつ、ここまではつきりとアドルフが言うからには、知っていることだろうと思ったが確認せずにはいられなかった。「ええ。ご存知です。私は侯爵に報告する義務もありますが、侯爵のこともディーン様に報告する義務もあります。まあ、狐と狸の化かし合いの仲立ちのようなものでございましょう」

そう言いながらも、どこか自分の立場を楽しんでいるような口ぶりで、アドルフは小さく笑う。

呆氣に取られて、彼を見つめた。

「だったら、あなたは私がどうして彼の婚約者となったのか、やはりご存知なのですよね？」

つまり、生い立ちも含めて。

ディーンとジュリアの婚約破棄を侯爵に納得させるには、二番手の婚約者となるユーフェミアが王族の血を引いている事が大前提なのだ。それが例え公にできない事ではあっても侯爵の耳には届いているはず。

再度確認を込めて問うと、彼は首を横に振った。

「執事である私に必要な情報は、あなたがディーン様の婚約者であるということ。必要な教育をあなたにさせるとディーン様が考えている以上、そのお手伝いすることです」

「……でも、それだと得体の知れない者を屋敷に招き入れることになるのではありませんか？ 不満はないのですか？」

「――たとえば、あなたが得体の知れない女性であったとしても、少なくとも常識をお持ちのように私には見えますよ」

穏やかに言われ、ユーフェミアは目を瞬いた。

これは褒められているのだろうか。

「あ、ありがとうございます」

どう反応すべきか悩んだか、取りあえず礼を口にすると、アドルフは笑みを深くした。

「いえ。少なくとも、私がディーン様の目的に反対する理由はなくなったというだけでございます」

意味深な言葉を残すと、では、と丁寧なお辞儀をしてアドルフは仕事に戻って行った。

ユーフェミアはアドルフの去っていった扉を眺めたまま、今の言葉のやり取りを頭の中で反芻した。だが、あることに気づき、直後どっと冷や汗をかいてしまった。

アドルフは侯爵に情報を流し、なおかつ自らの意志はそこに係わらないと言いながらも、彼自身がユーフェミアを判定していたのだ。彼の仕事上に必要なことは確かにディーンのかえの手伝いをすることなのだろう。だが、もしも自分がアドルフの目に敵わなかったら、つまるところディーンの目的を遮ることも辞さないという意味に取れてしまう。それではユーフェミアの望みも絶たれ、当然王宮には行けないということだ。

ユーフェミアは両手の拳を握りしめると、グツと奥場を噛みしめた。

なんて危ない綱渡りに巻き込んでくれたのよ、と思わず叫びたくなってしまった。

身体の片側だけ温かい。

うつらうつらと夢の中を彷徨いながらも、何となく寒さを感じていたユーフェミアは、温かさを求めるように思わずそちらにすり寄っていた。

すると、息を吐き出すような小さな笑い声がどこかで聞こえたような気がして、思わず眉間に皺が寄る。

その笑い方には覚えがあった。ここ数カ月、ユーフェミアの生活をかきまわしてくれた男の笑い方だ。

「何がおかしいのよ……」

条件反射ともいえる程、苛立ちを滲ませた声が喉の奥から漏れ出した。だが何故だか声が出し難い。あまりの出し難さに呻くと、ハツとしたようにユーフェミアは目を開けた。

「良く眠っていたね」

耳というより、身体に直に伝わってきた声に一瞬、自分がどのような状況にいるのか分からなかった。

その上、視界の先に声の主はいない。

「風邪を引くよ」

視界を横切るように現れた手が、目の前に垂れ下った蜂蜜色の髪をすくい取り、耳に掛けられた瞬間、ユーフェミアは状況を把握した。

ソファに座ったまま、頭をディーンの肩に預ける体勢で寄りかかっていたのだ。その上、無意識のうちに自ら寄っていった記憶もある。

一瞬にして、寒さなど気にならないほど体温が上昇した。

「ど、どうして、起こしてくれないの！　っていうか、何してるのよっ」

非難しながら、なお且つ逃げるようにソファから立ち上がると、ふわりと視界の隅で蜂蜜色の髪が踊った。

いつもより軽い頭に、もしかしてと手を髪にやると、後頭部でまとめてあったはずの髪は当然そこにはなく、そのまま背中に流れ落ちている。

ピンを自分で外した記憶はない。そして、そのようなことをする人物は目の前にいる一人しか思いつかない。

人が眠っている隙に何をしてくれるのか、この男は。

肩に滑り落ちてきた髪を後ろに払い、折角ノーリーンが綺麗にまとめてくれたのに、と残念に思いながら、じりじりとソファの反対の端に寄って座り直す。

まったくもって油断ならない。

二人掛けのソファとは言え、この男は何故わざわざ隣り合うように座っているのか。目の前には一人掛け用のソファが空いているのに。だからと言って、正面に座られて寝顔を眺められるのも嬉しくはないが。

無然としたユーフェミアを黙ったまま見つめてくるディーンは、なぜだか機嫌がいい。ソファにくつろいだように座り、ただ夜色の瞳をこちらに向けてくる。何を考えているのか分からないが、見られていると思うだけで落ち着かない。苛立っていたはずなのに、心音が次第に早い拍子を取り始める。

――違うから。

否定の言葉を焦りながら心の中で呟き、これ以上深く考えないように自分がここにいた理由で意識をそらす。尋ねたいことがあって、ディーンが帰ってくるのを待っていたのだ。

帰ってきたらすぐに捕まえてやろうと思い、玄関ホールに隣接する応接室に居座っていたのだが、いつの間にか眠りこけていたらしい。気づくとディーンは帰ってきており、その上、不覚にも彼の肩を借りていたなんて。

下がりにかけていた体温が、再び上昇する。

気づくと周回している思考に、だから違うと首を振る。

誤解しないようにしないと、とまさに肝に銘じようとした時、逆に誤解した言葉を呟かれた。

「待っていてくれたなんで予想外だったよ」

嬉しそうに笑む彼に、ユーフェミアはひくりと頬を引きつらす。

「聞きたいことがあったからよ」

ムツとしつつも他意はないことを明言するように、昼間ノーリーに髪を結われていた時に思った、この屋敷でのユーフェミアの立場と、アドルフのことを口にする。

「この屋敷の人には私のことをなんて説明しているのよ。それに、――その……アドルフさんは……」

言い淀むユーフェミアに、彼は分かっていると告げた。そして自

らの説明不足の非を認めた。

「うん。この屋敷の者にきみの事情は話していないよ。ただ、ある伯爵家の血筋だということだけは話してある。事情があつて庶民の中で育つたとね」

すらすらと告げるその話は母方の、つまりこの二十五年、ユーフェミアが知り得ていた事実だ。確かに伯爵家の血筋ならば少なくとも侯爵家に嫁いでもおかしくはないだろう。

嘘ではない生い立ちに、なるほどと思う。

確かに全く違う生い立ちを作られても、必ず失態を犯す自信はある。それならば、事実を隠した方が何かがあつたとしても辻褄が合わなくなることもない。

それが今まで、彼がユーフェミアに取ってきた手段であることにも気づく。

「アドルフのことも気にしないでいい。彼は確かに父の手先だが、それも使い方次第だろう？ それにきみのことも気に入ってくれたようだし、何も問題はないよ」

「でも！」

今度はイヴァンジェリンやリックのような監視ではない。そんな生ぬるいものではなくて、もしかしたらディーンの足を引っ張ることになるかもしれないのだ。

「大丈夫だよ。父とのことは私の問題だから。きみはきみのしなければならぬことに専念して、出来るだけ早く王宮に行けるように頑張ってくれればいい」

それはユーフェミアを思つての言葉だったのかもしれない。だが、その口ぶりにどこか一線を引かれたような気がした。

ユーフェミアがディーンの婚約者となる決心をしたのは自分の目的の為であつて、そのついでにディーンたちの目的に協力できればいいと思つたからだ。互いの目的が果たされればディーンとの関係は終わるのであつて、だから、それ以上のことに口を出す必要はないのだ。そう、関わりは、ない。

確かに、そうなのかもしれないけど。

だけど、心の奥に痛みが走る。

「……わかったわ」

頷いたものの、一度引っかかったわだかまりは簡単に拭えるはずもなく、ユーフェミアはその後、このことで散々な苦汁をなめる事となる。

16. 見せたくない過去も暴きたくて仕方がないくらい 後編

オールドリッジ邸でのユーフェミアの一日は、遅めの朝に始まる。これはイヴァン・ジェリン他の指導によって就寝の時間が明け方近くになる為である。

一番の気鬱の元であった「ディーンと毎日顔を合わさなければならぬこと」は無用の心配で、朝起きた時にはすでに彼は出かけていることがほとんどだった。

婚約者の立場として見送りもしないのはどうなのかと思うが、先日、彼に言われた言葉からすると、立場よりもやらなければならぬことに専念すべき、という意味に取れた為、ならば、そうさせてもらおうと周囲の目を気にしないようにしていた。だが一方で、あの時生じたわだかまりはユーフェミアの中で確実にディーンに対する苛立ちとなっていた。

彼の婚約者を演じなければならないのは承知している。それは彼の養父を欺く為だ。だが欺くつもりが真っ向勝負になってしまい密かに案じたつもりだったが、一線を引かれてしまった。彼は容易にユーフェミアの生活に関わってきたのに、逆は駄目だと言う。関わるな、と言われたような気がして胸に湧き上がってきたのは意外にも惨然とした感情だった。

自分の生まれが役に立つと言われ、思い上がっていたのかもしれない。

どこまで本気か分からない好意を寄せられ、無意識に自惚れていたのかもしれない。

惨めで卑屈で、こんな思いを仮ではあるが婚約者に持つてはいけないと思う一方、考えれば考えるほど情けなくなってくる。

だから考えなくてもいいように、やるべきことに集中した。

食事の作法から身分の差による挨拶の違い、立ち振る舞い、会話、ダンスと目まぐるしいほどの分単位で夕刻までの日程を組んでもら

い、そのおかげで日中は彼の存在自体を思い出さないほど時間が早く過ぎていく。

夕食も一人で取り、もちろんこの間もマナーをきっちり教え込まれ、折角美味しい食事でも味が分からないほどだ。厳しくお願いしますと言っているだけあって、アドルフも容赦がない。

食事の時間が終わると、本来なら勉強の時間から解放される予定なのだが、ユーフェミアにとってここからが本番だ。

何度も言うようだが、オールドリッジ邸は噂に高い幽霊屋敷だ。

初日の夜は、はつきり言って睡眠を取るどころではなかった。

イヴァンジェリンやリックも久しぶりに仲間に会えたからだろう。調子にのってはしゃぎ、どこからともなくやってきた老人がオールドリッジ卿だと名乗った時には、さすがにユーフェミアも言葉を失った。

怖い、というわけではなく、あまりにも気さく過ぎて。その上、一家を紹介された時にはどう答えていいやら、戸惑いを隠せなかったほどだ。

確かに、害がないと言えはなのだろう。ユーフェミアの事情を知った彼らは、もともと上流階級であった為か、喜んで手を貸してくれているつもりらしい。いや、むしろ楽しんでいる節も見受けられる。

その日の復習をする為、夜はピアノのある部屋をいつでも使えるようにしてもらっている。もちろん、ユーフェミアがピアノを弾くわけではない。

昼間はいつも控えているノーリーンも、この時間だけは適当な理由で無理矢理席を外してもらっている。本音は彼らを相手にしている時は、死者の見えない彼女に自分がさぞ不気味に映るだろうことを懸念してなのだ。

こうやって一日の復習をみっちり彼らに見てもらう為、昼間の教師からは覚えのいい生徒と思われているらしいが、実際にはイヴァンジェリンの叱責が恐ろしいからに他ならない。

『だから違うでしょうっ！ 何度言ったら分かりますのっ！？』

カチャカチャというシンバルの音にかぶせる様に、脳に直接響くようなキンキン声が響き渡る。

一人、ダンスの型を取らされ、シンバルのリズムに合わせて足運びの練習していたユーフェミアはその声にハッとして足を止めた。

『リック！ あなたもリズムカルに叩いてくださるなくては、ユーフェミアが困るでしょう！』

『……—』

ダンスの拍子を無理矢理取らされているリックは、ずっと無言を貫いている。これ以上、イヴァンジェリンを激昂させては彼女の怒りが誰に飛び火するか分からないことを知っているのだ。

ユーフェミアもいつ彼女に怒られるかと終始気を張っている為、余計にでも身体が強張ってしまう。おかげで足を出す順番を何度も間違え、それが余計にでもイヴァンジェリンを苛つかせていることは分かっているのだが。

ピアノの前の椅子に腰かけていたオールドリッジ卿の娘であるドリーが、茶色の瞳をこちらにむけて困ったように笑った。

『間違えても、次のステップで足を直すつもりで踏み出してみた方がいいんじゃないかしら？』

今は一人で踊っているのだし、と助け船を出してくれる。

彼女はピアノが好きで、ダンスを練習しているユーフェミアの為に曲を弾いてくれるつもりでいるらしいのだが、今のところまだ曲に合わせて踊れるほどユーフェミアの技術が追いついていないのだ。踊る為の場所を確保する為に壁に寄せたソファに腰をおろしていたオールドリッジ卿夫妻も、まるで娘を見るような温かい眼差しでドリーの言葉に頷いている。

『そう緊張などする必要はないぞ。貴女のように身軽な女性に踏まれても、男は痛くも痒くもないのだからな』

『誰だって男性の足を踏んだ経験はありますのよ。ふふ、懐かしいですわね』

そう言って上品に笑ってみせたオールドリッジ卿の奥方であるシンシアは、夫と視線を合わせて思わせぶりの微笑みを浮かべる。この夫婦は本当に仲が良いらしく、時々ドリーのピアノに合わせて踊ったりするのだ。流れるような動きはまさに手本で、自分も本当にシンシアのように踊れるようになるのかその度に不安にもなるのだが。

しかしながら現在は、教師役のイヴァンジェリンから容赦ない言葉が飛んでくる。

『一体、何時間同じステップを踏めば満足ですの！？　まだまだ覚えなくてはならないことが山積みですよ！！』

分かっているが、さすがに生身のユーフェミアは疲れが隠せなかった。

「ごめんなさい。ちょっと休憩させて」

すでに足がむくんで、慣れないダンス用のヒールはつま先に体重がかかって、立っているのも辛い状況だ。出来れば今すぐ靴を脱いで素足になりたいぐらいだが、一度それをイヴァンジェリンに見咎められて怒られてしまったのだ。

淑女がそのような醜態を人前で晒してはならないと。

ソファ近くのテーブルに陣取った人形は、漲る緊張の糸をわずかばかり緩めた。

『――仕方ありませんわね。少しだけですわよ』

渋々といった返事が返ってきて、ようやくリックから疲れたような言葉が漏れた。

『もう、勘弁してくれよお』

「ごめんね、リック」

ピアノの上に置かれたリックを持ち上げ、ユーフェミアは素直に謝罪の言葉を口にした。

ユーフェミアとしても上達したい気持ちはあるのだ。何とかしなければならぬという焦りばかりが生じて、身体が付いてこないことに苛立ちも感じている。覚えの悪さも自覚している。

だからと言って、何もしないでいると先日ディーンに言われたことが頭の中でぐるぐると回ってしまうのだ。それは何故だかユーフェミアを苛つかせる。だから考えたくないばかりに、寝台に横になったらすぐに眠れるよう、疲れ果てるまでイヴァンジェリンの指導にも逆らわずにいるのだが。

今もこうして立ち止まっていると、すぐに思い出してしまうほどだ。

『おい、どうした？』

リックを手の中に抱えたまま、ぼんやりとしてしまっていたらしい。

カチャッと鳴ったシンバルに意識が戻される。

ドリーはピアノの前の椅子に座り直すと、ユーフェミアを隣に座るよう促し、そして聞き覚えのある気分が明るくなるような曲を奏ではじめた。

それはダンス用の曲ではなかったが、こちらを見たドリーと視線が合い、彼女が自分の為に弾いてくれていることに気づいてしまった。演奏の邪魔にならないよう小さく礼を口にする。

最初こそ、この屋敷を幽霊屋敷と怖がっていたが、蓋を開けてみれば何と言うことはなかった。

オールドリッジ卿一家は皆親切だし、この屋敷で一番恐ろしいのがイヴァンジェリンだと知った時には何故だか気が抜けてしまった。あの噂は何だったのだろうと思うほど、彼らは楽しいことが好きなのだ。陽気な幽霊というのもおかしい話だが、昔はまだいた彼らの仲間も、ディーンが住むようになってから一人二人といつの間にか、想いが昇華されたのか消えていったという。

現在残っているのはオールドリッジ卿一家と数えるほどの使用人だという話だ。

『また何かつまらないことで悩んでいるんじゃないだろうな？』

軽快な音楽を奏でる側で、ぼそりとリックが尋ねてくる。

違うと言いかけて、口を閉ざした。

現在、イヴァンジェリンはオールドリッジ卿夫妻との会話を楽しんでゐる。あんなに和やかな雰囲気を出しているのに、なぜ自分と話す時は挑発的なのか。ユーフェミアとしては釈然としない。

じつと視線を彼女に送っていると、リックは溜息をついた。

『あいつのことか？ それともディーンのやつか？』

小声で言うリックは、おそらく自分を気づかせてくれたのことだろう。だが、ディーンの名前に知らず手に力が入る。

「関係ないわ」

冷たく否定しておきながら、反対に心の中がざわめく。熱をもつ。短く軽快な曲が終わると、扱いづらい感情を置きざるようにリッスをピアノの上に戻して、自らイヴァンジェリンに向き直った。

「再開しましょう」

痛む足を引きずるように、ユーフェミアは部屋の中央へと歩いて行った。

この感情がどこから来ているのか本当は気づいていながらも、囚われることに恐れ、気づきたくないと思っていることさえ認めたくないまま、その日も夜は更けていった。

閑話

ユーフェミアがこの屋敷で暮らすようになってから、ディーンは帰宅時、玄関ホールで出迎えたアドルフと、彼の背後に控えるように立つノーリーンに必ず尋ねるようにしていることがあった。

「彼女は今日一日、どう過ごしていた？」

コートと手袋を外し、横から伸びた手に無造作に渡す。足はすでに彼女のいる部屋へと向かっている。背後をついてくる二人の返事も待たずに、気ばかりが急いた。

好きでやっている商売だが、全てが思い通りに行くわけではない。年若いと侮ってくる者もいれば、端から聞く耳を持たない客先もある。そんな彼らの相手をするのはいずれの利益を見込めば苦痛ではなかったが、そうかと言って疲れないわけでもなかった。だからユーフェミアが屋敷で暮らすようになった初日、たとえ文句を言う為だったとしても、誰かが待っていてくれることがこれほど癒されることになるとは想像もしていなかった。

「午前中はテーブルマナーを。午後からはダンスの練習をしてもらいました」

慣れた様子でアドルフが答えた。

一つ頷くと、彼は心得たように一礼して自分の仕事に戻っていた。

そのままノーリーンだけを連れ、詳細な報告を受ける。

彼女にはユーフェミアが勉強中も常に側にいるように言い付けておいたのだ。どのような状況なのか、聞きながら思ったよりも苦戦している様子に思わず笑みが漏れていた。

「お笑いになるなど酷いですね。ユーフェミア様は頑張っているのに」

見咎められ、チラリと背後に視線を送る。

眉根をわずかに顰め、本心から不快な感情を見せていた。口先だ

けではないノーリーンの言葉に、珍しいと思う。

この屋敷に来てまだ日は浅いが、彼女とは王宮にいた時からの顔見知りである。人間関係も当たり障りなくこなす彼女の仕事ぶりも知っていたし、必要ならば口先だけの言葉をいくらでも言える。そんな世渡り上手な彼女が王宮を去らなければならなかった理由も当然ながら知っていた。

今までならば仕事は仕事、と割り切っていた彼女が、抑え気味とはいえ感情的になるなど珍しい。それほどユーフェミアのことが気に入ったのか、それとも自らと重ねているのだろうか。

ユーフェミアの味方となる人物が一人でも多いのはいい事だと思う一方、有能な彼女にはこの婚約が偽装ではないかとすでに疑われている。

まったくもって女性の勘は厄介だ。

ユーフェミアとの婚約は、一応同意もあつてのことだと理解はしてくれているが、彼女の感情がついて来ていないことなど、その態度を見ていれば誰だって分かる。おかげでこちらの苦勞も隠しようがない。

最近では、あしらわれている姿を使用^{死者}人及びかつての住人たちに見られては、密やかに嘲笑の的となっているのだ。まあ、憐れみの眼差しと共に声援ももれなく付いてくるのだが。

だから、思わず本音が漏れてしまう。

「うん。これが本当に私の為を思って頑張ってくれているのなら嬉しいことなんだけどね」

苦笑と共に呟くと、ノーリーンは異論もせず小さな溜息を落とした。

実際のところ、ユーフェミアの目的はエドワーズ国王に一目会いたいというささやかなものだ。

それだけを支えに頑張っているのだが、実を言うと国王に会うだけならば、このような手間など必要ないのだ。ジュリアやブライアンとの繋がりが出来た今、彼らに王宮に呼んでもらえばそれで事足

りることなのだが、それを言わなかったのはその小さな願いさえも彼女との距離を縮める時間を得る為に利用しようと決めたからだ。

本当は、ユーフェミアにマナーや教養など強いる必要などない。現在の彼女の頑張りも無駄とは言わないが、今すぐどうにかしなければならぬほどひどいものでもない。

彼女がこの婚約をどう思っているのか。彼女の様子を見る限り、ジュリアの為に受けたとは思えないぐらいだ。

イヴァンジェリンやリックに聞けば、すべてが終わったら破棄する気が満々だということも知っている。さすがにそれには頭を抱えなくなったが、そう簡単に諦めるつもりもない。

少なくとも、嫌われている素振りを見せているわけではない。どちらかと言うと戸惑っている、と言った方がいい。

そんなちよつとした行動さえ愛しく思える。

だからこそ、彼女が予想外に真剣に取り組む姿に、口を挟むに挟めなくなってしまったのだ。それに、もしかしたら、という期待も大きくなる。先程はノーリーンに冗談のつもりで口にしたが、自分の為に頑張ってくれているのかもしれない――と。

もちろん、頑張る彼女を見て、自分もただ手をこまねいていたわけはない。養父との取引もすでに始まってしまった。後戻りはもうできない。

ユーフェミアが屋敷にやってきた翌日から始まった彼女の教育は、最初こそ順調に見えたものの、ここ数日は行き詰まっているらしい。彼女の顔色が次第に悪くなっていき、本当は今すぐにでも止めさせたいぐらいなのだ。しかもここ数日、目も合わせようとしてもしない。挨拶程度ならば問題ないが、話をしようとする逃げ腰か、逆に苛立ちを向けられ、アドルフに無理矢理止めさせるよう言うと言わぬ非難の眼差しを向けてくる。

一体どうすればいいのやら、こうして彼女のいる部屋に向かっているが、早々と追い払われるのは分かっているのだ。

「下がってくれてかまわないよ」

目的の部屋から聞こえてきたピアノの音を耳にして、背後についでくるノーリーンに声をかけた。

誰が弾いているのか。ユーフェミアでないことは確かだ。それはノーリーンにも分かっているだろうに、さすが王宮で女官を務めたほどだ。これしきのことに怯まないとはい感心するが、だからと言ってこの屋敷の住人たちと対面させる必要はない。

扉の前で立ち止まり、振り返ると、少しだけあきれた様な顔をされ、彼女は渋々といったようにその場で一礼した。

「ユーフェミア様を少しは労わってあげてくださいね」

その言葉を残し、彼女は背を向けた。

労われというのはつまり、彼女の嫌がること――怒るようなことするなという意味か。その遠回しな釘の刺し方に苦笑が漏れる。おそらく、何をしても怒らしてしまう現状、それは不可能な事。だからと言って、同じ屋敷にいるのに彼女と顔を会わさない事も不可能なことだった。

「わかってるよ」

無意味な返事だと思いつつも、去っていくノーリーンの背に声をかけ、ピアノの音が漏れる扉を開けた。

一瞬だけ訪れる、至福の時間を思いながら。

17. その瞳の苛烈 前編

どうしてあなたがここにいるの――？

それは天気の良い昼下がりの出来事だった。

窓から差し込む冬の白い日射しがほどよく部屋を暖め、ダンスのレッスンを受けるにはかすかに汗ばむほど温かく、一、二、三とりズムを口ずさむ男女の声とスカートの裾が絨毯を擦る音だけが室内に響く。

そんな中、ノーリーンがアドルフに呼ばれて席を外し、そして間をあけず、すぐに血相を変えて戻って来た。

ようやくそれなりの形が身につき、教師であるアーネストと組んで互いに口で拍子を取りながら足を運んでいのだが、彼女は戻ってくるなり、離れてくださいと言わんばかりに間に割って入ってきた。珍しく動揺を隠しきれない彼女は、それでも詫びの言葉を口にし、すぐさまアーネストに頭を下げた。

「申し訳ございません。本日はこれまでにしてお引き取りください」その声は硬い。

ユーフェミアもアーネストも、思わず視線を合わせて、頭を下げるノーリーンを見やった。

いつもは冷静な彼女の瞳が揺れている――ような気がする。長い付き合いではないが、朝から夜まで共に過ごす時間が多い為、彼女の人となりはそれなりに分かってきたつもりだった。

「どうかしたの？」

何かあったのだろうかと問うと、彼女は弱り切った眼差しをいったんは気まづげにそらしたが、それから一度だけアーネストに視線を投げると、ユーフェミアに近づき耳元に唇を寄せた。

囁かれた言葉に、ユーフェミアも目を瞠る。

それが本当なら、レッスンどころの話ではない。

「アーネスト様。申し訳ありません。この続きはまた後日お願いします」

告げた言葉は言外に帰れと言っているに他ならないし、もちろん失礼なことを言っている自覚もあった。が、アーネストは余程の事と理解したのか、気を悪くした様子もみせず、一つ頷くと、二人の間に立つノーリーンをよけ、ユーフェミアの右手を取った。

「分かりました。本日はこれまでと致しましょう。では、また」

そのままユーフェミアの手を持ち上げると、甲に唇を落とす。淑女への挨拶だと聞かされて頭では分かっているにもかかわらず、いつも落ち着かない気分になる。

いくら慣れなくても戸惑いを決して見せてはならない、当然のものとして受け入れてください、とノーリーンに言われていたが、すでにアーネストにはユーフェミアの動揺は見破られている。わずかに身を硬くするといつも唇の端に笑みを浮かべるのだ。それがまた居心地が悪くて、余計にでも手を取り戻すタイミングを外してしまう。

だが、その緊張も今日ばかりは長く続かなかった。

「おい。いつまで待たせる気だ」

突如、扉を開け放って姿を現した人物に驚いたユーフェミアは、おかげで強引に手を取り戻すことができた。

アーネストも驚いたように声のした方を振り向き、ノーリーンはその声に、見るからに身を固まらせた。

「アシュレイ——様」

苦々しい声は果たしてユーフェミアだったのかノーリーンだったのか。

淡い金髪——蜂蜜色の髪をした男は、ゆったりと近づいてきながら、遠慮もなくユーフェミアの側に立つ男に冷え冷えとした眼差しを向けた。

「さっさと席をはずせというのが分からないのか」

三十を少し越したばかりのアーネストよりも、明らかにアシュレ

イの方が若いはずだが、態度だけは相変わらず高圧的だった。

アーネストはアドルフが連れてきたダンスの教師だが、彼自身は上流階級の出ではない。だからアシュレイの顔を知らなくても当然だし、以前のユーフェミア同様気づかなくてもおかしくはない。

しかしアーネストは、尊大な言い方に怒るわけでもなく平然としまま丁寧に一礼した。

「失礼しました。では、私はこれで」

どこまでも大人な態度で、さっと身を引くアーネストをノーリーンが慌てて見送りの為に同行する。

となると、当然部屋に残されるのはアシュレイと二人だけで。

静かに扉が閉ざされた途端、息苦しさを覚えた。

先程のアシュレイの取った態度が余計にでも彼の機嫌の悪さを伝えていよう、だからと言って人間として礼儀がなっていないのではないか、という苦言をジュリアのように言えるものでもない。

それに、アーネストの取った大人な態度も、ユーフェミアには理解できないわけではなかった。

見るからに上質の服に身を包み、身のこなしや所作である程度の身分は分かるというものだ。まして人を使う側独特の空気とでもいうのだろうか。こういう人間に一介の庶民が盾突いて特になることなど何一つない。

今もこうして見下ろされているし、その眼差しは以前と変わりなく決して好意的なものではない。

なんて厄介な人が来たのよ、と内心思う。

それに見送りのためとは言え、ノーリーンまでいなくなってしまうことに、早く帰って来て、と胸中で叫んでいると、すぐ側で嘲りを含んだ笑いが落とされた。

「おまえは媚びを売らないのではなかったのか？」

鼻で笑うような言い方に思わずムツとする。

確かに宣言した覚えはあるが、別に媚びなど売った覚えはない。

「何を見て媚びているとおっしゃるのですか？」

一応、笑顔を浮かべては見たものの頬はきつと引き攣っているに違いない。

「あの男に手を取られて嬉しそうだったではないか」

「……挨拶でしょう。それに、ああいう挨拶は慣れていないんです」

「それでカーティスの婚約者が務まるとは思えないな。大体、どうして受けた？ 私の忠告を無視するぐらい肝が据わっているなら、あの程度の挨拶ぐらいでうろたえるなどおかしいだろう」

媚びでなければ何なのだ、と冷ややかに見つめられる事自体、ユーフェミアとしては納得がいかない。

だからつい口が滑ってしまった。

「婚約なんて一時的なものです。本当に結婚なんてできないことなど現実を見れば分かるし、お互いの目的が果たせばそこで終わりなんです。それにいくら努力したって急に淑女になれるわけないわ」
どんなに苦勞しても、たかが一カ月程度で身につくことなど限られている。常に生活の中で無意識に洗練された動作をしている彼らとは違うのだ。どうしてもぎこちなさは出てしまうし、それでもイヴァンジェリンが言ったように、あの人に少しでも恥ずかしくない自分を見せたいという思いもあった。だから頑張っているのに。

悔しい。でもそれを目の前の人物に言っても、それこそこのように思いなど分からないだろう。

口を閉ざし、唇をかみしめた。

アシュレイアは再び呆れたように溜息を落とした。

「……カーティスも憐れだな。それに面白くない。おまえは以前より卑屈になった」

その言葉に頬に熱が集まる。

「ふん、自覚はあるのか。……だから、そのようなひどい顔をしているのか」

最後の方は呟きに近かったが、それでもユーフェミアの耳にその言葉は飛び込んできた。

思わず顔を上げる。

咄嗟に否定の言葉を口にしようとして、だが、ニヤリと笑ったアシュレイと視線が合った途端、続く言葉が出てこなかった。

「カーティスが戻ってくるまでまだ時間がかかるのだろう。ただ待っているのも暇だ。付き合ってやるから光栄に思え」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

付き合うって、何を？

怪訝な顔をするユーフェミアの前にやってきたアシュレイは、目の前で立ち止まると優雅な動作で綺麗な手をこちらに向けた。

「手を取れ。実際に踊った方が覚えやすいだろう」

言われた意味を理解するよりも先に、一歩近づき強引に手を取られ、引き寄せられる。

無意識のうちにユーフェミアの身体が動いていた。先程までアーネストと踊っていた形と同じに体勢を整える。

背中に回された手が身体を支える。アーネストのように遠慮をしていない分、上体が安定する。

「さて、おまえの努力がいかほどのものか見せてもらおうじゃないか。下手なのは承知の上だ――が、足だけは踏むなよ」

見上げた先にある淡褐色の瞳が意地悪く見下ろす。まるで挑発するかのよう。

ユーフェミアがムツとして文句の一つでも言ってやろうかと口を開くよりも先に、アシュレイは口の端に笑みを浮かべると足を踏み出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0002r/>

黄昏時の溜息

2011年11月27日09時46分発行